
やるっきゃない！

日野望美

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

やるっきゃない！

【Nコード】

N4693I

【作者名】

日野望美

【あらすじ】

飛行機事故に巻き込まれた熟年主婦が、美少女に転生した???なぜ、彼女は異世界で必要とされたのか？大帝国の未解決の大事件は？

中身は熟年の天才美少女はいかに活躍するか？そして恋の行方は？

・いわゆるプロローグ 第一章 ロザリア社長（前書き）

11月18日、一部改訂しました。

全体的な設定との繋がりの不備は解消できたでしょうか？

・いわゆるプロローグ 第一章 ロザリア社長

・いわゆるプロローグ

羽田発A空港行きエアバスは、まさに急降下しつつあった。

私、結構いい年の主婦、伊丹京子は、垂れ下がってくる酸素吸入器を装着して、

救命胴着のありかを確認しながらも、「これは、ダメかも」と覚悟しつつあった。

東京の会社に就職したばかりの長男が、大学時代から付き合いの有る彼女と「デキ婚」したため、

すでに、生まれたての孫息子がいるオバアチャンなのだし、長女は大手企業に勤めている。

末の次男は無事志望大学に入った、もう、親としての努めも九割がた済ませている気がする。

死んでしまうなら、それはそれで仕方がないか・・・などとぼんやり思っていると、

脳内で、やけに明るい調子の男の声が響いた。

「伊丹京子さん、もしもしー、京子さん」

「へ？何、とうかあなた誰？噂に聞く死神さんか何か？」

「あたらずといえども遠からずってとこですかね。あなた自身の伊丹京子としての一生がここで終了となるのは、既に確定された事として、私としても如何ともしがたいのですが、この世界とは異なる世界でしたら、

すぐにあなたのご希望に沿った別の人生をご用意できます」

「異世界転生ですか？ファンタジーの定番じゃないですか」

「いや、確かに。この非常事態に随分冷静ですね」

「そりやもう年ですから、なまじのことでは驚きませんよ」

「結構結構、精神年齢の高いというか、成熟度の高い魂が必要なんですよ。」

「一つの世界を救うために、あなたの魂はおあつらえ向きなんです。」
「何やるんですか？美少女に生まれ変わって美形男子にモテモテとかじゃないとやる気になれません」

「それはお安い御用です。あ、五分で地面に激突しますが、あと二つ条件を付加できます。」

魔法とか特殊能力とか付け加える事が出来ますよ」

「じゃ、魔法使い放題」

「魔法の体系は膨大でして、ある程度の絞込みはしていただかないと・・・そうですね、

何かあなたがイメージできる雛形というか、アイデアの素みたいなものがあると、

それに則した体系の魔法を使い放題にすることは可能です」

「では、あの黒いバッグの中に入っているゲームの攻略本の中に出ている魔法と技は使える、

あと、有る程度独自アレンジや合成が出来るっていうのはどうですか？」

「かなり古いFFシリーズとヴァリユキリー・プ◎ファイル、乙女ゲー、変わった組み合わせですね」

「長女と次男に頼まれてアキバで買ったゲーム攻略本の古本です」

「でも大丈夫です。これで行きましょう」

「後は・・・伊丹京子としての能力・記憶を保持していただきたいのですが、可能ですか？」

「可能です・・・最後の条件も合致させるには、文字通り生まれ変わって赤ん坊からやり直して下さい」

「どうやら、最後の条件が一番難しいものだったらしい。」

「では、時間も差し迫ってますから、行きますよ！」

その死神？らしい男の声が大きく響いたと思った後、随分長い間意識を失っていたらしい。

再び明るい光の中で目覚めたとき、予想していたとはいえ、やはり度肝を抜かれた。

第一章 ロザリア社長

「クラウド！クラウド！これは一体どうしたことなの？」

いつも各店舗との業務連絡をつけたり、仕入先との商談の段取りをまとめる役のクラウドが居ない。

眉をひそめて、社長室のデスクにどっかり腰をすえたその姿は、紛れも無い美少女でありながら、

風格といい堂々たる態度といいこの部屋の雰囲気になじんでいた。

アムダリア帝国有数の大貴族令嬢でありながら、帝国、いや外国までその名を知られる大手食品会社、

「キョウコ」の創業者にして社長ロザリア・ド・ヴァレス・レオンハート12歳、

これが伊丹京子がこの世界、オルトに転生後の姿である。

クラウドに命じていた隣国キタイ王国への出店計画は順調に運び、来月にはロザリア自らがキタイ王国の首都ブルサに出向き、摂政のエスコバル公爵立会いの下、必要書類に調印すれば良いだけになっていたはずだ。

軍事大国としての色彩が濃いこのアムダリア帝国とは異なり、通商で富を蓄え外交で戦乱を避けてきたキタイ王国は小国だが、自由闊達で明るい国内の雰囲気はやり手の摂政エスコバルの功績の賜物だという評判だ。

エスコバル公爵は30歳だが独身で、エスプリに満ちた話術と気さくな人柄で多くの女性ファンがいる。

蜂蜜の様な艶やかな金色の髪とやさしげな緑色の瞳の稀に見る美丈夫であることも、人気の一因であることは確かで、エスコバル公爵の肖像画は今や代表的なブルサ土産となっている。

エスコバル公爵にあこがれる妙齡の女性が肖像画を買うのはモチロ
ンだが、商いの守り神として、

あるいはオルトで最も豊かだというキタイ王室にあやかる為に
各国の商人が買うということも普通になっている。

ロザリアは、この名高い公爵と一年文通を続けていたが、直接会話を交わす機会を得ることを大変楽しみにしていた。

「ひ、姫様、一大事です！」

クラウスが、血相を変えて飛び込んできた。

ビジネスに関わる場所では「姫様」ではなく「社長」と呼ぶように
度々注意しているのだが、

帝国建国以来、レオンハート家の家臣として仕えて来た家柄のクラ
ウスは、どうかするとすぐ、

注意を忘れてしまうようだ。

「皇太子殿下じきじきのお達しで、今回のキタイ王国への出店計画
は白紙撤回せよとの事です」

従来なら、商業・貿易に関する事柄は皇帝の老臣たち10名で構成
されている最高諮問会で許可されれば、

何の問題もないのが普通なのである。

当然ながら、賄賂とか鼻薬、付け届けの類はかなり使ったが・・・
いつものことで、今回の出店計画も事前の根回し、調整は抜かりな
かったはずなのだが・・・

最高諮問会の決定を白紙に戻す権限は、皇帝自身と皇帝の軍を指揮
するものにのみ与えられている。

病床について長い皇帝に代わり、現在、軍の最高司令官は摂政でも

有る皇太子となっていた。

5歳年長の従兄弟に当たるアムダリア帝国皇太子ユーグは白銀に輝く髪と真紅の瞳を持った類まれな美青年だが、誰に対しても心を開かず、謎めいた「氷の微笑」と、剣の腕前・輝かしい軍歴により恐れられていた。

ユーグの生母はレオンハート家の出身で、ロザリアの父の妹であった。

穏やかなやさしい人柄で、「小さなロザリー」とロザリアを呼び、何かという目をかけてくれたのだが、

5年前のある日、宮中内に発生した毒殺事件でユーグの弟・妹ともに命を落とした。

后妃と皇子・皇女が一度に死亡という前代未聞の大事件であるにもかかわらず、犯人はいまだ不明である。

この事件以来、父のレオンハート公爵はロザリアを宮中から引き離し、領国の邸で生活させるようになった。

皇太子ユーグが「氷の微笑」の持ち主となったのは、この時期からであった。

「・・・とまあ、このような次第でして、皇太子殿下のご命令はいかなるお考えによるものか、私ごときでは、皆目見当がつきません」
「宜しい、クラウドス。では、私自身が殿下に直接伺って来ましょう。お優しかったユーグ兄様が昔とはすっかりお変わりになってしまったのだとしても、私とあの方とはいわば幼馴染で従兄弟同士・・・。率直なお気持ちやお考えをお打ち明け下さらないとも限らないもの。まあ、難しいのかもしれないけれど、何らかの事情があるはず。その一部だけでも探り当てておきたいものだわ」

ロザリアは皇太子の公邸でもある摂政府に出向く為に、身支度を整える事にした。

「クラウドスは、キタイの方々と連絡を取り、率直にご事情をお伝え

して。

御詫びはくれぐれも丁重に頼むわよ。キタイ出店用に用意した品物と資金は、国内、特にこの帝国の中心部の店舗網の強化に振り向けて頂戴ね。では、摂政府にけんかを売ってくるわ」

「ひ、姫様！皇太子様は冷酷で御気性が激しいと伺っております、どうか穏便にお願いいたします」

「そうねえ・・・そうやすやすと殿下の刀の錆びになる気も無いけど」

「姫様！」

「社長でしょ？何、様子を見てくるだけ。無理はしないから、お前は自分の仕事を頼むわ」

ロザリアは社長室を出て自分の寝室に引き取り、小間使いのナネットを呼ぶ。

衣装と身支度の件はナネットに任せれば安心だと、ロザリアは深く信頼している。

「出来る女という雰囲気で行くべきかしら、可愛い子路線で行くべきかしら」

それを聞いてナネットが笑い出した。

「姫様は12歳でいらっしやいますよ。大天才でいらして、そこらの大人が束でかかっても叶わない程の才覚と度胸をお持ちですが、御親戚でも有る皇太子殿下と久しぶりにお会いになるのですから、小さなロザリーちゃまでいらした頃の事を懐かしんで頂けた方がお話しも弾みませんか？」

「小さなロザリー」と読んで可愛がってくれた叔母のアデル妃殿下は、今の孤独な皇太子を見たならばどう感じるんだろう？ふとロザリアはそんな事を思った。

「アデル妃殿下は『ロザリーは何でも似合うけれど、ユークの瞳と同じ色の真紅が特によく似合うわ』とおっしゃってました」

「あら、そんな事おっしゃっていたかしら？」

「そうですとも。妃殿下は姫様を皇太子妃になさりたいお考えがあったのかもしれませんが」

「まさか・・・お前の考えすぎよ、ナネット」

「はいはい、そういう事にしておきます。でも、ご自分がおなかを痛めた殿下のお妃は、好ましいと感じられる姫君であって欲しいとアデル様がお考えになったとしても、自然じゃありませんか？」

ナネットの言い分を認めたロザリアは、素直に真紅のドレスを着て、似つかわしい真珠とルビーを沢山あしらったネックレスとイヤリングの一揃いを身につけた。その行為に何の不自然さも作為も無い。

帝都中でクラウド一人が正確な記憶を保ち、皇太子の魔法の影響を免れていると言う重大な秘密の存在も、クラウドやエスコバル公爵との真の関係も、完全にロザリアの記憶から抜け落ちていた。「敵を欺くにはまず味方から」とは言うものの、クラウドが酷く胸を痛めているなど露ほども感じていなかった。

・いわゆるプロローグ 第一章 ロザリア社長（後書き）

第十五章読了後、一応続きになる15禁の短編があります。
穏やかですがシモネタです。

<http://ncode.syosetu.com/n67141/>

第二章 ユーグ（前書き）

11月18日に一部を変更しました。

全体の設定からの繋がりが、スムーズになったでしょうか？

第二章 ユーグ

アムダリア帝国は傾きかけている。いや、土台が腐っている。

その事に気がついていている者は多いが、それを口に出来ない空気がアムダリアの宮中には存在する。

病の床に有る皇帝の命は長くは持たない。それはもはや暗黙の了解事項だが、皇太子であるユーグがすんなり皇位を継承できる保証はない。ユーグも危険性を大いに認識していた。

ユーグがいまだ17歳の若さであり、軍事はともかく内政の手腕は未知数であるから、別に政治顧問が必要だとか、軍歴は輝かしくても皇太子の後宮は無人で男色家の疑いが有るとか、皆勝手に噂している。

外国の姫君を妃に迎えて国の安定に貢献すべきだとか、男色家で世継ぎの誕生が望めないなら皇族の内でしかるべきものを養子に迎えるとか、腹立たしい限りだ。

「オレが男色家？馬鹿な！オレはロザリーの成長を待っているだけだ」

（覆い隠した過去を曝け出そうとする力が強まっている・・・オレには時間が無い）

侍従のグレンはヒヤヒヤしてその様子を見つめていた。

「ロザリーもロザリーだ。約束を忘れたのか？嬉々としてあの女たらし公爵に会おうとは・・・」

（あの男・・・オレの結界に介入し、龍の力を奪い、ロザリアも奪うつもりか？）

グレンは年若い主の焦燥感・恐怖感を感じても、真の理由に思い至る事は不可能だった。乳母であったグレンの母の病死以降、周囲に主は心を閉ざしているのだ。

そこへ侍従見習いの一人がロザリアがこの摂政府にやって来るとグレンに耳打ちした。

身の内に銀の龍を宿らせた主の孤独を理解できるのは、これからやって来る小さな客人だけかも知れない。

グレンは意を決して、主人に小さな彼の思い人がやってくる予定なのだと伝えた。

「何？グレン、それは誠か！思いの他上手く行っただな。そうか、ロザリーが来るか」

急に表情が和らぐ。「氷の微笑」とは似ても似つかない嬉しげな表情に、グレンは密かに驚いた。

「レオンハート公爵御息女ロザリア・ド・ヴァレス・レオンハート姫、お越しになりました」

到着を告げる知らせを耳にするや否や、ユークは表情を引き締めた。「早く通せ。皆遠慮せよ。オレとロザリア二人きりで重要な話があるのだな」

大貴族の姫君にしてはいささか落着きの無いパタパタした足音が響いて、いきなり扉が開いた。

「ユーク兄様、御久しゅうございます」

真紅のドレスを纏ったこの世界でただ一人の黒目黒髪の美少女の姿がそこにあった。

侍従と見習いは一斉に部屋を出て行った。

ユークは一応正式の礼をしようとしたロザリアを押しとどめ、すばやく抱きかかえるとソファアに座り込んだ。

「あ、あのう・・・」

「良いではないか、オレとお前の仲だ。それともオレの膝の上は座り心地が悪いのか？帝国中で、いやこのオルト中でここに座る事を許されているのはお前だけだと言うのに」

開国の祖に祝福を与えたという伝説の女神と同じ黒目黒髪、艶やかな愛らしい唇、桜色に染まった白い肌、

ユークにとって、ロザリアこそが唯一の女であり、ただ一人の妃となるべき存在であるのに、

この人並みはずれて賢い小さな娘は、ともすればそのことをすっかり忘れてしまうようなのだ。

「オレがこんなに好きなのに、このオチビちゃんは冷たいな」
甘く響く恨み言は実に心臓に悪い。

昔からユীগがロザリアを特別に思っ居る事をロザリアも十分わかきまえている。

5年前の毒殺事件の直後に、ユীগはすすり泣きながら、ロザリアを抱きしめたものだったが・・・

あの瞬間、ロザリアは幼いながらも自分自身がユীগにとって特別の存在であることを回された手から震える指先から痛いほどに感じ取った。ユীগ兄様のお力になりたい、あの時ロザリアは心からそう思ったのだ。

「もう泣かないでユীগ兄様、ロザリアは大人になったら兄様と結婚して差し上げますから」

そう、確かに、自分の口でそう言ったのだ。

「きっとだよ、ロザリー、誓ってくれるかい？」

わずか七歳ではあったけど、ロザリアは確かに誓ったのだ。ユীগと結婚すると。

七歳児といえども誓いは誓い。その重みはロザリア自身も承知している。

「大人になりましたら、きつとお約束どおりいたします」

「並みの大人が太刀打ちできないような知恵者が何を言う。12歳であっても、もう大人も同然ではないか。早くオレの妃になってくれ。何を思ったか知らんが、あの女たらし公爵に嬉々として会いに行く」と聞けば、心穏やかではないのも致し方無いぞ」

「私の体は、御覧のようにまだ子供です。ご心配には及ばぬかと・・・」

「憎い口だ。未来の夫の言う事にはもっと素直に従え」

と言うが早い、深いむさぼるようなキスをされた。ロザリアにしてみれば初めての事で、

と言うより、ユーグの熱い想いが伝わってきて、その激しさに驚いたのだ。

「氷の微笑」と言う異名とは似てもつかぬ燃える様な想いを込めた口付けは、幾度も繰り返された。

幼い頃に交わした物とは色々な意味で違っている大人の口付け、その意味合いをロザリアなりに、ぼんやりと理解しているものの、脳髓の中身まで吸い込まれてしまいそうな、食べられてしまいそうな激しさに、まだ幼い体は十分にはついて行けていないのだった。夢見るようなとろんとした目つきになって、頬が上気したロザリアの様子は、生まれて初めて官能に目覚めた瑞々しくも艶めかしい物だった。こんな様子を他の男に見られたら一体何が起るのか、考えただけでもユーグは心配でたまらなくなる。厄介なのは、この美しい少女本人が、自分の魅力を全くわかっていないことなのだ。

「もう、オレは待てないぞ。ロザリー、月のものはまだ来ないのか？」

ロザリアは一瞬間われた意味が理解できず、ボンヤリとユーグの顔を見てしまった。

「名実ともに夫婦となるには、そなたの体が大人にならねばなるまいが・・・まだでも構うものか、正式な婚約と広めの儀式だけでも済ましてしまおう」

「え？ ええ？ ？？」

「本当は他の男の目に触れさせるのも嫌だ。黄金作りの足かせでもして、オレしか知らぬ所に閉じ込めてしまいたい」

「そ、そんな」

「そんな無体をすればロザリーは許してくれないだろう？ だから、昔の約束を守れと言っているだけだよ」

「でも、正式の婚約者になってしまえば何かと・・・」

「何かと面倒ごとが増えて、商売に差し支えるか？」

ロザリアは恐る恐る頷いた。

「そのぐらい何とかしろ。いずれにしろ、このままあの女たらしに

会いに行くのは我慢ならん。百歩譲って会う必要が有ったとしても、正式の婚約者となって後のことだ。会うときは絶対オレと一緒に席でないと許さないからな、そのつもりでいてくれ」

思わぬ急展開に、ロザリアはまだ話が出来ない有様だ。

「あの事件の夜以来、ロザリーは一度も会いには来てくれなかったではないか。三度会いはしたが、三度ともオレが出先でお前を見かけて急遽会うことになったと言う有様ではなかったか？そのくせおかしい商売には熱心で、あちらこちら飛び回っていたのだろう？オレとしてはこうでもしないと、一向に先の見通しも立たない。なあ、わかってくれ」

艶やかな笑みを含んだ美しい顔で、恨み言を言う皇太子に、ロザリアはなすすべも無かった。

でも、ユーグの膝の上は心地よく、確かにこの場所を誰か他の女に取られてしまうのは嫌だと感じているのも事実なのだった。

「ロザリーはオレが嫌になったのかい？」

急いで頭を横に振って否定するその様子は、何やら幼い子供じみていて、愛らしい。

「ならば、オレの気持ちを受け止める。な？」

高貴な17歳の少年は、一層強く芳しく愛らしい美少女の体を抱きしめ、幾度も幾度も激しい口付けを繰り返した。そして、ロザリアの内に眠る不都合な記憶を封じた。

ようやくユーグの膝から降りる事を許された時、ロザリアは下着が奇妙な湿り気を帯びているのに気がついたが、どうやらキスだけで「いつてしまった」のであった。この恥ずかしい状態をどうすべきか戸惑いつつも、どこか嬉しいと感じた事自体、歪められた記憶によるものだと思わなかった。

帰り際に左の薬指にはめられた指輪は、ユーグの母アデル妃が生前身につけていたもので、ロザリアにあわせてきちんとサイズ調整がされていた。プラチナ製の細いものだが、細かな唐草模様が優美なデザインだ。

「ずっとこの指輪をしていて欲しい。きっと母上がお前を危険から守ってくださるだろう」

美しい指輪に込められた執念と魔法の作為を、ロザリアは深い愛情としか、もはや感じない。

この日を境に「皇太子は男色家」と言う噂は消え、かわりに重度のロリコンらしいと言う噂が帝国中を駆け巡ることとなった。噂された当人は謀が狙い通りの効果を挙げた事に満足した。

「そんな事は既に織り込み済みだ。ロザリーが手に入るのであれば馬鹿げた噂など何ほどの事があるうか」と嘯き、上機嫌だった。ユীগの魔法と詐術を見抜くものは居ない筈だ。ロザリアも例外では有るまい……

今は名前すらも伝わらぬ帝国の開祖に祝福を与えた伝説の女神と同じ、黒く艶やかな髪と黒い瞳の美少女の伴侶は、「先祖がえりした」「魔法と戦いの天才」の自分のはずであった。それが、狂ってしまったのだ……

ユীগは女神の悪意を怨み、忍び寄る金の龍の気配を嫌悪した。もはやユীগは持てる魔力の限りを尽くし、ロザリアを手に入れるしか無い。それがユীগ自身の命を削り、銀の龍を疲弊させる事になるうとも……

ロザリアはロザリアで、これ以降、時折何事かを思い返し、度々悩ましげに溜め息を吐くようになった。

不鮮明な記憶・蓋をされた過去……自分に見えていない物は何なのか？大切な記憶が抜けている。

なぜ、どうして……

そんな姿を見たロザリアの身近に仕える者たちは「姫様は恋煩い」だと、暢気な誤解をしていた。

第二章 ユーグ（後書き）

ユーグは美しく悲劇的な悪役・・・にしたいものです。

第三章 レオンハート公爵（前書き）

まずは、家庭環境から話を進めますか・・・

第三章 レオンハート公爵

思えば、娘のロザリアは、生まれてきた時のいきさつからして型破りだった。

「お父様、ロザリアの心からの願いをお聞き届け下さい」

思い返しても、とても2歳半の幼児の言葉とは思えない。

その言葉を口にした幼い娘は女神の祝福を受けて生まれたのが明らかな、女神と同じ輝く黒い瞳、艶やかな黒髪で、大人になったら大した美女になるだろうと思わせる愛らしさだった。生後わずか半年で言葉を口にし、2歳を過ぎる頃には既に、大人顔負けの難しい言葉も言い回しも理解していると云う賢さは、ある種空恐ろしいものが有ったが・・・

今でこそ大人しく良き領主、良き父といった役割に納まっているが、レオンハート公爵ジョシユアは、かつては「高貴なる放蕩者」として帝国内に広く知られていた。身分を隠して帝国の首都・オルテスの盛り場や娼婦窟に出入りし、派手な浮名を流したり、身分の低い荒くれ者と渡り合ったり、「建国以来の名門」「皇帝を支える諸侯の要」とされる名門の当主としては、目も当てられぬ荒れようで、美人と評判の妻をエリンコート伯爵家から迎えても、全く素行は改まらなかった。

興入れ当時、16歳であった妻のエスターは、口数が少なく塞ぎがちで邸にずっと引きこもっていた。たまにジョシユアと顔を合わせても悲しげに見つめ返し、挨拶以外何も言葉を口にしない。なまじジョシユアに「自分が悪い」という自覚があるだけに、ますますエスターとの仲は冷え切ったものとなって行くのだった。

「帝国一の美しい妻を泣かせてばかりいて、少しは申し訳ないと思わんのか？」

「清らかな乙女であった人を一度我が物としたら、後は放り出すのか？」

「レオンハートの血筋を伝える事ができるのは、身も心も高貴な女性だけだぞ」

そうなのだ。このオルトと言う世界では、魔法の力は高貴な血筋に伴う能力で、そうした男性の子を生むことが出来るのは同じく魔力を持つ高貴な家系の女性でなければ不可能とされている。

ごくまれに非嫡出の子供が生まれる事もあるが、そうした場合も生みの母はかつて貴族であった、或いは他国の王族であったものが没落して庶民に紛れ込んでいただけと言う例ばかりで「高貴なものの母は高貴でなければならぬ」と言うのは、この帝国全体、いやオルト全体の常識であった。

しかし、その「高貴な血筋」にどれ程の価値があるのか、ジョシュアは幼い頃から疑問だった。

確かに建国当時の皇帝とその眷属は、大規模な魔法を使い、世界に大きな影響を与えたいらしいが、遙か後世の子孫は魔法といっても、子供だましの手品のような事しか出来ないものがほとんどだ。

炎系の魔法なら種火程度の火種がやっと出せる程度、水系の治癒魔法なら虫刺されが治せる程度、風系の魔法はごく限られた範囲にそよ風を起こす程度だ。複数の魔法が使える場合でも、大した実用性は無いと言っても良かった。そんな程度のことでは、真面目な庶民に向かって威張り散らかして良いとは思えない。

魔法をより開放して増大する修行方法や瞑想の技法も失われて久しい。

実際の世の中は、大半が魔法など抜きで成り立っている。

役立たずの魔法が使えるからと、威張り腐っている古い家系の人間が政治権力を独占するのは、どこか間違っているのではないか？」

高貴な血筋」などより全うな努力や合理的な工夫のほうがよほど尊い・・・こうしたオルトでは危険な思想が、もはやジョシユアの信念となっていた。

しかし、今にして思えば、新婚の妻に苛立ちをぶつけていただけだった。

実に大人気おとなげなかったと思うのだ。

結婚以来、夫婦双方の親戚どもがあれやこれや要らざる干渉を繰り返し、やれ子供を早く作れだの、放蕩癖が修まらない男など離縁して実家に戻れとか、実に不愉快なことばかり続いた。

まだ十代でおとなしい性質で世慣れぬ妻は、美しかったが、正直な話、会話の相手としては退屈で、まれに共に食事をとってもどうも重苦しい沈黙が続いてしまうのだった。

ある夜、遠縁の者がまた要らざる「忠告」を妻にしていたことが露見し、不機嫌な気分を妻のエスターにぶつけながら強引に事に及んだことが有ったが、皮肉なもので、その夜の行為の結果エスターは懐妊し、娘のロザリアが生まれたのだから、人生と言うのはおかしなものだ。

母親が死ぬか、子供が死ぬかと言う大変な難産だったが、苦しみながらもジョシユアの子を守りたいと強く願うエスターの様子を見て、この年若い妻は自分が思っていたよりもずっと深く自分を愛してくれているのだと言う事、今まで自分は妻の良い所を素直に認めようとしなくて頑なに拒んでいたのではないかと言う事に、はじめて思い至った。

子を成す時は、親となる男女双方が深く互いを思っているほど健康で幸せな子が授かるというのは、オルトでは上は皇帝から下は身分卑しい者まで、誰もが弁えている事だった。

自分が妻に対する労りや思いやりが欠けていたため、子が神の祝福

と加護を十分に受けられないのだ・・・と、ジョシユアが己を責めている内に、エスターは危篤状態に陥ってしまった。このままでは腹の子も亡くなるであろうと言う医師の宣告を聞きながら、ジョシユアは生まれて初めて開国の祖を祝福したと言う黒髪の女神に心から祈った。

その運命の夜が明けたとき、奇跡的にエスターの意識が戻り、黒目黒髪の女の子が生まれたのだ。

「夢の中で、あなたが私を必死に呼んでいらっしゃるのを見ました。そこに明るい光が現れて『名も無き黒髪の女神の加護を与えよう』と言う厳かな調子の声が響きました。そこで目覚めたら、あなたが私の手を取って涙を浮かべていらっしゃるのを見たのです」

子を産んでから強くなったエスターに、幾度もその話を繰り返されるたび、ジョシユアは一言も言い返せなくなっていた。それと同時に、徐々にではあったが、夫婦の距離は近くなっていくのだった。そう、この美しい妻はまっすぐに自分を見て、愛してくれている。しかし、自分はどうかだろうか？そんな忸怩たる思いと照れ、堅苦しい貴族の暮らしに対する反発から、まだ、ジョシユアは「放蕩者」であり続けた。

ただ、必ず夫婦で同じベッドに眠り、朝食を取るようにはなっていて、妻は朗らかにになり、ロザリアは日を追うごとに目覚しく成長していった。

自分を、良き領主、良き夫にしたのは、あの、二歳半のロザリアが口にした言葉なのだ。

「お母様は本当にお父様が大切なのです。ですから、よその女の方の所に度々出かけられるのは、おやめいただくことは出来ないのでしょうか？お母様は、お笑いになって『大丈夫よ、ロザリア、お父様はちゃんと私のところに戻ってきて下さるから』とおっしゃいますが、でも、その後、お一人で溜め息を漏らされたり、時々涙ぐまれたりなさるのです。私が物陰から見てもまるで気がついてら

っしやいません。きつと、それだけ、お母様のお嘆きは深いのですわ」

二歳半の幼児が口にすることではないし、これほど幼い子供に両親の間の微妙な関係を氣遣われるというのも、なんとも父としては、ふがいない話だ。ジョシユアは苦笑いした。

「本当に、真剣に申し上げていますのに・・・」

ロザリアは、そう言うとその瞳に大粒の涙を浮かべた。ジョシユアは自分でもとんでもない悪事を働いたような気分になってしまった。「ああ、ゴメンよ、ロザリア、ちゃんとお前が真剣にお母様とお父様のことを思ってくれているのは、解かっているよ。苦しませてしまつて、お前にもお母様にもすまなかつたね」

ジョシユアはロザリアを抱きしめると、涙を浮かべて誓つた。

「今日からお父様も、ロザリアの良いお父様になるように、そしてお母様ともっと仲良くなるように、心を入れ替えてがんばるよ。許しておくれ」

子は鏟かすがいとは、誠によく言つたものである。

それからのジョシユアは、帝国中に名高い愛妻家、子煩悩となつたのだが、なぜかつての放蕩者がこうもすっかり生まれ変わったのかと人に聞かれるたびに、「ロザリアに泣かれてしまひましてね」と答えるのだった。

結婚以来、はや十五年、エスターは三十一歳になったが、このごろは輝くような美しさに円熟味が加わり、今や名実ともに帝国を代表する貴婦人となっている。

「お父様、お母様おめでたですわ。きつと今度は元氣の良い可愛い弟が生まれると思います」

ロザリアが今朝、そつとジョシユアに告げた。

あわてて、エスターに確かめると、

「ついさきほど医者に確かめてもらいましたのに、ロザリアがそのように申しましたか？」と、驚いていた。

「ロザリアが言うには、元気の良い弟だそうだ」

「まあ・・・あの子には、弟だとわかるのでしょうか？」

「わかっていのような気がするな」

だが、さすがのジョシアも、弟が生まれれば、自分は気兼ねなく他所に嫁ぐことができる。ロザリアがホッとしているという事までは、思い至らなかった。既にロザリアが皇太子ユーグから熱烈に求婚されている事、娘が恋をしている事を、妻のエスターが察していたのも驚きだった。とは言え・・・

ジョシアもロザリアもエスターも、ユーグ皇太子の放つ銀の龍の力に影響され、その記憶が大きく歪められていると言う自覚が持てなかった。僅かにロザリアだけが密かに違和感と理由のわからない焦燥感を覚えているのだった。たた一人全てを記憶するクラウドは、来るべき日に備えて帝国内での活動に勤しんでいた。

父親と瓜二つの弟が無事に生まれて、レオンハート公爵家はますます明るく賑やかになるといふのは、また別の話。

第四章 母の気懸かり（前書き）

しっかりした子でも、やっぱり心配なんです。

第四章 母の気懸かり

生まれたときから、二つの魂を持つ娘、それをどう受け止めるべきなのだろう。

本来の娘の魂は母の命と共に儚く消え去る定めであつたらしいが、どうにか異世界の若くは無い女の魂の力で、消滅する事を免れたのだ。

四歳頃まで、ロザリアはエスターに「他の人には絶対ナイショですよ」と言いつつ、「キョウコ」と言う異界の婦人について語つてくれた。それによると、三人の成長した子供の母で、学問を7歳から二十二歳頃までおさめ、アイキドウとケンドウと言う武術の心得があり、料理が得意な人なのだという。その人「キョウコ」がロザリアの中にいて、異界の風変わりな魔法や目新しい知識を夢を通じて教えてくれるらしい。

「私が本当の意味で大人になったとき、キョウコ様は私の魂の一つになられて、今のよう夢の中でお話する事はなくなるのだそうです。何だかそれは寂しいのですけれど、仕方がないことのようにです」

その、キョウコは黒い目黒い髪の人がたくさんいる国の人であるらしい。

そう言えば、エスターは出産の時、夢の中でキョウコと思われる姿かたちの婦人に『お助けします、しっかりなさい』と言われたように思う。

その人の智恵や知識が、ロザリアの中に眠っているのだろうか？エスターの魔力は微々たる物だが、ロザリアに眠る強い力を感じ取れる能力は有った。この世界の魔力とはどこか違っている。でも強い。それが何を意味するのか、エスターには見当がつかなかった。

自分自身が腹を痛めた娘は、ロザリア一人きりなのであるから、他の子供とどこが違うのか、細かなことまでわかるわけではない。それでも、誰が見ても風変わりな娘との付き合いは、エスターを思ひもよらぬ運命に導くようであった。それは空恐ろしくも有り、楽しみでもあった。

ロザリアの並み外れた力は、まず言語能力に現れた。

なんと、生後わずか半年で「だっこ」とはつきり口にしたのだ。ベビーベッドを覗き込むと、じっと、エスターの目を見つめて、小さな紅葉のような手をひらひらさせる。

「だっこするの？」

「はい」

「はい」と返事する生後6ヶ月の赤ん坊の話など、聞いたことが無い。

エスターが抱っこすると、「お外」と言う。外へ出たいと言う事らしい。

「お外は少し寒いわよ」と言うと、「お花」「お花」としきりに言う。

窓の外を指差す先には、白い梅が三分ほど咲いていた。

「お部屋から見ましょう」と言っても、「お庭」「お外」と繰り返す。

「じゃあ、ちゃんと温かい格好をして、お花を見に行きましょうね」そういつて一度おろして、おくるみに包んでやると、その間にはっこりして大人しい。

エスターもショールを羽織って、改めてロザリアをしっかりと抱きかかえ、庭に出てロザリアが納得するまで、花を見せてやるのだった。希望をすっかり叶えると、実に可愛い表情で「ありがとう」と言う。

それから毎日、エスターだけでなく、乳母や小間使い、執事に執事

見習い、掃除のメイドや庭師に至るまで、ロザリアは盛んに話しかけ、抱っこしてもらって、自分の見たいものを見せてもらったり、屋敷の中を探検したりするのだった。乳母や執事はともかく、新入りのメイドや庭師に抱っこさせるのは無用心極まりないと父も執事も心配したが、いつも安全に移動し、目的をちゃんと果たしていて、ヨチヨチ歩けるようになる頃には邸の中で見ていない所は無く、邸に仕える人間全てと顔見知りと言う状態になっていた。

「ウチの姫様は、本当に凄いで。樹の刈り込みの手順を説明して差し上げたら、『じゃああれは、本当は間違いな？』っと、新入りのハンスがやっている刈り込み作業を指差されるんだもんな。確かに、あいつ、一つ手順をすつとばかりしてイヤがった。思わず叱ろうとしたら、『お願い、怒らないでね？ハンスは咳をしてるし、元気が無いように見えるの』とおっしゃる。ハンスの額を触ると、熱が高くて慌てて医者に見せたよ」

庭師のマルクは酒を飲むたび、その驚きを語るのだった。庭以外にも、厩に行けば馬の世話の仕方や体調管理、調理場に行けば火の起こし方に始まって、パンの焼き方やシチューの作り方を、その係りのものに熱心に質問して学ぶと言った具合だった。

厩舎長は「姫様なら皇帝陛下のお馬の世話も立派に出来るようになる」と言い、料理長は「皇帝陛下の召し上がり物だって立派なおつくりになるに違いない」と褒めるのである。

主人の娘だから、多少は世辞が入っているとしても、わずか5歳かそこらで邸中の人間の仕事の内容を深く理解出来ているのは確かだった。

エスターは、この好奇心旺盛で何でもやってしまう娘も、そろそろ貴族の娘としてのたしなみを仕込まなくては困ったことになるかもしれないと思い、夫に相談したのだが、夫は「ロザリアのやりたいようにさせてやればよからう。どうやら既に文字の読み書きは出来てしまうようだし、あまり急ぐことも無いのではないか？」と言っ

た。

「エスター、お前がこう考えていると言う事を、直接ロザリアに伝えたほうが良いのではないか？ 私はロザリアは好奇心が旺盛だから、案外お前が身につけて欲しいと思っている『貴族の嗜み』にも興味を示してくれるような気がするよ」

その夫の助言に従い、エスターはロザリアに自分の考えを伝えた。

「やはりお前は公爵家の一人娘ですから、貴族らしい気品有る立ち居振る舞いをしなくてはいけませんし、楽器の一つも弾けた方が良いでしょう、大きな舞踏会でも気後れせずダンスが出来るほうがよいですね。そうは言ってもお母様は舞踏会は苦手ですけれどね。でも、大きくなればそれなりのお付き合いは必要です。宮中で高貴なご身分の方々にお会いしたり、皇帝陛下の御用を務めたりするかもしれない。何より、お前にふさわしい身分の貴族か皇族の方を婿としてこの家に迎える事なるかもしれない・・・」

「お母様、マナーが完璧でダンスが出来て、何か楽器が弾ければ良いのでしょうか？」

「最低それだけは、と思うわ」

「では、それもやることとして、私は学問がしたいのです。それに、武術も学びたい」

「女の子がそんなことまで・・・」

「レオンハート領内の皆さんは、まだまだ貧しいです。ご苦勞が多いのです。自然の恵みをもっと生かせる方法が本当はあると思うんです。そうすれば皆さんの新しい仕事が出来て、遠くの街まで条件のよくない出稼ぎに行く必要もなくなります。だから、いずれは農業と畜産について学ばせてください。そんな学校があれば行きたいのですが、この帝国にはないそうですね。キタイ王国には立派な学校があるそうです。」

「外国にやるのは少なくとも今は無理でしょう。まずは、最低限、公爵家の跡取り娘として、必要な事柄だけでも身につけてください。」

お父様に無理なことをお願いしたいなら、尚更です」

「本当はダンスもマナーも、これからの私には大して役に立たない気もしますが、お母様のご心配はわかりました。でも、学問と武術は絶対必要だと思います。立派な方に婿に来ていただくためには、その方のお話やお考えがきちんとわかり、時には御相談相手も勤まるようではなくてはいいけないのではないのでしょうか？それに何か一大事があつたとき自分の身も守れないようでは、領国も守れませんでしょう？」

エステルは、幼い娘が自分をふがない母だと感じているのかも知れないと、思い至った。

「それはそうなのかもしれません。私では確かに、お父様の御相談相手も出来ず、政治向きのお話や領国のやりくりも出来ませんから」
エステルは段々我が身が情けなくなってきた。

「ご、ごめんなさい」

「いいえ、本当のことですものね」

わずから歳の娘は、母親の気持ちを傷つけたことを、ひどく気にしている様だった。

「お母様、泣かないで、ごめんなさい、ちゃんとダンスもマナーも楽器もがんばります。でも・・・」

「学問と武術ですね。わかりました、お前の気がすむようにやってみなさい、でも、留学はダメですよ」

「はい、ありがとうございます」

そういつて、ロザリアはエステルの腕に飛び込んできた。

「お母様、泣かないで、きっとロザリアが守って差し上げます。守れるようにがんばります」

わずか五歳の娘にこんな風に言われてしまう自分は、母としては落第かもしれないと、

苦笑しながらも、その癖の無い美しい黒髪を撫でてやるのだった。

だが、ロザリアにとって学問と武術がどれ程必要であるか、エスターはこの当時はまるで理解できていなかったのだ。領国の建て直しにロザリアが腕を振るい、自らのアイデアを生かして帝国一の女商人となるに及んで、なぜロザリアが学問と武術にこだわったのか、ようやくその重要性を悟ったのである。

もはや、母としてこの子に教えてやれることなど何もないかと思っていたが・・・

意外や意外、自分の出番は、むしろこれからかもしれないと、近頃エスターは感じるようになった。

大人びて人並み外れて賢いとは言え、まだ、ロザリアは12歳なのだ。並みの貴族の姫ならば家庭教師や乳母にまだまだ色々しつけられている年頃だし、もっと身分の軽いものなら学塾に通ったり、やっと奉公を始めたりする年頃である。

時々思いつめた表情で、溜め息をついている姿を近頃は見るようになったのだが、

あれは、恋の悩みでは無かろうか？そうエスターは察しをつけてはいたが、

まだ見守っていたほうが良いような気もしていた。

相手は、誰なのだろうか？やはり、皇太子と見るべきなのだろうか？それとも度々話題に出ていた隣国の摂政だろうか？

身近に仕えるクラウスだろうか？

その絞込みはエスターには出来て居なかった。

既に皇太子から内々に求婚されて居たとは、思いもよらなかったし、そのためにユীগが捨て身で魔法を行使しているとは考えもつかなかった。

第五章 クラウス（前書き）

- ・ 真面目です。割りを食う役目ですが、そのうちに良い事も有るかど
- ・

第五章 クラウス

「ほお・・・良い男じゃ。殆ど魔力は無いがロザリアの大きな助けとなろう。もう少し魔力さえあれば、夫となることも叶うのだが・・・惜しいの」

クラウスは小さな光の塊が、古の石版の上に立つロザリアに向かって言葉を発するのを、呆然と見つめた。余りの事に腰を抜かして、立っている事が出来ない。幾ら女神の末裔とは言え6歳に満たない幼いロザリアが堂々としているのに対して、自分はなぜこうも無様なのか、クラウスは情けなかった。

「何と、立てぬか・・・まあ良い。良く聴け男。そなたは終生ロザリアのなすべきことを支え、助けよ。それこそそなたの生まれた意義、運命じゃ」

「クラウス、よろしくね！」ロザリアはにっこりして言った。

「夫には出来ぬ男ゆえ、罪作りな事はするでないぞ、ロザリア」
「はい」

人の気も知らないで、何気に姫様も残酷だとクラウスは思った。

「クラウスとやら、色々男として辛い事もあるうが、心して努めれば良い事も有ろう。ロザリア、ますます励み、智恵有る人の言葉に耳を傾けよ。では、次にあう日を楽しみにしている」

言いたい事を言ってしまうと、女神と思しき光は消えた。

女神との遭遇から遡ること5年、ロザリアとクラウスの関わりは、ロザリアが歩けない頃から始まっていた。

クラウスはレオンハート公爵家の分家筋で譜代の家臣の家に生まれた。騎士身分にふさわしい教育を受けるため12歳から「騎士見習い」として帝国の首都・オルテスに有るレオンハート家の邸に入った。

その日の翌日、庭で剣の修練を済ませて、休んでいた所、いきなり

幼い女の子の声がした。

「クラウド！ロザリアを抱っこして！」

驚いて声がしたほうを見ると、中年のメイドに抱かれたロザリアがニコニコして、手を振っていた。

「姫様、クラウドさんはまだ12歳ですし、お邸に参ったばかりですよ」

「いいの。マリアは今からお仕事だけど、クラウドはお休みだから確かに、そうだが、その理解力と言うか状況判断に驚愕した。まだ1歳にもならない子が、こうもしっかり会話出来るなど聞いた事が無い。

「マリアさん、私はどうすれば・・・」

クラウドは途方にくれた。国許で幼い弟や妹の面倒は結構見てはいたが、どの子も歩けるようになってからのことであつたし、主君の一人娘を自分なんか抱っこして良いものなのだろうか？

「そうねえ・・・姫様を抱っこしてあげて」

「ええ？構わないのですか？」

「姫様がそうおっしゃるんだし、今休憩中なんですよ？」

「はあ、まあ・・・」

「大事な御用があるなら、乳母のイネス様か、執事のマルク様にお預けすれば良いんじゃない？」

そう言い置いて、古参メイドのマリアはクラウドにロザリアを渡した。

ロザリアを抱っこしてみて、驚いたのだが、何か良くわからない心引かれる良い香りが仄かにする。幼い子が香水を使うはずも無いのだが・・・抱っこされ慣れている所為か、いささかも重く感じない。

「クラウド、イネスの所でお菓子食べよう」

「姫様のお菓子を私なんかが頂くわけには、参りません」

「一緒に食べるの！」

「よろしいのですか？」

「いいの。あ、そこを曲がるとイネスが居る」

ロザリアの言葉通り、廊下を曲がるとイネスの姿があった。

「イネスく、クラウドとおやつ食べるの！」

「クラウドさんと御一緒におやつですか？」

「ロザリアのを半分こして、食べるの」

「今日は大きなカボチャのプリンですよ」

「クラウドとイネスとロザリアで食べるの！」

イネスはにこやかに3人分のおやつを支度をした。

「姫様はミルクですか？お茶ですか？」

「お茶！イネス、ふーふーしてね」

クラウドには薫り高い熱々の茶が、ロザリアには小さな愛らしいカップに入れた「ふーふー」した茶が出された。大きなカボチャプリンはロザリアの好物らしく、ご機嫌である。

「おいしいよ、クラウド食べよう」

「姫様、クラウドさんが大好きですか？」

「うん、大好き」

それを聞いて、クラウドは何だか照れてしまった。

乳母のイネスが言うには、ロザリアは驚くほど人をきちんと見ていて、抱っこをねだるのは確実に自分を運んでくれそうなそうな者に限るらしい。おやつと一緒に食べるのは特に気に入った人間であるという。

「私は今日初めて姫様にお会いしたのですが、気に入って下さったのですか？」

クラウドもロザリアとの会話に慣れてきて、直接尋ねてみた。

「あのね、クラウドに、ロザリアのお手伝いを頼むの！」

「姫様のお仕事のお手伝いですか？」

「うん。大事なお仕事。頑張って欲しい」

黒い瞳は実に真剣だった。

はて、一体どのような事をさせようとかの方は考えているのやら？後になって、「大事なお仕事」の重みと重要性を思い知る事になる

が、この頃のクラウスには姫様の遠大な計画と野望がまるで見えていなかった。

それでも言葉や行動と幼い外見が不釣り合いなロザリアを、不思議な方だとクラウスは感じ始めていた。

「クラウスさんは、色々大変なお仕事が有るようですね」

イネスは苦笑いしながらも、目は笑っていない。

「クラウス、お勉強も頑張ってるね。図書室の本を早く全部読んでね。ロザリア、待ってるから」

この表情からすると、真剣に待っているらしいので、驚いてしまった。

「まあ、姫様、あの凄い量の本を全部ですか？」

イネスも自分の膝の上でプリンを頬張るロザリアが、重々しくうなずくのを見て、驚いていた。

「難しいお仕事なの。お勉強が大事なの。ロザリアもお勉強したい」クラウスは昨日初めて許しを得て入った邸内の図書室の様子を思い返した。あの膨大な書籍を読むなんて、一体どのくらい掛かるのだろう？自分は武芸は得意だが、本を読むのは苦手なのに・・・気が重い。

それでも、カボチャプリンは美味しいし、腹も減っていたからクラウスはいつの間にか綺麗に平らげ、おかわりのお茶を飲んで考え込んでいた。すると・・・

「クラウス、お勉強だよ」ロザリアが窓を指差す。

「あら、本当ですね！ティボー先生がいらしたようよ」

帝都の大学の学長の職にあるティボーは、レオンハート領内の農民の息子で、若い頃は現当主であるジョシュアの家家庭教師を務めながらレオンハート家の支援を受け、大学者となった。

ジョシュアが身分にこだわりが薄いのは、師匠の影響を強く受けた所為だとされる。

「それでは、失礼いたします。おやつごちそうさまでした」

「お勉強、がんばってね」ロザリアはイネスに抱かれながら、もみじのような手をひらひらと降った。

「明日も一緒におやつね」

「はい。では、行って参ります」クラウスは深々と頭を下げると、ティボーが向かっている図書室目指して走りだした。

国許では幼い頃から山間の土地を走り回っていたので、クラウスの足は速かった。高齢で肥満したティボーより一足早く図書室の入り口に辿り着く事が出来た。

「・・・ふう、やれやれ」ホツとする間も無く、

「おう、おう、君がクラウス君かな？」朗々と響くテノールで、ティボーが呼びかけてきた。

「はい。初めまして。クラウス・ド・ピネと申します・・・」

「ああ、格式ばった挨拶は良い。クラウス君、私は農民の子だ。知っているか？」

「ティボー先生の御高名と業績は、シュビッツの村の誇りです」

「で、君は世が世なら私の御領主様と言う事になる」

「ピネ家は公爵様から『女神の台座』とシュビッツ・ピネ2ヶ村の監督を命じられているに過ぎません」

「いや、どうしてどうして、君は皇帝直属の騎士となるよりレオンハート公爵と共に有る事を選んだ廉直の士・心正しき騎士の末裔にふさわしいようだ」

「先祖の名を汚さぬよう、精進致します」

「では、手加減は無用だな。公爵様からも君をしっかりと鍛えて欲しいと伺っている」

「そうなのですか」

「ご期待に沿うべく、頑張り給え」

ティボーは言葉通り厳しかった。

毎日の講義にゲッソリするクラウスを「おやつ」で励まし、時には「クラウスの御本、読んで」とねだって講義内容を復習させ、疑問をぶつけて理解すべき内容を整理させてきたのは何を隠そう、幼い

ロザリアだった。おかげでクラウドスはオルト全体の歴史・宗教・地理について、深い内容を理解できるようになり、あの女神遭遇事件の少し前には「大学の入試を受けたまえ」とティボーに言われるま
でになった。

だが、5歳かそこらで知識・学力とも既に大学の学生のレベルに到達していたロザリアは、クラウドスと共にティボーの講義を受け「すばらしいです、姫様」と言わしめるようになっていた。

「クラウドス君は秀才だが、姫様は女神様の申し子だ、奇跡だ。その方のお手助けをするには君も私も相当精進せねばなるまいな」と、時折ティボーは溜め息をついていたものだ。

生まれ故郷のピネに程近い『女神の台座』、高山植物の花畑の中に謎の文字が刻まれた人が二人ほど乗れそうな大きさで四角い白大理石の石版が有るばかりと言う謎の遺跡は、クラウドスの生家・公爵家の譜代の臣ピネ家が管理を任されてきた。女神様をお願いすべき用件があるから、『女神の台座』に行くとロザリアが言い出したのは、ロザリアがもうすぐ6歳、クラウドスが17歳の夏の事だった。

公爵夫妻は実にあっさりとロザリアの願いを許可した。

生まれて初めて見るはずの『女神の台座』に刻まれた謎の文字をなんとロザリアは読み解き、台座に乗り天に呼びかけると、眩しく輝く光が舞い降り、ロザリアとクラウドスに語りかけたというわけなのだ。

姫様は紛れも無い女神の申し子なのだ。その方を支えよと言われたのだから、その役目を精一杯果たそう。

以来、努力と誠実の人クラウドスは精進を重ね、大学を主席で卒業し、合理的な会計処理を隣国キタイで学び、ロザリアの事業の発展に大いに尽くした。

第五章 クラウス（後書き）

皆さん、作中の人間関係はご理解頂けているでしょうか？
心配です。メインの人物は10人以下に抑える予定ですが、どうなるかな・・・

第六章 初の参内（前書き）

第一章から一旦過去にさかのぼって、ロザリアが生まれた時から話をしていますが、次第にロザリアが12歳の時点に戻って行きます。今回はロザリアが7歳の時の話になります。

第六章 初の参内

クラウドの目の前で、女神が降臨して2年が過ぎた。

ロザリアはあれ以来、年に幾度か『女神の台座』に出向き、クラウドには理解できない異界の言葉で女神と何事か語り合ったものだったが・・・

「まるで御親戚にでも会いに行かれるような」気軽さと親密さであった。

だが、これはまだ、ロザリアとクラウドだけの秘密であった。

「もう少ししたら、お父様とお母様も女神様にお会いすべきだと思いますけれど、まだ早いみたい」

ロザリアは7歳になり、母の願い通り5歳からはじめた公爵令嬢にふさわしいマナーやダンスの修行もほぼ完璧な段階に到達していた。女神様の末裔にふさわしいという学問の師・ティボールの意見で始めた豎琴も、熱心に練習していて、帝都の名だたる演奏者も一目置く存在となっていた。

母のエスターは余りに女の子が学問に励んでも・・・思っていたのだが、ティボールを深く信頼する父ジョシアの方針で、ロザリアの知的好奇心は抑制される事も無く、ますます強くなるのだった。

こっそり始めた剣の修行は、クラウドと手合わせして三本に一本は勝ちを取れる程度に上達していた。今では反対していた母もあきらめ、おおっぴらに邸内の修練場で稽古できるようになっていた。

魔法の修行法は古代に失われてしまったはずなのだが、女神のお告げ以来、どうやら一人でひそかに修練に励んでいるらしい。異界の言葉を短く呟き、様々な不思議な現象を発生させるロザリアの姿は、クラウドには光の塊にしか見えない女神よりも、より一掃、女神にふさわしい姿に見えた。

「その内、クラウドにも使いやすい、役に立つ魔法を見つかるからね」

そうロザリアは言うのだが、自分に魔法が使えるようになるなんて、丸でクラウスは信じられなかった。

「クラウスはそれがいけないの！」

ロザリアの言う所によると、オルトの人間は皆何がしかの魔力を帯びているそうだ。

もし全く魔力が無い人が居るとしたら、それはロザリアの魂に宿る「キョウコ」と言う婦人の故郷の「地球」と言う世界から来た人間ぐらいだという事だった。地球から来た人間は魔法が全く使えないかわり、全然魔法が効かないのだと言う。そのくせ魔法の概念は豊富で、色々な術の体系が考えられているらしい。地球では、魔法は御伽噺のもので、現実のものではないらしいのだ。もっとも、幾度説明を受けても、クラウスはその辺りの事情がどうも理解できないでいる。

異界の地球のような特殊な世界ならともかく、オルトではある程度の魔法が使われていないと、世界の均衡が崩れるのだが、今のうちに殆ど誰も使い方を忘れてしまっている状態は、ごく一握りの魔力が強いものの精神を荒廃させ、暴走を招くのだと言う。

既に、魔力を強く持つ皇帝陛下の血縁者の辺りに、その好ましくない兆しは見え始めているらしい。そのように女神が教えたところ、ロザリアはクラウスに語ったが、何事かクラウスにも語れない重大な秘密もあるらしい。

「魔法はちよつとばかり自信過剰で、高慢ちきな人のほうがうまく制御しやすいみたいよ。だからクラウスには向かないのかもしれないわね。でも、異界の魔法をうまくアレンジすれば、きっとクラウスも使いやすいと思うの」

クラウスには、治癒魔法が向いているらしいが、まだ開発途中らしい。攻撃魔法はクラウスの得意な剣と連動させたものならばかなり強力な物も期待出来るとか……。だが、しかし、それよりも気がかりなのは不吉な女神の予言だ。皇帝の周辺で何が起ころのだらう

か？

そんな話をロザリアとクラウドが語り合った日の翌日、父・ジョシアの妹で正妃であったアデルから宮廷への「お召し」が有った。評判の「小さな貴婦人」ロザリアを、幼い皇子・皇女の「御学友」にしたなどの事であった。アデル妃にしてみれば、実の姪であるし、実家、殊に頼りにしている兄のジョシアとの行き来が自然な形で出来るようになると心強いと言う事でも有ったのだろう。

正妃なのに皇后位を賜っていない理由として、キタイ王国の王女で皇后であった妊娠中の「先妻」とその胎内の子の突然の失踪が、二人のその後の足取りも含め全てが現在も謎のままである事、アデルがいわば皇帝の「後妻」の立場で家臣の家の出身である事が上げられるが、最大の理由は「先妻」の失踪は野心家であった先代のレオンハート公爵の関与が疑われ、その疑いは先代の死後ジョシアが公爵家を継いだ後も消えていない事なのだ。

母エスターは、実家エリンコート家の親族達が「ロザリアの参内はレオンハートがまた後宮を牛耳る策謀を巡らしていると受け止められかねない」と言う見方を伝えて来ていた事もあって、怖い噂の多い今の宮廷に一人娘をやる事に強い不安を抱いていた。しかし父のジョシアは妹に力添えしてやりたい気持ちもあり、申し出を「謹んでお受けした」のである。兄であるジョシアから見ても、ただ一人の妹アデルは陰謀渦巻く宮中で勢力を張って生きていくには余りに善良で、いささか気弱であった。

「ロザリアを参内させる」と言う返答をアデル妃にした翌日、アデル妃の使いが贈り物を持ってきた。

黄金に豪華な真珠とルビーを沢山あしらったネックレスとイヤリングの一揃いである。

「ロザリア姫が黒い目黒い髪の愛らしい方とお聞き及びになり、妃殿下御自らがお選びになりました。この一揃いを身につけられた姫様を早く御覧になりたいと言うお気持ちではないかと拝察いたします」

と言う、使いの老女官の言葉もあり、ルビーと真珠が良く映るようなドレスを大急ぎで誂えなくてはいけなくなった。いつもならドレスなんて「着られれば、それで良い」と思っているロザリアも、今回ばかりは幾度も仮縫いやサイズ調節に立ち会わされ、うんざりだった。

乳母のイネスは、気が重い本人や内心は反対の母のエスターの思惑をよそに大張り切りであった。

「姫様、マナーのチェックをいたしましょう」だの、「きっと姫様の豎琴を御所望になりますよ。おさらいいたしませんと」だの、「姫様は学問にも御造詣が深く、武芸に優れていらっしゃるとはいえ、宮中では万事控えめになさいませ」だの、実にうるさい。

「かわりにイネスが宮中に上がれば良いのに・・・」つい、ロザリアは愚痴っぽくエスターにぼやいた。

「普通の人間にとって、参内は晴れがましく名誉な事でしょうからね」

「お母様の御心配は、私もごもつとも思っております」

「まあ、ロザリア、あなたもそう思うの？」

「二代続いてレオンハートが妃を送り込む気か、と疑う貴族は多いでしょう。それに、今も行方知れずでいらっしゃる皇后様とお腹のお子様、もしご無事ならお子様はどうに御成人なさっているはずですよね・・・」

「そうねえ。その方が男のお子様で、どこかにお姿を現すと言う事が無いとも限ら無いし」

「皇太子ユーク様のお立場は微妙になりましょうね」

「それにしてもロザリア、お前は本当は何歳なの？成人して久しい人と話しているような気になるわ」

「キョウコという方は成人したお子様3人の母親でしたから、私は7歳の子供としては歪で奇妙な存在なのです。女神様の御都合で、色々厄介ごとを片付けなくてはならないようですからね」

「まあ・・・ロザリア・・・。それでもお前は私にとってただ一人の大切な娘です。その事は絶対に忘れないで下さいね」

真紅のドレスに妃から賜ったネックレスとイヤリングを身につけ、ロザリアは参内した。

見事に正式の礼をこなし、皇帝と妃の御下問も優雅に切り抜け、評判以上の「小さな貴婦人」ぶりに、その場の大人たちは目を奪われた。

だが、そのロザリアを決して好意的とはいえない冷ややかな視線で見つめるものも少なからず居たし、中には憎しみを感じさせる視線も有った。行方不明の皇后に仕えていた者だろうか？

アデル妃は御満悦であったが、隣の席の皇帝陛下の視線は定かでは無く、無関心無気力そのものだった。そしてもう一つ、強烈な視線の存在が有った。

珍奇な生き物を見るような好奇心丸出しで、ロザリアの中身まで全部見通してやろうとでも言うように「ジロジロ」見つめて来る。皇太子のユークだった。その真紅の瞳には今時珍しい事に、強烈な魔力が籠もっており、並の人間ならば全ての思いを見透かされていただろう。

魔力が弱い者はユークの力の程を感じ取れないが、なまじロザリアは魔力が有るだけに、ユークの禍々しい視線の力を強く意識した。それでも眩暈を起こさず、最後まで冷静に儀式を行うことが出来たのは、ロザリアの魔力が系統化された異界の魔法で、原始的な段階の素朴な魔法は力が強くても弾き返せるかららしい。

自分の魔法が弾き返されている事に、ユークは強烈に驚いていた。

「誠に女神の申し子かどうか知る由も無いが、あの小さな体に凄まじい『力』が有るのは確かだな」

周りの人間はユীগが魔力を照射すると骨の髄まで見通せるのに、ロザリアの場合はそれがかなわないのだ。

でも、ユীগは歯がゆく悔しいと思うより、ロザリアが気になってしかたがなかった。

「可愛いよなあ・・・確かに」

この時、ユীগ、12歳。

これがどうも「ひとめぼれ」と言う物で有ると悟るには、幼すぎた。

一方ロザリアは、ユীগよりも、既に正常な思考力が失せているらしい皇帝の様子が気がりだった。

「このままでは、この国は大変な事になるかも知れ無いわ・・・」
能天気な調子で「本当に、姫様、ご立派でした、もう私は思い残すことはありません」とか何とか、乳母のイネスが興奮して話し続ける帰りの馬車の中で、ロザリアは迫り来る危機、あるいは災厄と言うものの気配を強烈に感じながら、急に襲ってきた眠気に身を任せた。

「おや、まあ・・・眠ってしまったのですか？ こうした所は、まだまだ可愛い小さいお子様でいらっしゃるじゃいますね」

イネスの鈍感さが羨ましいと感じながら、ロザリアは、より深い眠りに落ちて行くのだった。

第六章 初の参内（後書き）

うまく今までの話全部が繋がって、イメージできるでしょうか？

第七章 2年間で大もうけ

生まれつき身分の上下があるのが自明の理で、魔法を使えない人間は使える人間の言いなりになるのが当然、身分の低いものは貧しくても当たり前で、身分有る者が頭を悩ませる必要は無い。それがこのオルトと言う世界全体の、特に貴族社会の常識だったが、近頃は少し風向きが変わってきた。

新しい風は思いもよらぬ所から吹いてきたのだ。

隣国キタイ王国の摂政・エスコバル公爵は、新しい農法をもたらし、産業の育成と雇用の拡大により、国内を活気付け、国民の暮らしを飛躍的に豊かにした。

従来からオルトで行われてきた農法は、実に素朴と言うか粗雑なもので、ロザリアも常々どうにかならないかと、気にはなっていたのだが・・・「混合農法が拓く未来」と題したエスコバル公爵の著作を読んで、衝撃を受けた。ティボーやクラウスも同じくその本に衝撃を受け「この農法を一刻も早く国内にも広めるべき」だという結論に至った。この時、ロザリアは5歳だったが、ティボーもクラウスも表向きのロザリアの年齢などとうに無視して考えるようになっていた。

「まずは試験的にレオンハート領内で新しい農法を実践してみよう」という事になり、父・ジョシユアの同意を得て領内の若者の中から意欲有る優秀な若者を5〜6名選び、エスコバル公爵の建てた「農業学校」に留学させた。期間は2年間の予定である。

アムダリア帝国内では「ローマの二圃式」同様の休閑と耕作を交互に行う農法がせいぜいで、「三圃式農業」すら知られて居なかった。休閑地はただそのまま半年放置されているにすぎず、家畜の排泄物を畑に還元することも、マメ科作物や根栽類を栽培して地力を回復

することも、まるで知られて居なかった。ここに、馬や牛に引かせる大型で深く耕せるタイプの鋤の導入と、穀物・野菜・牧草・飼料作物の土地の条件に合わせた輪作をセットで導入すれば、食料の生産高は飛躍的に増大すると説くエスコバル公爵が現れたのだ。

エスコバル公爵の理論の確かさを認め、留学生を送ってきたのはどうやらレオンハート家だけであつたようで、留学生は思いもよらぬほどの歓待を受け、懇切丁寧に新農法について指導を受けることが出来ている。

留学生派遣を最初に主張したのが、わずか5歳のロザリアであつたと聞いて、今度は逆にエスコバル公爵が驚き、以来、学問的な公爵の著作が完成するたび、ロザリアに「献呈」するとして送ってくれるようになった。

そのたびに、ロザリアは丁寧な感謝の言葉、学問上の疑問などを綴った手紙を出していたが、公爵は「その返事を楽しみにしている」らしかった。

幾度か手紙をやり取りする内、エスコバル公爵の手紙は次第に長くなる傾向にあつた。

最新のものは、三日前に届いたものだが、驚くほど分厚く、封を開くと爽やかな心地よい香りがする。

どうやら香水を降りかけたらしい。

「私のリユートの新曲の楽譜や詩集は読んで下さっても、大半の世の女性方は論文には目もくれない有様です。私の理想を深く理解し賛同して下さいの方が『女神の申し子』『小さな貴婦人』と呼ばれていらつしやると伺い、大変感動いたしております。オルト広しといえども、貴女ほど私の心を捕らえる方はきっとおいでになりません。帝国の人々は貴女の可憐さ・美しさを称えますが、私は貴女の志の深さ・賢明さ故に強く心惹かれております・・・」

それ以降は、はっきり言って、艶書・恋文といった風情に変化して、ロザリアはまだ見ぬ「麗しの摂政殿下」に心惹かれると同時に

に、いささか困惑もしていた。それでも、「オルト随一の伊達男」の実力は大変なものではないかと感じていた。

「摂政殿下はちょっと困った方だけど、味方になって下さったら、きつと頼りになるわ」

クラウドはロザリアの言う「ちょっと困った」と言う言葉が気がかりで堪らなかったが、「女神の申し子」であるロザリアなら、男の一人や二人、軽くないすことも出来そうな気もしていた。だが・・・風流な貴公子で知られるあの摂政殿下でも、自分の理想を理解できる女性は他に早々は見つけられないかもしれない。だとすると、一体・・・いやいや、年齢差は18歳も有るのだ。それを言い出せば、自分だってかなりの年齢差だが・・・。クラウドはてきぱきと領内の「実験農園」の話をもとめてゆくロザリアの言葉を、ボンヤリ聞いていた。他に、農園を作るピネ村の長老と邸内の庭園の管理者が同席している。

「それにしても、姫様のお話やキタイから手紙をよこしました者達の話から地力の回復を早く確実に行うことがいかに大切か、この爺にも理解できましたぞ」

「美しい花が咲き、家畜の餌にもなり、地力も回復させる植物ですか、それはすばらしいですな」

「更に、その花から蜂に蜜を取らせたらどうかとも思うのよ」

「蜂飼いの技を伝える者は居るようですが、うまくいきましようか？」

「邸の庭に咲いた花を見せて、農園の場所の説明を『女神の台座』近くで蜂を飼う人にしたら、恐らく良い蜜がかなりの量確保できると言ってくれたわよ」

「ほほ、それは楽しみですな」

クラウドの思いをよそに、話は弾んでいた。

「クラウド、クラウド、大丈夫？」

気がついたら、老人二人の姿は既に無く、ロザリアが心配げにクラ

ウスの顔を覗き込んでいた。

「いや・・・摂政殿下がどう『困った』方なのかと考えていましたら、意識がボンヤリしてきました」

「クラウスも連日色々と働いてもらっているからね。お疲れかも。

摂政殿下だけど、ひよっとしたら、あの方はキョウコ様と同じ世界に深く関わる方かもしれないわ」

「そうなのですか？」

「混合農法というのは、あの世界では広く知られた農法らしいの」

「そう言えば、気になる噂を思い出しました。あの方はキタイ王の御親族ではあるが、お子様ではない、だが高貴なご身分なのだと・・・そして、お生みになった母君のことは誰も存じ上げないのだと言いますね」

「母君は御出産のすぐ後、亡くなられた、とも聞くわね。殿下御自身、母君がどのどなたか御存知無いかしら？」

「異界の方と言う事は無いでしょうか？それならば色々伏せる必要が有りそうですね」

「そうですね。色々な可能性を考えたほうがいいのでしょうかね」

この時は、キタイ王国摂政エスコバルの秘密と帝国の運命が、どう関わってくるのか、二人ともまるで見当がつかなかった。

そんなことより、まずは領内の食料増産を成功させ、一日でも早く、レオンハート領内から飢えた者が居なくなるようにしたかった。領内5箇所「給食所」を作り、真冬の間希望するものには誰でも朝は粥とチーズ、夜はシチューとパンを与え、住まいの無い者達が寝泊りできる宿泊所も隣接して作った。

費用はレオンハート家持ちだが運営は村人全体に任せ、相互に協力・監視させて、不正を働く不心得物が出ないようにした。おかげで去年は、真冬の凍死者は出なかった。

だが、これでは、根本的解決には程遠い。一刻も早い新しい農法の

定着と産業の育成が必要だった。

5歳から7歳にかけては、いわばロザリアにとって地ならしの時期であった。

混合農法の本格的な導入に先駆けて、今からでも出来る事をやっておきたいと必死だった。

うかうかしている間にも、人々の貧しく苦しい暮らしは続いている。まずは今あるもので、何か起業できないかとロザリアは考えた。

領内の産物に高い付加価値をつけて、売る事ができれば、新しい雇用を創出することも出来るし、新しい農法で増えるであろう産物を売りさばく販路も確保できそうだ、と思い至った。

砂糖が外国から導入されて、帝国内でもハチミツの需要は大きく落ち込んでしまったが、まずはレオンハート領内の上質なハチミツの風味のよさを前面に押し出した目新しい菓子を売り出してはどうかと考えたのだ。

まだオルトでは知られていなかったキャラメルや、マシユマロ、さくさくした折りパイとかフィユタージュタイプと呼ばれるようなパイを試験的に帝都で売り出したところ、大評判となった。特に、今まで練りパイしか知らなかった人々にとって、折りパイのサクサク感、驚きのおいしさだったのだ。

これらはいずれもハチミツの風味を前面に打ち出し「レオンハートのハチミツ」の評判と取引価格も高めた。

次いで都の邸内に本格的に菓子工房を作り、レオンハート領内出身者が経営する宿屋や酒場・料理店で委託販売を行った。レシピは全てロザリアが京子の知っている物をほぼそのまま伝えたただけだが、その際、出入りの職人に命じて、泡だて器・レードル・裏ごし器・軽量スプーンやカップ・金属バット・ケーキクーラーなどの調理器具類も作らせた。これまた大成功し、調理器具専門の製作工房を作っても十分商売になるほどのヒット商品となった。

製造工程の単純なキャラメルはその後、製造の主力を都からレオンハート領内に移し、農作業の出来ない真冬の期間に農民が働ける場所とした。そして、ナッツやハーブ、ドライフルーツを配合した新商品も次々開発し、キャラメル一粒一粒を色とりどりの紙にくるみ、赤いリボンの柄を入れた銀色の缶に詰めて、「プレゼント用」に売り出した所、今度は帝国以外の国々から多くの引き合いが来るようになり、まさに商売繁盛であった。

これらのオルトでは革新的なアイデアを次々繰り出し、ロザリアの始めた菓子作りは、今や立派に領内の「雇用創出」「産業の育成」となっていた。

長年のレオンハート家の赤字体質は改善され、いまや大幅な黒字となりつつある。

5歳で始めたことが、わずか2年で、恐ろしいほどうまく行き、ロザリアはホッとする一方で、きつとこれから色々と厄介な事が起こるに違いないという、嬉しくない確かな予感に慄いていた。

第七章 2年間で大もうけ（後書き）

五時が、いや誤字が有りそうですね・・・見つけたらすぐ直します。

第八章 魔力

初の参内以降、2日に一度の頻度でアデル妃からのお召しがあり、ロザリアの頭痛の種になっていた。

実験農場の計画は着々と進んでいたが、領内に混合農法を定着させるための準備は、最高責任者のロザリアがいなくともうまく運ばないことも多く、はっきり言って余りに頻繁な妃の誘いは迷惑だった。最近では、ロザリアは宮中の3つの門に小さな鳥型の使い魔を置き、お妃の誘いの使者らしき人間が出発したら、すぐに知らせが来るようにした。知らせが来た途端ロザリアは馬で飛び出す事にしていた。懇意の農家なり、なじみの食堂なり、自分の開発商品を売っている店なりに行つて、それぞれの場所で仕事を手伝うのだ。アデル妃はまだ良しとしても、宮中には厄介な事が多かった。中でも皇太子ユークがロザリアに向ける強烈な執着と無秩序で大きすぎる魔力は上手い対処法も思いつかない難問だった。

父には悪いが、宮中では冷たく射すような視線が幾つも向けられ、多くの邪悪な意思が渦を巻いていて、その気配だけでもロザリアは疲れてしまう。アデル妃は善良だが物事の本質を見定める能力に欠けており、話題も退屈極まりなかったし、頼りなかった。

お召しを受けると、宮中のしょうもない噂話の相手や、豎琴の演奏をさせられる事が多かった。従兄弟の幼い皇子や皇女は愛らしかったが、大学生以上の学力があるロザリアでは御学友にもならないし、皇子・皇女付きの教師を差し置いて勉強を教えるわけにも行かず、本の読み聞かせをしたり、外で見聞きした事柄の話をねだられるままにする事が多かった。

アデル妃はロザリアの愛らしさ・賢さに夢中で、「私だけの特別な呼び方がしたい」との事で「小さなロザリー」と呼ぶのだが、そう呼ばれる時の周りの女官達の冷ややかな視線が更に疲労感を誘った。

アデルの生んだ12歳の皇太子ユーグは宮中でも独立した別の建物に住んでおり、最初の数回は顔も合わせなかったが、そのうち、ロザリアがやってくるのにあわせて母の住まう後宮の御殿に顔を見せるようになり、ロザリアが当惑するほど強い射る様なまなざしで見つめるようになった。

そうしたことが幾度かあって後、余りにぶしつけにロザリアを見るので、たまりかねて「殿下、何かおかしなものでも私についておりますか？」と尋ねると、表情に乏しい顔に笑みが浮かび、「いや・・・愛らしい人だと思ってつい見つめてしまうだけだ」と直球の答えが帰ってきて、ロザリアも決まりが悪かった。

「気に障ったのなら許して欲しい。ただ貴女の姿を目にして、声を聞くのが心地よいのだ。解かってくれ」と言いつつ、ユーグはロザリアの手を、両手で握りこんでしまう。

「殿下、その・・・」

「ユーグだ。ユーグと私の事を呼んでほしい」燃えるような赤い瞳の奥にすさまじいまでの魔力が揺らめいているのが感じられ、そのすさまじさにロザリアは一瞬気が遠くなってしまう、体のバランスを崩した。するとその瞬間、ユーグは驚くほどの強さでロザリアを抱きしめ、耳元に熱っぽい声でささやいた。

「そなたは、私の内に宿る力が解かるのだな」ロザリアは答えに窮した。

「答えにくいか、まあ、良い。日日、私は私自身の意志を超えて大きな力が勝手に流れ込んでくるのを感じるのだ。そなたは、幼い見かけと異なる強靱な魂と強い力を持っているな」

「・・・」

「ふっ・・・まあ、良からう。大きくなり続ける秘めたる力を制御する事が、時折困難に感じることもあるのだが、そなたは不思議な人だ。こうして触れているだけで心が凜ぎ、大きな安らぎを覚える。またこうして触れる事を許して欲しい」

ロザリアは、思わずユーグの顔を見返すと、なんとも寂しげな表情が浮かんでいる。何やらロザリアまでしんみりした気分になり、ユーグに向かって自分から手を差し伸べた。

「殿下・・・」

「ユーグだ。頼む、ユーグと呼んでおくれ」

そして、気がつくとも熱を帯びた唇がロザリアの唇に重ねられていた。

その翌日、女官どもは「小さなロザリーちゃん」はわずか7歳なのに皇太子殿下を色香で惑わせる空恐ろしいかただ、と噂した。これを聞いてユーグは激怒し、噂の発信源となった皇太子付きの侍女を激しく打擲した末、宮殿から放り出した。

この事件の後、女官達の視線が一層冷ややかになり、ロザリアは何がしか理由をつけて参内を避けようとするようになった。しかし正面切って誘いを断れば断ったで「レオンハートの小娘は無礼だ」と言われてしまう。

ロザリアが憂鬱そうに眉を顰めるようになったのは、参内を命じられてからの事で、その様子を傍で見ているしか出来ないクラウスは厄介ごとを持ち込んだアデル妃が恨めしかった。

だが、ロザリアの最大の悩みの種がアデル妃ではなく、ユーグ皇太子だとは思いつかなかった。

ユーグの行動は、次第に積極的になり、近頃はロザリアと二人きりの時間を過ごすためなら結界を張ることも、周囲の人間の記憶を操作することも厭わなかった。ユーグの魔力は非常に強く、抱きしめられ囁かれるだけで翌日までなんともいえない疲労感が残るのだった。今も、ロザリアは長椅子に足を伸ばしたユーグの膝の上にいるのだが、どこかボンヤリと靄のかかったような、甘くしびれるような感覚に浸っている。皇太子が結界を張ってまで自分と二人きりの時間を持つ事に強烈に執着している・・・その意味をロザリアなり

にある程度は理解していたが、それが迷惑なのか嬉しいのか実は自分でも良くわからずにいた。

「ロザリー、オレは自分で自分が恐ろしい。猛々しい力がオレ自身を喰らい尽くし、オレは化け物に変じてしまうかもしれない」

「武術の修行に励まれて、学問を積まれて、ご自分を強くおもちください」ロザリアはユーグの煌く銀色の髪を軽く手で梳きながら、ユーグの耳に囁いた。

「キスしておくれ、ロザリー、そうすればがんばれそうだ」

ロザリアは無言でユーグの頭を抱きしめると、そっと額にキスをした。

「オレの力がお前に負担を強いているのだろうな・・・弁えてはいらつものりなのだが、どうしても、こうして抱きしめたくなくなってしまふ。すまない」

「あやまらないで、ユーグ兄様・・・。古の龍の力をどうか御自分のものになさって下さい」

「逆に龍に食い散らかされてしまいそうだ」

「ユーグ兄様は大丈夫です。だから御自分を信じてください」

「なあ・・・何年か後になろうが・・・オレの妃になってくれないか？」

「色々と難しいでしょうね。私自身がやるべきことも色々有りますから」

「お前がオレをユーグと呼んでくれて、自ら唇にキスしてくれる日を夢見ているのだから」

「とても難しいです」

「それに関して、女神は何か仰らないのか？」

「ナイショです」そう言うと、ロザリアは軽いキスをユーグの唇にして、軽やかな身のこなしで長椅子から飛び降りた。

「今のキスで私としては精一杯です。後はユーグ兄様が龍の力を完全に御自分の物になさってからですわ」

そういうと、ユーグの結界ものともせず、部屋を出て行ってしまうのだった。

ユーグの結界を振り払って、クラウドが控えている通用門脇の小部屋にたどり着くと、ロザリアは意識を失った。倒れそうな体をクラウドがあわてて抱き止め、急ぎ馬車に抱えて乗り込む。

「クラウド、ああ、クラウド、良かった」

そういうと、またロザリアは昏々とクラウドの腕の中で眠り続けた。

「女神様、これは一体どうしたことなのです？」クラウドは女神に問うた。

「龍の力にあてられたな」クラウドの耳にあの女神の声が響いた。

「そなた、わが声が受け止められるようになったの。あっぱれじゃ。更に精進いたせよ」

「その龍の力とはいかなるものですか？」

「帝国の祖の身に宿っていた龍の片割れの力じゃ。これ以上のことはまだ言えぬ。せいぜい、ロザリアを愛しんでやれよ」

無垢な美しい寝顔を見つめていて、クラウドは清らかな額に口付けを落とした。

「クラウド、クラウド、抱っこ・・・」

ロザリアが寝言を言うことなど珍しいのではないだろうか？

「大丈夫です、しっかりと抱っこしておりますよ」

この世の誰よりも長い時間、クラウドはロザリアの体を抱いてきたのだ。如何に賢く優れていても、ロザリアの肉体は紛れもなく7歳の小さな女の子のもので、幼い子供らしい感情も願いもその中に存在している。その事をクラウドは知っていたし、女神の都合で奇妙な運命を押し付けられたロザリアの苦しみも自分こそが一番理解していると密かに自負していた。

「姫様、貴女をお守りするためならクラウドは何でもいたしますよ」艶やかな黒髪を梳いてやりつつ、日頃は口にしない思いの丈を吐いたのは、別の男の影を感じた所為かもしれないなかった。

女神の言葉からすると、ロザリアの激しい疲労は龍の力によるらしい。

帝国の祖の身に宿っていた龍・・・建国の神話と古い口伝に謎を解く鍵が隠されているのだろうか？その龍の力と向き合うのがロザリアの宿命なのだろうか？龍の力は皇族の身に宿る事が有ると言うが・・・？やはり皇太子の所為なのだろうか？

魔力が足りないから自分はロザリアの夫にはなれない、そう女神に告げられた事が、今頃になって、残念でたまらない。家臣の身で姫様を妻にするなど有りえないとずっと思っていた心の封印が、あの女神の言葉でどうにかなくなってしまったのだ。

「十分な魔力さえ有れば」

そう、魔力さえ有れば、自分は姫様を守れるかもしれない。事実、地道な修行の結果、自分一人で女神の声を聞き取る事ができるようになった、そして・・・

いや、それ以上はこれからの修行の成果次第だ。でも、何もしないであきらめる事は絶対にしない、そうクラウドは自分自身に誓うのだった。

第八章 魔力（後書き）

感想、お待ちしております！

「つまらん」といわれちゃうとめげそうですが・・・

誤字脱字の御指摘、大歓迎です！

第九章 成長する男（前書き）

成長する人は、魅力的です。

第九章 成長する男

ロザリアの起業した菓子製造とその販売を行う企業体を「会社」にしたのは、クラウスの提案だった。

このオルトと言う世界には、近代的な社会保険制度も無く法人法も存在しないが、クラウスは会社の組織や運営方法、資本金など会社の基本的なルールを「定款」に纏め、帝国の公証人役場に登録して公の認証を受け、国際ギルドにも発起人・役員・商標・商号・本店所在地・事業目的・資本金額をきっちり登録した。

個人的な商店では帝国中に事業を展開する上で資金的にも人材的にも限界がある。会社組織にすればより多くの人材と資金を集め易いのではないかと期待しての事であったが、法的な手続きを経て、国家の認証とギルドの会員証を掲げて商売をしたおかげで、社会的な信頼度は高まり、人材の採用もしやすくなった。

公爵家の姫君や騎士が銭金の心配をし、帳簿をつけ、物売り買いするなど如何な物か、と言った苦言を呈する向きもあったが、領内に新しい産業を興し、人々の暮らしを豊かにするために必要な事と言うクラウスの信念は固かった。

乳母のイネスは初参内以降、幾度かロザリアの供をしたが「宮中に渦巻く邪悪な気」に中てられて体調を崩し、国許へ静養に戻る事になり、事実上引退していた。魔力が全く無いものは、気に中る事も無いのだが、干渉してくる力を防御する術も無いのに感応する微少な魔力だけが残っていると、イネスのような状態になってしまう。

元来は、クラウスもイネスと大差ない能力しか発揮できなかったが、ロザリアが異界の魔術でクラウスの気性になじみやすい物を選び出した中から、少しずつ修行して身につける内、予想もしなかったハイレベルの防御魔法を手に入れた。

ロザリアの魔法の教え方は風変わりであった。

「このやり方ではクラウドス一人にしか教えられないけれど」と言いながら、いつもロザリアは目をつぶって床や地面に座ったクラウドスの頭をそっと抱きかかえる。そして「色の無い輝く大きな玉を思い浮かべて」と耳元でささやくのだ。すると、クラウドスの脳裏にきらめく色の無い巨大な宝玉が鮮明に思い浮かぶ。

「思い浮かんだわね。ならば、今から押し寄せて来る汚れた気・邪悪な気を呪文とともに掻き消すわよ。イレイズ！」すると、立ちこめて来ていた黒い気配が一度に消滅した。

「イレイズ、消滅の呪文よ。さあ、クラウドス、今度は自分の口で言ってみて頂戴」

次に、また黒い気配が漂ってきた。

「イレイズ」

「先ほどの消滅の瞬間をもっと鮮明に頭に描いて、もう一度」

「イレイズ！」

「まあ、今度はうまく行ったわ」確かに気配は消えていた。

すると、次の段階は手近な場所で黒い気配を感じる墓地や邸に続く森に出かけて行って、自分の体が「色の無い輝く大きな玉」にすっぽり入り込んでいる様子を思い浮かべさせ、「イレイズ」するのだった。

幾度か繰返す内にロザリアに見せられたヴィジョンを思い浮かべると呪文を唱えるタイミングが、かみ合うようになって来る。ここまですれば、後はクラウドス一人で練習を積みめば良い。

玉の中に、自分を納めるイメージのほか、ロザリアを納める様子を思い浮かべたり、自分とロザリア二人を納める様子に切り替えたり、応用もしてみる。こうして「イレイズ」は都合10日ほどで完全に習得できた。

クラウドスは、こうしてロザリアの手ほどきを受け、防御魔法と治癒魔法を体得した。修行の過程で小さな魔物や悪霊から受けた攻撃を

模倣して応用した攻撃魔法も自分のものにしていった。

「クラウスの魂のありようが、色の無い輝く大きな玉そのものだからこうして教える事ができるが」他のものではこうした教え方も出来ないし、ロザリアの描くヴィジョンを体に触れる事で感じ取る事が可能な人間など、「クラウスしか知らない」とロザリアは言うのだった。

全く魔力の無い庭師が、剪定作業をしていた高い木の上から、二人の魔法の練習の様子を見て、

「姫様はクラウス様がお好きなんだろうな。まあ、稀に見る好い男だし何より姫様一筋だからなあ。あれまあ、あんな風に愛しげに頭を胸元に抱きかかえて何事か囁いておいでだ。いやあ、お熱い事だ」などと面白がっていたのは気がつかなかった。

それから数日して「いやあ、クラウス様もうらやましいやら大変やらですな!」と、酒の入った庭師に大声で呼び止められて初めて、その様子を見られていた事にクラウスは思い至ったのだった。

興味津々と言う庭師の目つきから、魔法の修行が確かに恋人同士の親密な行動に見えなくも無い事に気がついて、クラウスは赤面した。

「・・・とまあ、かような具合に面白半分の噂のネタにされてしまったようです。迂闊でした」

と、クラウスは顔を赤くしながらロザリアに事の次第を伝えたと、

「魔力も殺意も無い視線まで気を配っていなかったわ。私もうつかりしてた。でもね・・・」

「でも、何ですか?」

「その庭師のおじさんの見方は正しいのかもね」

「姫様!」

「だって女神様は言われたの。触れられて構わないと思う男、嬉しいと思う男、動けないと思う男、そういう男は特別な存在で、私の運命に大きく関わるのだと」

「な、なんですって？」

「まだオムツをしていた時分から、私はクラウドに抱っこしてもらうのが好きだった。今も触れると何だか気分が安らぐの。最近、触れられると動けないと感じる方に出合ったけれど、あれは魔力の所為かもしれないし、どう言う事なのかまだ私の中で整理がつかないの」

「それは、皇太子殿下ですか？」

「そう。大きすぎる魔力に押しつぶされそうになっている寂しい方よ」

「姫様はあの方が好きですか？」

「あの方は私を好きだとおっしゃるけれど、どうなのかしら・・・苦しくて寂しいから、助けを求めていらっしゃるだけのように思いうわ。あの方の瞳の奥に時々、怒り狂う銀色の龍が見えるの。今の私ではあの大きな力に食いつぶされてしまいそうで怖い」

「姫様、どうかご自分のお気持ちのままになさって下さい。怖いなら、怖く無くなるように手を尽くしてみますか？それとも一層の事逃げますか？私はどこまでも貴女にお供いたします」

「銀の龍は片割れで、金の龍がいるはずなの。その二つの龍の力が穏やかな形でこのオルトに留まるには、どうしたら良いのかしらね？」

「金の龍の力も、この世界の誰かの中に宿っているのですね？」

「女神様のお言葉はそういう意味だと思うの」

「やはり怒り狂う恐ろしい龍でしょうか？」

「そうかもしれないし、そうでは無いかもしれない。だって、金の龍と銀の龍は性質がまるで違うらしいから。私なんか片割れの龍だけでも恐ろしいのに、その二つの龍を調和させ自分の身に宿らせたという建国の祖であられた方は、どれほどの力をお持ちだったのかしら」

「姫様の重大な使命とは、龍の力の調和なのでしょいか？」

「そうなのではないかと私も思うの。でも、どうすれば良いのかわ

からない」

「逃げるに逃げられませんか・・・」

「たぶんね。クラウドはどう思う？」

「銀の龍が暴れだす前に、金の龍を探す事が大切かもしれませんね。同じぐらいの大きな力が二つあれば、おのずと力の均衡も生まれてくるでしょうから。そうすれば、姫様がお力を蓄える時間も出来るのではありますまいか？」

「まあ、本当ね！とても素晴らしい考えだと思うわ」

「どこで何をなさるにせよ、このクラウドをお連れ下さい。魔法も精進いたしますから」

「クラウドって不思議な人ね」

「不思議ですか？」

「だって、年を追うごとに、確実に強く賢く頼りがいの有る人になって行くのだから。出合った頃は、ただ真面目で優しいお兄さんと言っ感じだったのにね」

「私はただ、姫様をお守りしたい、いつもそれだけなのです」

ロザリアはいつしかごく自然にクラウドに抱き上げられていた。初めて抱っこされた頃よりずっと背が高くなり、胸板も厚くなっている。かつての優しく清らかな少年の面差しは逞しく決意を秘めた男の顔になっていた。近頃クラウドは幾人もの女から文や贈り物を送られるようだったが「自分は姫様をお守りする騎士だからお受けできない」と言って、全て断っているらしい。近頃ふとしたきっかけでそのことを知って、ロザリアは嬉しかった。嬉しい。なぜ嬉しいのかしら・・・。

いつも心地よく気持ちいが安らぐクラウドの腕の中に比べて、あの赤い瞳の皇太子の腕の中は苦しく切なく、そして痺れる様な甘い気だるさを感じさせる。

ずっとクラウドと一緒に居たいけれど、あの皇太子を見捨てて良いとは思えない。

銀の龍に相對する金の龍・・・金の龍を宿した人間との出会いはい

つの事になるのか？

そして自分の運命はどのように変化するのだろうか？

化け物じみた龍の力に飲み込まれそうな少年と、奇妙な魂と運命を与えられた自分、そしてまだ見ぬ金の龍。

そんな厄介ごとの中に、クラウドのような善良な魂の持ち主を引きずり込んだのは、ほかならぬロザリア自身だった。

「クラウド、ごめんね」

「何をおっしゃいますか」

「次々と厄介な事にクラウドを引きずり込んで、本当にすまないと思ってるの」

「別に姫様の所為では有りません。お気になさいますな」

「あの日、あの時、私がクラウドに抱っこをせがまなかったら、クラウドは誰か優しい人と結婚して、平和に楽しく暮らしていたかもしれないのに」

「今の立場に私を置いて下さったのは姫様ご自身です。姫様がご自身で私を選んで下さった、その事がどれ程私にとって大切な、お分かりますか？」

「全部はわかってないかも。まだ私は七歳だから」

「ふふふっ・・・そうですね。だからこうしてまだ抱っこして差し上げる事ができますから。あと数年すればこんな事も出来ません」

「クラウド・・・ずっと傍にいてね」

「勿論です。もっと強くなって、いつも姫様をお助けできる男で居たいものです」

そう答えたクラウドの顔が、男らしくて綺麗だとロザリアは思っていた。

第九章 成長する男（後書き）

お気に入り登録が順調に増えてありがたいです。
励みになります。

是非感想もおよせ下さい。

第十章 惨劇（前書き）

残虐シーンがあります。血みどろです。

微細な描写は避けましたが・・・

今回ばかりは読後感が良くないでしょう。でも、重要な布石です。
よろしくお願いいたします。

第十章 惨劇

ロザリアが七歳のその年、忘れられない大異変があった。

いつものように、アデル妃のお召しに応じて後宮に足を踏み入れてみると、異様な光景が目に入った。

多くの女官が泣き叫び、医師や宮廷お抱えの魔術師が慌しく行き来している。

一人の年若い女官を捕まえて、一体何があったのか尋ねると、

「妃殿下と第二皇子様・皇女様が御一緒に突如血を吐かれて、意識を失われました。あっという間に息をなさらなくなって、魔術師達が回復魔法を発動させ、医者が診察いたしましたが無効で、何かの強烈な魔力が掛かった毒薬らしいことはどうにか突き止めたものの、解毒の方法がわからぬとかで・・・」

ロザリアもあわてて、三人が寝かされている部屋に向かった。

入り口に辿り着くと「ご臨終です」と言う声が聞こえ、啜り泣きが宮殿中に広がった。

そこへ荒々しい足跡がした。皇太子・ユークだった。

「ロザリー、中に入れ」手を取られて、ロザリアも中に入った。

大きな寝台に三人が寝かされているのを目にしたとたん、ユークの中から銀色の炎の様な物が揺らめき始め、

次第にユークの形相が陰しく変化して行くのが感じられた。風が巻き起こり、巨大な生き物の息遣いのような音が聞こえる。その場にいた者たちは脅えて部屋を逃げ出した。

「殿下、ユーク兄様、御自分を強く持ってください。罪なき物たちまで災厄に巻き込んではいけません」

「では、では、母上や弟・妹は罪が有ったと言うのか、惨たらしく殺される程の罪を犯したと言うのか」

耳を劈くような声でユークは叫ぶ。

「でも、龍の力に飲み込まれてはいけません！」

「皆、滅べばよいのだ！何もかも消えてしまえば良い！！！」

「ロザリアは大人になったら兄様と結婚して差し上げます！だからしっかりなさって！！」

その言葉がユークの耳に届いた瞬間、巨大な生き物の息遣いは消え、ユークはロザリアの腕に倒れこんだ。

そして小さな赤い炎がユークの頭頂部の辺りに揺らめきはじめ、中に銀色の龍が見て取れた。不安定だが強い波動をロザリアに向け、語りかけてくる。

「黒き宝玉の全き器よ、女神の申し子よ、この器は龍の血に未だなじめず弱く脆い。この器が毀たれぬ内に新しき龍の器を生せ。時は余り無い。さもなくば龍の力はオルトの天地になじまず、災厄の根源と成り果てよう」

それだけを告げると、まるで蠟燭の火が消えるように姿を消した。

ロザリアは呆然とした。龍の宣告の意味、その重大性がロザリアを恐れ慄かせ、恐怖に陥れた。

痙攣するロザリアの腕の中でユークは意識を取り戻し、蒼白なその顔を見つめた。起き上がって今度はロザリアを抱き返し、悲しげな調子で尋ねた。

「・・・ん？ロザリー？何が有ったのだ？なあ・・・教えてくれ・・・」

「龍の、龍の言葉を聴きました」

「龍はなんと？」

「わかりません。わかりません！わかりたくありません」

「オレの命が短いと言わなかったか？」

「わかりません！龍の言葉など！！」

「すまない、本当にすまない、ロザリー」

ロザリアもユークも打ちのめされ悲嘆にくれ、涙を流していた。

「この器が毀たれぬ内に新しき龍の器を生せ。時は余り無い」その意味する所はやはり一つしかないのかも知れない・・・。

二人はどれ程の時間抱き合っていただろうか？

痛いほどの少年の孤独と悲しみがロザリアの胸に突き刺さる。ロザリアを支えて抱きしめてはいるが、縋り付いているのは実はユーグの方なのだ。悲しい・寂しい・恐ろしい・・・そんなユーグの思いが、震える指から、回された手から、不安定に激しい心臓の鼓動から痛いほど伝わってくる。

「もう泣かないでユーグ兄様、ロザリアは大人になったら兄様と結婚して差し上げますから」

その言葉こそが、ユーグにも内に宿る龍にも必要である事はわかっていた。

龍は悠久の時を生きる。「時は余り無い」とはいえ人間の時間としてはいささか猶予は有るはずだ。

「きつとだよ、ロザリー、誓ってくれるかい？」

「ええ。でも、お心を強くもって龍の力に飲まれないようになさって下さい。さもないと誓いも守れません」

「武術に励み、学問を積むのだな」

「そうです。私も女神様にお力添えをお願いいたします」

「あなたの申し子をわが妃にいただきたいと、お願いした方が良かったのか」

「それが良いかもしれません」

「母や弟・妹の敵も取^{かたき}ってやりたい」

「そのお気持ちは当然の事ですけれど、暗い思いに沈まぬようお心を強く持って下さい。そうでなくてはお約束も守れません」

風が止み、大きな生き物の気配が消えたのを見て、部屋を遠巻きにしていた近衛兵の一団が雪崩込んで来た。

「殿下！御無事でしたか！怪しき気配は消えたようですが一体・・・」

「ロザリーが消してくれたぞ。そち達は大方脅えて部屋を遠巻きにしておったのだろう」

「め、面目次第も御座いません！」

責任者と思しき大男が冷や汗をかいている。

「ふっ・・・素直さに免じて許してやろう。毒殺犯を必ずや捕らえねばなるまいな」

「ははっ！」

「まずは、ロザリーを邸まで送れ。我が命の恩人ゆえ、くれぐれも丁重にな」

「ロザリー、近いうちにまた会おう」

一旦クラウドと共に馬車に乗り込んで、今日ばかりは特別に周りを近衛の騎馬隊に囲まれながら邸へ向かう道すがら、「こ、これは何、クラウド、クラウド」ロザリアが急に震えだした。

「どうなさいました？」クラウドがロザリアを抱きしめると、凄まじい光景がクラウドの意識に流れ込んだ。

「こ、これは、一大事」クラウドは馬車を急いで停車させると、近衛隊士たちにロザリアが宮中での異変を感じ取ったと伝えた。困惑する近衛隊士にロザリアは叫んだ。

「急いで、一刻も急いで殿下をお止めして！」

ただならぬ様子に、近衛隊士達は馬首を宮殿に向けて走り出した。

「クラウド、クラウド」

「はい。姫様、いかがいたしますか？」

「戻ります。あの方を止めなくては！」

宮殿の大広間は凄惨を極め、余りの惨たらしさに歴戦の士である近衛隊長までもが腰を抜かした。

元は人間であったかと思われるような肉片や臓器、手足、首が血みどろの海の中に転がっており、一部はまだうごめいていた。その大きな血だまりの中にユージュは仁王立ちをして、一人不気味に哄笑している。頭上に大きな赤い炎が揺らめいて見える。

「汚らわしき物ども、滅びるがいい・・・ククッ、ハハハ」

その魔物に取り憑かれたと思えない皇太子を、誰も止める事が

できずに居た。

ロザリアは凄まじい血の匂いに眩暈を覚えながら、クラウドに支えられ前に進んだ。

「もう、おやめ下さい、敵討ちも十分出来ましたでしょう。これ以上続ければ、私も先ほどのお約束は果たしかねます」

「ロザリー、おお、ロザリー、見よ、敵は取ったぞ。^{かたき}このオレに毒など100年早いわ・・・？ロザリー、その男は誰だ、お前は私の物になるのだ」

血まみれで虚ろな表情のまま、ユーグはロザリアに向かって怒りの視線を向け、剣に手をかけた。

「馬鹿者！」

鼓膜の破れそうな大音響の直後に女神の声が響き、全ての血だまり、全ての肉片が一瞬で消滅した。

すると、ユーグの目から狂気が消えた。

「ユーグよ。精進して龍の力を自らの物とせよ。それがならぬ内は我が許し無くロザリアに会う事を禁ずる」

ユーグはがっくり膝を折り、泣き声を放った。

「つくづく未熟者よのう・・・ロザリア、長居は無用じゃ。急ぎ邸に戻れ」

事の詳細までは知りようが無かったが、ユーグは自らの魔力を発動させて周りの人間の心の内を探り、母と弟・妹の殺害の実行犯とその殺害計画を企てた者をすぐに突き止めてしまったらしい。更にその上部の黒幕を探るために取調べを行う以前に、怒りの感情が沸騰し、犯人に繋がる可能性が有る人間を多数瞬殺したようだ。結局、犯行の源流には辿り着けず、必要以上に多くの人命を奪う結果になった。

使われた龍の魔法「爆殺」は特定の言葉なり物質なりに反応した者を全て内部から爆発させてしまう。今回の場合、アデル妃たちの飲

んだ茶に仕込まれた毒薬「龍の粉」の存在を僅かでも知る者・触れた者全てを殺害したのである。実際には「毒殺の実行された当日・前日に宮中に足を踏み入れ、龍の粉の用法を知るもの乃至は触れた者の内、『毒殺』と言う言葉に強く反応した者全て」に向けて術を発動させると言う無茶な方法を取ったらしい。犯罪の片棒を知らずに担がされて、事件発生後に気がついた者なども「全部まとめて始末すれば良い」と言うユーグの感覚は、将来の為政者として大いに問題が有る。

「龍の粉」は強烈な麻痺作用が有り、稀に薬用に使う事もある。医師の中には薬として使用した経験が有る者も居た。或いはそうした用法が有ると知っている者まで含めると相当な数に登るのだ。今回の大惨劇でかなりの数の無実の医師やその関係者が命を落としたと思われる。ましてや血に騒ぐ龍の力を制御しきれなくなるなど、危険極まりない事であって、ユーグには龍をその身に宿す資格が無いと言って良い。

「それでも、あやつに龍の力が宿っているのが問題なのだ」と言う女神の言葉は頷けた。

ユーグの暴挙の所為で、真相は一層見えにくくなったと言って良かった。

余りに多くの人の死を見て、ロザリアは精神が不安定になりかけていた。そんな時でも、クラウスにすがりつく心は安らぐのだった。

邸に戻るとロザリアの両親が、揃って気遣わしげに出迎えた。既に宮中での毒殺事件と大惨事はおよその話が伝わっていた。ロザリアはクラウスの腕の中で眠っている。

「寝かしつけたら、クラウスに折り入って頼みが有る」父・ジョシユア公爵の表情は暗かった。

第十一章 支え（前書き）

最後の方は、十八禁な展開を、すごくあっさり扱ってます。すっかり書いた「外伝」とか「余話」のような物を、そのうち書くかも知れません。その場合はきっちり「十八禁」の表示をしますね。

第十一章 支え

ティボーは近頃、古い魔法・秘術・魔術の研究に没頭していた。企業の経営や農地の改良といった実務はクラウスに大半任せても、危なげなく運用できるようになってきたからでもあるが、レオンハート家の危機、いや、帝国の危機を未然に防ぐ手立てを探り当てようとしていた。クラウスが目撃した惨状と力を発動させたユーグの状態を伝え聞いて、龍の力の調和が急務と悟ったのだ。

先ほどから、ティボーとクラウスが目の前に広げている絵は、皇帝直属の宮殿に隣接する大神殿の書庫に長年秘蔵されてきた絵図面の写しだ。鼻葉と言うか賄賂を使えば、持ち出しを禁じられた書物の写しを取るぐらい、たやすかった。ティボーは腕利きの絵師を伴って秘蔵の古文書や絵図面を多数写し取った。この『根本原理の図』と言う表題のついた絵図の原本は、制作年代も定かでは無い途轍もなく古い物のようだった。

絵図には黒い宝玉と、その宝玉に左右対称に絡み付いている金の龍・銀の龍が描かれ、双龍を絡みつかせた宝玉は白い大きな円の上に浮かんでいる。絵図の詞書は「金の龍・銀の龍は地を統べる者を器とし、黒き宝玉は双龍の氣と相和しオルトの天地と融和せしめる・・・」と有るが白い大きな円が一体何かという説明が欠けている。読み取れる部分の後に痛みがひどく判読できない箇所があるのだ。

「うーん・・・やはり、この図が秘密を解き明かす鍵になるような気がするがなあ」

ティボーは考えを纏める時の癖で、残り少なくなった頭髪を掻き毟った。

「先生、今の時代では、この黒い宝玉がロザリア様で銀の龍は皇太子殿下なのでしょうか」

「それは間違いなからう。だが、この、白い大きな円の役割は何だ？どのような性質を持つのだろうか？」

「二つの龍に絡みつかれた宝玉を支えているようにも見えますが」

「おお！それだ、それに違いない！！クラウド、姫様がお前の魂の有り様が色の無い宝玉のようだとおっしゃっていると言っていたな」

「はあ・・・」

「クラウドの役どころは、この白い円ではないか？黒い宝玉を支える役目だぞ」

クラウドは難しい顔つきで黙り込んでしまった。自分がそんな大層なものだろうか？確かに自分は姫様を支えて行きたいと願っているが・・・

「クラウドは、やはり『新しき器』は皇室の血筋のお子様だと考えるか？」

「ロザリア様が見た皇太子殿下に宿る龍は『この器は龍の血に未だなじめず弱く脆い』と言ったそうです」

「それはやはり、ロザリア様が皇太子の御子を生まねばならぬと言う意味だろうか」

「ロザリア様が『大人になったら殿下と結婚して差し上げる』とおっしゃると、殿下の気が和み、龍が消えたそうです」

「普通の受け止め方はそうなのだろうか・・・何か抜け道がありそうだがな」

「は？抜け道ですか？？」

「クラウドも若い身空で苦労が多いな。公爵様がお前を息子同然と思っただけ下さっても、あの氣狂いの皇太子がロザリア様を狙っているはなあ・・・」

「先生、そのような事おっしゃいますな。何かあるかわかりません」「この図書室は龍の力を遮断できる結界が施されている。ここで話すのならば恐らく大丈夫じゃよ」

「ですが、御用心下さい」

「用心しよう。それにしても・・・殿下の内に銀の龍は居るが、対

の金の龍は見当たaraぬのだよな」

「私もずっと不思議に思っております。女神様のお話では『金の龍を宿らせたものがオルトのどこかに居る』のは確かだが、よほどその人間と龍の馴染みが良いらしく、龍としての形を取る事が絶えて久しいとか」

「ならば、その『金の龍の器』を探し当てて見ると道が開けるかもしれないのう」

「龍がなじむと言う事は、度量が有り優れた人物でしょうね」

「既に広く世に名を知られた人と言う可能性は高かろうなあ」

「金の龍と銀の龍はどこが違うのですか？」

「金の龍は体が金色で緑の目、銀の龍は体が銀色で赤い目とされるな。人型を取るか人に宿る場合もその頭髮の色と目の色に元の色が現れると言う。皇太子は髪が銀色で目は赤い」

「と言うことは、金の龍を宿す人は髪が金色で目が緑色なのでしょうか？」

「だろうなあ……。金の龍は光明の中にいて音曲を好み、多くの実りを齎す^{もたら}。銀の龍は暗黒の中に身を潜め静寂を好み、隠された望みを成就せしめる、と幾つかの古書に記されている」

「金の龍は現われたる技で人々の心を動かし、銀の龍は隠されたる技で人々の心を惑わす……。という言葉^をを記憶しておりますが」

「金の龍は言葉や芸能・芸術の力で多くの人の心を捉え、銀の龍は魔法や秘術・秘薬で公に口に出来ぬような願いも成就させる、と言う意味合いに解釈されている。『惑わす』が願いの成就を意味すると言う解釈には、異論もあるがな」

「皇太子殿下は惑わしているのでしょうか？」

「ロザリア様を惑わそうとはなさるだろうな。人の思い、記憶に干渉する力は既にお持ちではないか？」

「それは、そうなのかもしれません。……。さてよ……。そうだ、弁舌や著作で多くの人の心を動かし、リ्यूトや歌の名手で金色の髪・緑の目という方がいらっしゃるではないですか！」

「おお、『麗しの摂政殿下』か！」

「以前ロザリア様が、摂政殿下はキョウコ様と同じ世界に関わりの深い方ではないかと仰ってました」

「ならば、合点が行くぞ。異界の魂の力でしっかりとした金の龍の器の役目を果たしておられるのだらう。ロザリア様が『黒き宝玉の全き器』であられるのと、同様の事情ではあるまいか？」

「これは・・・やはり一度直接キタイに赴いて、摂政殿下に御相談申し上げますか」

「だが、帝国の秘事を他国の王族に明らかにして良いものかのう・・・」

「少なくとも摂政殿下が金の龍かどうかだけでも、はっきりさせたいです」

「この際、ロザリア様をお連れしたらどうだ」

「摂政殿下は英明な方のようですが、女性関係の噂はどうも・・・」

「そうであるにせよ、あの皇太子殿下より恐らくマシじやろう。それに、ロザリア様はまだ7歳でいらっしゃる。さすがにけしからぬ事もなさるまい」

「姑息な魔法などお使いにならないように思いますが、それはそれで、心配です」

「ロザリア様とは18歳違いか・・・輝くような美丈夫で才気溢れる方なら、正々堂々と『お前の姫様』のお心を手に入れてしまわれるかも知れぬか？」

ティボーは笑いながらクラウドの肩をたたいた。

「残念ながら『私の姫様』では有りませんし、笑い事ではありませんん」

「いや、すまんすまん。だが、公爵様は『クラウドに任せる』と仰ったのであろう？奥方様はお前がロザリア様と同じ臥所で眠って欲しいと仰せになったとか」

「さすがに、姫様のベッドは恐れ多くて・・・昨夜はソファで眠りました」

「クラウド、腹をくくれ!」

「は?」

「お前がこの白い円で描かれた宝玉の支えであるならば、身も心も支えて差し上げよ」

「はあ・・・」

「ロザリア様はどう仰ったのだ」

「今夜からは、同じベッドで眠ろうと仰いましたが・・・」

「別にお前も嫌ではあるまい? ははあ・・・健全な18歳の男子としては辛いかな、色々! そういった方面のご相談は奥方様や姫様には申し上げかねるよな。公爵様など、今のお前と同じ年頃には上は貴族の奥方・皇族の姫君から下は酒場の女・娼婦まで、色々と派手でいらしたぞ。私は幼馴染でも有る女房殿一筋だがな」

「つ、辛いかなとは申しませんが、私はいまだ経験ありませんし、当分大丈夫です!」

「そうかそうか、それにしても、女神様も残酷な事をなさるな」

その夜から、クラウドは覚悟を決めてロザリアと同じ臥所で眠る事にした。

床に入る前にやけに長く祈りをささげるクラウドを、ロザリアは訝しがった。

「どうしたの?」

「私が夢うつつで姫様にけしからぬことなどしませんように、女神様をお願いしておりました」

「まあ、クラウド、けしからぬことって・・・クラウドがしたい事なら、けしからぬことなど無いわ」

「姫様」

「さあ、床に入りましょう」

床に入ると、ロザリアはごく自然に身を寄せてきた。

「クラウド、こっちを向いて」

クラウドが顔を向けると、ロザリアは唇にキスをした。そして「ク

ラウス、大好き・・・」とささやくと、そのとたんに安らかな寝息を立て始めた。

確かに、女神は残酷だ。ロザリアはまだ7歳なのだ。昼間の会話の所為か、かぐわしいロザリアの髪の毛の香りの所為か、普段は意識しなかった自らの器官に注意が向いてしまう。この状態が意味するところをロザリアに知られるのが憚られる。知ってなおロザリアは「大好き」と言ってくれるだろうか・・・悶悶とする内、クラウスは奇妙な夢の中に落ちていった。

ふと見ると、ロザリアは大人になっていて、胸は豊かで腰は引き締まり、目がつぶれるかと思うほど美しい裸身を惜しげもなくクラウスの前にさらしている。「まあ、あなた・・・18歳のあなたなのね？」クラウスがおずおずうなずくと「わかりました」とニッコリして、思いもよらないような大胆なマネを色々してのけた。強烈な爽快感と共に事が終わると、そのロザリアも汗ばんだ体を摺り寄せ「大好き」と言ってクラウスの唇にキスをした。

目が覚めると夜は明けていて、心地よい気だるさが残った。まだ幼いロザリアは安らかな寝息を立てている。

「クラウス、いかがじゃ」女神の声がする。

「あれは・・・あの夢はいかなるものでしょうか？」

「少し時を歪めて、大人のロザリアの所に導いたのだ。あのロザリアは若いそなたを懐かしんで愛しんでくれたであろう」

「は、はあ・・・」

「必要と有らば、毎夜でも遠慮なく会えば良い。そちの隣に居るのもロザリアなら、あれも紛れも無いロザリアなのだからな」

第十二章 遺言書（前書き）

少し残酷シーン有りです。

ちよつと舞台を移すので、前フリです。

それにしても、遺言書って、こんな感じ？

第十二章 遺言書

突然、ティボーが投獄された。

あの『根本原理の図』を前にクラウドと語り合ってから一月と経っていないかった。

帝国の秘密文書を密かに写し、外国に帝国の機密を漏らしたという容疑であった。

証拠書類を押さえようとしたが、皆、雲散霧消しており、立証は不可能だった。

それでも、ティボーは牢に留め置かれ、毎日、皇太子自らの取調べを受けた。

「で、帝国の秘事を隣国の摂政にもらしたな……。クツ、気狂い皇太子とは、言ってくれる。隠し立ては無駄だ。龍の力を阻む結界がある所でなら何をして大丈夫と油断したようだな。結界の外でのお前の意識を探れば、何がなされて居たか、手に取るようにわかるのだぞ」

ユーグの赤い目は、残虐な喜びに輝いている。

「わ、私の命を奪うなど容易かろう。しかし、そうすれば言わばレオンハートは逆臣となり、ロザリア姫をお妃に迎えられる事は、まず不可能となりましょう」

ユーグは目を見開き、この忌々しい老人の頬を打った。

「術をかけるまでも無く、ひねり殺すことも出来そうな爺だが、悪知恵は回るの。良い。我が印をその背中に焼き付けてやろう。爺の背中を出せ。焼鰻やきうなぎを押すのだ。そうだ、それをよこせ……。」

牢番は恭しく焼鰻をユーグに差し出した。

「我が意に染まぬ物に大いなる苦しみと緩慢なる死を与えよ。焼楔！」

呪文と共に、焼鰻は真っ赤になった。

「皇太子たるこのユーグ自らが、お前に印を与えよう。ロザリアが

我が妃となるのを妨げるような事を企み、口にするたび、耐え難い苦痛を覚えるだろう。最初は右手が焼け落ち、次は左手が焼け落ちる。クククッ、お前の様なひ弱な爺はそれまでで命を落とすかも知れぬな。生き延びても次は右足、左足、そして頭が焼ける。クククッ、さすがにそれで生き続ける物は居まい」

凄まじいティボーの苦悶の叫び声を聞きながら、肉の焼ける匂いに眉を顰め、

「爺は焼ける匂いまで、爺だの」と言い捨てた。

「こやつをレオンハートの邸に送り届けよ。今回は証拠不十分で見逃してやるが二度とは許さぬと、公爵に伝えよ」

強気を装いつつもユークは動揺していた。

焼鏝を当てられながらも、ティボーが「これでロザリア様のお気持ちは完全に皇太子から離れよう」とチラッと思った事を読み解いて、自分の迂闊さに腹を立てていた。ロザリアとあの忌々しい騎士だけは、何故か全く龍の力が及ばない。記憶の操作が出来ないロザリアに嫌われてしまえば、取り返しがつかぬ・・・「迂闊であった」

こうなれば、もっと大掛かりな仕掛けをせねば、ロザリアの心は完全に離れる。

何か、起死回生の手段は無いものか？

女神の動きを封印出来る禁術が存在したはずだが・・・その事に思い至ったユークは神官どもに、古文書の洗い出しを急がせる事にした。

「女神を封じれば、ロザリーの記憶も操作出来るかも知れぬ」

ユークはなりふり構わなかった。

一方で、ティボーは罪人の死骸を包む布袋に詰められ、レオンハート公爵家に届けられた。

虫の息のティボーにロザリアとクラウドは治癒魔法を施した。一人ずつでは効果が薄い、ロザリアの発案でクラウドと手と手を合わせ額を寄せ合い「イレイズ！」と声を合わせ号令すると、背中 of 惨

たらしい印がきれいに消えた。

「先生！大丈夫ですか」

「おお、姫様、クラウドス、ありがとう、本当にありがとう」

ティボーの投獄以来、レオンハート邸は龍の力よけの結界を張ったが・・・

「結界を張ること自体、反逆の意志有りと見做す」と言うユーグの言葉を思えば、この邸も安全ではない。

公爵とティボーはこれからの身の処し方について相談していた。

「姫様とクラウドスにだけは龍の魔法は効かぬようです・・・それだけに、クラウドスは魔法以外の方法で命を付けねられる事になるのでは有りますまいか？或いは・・・」

「或いは？」

「龍の魔法が及ぶ者全ての記憶を変容させ、殿下に都合の良い幻を皆に信じ込ませるのでは有りますまいか？私が、うっかり、直接的な攻撃しか出来ぬとは全く馬鹿な皇太子だと罵りましたら、あの皇太子は『記憶を歪め我が僕と成し得る人間が大半だ』という事を知らぬか。お前自身の頭の中身も例外では無いのだぞ』と言われましたからな」

「では、先生、ロザリアとクラウドスは、この国から外に逃がしますか」

「それが良からう。力無き物は、頭を垂れ、あの横暴な皇太子に従いつつも生き延びて、二人の行く末に期待いたしましょう」

「皇太子は余り寿命が残っていないように伺いましたが、一体どれ程生きるのでしょうか」

「さよう、今のようになら先もわきまえず魔力を浪費していれば、早晩死に至りましょう」

「何年ほど、と予想されますか？」

「さよう、せいぜい5年。持って6年と言う所でありましょうか」

その夜、ロザリアとクラウスは公爵夫妻・ティボーと共に図書室で語り合った。

「私もエスターもお前を家臣では無く『我が家族』と思っている。その、お前さえ良ければ将来ロザリアを妻にする事も考えて欲しい。時節柄、表立って披露は出来ないが、エスターと私の心積もりはずっとそのようなものだった。この話、受けてくれようか？」

「謹んでお受けいたします・・・ですが、皇太子殿下はロザリア様をどうしてもお妃になさるつもりでは？」

「口さがない不快な噂は色々耳にしたが、正式のお申入れを頂いた訳では無いし、少なくとも、私もエスターも内々のお話すら承っていないのだ。国許で静養させると言って、密かに出国せよ」

「それでは、お父様やお母様、先生に何事かあってもお助けできません」ロザリアは心配げに言った。

「ロザリア・・・女神様の思し召しに任せましょう。今朝、女神様があなたたち二人を金の龍に引き合わせれば、道が開けるとお示し下さいました」

「お母様も私も同じ夢を見たのだ。何、女神様のお計らいに任せよう」公爵は涙を浮かべ微笑んだ。

「では、行き先はキタイですね」

「そうだ。クラウスにはこれを大切に持っていて欲しい。先生とご相談の上纏めた正式の遺言書だ」

「お父様！」

「ロザリア、落ちついて、お母様も賛成しました」

「それでじゃ、クラウス、姫様と共に、遺言書の内容に良く目を通し、龍の魔法よけを施してもらいたい」

「レオンハート家の当主は、代々日記を子孫のために残している。こちらの、私が公爵を継いでから、ほぼ毎日、かなり真面目に政治向きの内情や宮中の動向を綴った日記の方も、勝手に何者かによって改竄されたり、捨てられたりしないように封印できないだろうか」公爵夫妻とティボーが恐れているのは、記憶の操作・作為的な忘却

であったが、その恐れは、恐らく現実のものとなるだろうとクラウドは感じた。

「私は、龍の魔法から本当に逃れる力を持つでしょうか？」ロザリアは恐怖に震えていた。

「大切な人や大切なことをすっかり忘れてしまったりしないでしょうか？」

「ロザリア、きっと大丈夫よ。たとえ一時惑わされたとしても、あなたの魂の奥にまで触れることなど出来はしないでしょう」母・エスターはロザリアをそっと抱きしめた。

「皇太子は禁術を探り当てる気でしょうか？使い魔が宮殿での動きを伝えてきましたが・・・」

クラウドの言葉から知らず知らず「殿下」という敬称が抜けている。

「何？それはまずいな・・・女神様を封じる気ではあるまいか？」

「しかし・・・その術は自らの寿命を半減するものではなかったかと記憶しております」クラウド自身はこの図書室の蔵書の或る古文書の内容に記憶が有った。

「そうじゃ、わたしも読んだな・・・いかなる本であったか記憶に無いのだが」

「確か、龍自身か龍の気を帯びた物の血で、『女神の台座』に呪いの文字を書き込むと言う方法でしたね」

「まあ・・・恐ろしい」

一同、皇太子ユークの狂気に嫌悪感と恐怖を覚えていた。

「エスター、恐ろしがつてばかりいても事は先に進まぬぞ」

「そうですわね。クラウド、ロザリア、遺言を確認なさい」

テーブルに広げられた遺言書はオルト全体で通用する正式な形式のものだった。

「遺言者 帝国開祖の莫逆の友にして忠臣たるバラム・ド・ネヴィル・レオンハートの正統たる公爵ジョシア・ド・ヴァレス・レオンハートは、遺言者の有する下記城郭・荘園・邸宅・店舗・財宝・債権・家畜、および帝国開祖より特に当レオンハート公爵家に託さ

れたる神域の管理権を、遺言者の娘ロザリア・ド・ヴァレス・レオンハートの正統な配偶者たるクラウド・ド・ピネ（功臣ルーファス・ド・ピネの末裔にして騎士）に託し、一切の管理運営を委ねる」となっており、「この遺言の発効は遺言者の生命が失われたる場合は無論、悪意有る魔法・秘術・薬物・病などにより遺言者が正常ならざる状態に有ると立会人が認めたる場合もこれを含む。立会人死亡の際は娘ロザリアの判断に従う」と言う附則事項と日付が入り、正式な公爵の署名とサイン、立会人として母エスターとティボーの署名・サインが有った。

「公爵様・・・」

「父上と呼べ、クラウド」

「で、では、父上、この日付は本日となっておりますが」

「本日只今から、何か事があれば全てをクラウドに託すと言う意味だ」

「ありがとうございます」

「秘術への対策だ。出来うる限りの備えはしておかねばな。では、ロザリアと共に仕上げを頼む」

クラウドはロザリアの前にひざまずき、二人は両方の手と額をあわせて念じた

「プロテス・シェル！」

無色で氷の結晶の様な物が多数発生し、遺言書と日記帳に降り注ぐ。日記帳の方にはこの図書室から持ち出そうとすると、地面にめり込んで動けなくなる呪いもかけた。

些かでもこうした手立てが役立てば良いのだが・・・ジョシユアは不安でならなかった。

第十三章

女神の裏事情（前書き）

なんだか色々、女神さんも不味い事やって来たようです。
一足先に、新キャラの中身だけ登場です。

第十三章

女神の裏事情

何処とは特定し難いが、オルトの力^{ちから}有る魂と神霊が集い、意思の疎通を図る事が可能な場所が有る。

どういう訳か京子の霊はオルトで生じたロザリアの霊と同一の肉体に平和に共存しながらも、独自の霊格・意識を保ったまま存在し続けている。女神も予想していなかった事態で有ったが、これから訪れる困難を乗り切るにはかえって好都合なのかもしれない。

「いやあ、だからね、そんな、あきませんって。そりゃあ、私、美少女に生まれ変わって美形男子にモテモテが良いとは言いましたけど、あんなウジウジグズグズで浅はかな皇子に粘着されても嬉しくないわ。しかもあんだ、最初はロザリアちゃんにあいつの子供生ませる気だったんですやろ？ ほんでもって、お隣の国のイケメンさんだかに、最後がクラウドス君の子供？ そりゃあ、3人ぐらい子供生んだかて、かめへんけど、子供も偉い気の毒ですよん」

「しかしなあ、龍の気をなじませるにはロザリアが金の龍と銀の龍の子を産むしかならう？」

女神は京子の剣幕にたじたじである。

「ヘイ！ ウェイト！！」

「お宅どなた？」

「その隣の国のイケメンの中身。マークと言います。地球ではMITの学生で将来は革命的な食糧生産体制と都市機能の調和について研究の予定だったのに、飛行機事故でこっちに来ちゃいまして、今、話に出た金の龍と馴れ合って摂政役やってます」

「MITって、めっさ、賢いやん。あ、うちら今何語でしゃべってるの？」

「意識そのまままで全て通じるのじゃ、ここでは」

「あ、僕、日本語OKです。一応JTEST特A級ですから」

「何それ？」

「実用日本語検定試験って、日本語じゃ言いますか。外国人向けの日本語能力検定試験です」

「日本人より、日本語詳しそう」

「秋葉原は僕の心のふるさとです。時々コスプレしてました。今は毎日がコスプレみたいな状態ですが」

「おー！オタクやねー！！めっさ気が合いそう！！」

「気が合うのは結構だが、マーク、話があるのでは無いか？」

「僕も、京子さんの意見に賛成です。あのままじゃ、ロザリアちゃん、壊れますよ」

「それは、確かにまずいのじゃが・・・」

「女神さんとロザリアちゃんは時空を自由に行き来出来る特殊能力があるんで、一度100倍速だか200倍速だかで、女神さんのシナリオのシュミレーションやったんよ。それが、結果は散々」

「そのシュミレーションの所為か僕、まだ会った事の無いはずのロザリアちゃんと無理やりエッチに及ぶ変なヴィジョンを見て、えらい後味が悪かったんです。ロザリアちゃん、危なくないですか？」

「壊れる寸前。子供もあのシナリオじゃ全員不幸だし」京子は溜め息をつく。

「京子とロザリアのなじみも良くなかったしの・・・」

「僕の場合、魂は抜けてましたけど、京子さんの場合は幼い魂と同じ居って変わってますね」

「黒い宝玉にはオルトで生じた魂が必要なのだが、余りに未熟であった故、育てつつ補強できる魂をさがして、条件が嵌る京子に入って貰ったのじゃ」

「まあ、私は酸いも甘いもかみ分けたお婆ちゃんだから良いとして、無垢なロザリアちゃんには性悪皇子と、マークさんが中身やってる人と、クラウス君の子供を全部生むなんて耐えられへんよ。あんな無茶せんと龍とオルトの天地はなじまんのやろか？そもそも、そこが疑問やわ」

「だがのう・・・双龍と黒い宝玉は新しき器を作らねばならぬゆえ」

「僕からの提案なんですが、まず、両方の龍の意見を聞きましょう」

「そんなこと出来るん？」

「出来ますよ」

「そのような事、考えつかなんだ」女神は本当に考え付かなかったようだ。

「女神さん、共同作業に向かな。独断はアカン」

「やはり多方面の意見を汲み上げないとまずいですよ。相棒^{メイト}の金の龍が言うには、自分が呼べばすぐに銀の龍もここに来るそうですよ。な！」

「むきゅ」

「わ、可愛い！金色のちっちゃい龍やないの」

「これはエネルギー節約モードです。必要と有らばデカくなりますよ」

「（では、銀色のを呼ぶか）」

「ア！びっくりした。これが金色の龍の言葉？」

「（そうだ。では呼ぶぞ）」

「むきゅ・・・」銀色の龍は光がくすんでいて、声も小さい。

「あ、来た、ナンや元気ないな」

「（た、助けてくれ）」

「だ、だいじょうぶ？」京子は思わず銀の小さな龍を抱きしめた。

「（何だか心地良い気だ・・・zzz）」

「あれ、銀色の寝ちゃったよ。なあ、相棒^{メイト}これなら僕達の考え通り事が運べそうだよな」

「（大体、女神が思い込みで暴走するのが間違いの始まりだな）」

「あれ、女神さん、えらい厳しい事言われてますやん」

「（我と銀色の黒い宝玉に十分なじめば事は足りるのだ。人の子は二親の思いが深く交わらねば脆い。脆い器ばかり作っても、用は果たせぬぞ）」

「ロザリアちゃんはクラウド君とラブラブ一筋でええんやね？」

「僕も異議なし。ロリコンは道義的に抵抗がある。クラウド君は愛で年齢の壁を越えればいいんだよ」

「時々大人バージョンで面倒見てあげればエエ事やし」

「何です？それ？」

「ないしょ、ないしょ」

「（京子の力で銀の龍と子をなさずとも今の器が滅すれば、黒い宝玉になじむ）」

「では、ユーグの肉体を滅すれば良いのか？」

「（いや、帝国開祖との血の繋がりが有る故、無理に滅しても銀の龍は『あの器』から完全には抜け出せぬ。自滅を待つのが最も良い）」

「ユーグ皇太子が自滅した後、京子さんの力で銀の龍がロザリアちゃんに馴染むとして、相棒あんたはどうするんだ？」

「マークと共にあるのは心地よいが、長らく楽をした故、今は分身も造作も無く作れる。本体はマークと、分身は京子や銀の龍と共にあればよい）」

「ふうん、私・ロザリアちゃん・金の龍・銀の龍、えらい賑やかやね」

「クラウドとの間に子ができれば、龍はそちらに移るであろう、違うかの？」

「（そうとも言えるが、京子の傍は心地よいゆえ必要な時はいつでも力を貸せる）」

「クラウド君の中には、誰も居ないんですか？」

「クラウドは、クラウドだけじゃ」

「すっきりしていて、羨ましいな」マークはしみじみした調子で言った。

「（マークは我と共にあるのは嫌か？）」金の龍が心配そうに問う。
「別に嫌ってわけじゃないけどさ、自分自身の力だけで真っ向勝負って言うのが、やっぱり男だようになって思ってたさ、何だか羨ましかったんだよ」

「ああ、それわかるわかる。何や、いんちき臭い、ズルしてる感じが有るもん」

「（女神の失策を異なる世界の魂で取り繕うのは、確かにズルだ）」
「うはあ・・・金の龍ちゃん、厳しい！でも、それはそうなんやろうね」

「（京子の思いの力は強いな。地球に戻りたいのか？）」

「私、長男の所に孫が生まれたばかりでこっちに来たんやけど、まだ結婚してない子供が二人、あの後どないなったか気になるし、長年連れ添った亭主もちゃんと御飯食べてるやろか、再婚は無理かなーとか、正直言っただけになるわ」

「（ロザリアとクラウスの魂が十分に和合し、力を持てば、京子はロザリアから離れる事もできるぞ）」

「離れても、地球には戻られへんのと違う？」

「（銀の龍が元気になれば、龍の力で戻せる。さすがに同じ場所同じ時間は無理だが・・・）」

「それはそうなんやろうね、まあ、そうされても、飛行機事故で死ぬし」

「（京子が心にかけている人々と共にあることの出来る場所には送り出せる）」

「え？それ、ほんま？」

「フフッ、京子さん嬉しそうですね」

「なるほどのう・・・そうした訳で京子はロザリアとは同一化出来るんじゃないな」

「（力有る魂は、自らの力であるもの。他の魂と無理に一つになどなれぬ。左様な事もわからぬものが女神か。オルトが乱れるのも当然じゃ）」

「色々配慮が足らず、今まで『脆き器』ばかり作り、双龍にも面倒をかけたようじゃの、すまぬ」

「摂政さんも元来は『脆き器』だった、言う事やろか？」

「（ひ弱でまるで使い物にならぬ物であったが、マークにより『強

き器』と成った)」

「マークさん、えらい頼りにされてますね」

「（マークが居らねば、我は消え、オルトはその形を失う所であった）」

「クラウス君が育てば、私はお役ゴメンで、宜しいですよね？」

「（オルトの天地よりクラウスの力を見出したのは京子の力だ）」

「え？そうでしたん？てっきりロザリアちゃんが自分で選んだと思うてたけど」

「（クラウスの力強く伸び行く力を見出し、ロザリアとの強き縁を作り上げたのは京子の力だ）」

「京子の子の母としての力が強く働いたのじゃな」

「（その通りだ。女神よ。その力故にロザリアもまた、成長できた）」

「ロザリアちゃんやクラウス君はここに来られないんですか？」マークの疑問はもっともだった。

「まだ力が足らぬのだ。親密に交われるようになると互いの力が増してゆくのだがな」

「愛あるエッチはパワーの元ですか。無事に彼らがラブラブになれるように、僕らも力を尽くさなくちゃいけないんですね。そうすれば、京子さんも帰れるし・・・」

「（マークは戻るのか？）」

「僕は親とは死に別れたし、育ててくれた お祖母ちゃんも大学に入ってすぐ亡くなった。地球には友達はいたけれど、家族も恋人も居ない。今はもう、こちらの世界の方が大切だな」

「京子、すまなんだの。だが、しばらく力を貸して欲しい」

「ロザリアちゃんに今まで伝えたこと、色々訂正せんとあかんね」

「（機が熟すればロザリアはおのずと真実を悟るであろう。今は為すべき事を為すのみ）」

「やるっきゃない！、と言う事やな。せいぜい気張らせてもらいま

「す
じゃあ、みんな、
Let's
Go
!」

第十四章 聖剣（前書き）

はい、そうです、あの方の登場です。

第十四章 聖劍

「クラウドス、これを」とジョシユアは一振りの剣を渡した。

何の飾りも無く、質実剛健な作り、だが、手に取って見て、不思議な力が漲るような心持ちがした。

「今のお前なら十分にこの剣を扱えよう」

「これは、いかなる剣でしょうか？手にただけで力が漲る感じがいたしますが・・・」

「やはり、お前に託すべきであるようだ。これは我がレオンハート公爵家初代のバラムが常に愛用したとされる聖剣だが、お前も名前ぐらいは聞いた事があるろう。『パンテラ・レオ』と呼ばれている。

柄に象嵌されている動物は「ライオン」と言う異界の生き物だが、数多の獣の王であるらしい。当家の口伝ではバラムは異界より降臨した戦士であったと言う。この剣はそのバラムが異界より携えてきた物らしいが・・・気難しくてな、主人を自ら選ぶのだ。選ばれたものが持てば、力が漲り、いかなる難局も乗り越える不退転の決意が心を満たすと言う」

「そのような剣を私に？」

「次代のいわば当主であり、難局を切り開くために戦う騎士に相応しかろう。実は私にはこの剣を鞘から取り出すことは出来ないのだ。剣に選ばれなかった、と言う事のようなのだ。この剣は平和な時代は鞘で眠り、世が乱れるときに勇者と共に戦うとされるのだ。さあ、クラウドス、その剣を抜いて私に見せてくれないか？」

「はい」

すべるように鞘から踊りだした刀身は神秘的な白い光に包まれている。

「一振りしてみよ」

「では、失礼いたします」振りかぶって一振りすると、爽やかな香りがしてどこからとも無く白い花びらが降って来た。

「ほほ、クラウドは剣によほど気に入られたな。バラムと同じ白い花びらが降るとは」

公爵は満足げな笑みを浮かべた。

「気に入られ方にも段階があつて、その剣を振るつた時に、その程度がはつきり現れるとされる。」

たいていの場合には香りも無く風を切るだけなのだ。稀に芳香を生じる場合があり、それは大業を為しうる証らしい。芳香の上に白い花びらとは、バラム以外の主人ではお前が初めてだろうな」

「何やらそのように伺うと、御伽噺の勇者にでもなつたような心持です」

「いや、まさにお前はそのようなものであろう。当家にとって望みうる最高の婿を迎えた事になるようだ。これでもう、あの世に行つても、御先祖様に申し開きが立つな」

「こ、公爵様！」

「だから、父上だ。お前は『パンテラ・レオ』が認める立派な跡取りなのだぞ。自信を持て」

帝国と各国を結ぶ航路が、ユীগ皇太子の港湾封鎖命令で停止状態に追い込まれ、各国の商人達は大きな打撃を受けた。帝国から手を引くものも珍しくなく、帝都の活気は次第に失われていった。

帝国のオルテス港と並んで賑わうのがキタイのケンブリッジ港だったが、いまや商売の中心は帝国ではなくキタイとみなす空気がオルト中に広がっていた。凋落する大帝帝国と日の出の勢いの小国キタイの勝負は、今のところ稀有なるカリスマ・摂政エスコバルの力もあいまって、キタイが有利と見る向きに傾きつつあるが、帝国が巨大な軍勢力に物を言わせて強引な策に出る可能性は高く、近く大きな戦争が起こるのではないかと言う噂も高まっている。

皇太子と「建国以来の名門」「皇帝を支える諸侯の要」とされるレオンハート家との極度の緊張関係や、ロザリアがキタイに亡命するらしいと言う情報も、よりキナ臭さを漂わせる材料となっていた。

こうした現状では皇太子の命で動く官憲の臨検は厳しく、当初は海路でキタイに入る予定を立てていたロザリアとクラウドスは、あきらめざるをえなかった。

クラウドスはロザリアをつれて故郷のピネ村から『女神の台座』が有る神域を抜け、オルトの最高峰であるレオンハート峰を回り込み、キタイに入るルートを選んだ。レオンハート峰は帝国側はレオンハート公爵の管理下にある神域で、なだらかで女性的な姿を見せているが、キタイ側のエスコバル公爵の直轄領では峨峨^{がが}たる山容を露わにしていた。ろくに樹も生えず岩肌がむき出しで、地元の間人は山の恵とは無縁に生きてきたが、近頃、この山域で良質の鉄の鉱脈が発見され、麓の村は活気付いていた。エスコバル公爵の指導の元、オルト始まって以来初の機械類を使用した大規模な露天掘りの手法が導入され、各方面から人が集まり、よそ者の姿も珍しくない。エスコバル領側からレオンハート側の農産物や乳製品・蜂蜜を仕入れに来る「担ぎ屋」がやって来て、舶来の品物と引き換えに仕入れ、これらの食品をエスコバル側で高値で売る、と言う事も珍しく無くなっている。

「担ぎ屋」たちが頻繁に通過するルートは次第に整備され、帝国の預かり知らぬ所でなされるこうした密貿易は、次第にその取引量が増えていた。

皇太子ユークも、その密貿易の噂を感知してはいたが、「蛆虫ども」の小汚い商売などしばらく放置していても何ほどのことがあるうかと考えていた。その甘い判断をユークに信じ込ませたのがエスコバル公爵に宿る金の龍の力の一端だとは思ってもよらぬ事であった。

エスコバル領内から運び出される交易品のうち、縁に優雅な透かし彫りを施した壁掛け鏡は、レオンハート領内の女たちに人気があったが、じつはこの鏡一つ一つが作為的な記憶の変容を妨げる護符の働きをするようになっていて、ユークが時折放つ魔法の作用もこの

辺りでは無効化されているのだった。

帝都ではもはや誰もあの、ユークの力が暴走した大量『爆殺』事件も、ティボーの投獄も記憶していない状態であったが、レオンハート領内に入り、国境が近づくにつれ、皇太子の過去の暴行・悪行は鮮明に意識されるようになっており、帝国そのものに対する反抗的な気分も強くなってくるのだった。

「いずれ、あの忌々しい『女神の台座』は封印を施してやるのだ。ついでに反抗的な村々は焼き捨ててやれば良い」といった辺りがあの皇太子の考えそうな事だと、エスコバル公爵は見ていたが、まさにその通りであった。

クラウドとロザリアは二人きりでいわば手に手を取っての逃避行だったが、途中で大きな襲撃を受ける事は無かった。可能な限り『金の龍』の力が届く所を選び、ロザリアの目立つ黒目黒髪は、魔法でクラウドと同じ琥珀色の目と髪に変え身なりも少年のものにした。大抵はそれでまかり通ったが、案外子を生み育てた女の中にはロザリアが少女だと気付いてしまうものも居た。まあ、そうした場合「妹さん、器量よしだから色々大変よね。都には悪い人買いも多いんじゃない？」などと言う勝手な納得の仕方では至らなかったが・・・。

或いは逆に、今のように気がつかれない内に宿の好意で入浴を勧められ「兄弟だから一緒にいいよね」と言われてしまうと、断りきれず共に入浴する羽目になる。無邪気に「気持ち良い」と喜ぶロザリアに対して、クラウドはひどく緊張してしまい目のやり場に困る。確かに目の前の肉体は幼いが、時折見る夢の所為で成長後の姿を生々しく思い返してしまうのだ。

「ね、どうしたの？ 顔が真っ赤」

「お湯にあたったんでしょかね・・・」

「そんなに熱くなくて、ちょうど良いぐらいだと思っけれど・・・」

「で、では、先が上がります」

こんなことで、動揺している場合ではない。明日は『女神の台座』に到達できそうだが、まだ、キタイ国内に入ったわけではないのだ。油断は禁物だとクラウスは自分を戒めた。と、その時、ごく小さな不思議な生き物の羽音のような或いは漣の様な音が『パンテラ・レオ』からするのに気がついた。

「どうしたんだ？ 一体、お前の仲間と響きあっているのか？」クラウスは無意識に剣に語りかけた。すると、音は止んでしまった。

その夜、クラウスは奇妙な夢を見た。『パンテラ・レオ』が宙を踊り、香る風に白い花びらを舞わせていると、もう一本の剣が現れ、『パンテラ・レオ』の回りをくるくるひらひらと舞い、金色の光の粒を巻き散らかした。そして、そばに虹が見える。二つの剣は巡りあった事を喜んでいるようだった。

「良かったな、お前達」と言った所で目覚めた。ふと見ると、目の前にロザリアの顔があり「何が一体良かったの？」と尋ねた。

『パンテラ・レオ』の微妙な音を聞かせて、夢の話をする、

「やっぱり、それは『ジルニトラ』ともうすぐ会うって事かなあ・

・」

「身ごもられた皇后陛下が失踪された際、聖剣『ジルニトラ』が消えたという話は聞いた事が有ります」

「皇后陛下のお腹の中に居た皇子を守護するために『ジルニトラ』は飛んで行ったのかも知れないって、以前ティボー先生から伺った事が有るけれど、それが本当だとすると・・・」

帝国開祖愛用の剣、『ジルニトラ』は刀身が黒く輝き、自らの意思を持ち、主の危機の際には魔法を発動して助けとなるという。また『ジルニトラ』には仲間の剣を呼ぶ力が有り、自らの主人と仲間の剣の持ち主の縁を結ぶともいう。『パンテラ・レオ』は殊に相性が良く、互いに引き合う力が強いと言い伝えられている。

レオンハート公爵はクラウドに『パンテラ・レオ』を託す際、「聖剣『ジルニトラ』とその主に巡りあえる事を願っているよ」とも言った。皇后の生んだ皇子が『ジルニトラ』に守護されて無事にいる可能性に望みを繋ぐ公爵の想いが報われる日が来ることを、クラウドも願っている。

宿を出て、『女神の台座』への道を進むにつれ『パンテラ・レオ』の響きは確かなものになって行く。

ふと、目をやると、夢で見たのと同じような金色の光の粒が舞っている。

そして前方から陽気な調子の話し声が響いてきた。

「あら、女神様とお話をしているわ、あの方。どなたかしら？台座にも乗らず、あのようにお話が出来るんですもの、きつと大変な『力』の有る方ね」

ロザリアですら、最初は台座に乗らないと、女神と話すことは出来なかったのだ・・・。

陽気に響く声を耳にしながら、クラウドは予想した通りの「あの方」に違いないと確信するのだった。

第十四章 聖劍（後書き）

ごめんなさい、誤字色々ありました。まだ有るかな・・・

第十五章 ジルニトラの主 (前書き)

男前って、スピード感とか爽快感が必要ですかね？

これから戦闘シーンもあるのに、どうしよう。

あの人とあの方は兄弟だよって、今更なネタバレ有りです。

第十五章 ジルニトラの主

今、女神と言葉を交わしている男は、いたって気楽な調子で、草地の上に立っている。一瞥した所、髪は褐色で服装は豊かな農民と言った感じが、帯剣している。髪の色は魔法で本来の色を隠しているのは確かだが、元の色はもっと近づかないと判別できない。だが、やはり・・・

「待ち人来る、じゃな」

「ああ、そうですね。こいつがさっきから鳴りっ放しです」

「それにしても、聖剣が2本揃う様を見るのは久しぶりじゃ」

「僕は『パンテラ・レオ』を見るのも、持ち主に会うのも初めてだから、楽しみです」

男は後ろを振りむいて、ひらひらと手を振った。

「やあ！君達が僕の待っていた人たちだね」

魔法を自ら解いたその髪は見事な黄金に輝き、緑色の目は楽しげな光を浮かべている。

「ああ、やはり・・・お初にお目にかかります。こちらはロザリア・ド・ヴァレス・レオンハート、私はクラウドス・ド・ピネでございます」

「こんにちは。待ちきれずに自分で迎えに来たよ。細かい話は、帝国を出てからにしよう」

三人は女神に別れを告げ、道を急ぎ、エスコバル領内の小さな宿屋に入った。

既に部屋が二つ用意されており、大きいほうの部屋を「君らが使つてね」と言われた。

午前中の早めの時間のためか、宿屋の食堂にまだ他に人影は無い。

「では、自己紹介から行こうか。手紙のやり取りは幾度もやってい

るね、エスコバル公爵・マルク・ド・エスコバル・ハリウスと名乗ってるけど、キタイ王ファジル・ド・ハリウスは母方の伯父だ。本来は最後につける家名はハリウスではなく、オルテスなんだろうね。この『ジルニトラ』が僕の手元にあるんだから」

「摂政殿下の母君はギルバハル皇后陛下であられますか？」クラウスにしてみれば一番気になる点だった。

「ギルバハル皇后は『ジルニトラ』の助けて実家のキタイ王宮にたどり着いたけれど、皇子を出産してすぐ息を引き取った。皇子もそのままならば程なく亡くなる所だったらしいのだけど、地球のアメリカ人、マーク・ゴルドの魂が入り込んで、今日まで来たのが僕と言う訳さ。ゴルドって言うのはアメリカの言葉で金の事だ。

オルテスって言うのもオルトの古語で金の事だろう？ 僕に宿る金の龍は、よほど金が好きなんだな」

「そもそも、なぜ、皇后陛下は秘かにキタイに戻られたのですか？」

「金の龍が言うには、皇帝の『潰器』が原因らしい」

『潰器』とは自己の能力を超えて無用に魔法を使うことにより魂の器である肉体が疲弊破損するばかりでなく、魂そのものも本来の状態を保てなくなる事を言う。器は単なる入れ物ではない。良き器は優れた魂を形作る。

「最近になって、はっきり色々解かってきたんだけど・・・」とエスコバル公爵は説明をしてくれた。

オルトに生じた器がオルトの魂を受け入れるのが本来の形で、大半のオルトの人間は一つの肉体に対して一つの魂と言うのが普通である。稀に優れた人物に高位の神霊が宿り、目覚しい働きをする場合もある。

大抵は神霊が優れた人物を『良き器』と認めて宿るものだが、金の龍・銀の龍は帝国開祖の内に共に宿った際の盟約を尊ぶあまり、帝国開祖の血脈にのみ宿ると自ら定めた。だがしかし、開祖の正統である皇帝が必ずしも『良き器』になりうるわけでも無い。『良き器』

で無くとも双龍は開祖の末裔にのみ宿ろうとする。開祖より遙かに劣る小さく『脆き器』は、双龍を一度に納めることは不可能で、どちらか一方の龍をどうにかやっと受け入れている場合も多かった。そのため、歴代皇帝の中には器と受け入れた龍との釣り合いがうまく取れず、やがては『潰器』に至った例が珍しくない。

皇帝を器と出来なかったもう一方の龍は、不安定な状態のまま彷徨いつつ、次の皇帝と成りうる子孫が生まれ出るのを待つのが常だった。だが、十数年の内に器に宿らなければ、龍といえども滅してしまふ恐れが有る。そのため開祖にゆかりが深く開祖の血筋に連なる貴族の家系で『良き器』が生じると、彷徨っていた片方の龍が宿る事も珍しくは無く、それらは皆例外なく帝国の功臣、皇帝の大いなる助けとなるような存在となった。

ギルバハル皇后の祖父は金の龍の『良き器』であった皇帝の庶子で、キタイの姫の夫となり、後に女王となった妻を良く支えた人物だった。その後、『脆き器』で有る名ばかりの現皇帝ファーン・ド・オルテスが壊れ始めた頃に、ギルバハルが懷妊した。こうした場合、金の龍は『脆き器』から抜け出し、新しき器に移る時機を伺うものだが、時として力の喪失を恐れた『脆き器』自身で新しき器の出現を妨げようとする事が有る。

人間界の現象としては、力の喪失を恐れた暗愚な皇帝が次代の力の継承者である息子を闇に葬ろうとした・・・と言う事になる。ギルバハルは流産をひき起こす毒を皇帝の手の者達に飲まされたのだった。子が胎内から流れ出ようとした時に、『ジルニトラ』が魔法を発動させてギルバハルを兄であるキタイ王のもとに導いた。

『ジルニトラ』の魔力と、『良き器』の孫であるギルバハル皇后とキタイ王の魂の波動は、金の龍にとって心地よく、子殺し・妻殺しもいとわなない『脆き器』からの完全離脱を金の龍自体が望んだため、マークの魂が異界から召喚された。未熟な魂はギルバハルの死と共に完全に去った。そのため、空き家状態の肉体にマークの魂

が入って『強く優れた器』を作り上げた。この心地よい器を現在金は龍が独占しているが、銀の龍を更に受け入れる事は十分に可能であるらしい。

だがしかし、金の龍によれば「（銀色のは帝国から出た事が無い）」と言う。従って、現在も帝国に存在する『脆き器』であるユークの中にいるという事のような。エスコバル公爵とユーク皇太子の父であるファーンは既に壊れた器であって、ろくに言葉も解さず、自身で立つことも歩くことも出来ない廃人と成り果てている。

「龍たちはとんでもなく頑固者なんだね」エスコバル公爵は苦笑いした。

「別に皇帝の血筋なんて拘らずに、出来の良い人間に宿ればいいのに。そうすればもつと話は簡単に思えちゃうんだけどね。まあ、僕が皇帝とか王が存在しない大国・アメリカの人間でもあるせいなんだろうな」

「王も皇帝も無く、国が成り立つのですか？」

「みんなで優れた人を選挙って言う一種の入れ札で、選ぶんだ。必ずしも本当に優れた人が選ばれるとは限らないけれど、それでもその代表を選んだのは自分たち自身だから、納得できるんだよ。出来が悪くても、王や皇帝の子供に生まれちゃったら後を継いって、本人も災難だし、周りも困るだろう？」

「そのように考えたことなど、有りませんでした」クラウドは驚いていた。

「ユーク兄様もそう考えるとお気の毒・・・」

「おや！ロザリアちゃんはユークのことを兄様って呼ぶの？」

「あ・・・まあ、ちよつとした癖です」

「じゃあ、じゃあ、僕のことマーク兄様って呼んで！ね？ダメ？」人懐っこい緑の瞳で見つめられると、なぜか頷いてしまった。

「クラウド君は未来のどんな様だから、『あなた』ってよぶ？」

「で、殿下！」クラウドは真っ赤になった。

「クラウドと私は呼ぶのですが、おかしいでしょうか？」

「七歳だから『あなた』は早いかな。でも、姫様は止めた方がいいよね」

「ええ、そう思います。一度、ロザリアと呼んで欲しいと頼んだんですけど、直らないんです」

「だってさく、わかった？クラウド君、一度ちゃんと呼んで御覧？マーク兄様が見ていてあげるからさ」

「・・・」

「クラウド、お願い」

こうしてクラウドは、ちゃんと「ロザリア」と呼べるように幾度も練習させられる羽目になった。

「それにしても・・・こいつらが煩いね」

「確かに先ほどからずっと、小さく響きあってますね」

「提案だけどさ、こいつらを使って、手合わせをやってみない？多分うまく行くと思うんだ」

宿屋の裏手はろくに草も生えない荒地だった。

エスコバル公爵は、恐るべき使い手だった。素早く大胆な剣さばきは華麗で目を奪う。

時折金の粉が舞い、虹が見える。

一方でクラウドはその剣の動きを全て正確に見切り、良く防ぎ、一歩も引けを取らない。

ほのかに爽やかな香りが立ち上り、白い花びらが舞い上がる。

余りの見事さ美しさにロザリアは見惚れた。

剣を交える事、五十合はとうに過ぎ、いつ果てるとも知れない中で、次第に見物人が増え始め、大変な騒ぎになってきた。前代未聞の見事な立会いに、皆夢中だ。

「いや、もう、切りがないね」

「何だか人が増えましたね」

「そろそろ、ビールが欲しいな」

「確かに、喉も渴きました」

「じゃあ、おしまい！」

すると、見物人たちが失望の声を上げた。

「僕がみんなにビールをおごるよ。今日は嬉しい事が有ったお祝いなんだ。パ―ツと行こうね！」

すると、今度は歓声が沸き起こる。

小さな宿屋の食堂は人であふれ、食べ放題飲み放題と言う気前の良さに、

「まるで旦那は公爵様みたいな方ですね」と言う者も居た。

「へええ、君は公爵様に会った事があるの？」そういう公爵は魔法で髪も目も褐色にしている。

「見事な金髪で、愉快な方でしたよ。たまたま居合わせた都の居酒屋でご馳走になりました」

「やっぱりビールだった？」

「ワインの大樽でしたよ。もう嫌になるほど飲みましたけど、公爵様はケロッとなさって、大変な酒豪でいらっしゃるようですね」男は公爵の隣に座った。

「公爵様が酒豪でいらっしゃるのは、金の龍のせいらしいぜ」宿屋の主人も機嫌がよい。

「そうなのか？」

「金の龍も銀の龍もうまい酒を毎日ドツサリ飲みたいもんだから、身分のある方にしか宿らないって、ウチのばあちゃんが昔教えてくれた」宿屋の主人はビールをまたついで、公爵と隣の男に渡す。

「ヘー、それは知らなかった」公爵もその話は初耳だったらしい。クラウドも、ロザリアも、この摂政殿下の明るい気取らない雰囲気

に強く惹かれ始めていた。

第十五章 ジルニトラの主 (後書き)

このあとのエッチなこぼれ話、

「ロザリアの性教育？」UPしてます。

一応15禁にしました。

<http://ncode.syosetu.com/n6714>
i/

第十六章 国境の宿にて（前書き）

先の展開が読めますよね。
時代劇テイストかな・・・

第十六章 国境の宿にて

ロザリアはその小さな宿屋の厨房を手伝っていた。

そもそもは、エスコバル公爵こと「マーク兄さま」が、宿屋の主人夫妻に、ロザリアは料理に詳しいから何かうまいものを作ってもらえと、けしかけた事がきっかけだったが、宿に常備されている小麦粉・卵・塩・オイルを使ってパスタを作り、ハーブを使ったソースで和えて出したら、ひどく感心されてしまい、宿屋の定番メニューにしたいので、詳しく教えてくれと懇願された。

「そうそう、酒の肴にお菓子も頼んだら？」マーク兄さまはえらく気軽に言う。

「でも、ロザリア、無理はしないでくださいね」クラウスは心配そうだ。

「大丈夫よ。簡単にできるものにするから」そう言って、挽肉を薬味やつなぎとあわせ、中にゆで卵を入れて揚げた『巣ごもり卵』を出す、マーク兄様は大喜びした。

「やあ！ Scotch egg だ！何年ぶりかな、お、辛味の効いたソースも有るね」

「これは、スコッチ・エッグというものなのですか？」クラウスは興味津々だ。

「まあ、あちらの世界で僕も良く食べたものだよ。京子さんも良く作ったのかな？」

「その辺のことは私も良くわからないのです。京子様の夢は最近殆ど見ないかわりに、京子様がご存知な事・出来る事が自然に私のものになったような感覚で・・・この宿屋の食料庫を見せてもらって、すぐ思いついた料理が幾つもありました」

マヨネーズの作り方をおかみさんに教えながら、幾つかサラダを仕

込み、卵白を固くあわ立てて小さな川魚のフリッターを作ると「今流行の泡だて器って、こんなことに使うんですか」といたく感心された。

行商人から「帝国では大流行」だと聞かされて買ったものの、ロザリアが実際に使って見せるまで、泡だて器は台所の隅に転がっていたのだ。

ハチミツを使った甘い卵焼きは、意外なことに宿の主人のほうが非常に気に入ってくれた。

行商人から売りつけられて、どう使えばよいのかわからないという米を使って、きのこや木の実を入れて炊き込みご飯を作ると、「見たこともない料理」だといわれたが、試食してもらおうと「もって作ってくれませんか」といわれた。

やがて夕食の時間帯になって、酒と食事だけが目当てやって来る鉄鉱山で働く男達で席が埋まった。

「ここはいつもビールもうまいし、食い物も悪くないけれど、今日は見慣れないうまそうなものが色々あるね」

「おばちゃん、オレもその卵の入った肉の団子、くれよ」

「なんかこの芋が妙にうまいな。こんなの誰でも食ったことねえよ」

「何？御嬢ちゃんがこの料理を作りなすったの？へエエ、大したもんだ」

「王様もこんなのはご存じないんじゃないの？」

「旦那方がえらく腕っ節の強い方だって言うのは、あの凄い立会いをみてわかりやしたが、そうやって、座っていらっしゃるとお二人とも妙に品がありなさる」

「ロザリアちゃんも、こんなに働きもんじゃ無かったら、どこかのお姫様って感じだよな」

「ねえ、旦那、実はやんごとない御身分の方のお忍びって事はないんですかい？」

「実は、そうなんだ。内密に頼むよ」エスコバル公爵はニコニコし

て言う。

「やっぱり、で、国境でこれから何か起こるんでしょうか？」

「帝国側は何だかややこしいみたいだ」

「で、旦那は国王様の御用か何かですか？」

「いや、この二人を迎えに行って来たただだよ」

「ご親戚か何かで？」

「どう見える？」

「腹違いの御兄弟とか、御従兄弟同士とか」

「なるほどね」

「本当はどうなんですか？」

「ナイショ。口止め料にビールをどうだい？」

「頂きます」

「おい、ビール3杯追加」

エスコバル公爵はビールを飲みながら、鉄鉱山で働く男達がおおむね給料には満足している事や、出稼ぎがこの所増えていて小さいざこざが増えたこと、監督官が鉱石を横流しして懐を肥やし麓の妓楼に入り浸っているらしい事、ゆっくり風呂に浸かりたいが宿舎には風呂場が無い事を聞き出した。その流れるような自然さにクラウスはひそかに驚嘆していた。ロザリアはその監督官がどんな男なのか酷く気になった。

「ビールもいいんですが、なんか時折甘くて美味しい物が食べたいなと思うんですが」

「都なら、美味しい菓子なんかも売ってますけどね、ここじゃ無理だなあ・・・」

激しい労働をすると、案外甘いものも欲しいものらしい。

「お二人とも、これは試作品なんですがいかがですか？」ロザリアは出来立てのシュークリームを出した。

「なんだこれ、初めて見る」

「ふわふわしていて、中にクリームが入ってるなあ」

うめええ！！！

二人の男が声をそろえて言ったので、食堂中がざわめいた。

「お嬢ちゃん、オレにもそれくれない」

「まだ有る？」

あつという間に作った50個が全部無くなってしまい、

「ごめんなさい、明日はもっとたくさん作っておきますね」とロザリアは頭を下げた。

「良いつて事よ。明日また来るぜ」

「ありゃあ、美味しいなあ。あれなら都の目抜き通りでも商売できるぜ」

「都にも無いよな」

まさか、そのシュークリームが思わぬ客を呼び寄せるとは思いもよらないことだった。

翌日の昼下がりに、でっぴり太った男が供を二人連れて、宿にやってきた。黒ビロード製の羽根付き帽子をかぶり、右手にも左手にも大粒の宝石が入った指輪をはめ、剣の柄や鞘も金銀宝石で派手に飾り立てている。胸糞悪くなるぐらい香水の匂いをさせていて、眉間には皺を寄せている。

「ここで、美味しい菓子が食べられると聞いて来たのだがな。誠の話だろうか？」

「はあ・・・あれは、お客様がお作りになったものでして、手前どももその作り方は存じません」

「ふん、お前の所は客に料理を作らせるのか」

「大層凝ったおいしいものの作り方をご存知の方でして、私どもも、ただ今教えていただいている最中なのでございますよ」

「では、その客とやらを呼べ」

亭主は、逗留中の3人の客は高貴な身分の方々のお忍びと言う風に察していたので、こんな小役人風情が太刀打ち出来ないと思った。

「事情があまりの、御身分有る方々だと思いますが、宜しゅうございますか？」

「なに？ エスコバル摂政殿下の代官たるワシに命令できる貴族がそう居ると思えん。構わん」

「はあ・・・」

二階から秘かに様子を覗いていたエスコバル公爵・クラウド・ロザリアは、会話から思念を通じて意思を伝え合う『心話^{しんわ}』に切りかえた。

「(すまない、近い内、あの馬鹿代官の首を挿げ替える予定なんだが、今は最後の証拠固めの最中なんだ)」

「(なぜ菓子が欲しいのでしょうか?)」クラウドは首をかしげた。
「(麓の町の妓楼で一番の売れっ子が、菓子が大好きなんだよ。その子の気を引きたいんだろう)」

「(お菓子を作るのは私なのに、あの男はどうする気でしょうか?)」ロザリアも首をかしげる。

「(金をやるから作れとか、言う気かなあ。不正蓄財の金なのに)」
「(ロザリアは給金を貰って働く料理番では無いのに、どう断りますか?)」クラウドは眉を顰めた。

「(いっそ、妓楼の女の子にお菓子を作ってあげる事にするかい?)」

「(そうした場所にロザリアが行っても大丈夫でしょうか?)」

「(女将は気立ての良い女だよ)」

「(マーク兄様のご存知の方なのですか?)」

「(一応彼女の一人かな)」

「(そ、そうなのですか? 理^{わり}ない仲でいらっしゃるのです?)」クラウドが一番動揺している。

「(理^{わり}ない仲ねえ・・・否定しないよ。結構古い話になるけど)」

「(何だか凄くやる気になってきました)」ロザリアは興味津々と言う顔つきになる。

「(殿下! 余りロザリアを焚付けないで下さい)」

「(ごめん、予定外の展開だけど、腐れ代官の処分と妓楼の子達の商売がえを、君達にお手伝い願って一度に出来たら良いなって、思

うのだけどね)」

「(商売がえですか、何かお考えでも?)」

「(ロザリアちゃんの力を借りて、女の子たちが生活できて稼げる
といいんだけどね)」

「(マーク兄様、お手伝いさせてください)」

そこへ、宿の主人が、やって来た。

「恐れ入ります、下に公爵様の代官の方がおいででして、その代官
様が昨夜のあの『シュークリーム』をお召し上がりになりたいよう
でして・・・お客様がおつくりになったといいましたら、会いたい
とおっしゃいます。その・・・一度、代官様にお会いいただけます
か?」

宿の主人は言い出しにくそうに言葉を選んでいる。

「(クラウス君と二人で会ってくれないか? 僕は顔を出さない方が
良いかも知れない。あの男は僕が髪や目の色を変えて出歩くのを知
っているからね。それに一応魔力を感知できる程度の力は有る。ロ
ザリアちゃんとクラウス君の魔法は龍の力とは系統が違うから、ア
イツも完全には察知できないと思うんだ)」

「では、私が妹と一緒に会う事にしましょう」

「ありがとうございます。お嬢様は大層賢くていらっしゃいますが、
あの代官様が何を言い出されるかわかりませんし、さりとて、私ど
もとしては代官様のお言葉を見てもできませんので・・・」

「ご主人、僕はここで様子を伺わせて頂く。少し仔細が有るのでね。
くれぐれも内密に願うよ」

「はい、承知いたしました。その辺りは私も心得ております」

「(じゃあ、クラウス兄様、参りましょう)」

「(ロザリア・・・無茶をしちゃいけないですよ)」

「では、ロザリア、行こうか」クラウスはロザリアをひよいと抱き
かかえた。

「クラウス兄様ったら・・・」

「(兄に抱っこされるような子供だと思って貰う方が、話が都合よ

く行くような気がします」

「ロザリアは私の命より大切な宝物だからね」

なんだか、大人の男女の睦言のようなやり取りだと宿の亭主は思った。

そして、明らかに、ただの小役人に過ぎないあの代官とはまるで格が違うと感じた。

この、えらく男前の兄と大層賢い可憐な妹は、どこの誰なんだろうかと、ひどく気になるのだった。

第十七章 アルビ（前書き）

最初、悪役の代官の名前も決めていたのですが、削りました。
名前の有るキャラが多すぎると混乱しません？

第十七章 アルビ

「いらっしやいませ、シユークリームをお召し上がりになりたいと、伺って参りました」

琥珀色の目と髪をした少女が、こちらに向かって声をかけて来た。同じく琥珀色の目と髪をした大柄な若者に抱かれてあらわれたその少女は目の覚めるような美貌だが、幼い。年の頃は7〜8歳と言ったところか。身なりを少年のようにやつしているが、後数年したら大した美人になりそうだ。

太っちょの代官殿がそのように見たのは、この際大して重要な話ではない。

一応、「代官兼鉦山監督官」と自己の官職と姓名を名乗ってから、その代官殿はこう切り出した。

「卒時ながら、そちらの貴殿にお尋ねする、いずこよりいかなるご用件で当地にご滞在かな？」

「帝国よりキタイ領内の親族の下へ参ります。これを御覧下さい」と言ってクラウドスは摂政殿下自らが発行した『特別通行滞在許可証』を見せた。金の龍の力が込められ偽造は不可能で、発行部数もほんの数枚とされる貴重なものだ。これを持つ者に関しては身元・行き先・行動目的一切の詮索・尋問が禁じられている。そればかりか所持する人間を護衛・保護し、便宜をはかる事になっている。国家の重要な機密に関わる人物の証であるとされるのだ。代官殿も噂には聞いた事があったが、現物は初めて見た。

「キタイ王国内において、クラウド・ド・ピネ及びその妹ロザリア、両名の行動滞在の一切の自由は摂政エスコバル公爵・マルク・ド・エスコバル・ハリユス自らが保証する」とあり、金色の摂政殿下の手形とサインが入っている。正体は不明だが重要人物と言う事だ。「大変御無礼いたしました。昨夜、こちらで振舞われた『シユーク

リーム』なる菓子の評判を伝え聞きまして是非いただいてみたいものだと思います、参りました幸いです。こちらの妹御がお作りになるのですか？」

「ええ、お召し上がりになるのでしたら、ただ今から作りますが、一時間ほど掛かります」

鈴を振るような・・・と言うのはこういう声を言うのであろうか。耳に心地よい声だ。

「それはそれは、まことにありがたい。喜んで待たせていただきます」

「代官殿は菓子がお好きなのですか？」

「はあ、まあ、美味しいものなら何でも好きですが、私が土産に持って帰るのを楽しみにしているものが居りまして」

「御家族でしょうか？或いはご友人？」

「はあ、まあ、・・・」まさか妓楼の馴染みの女に食べさせたいとも言えず、目を白黒させている。

「代官殿は『朝露楼』の馴染みでいらっしゃるの噂ですが、我々、其処の女主人にお渡しするものを託っております。もしご存知でしたら、ご案内願えませんか？」クラウスがストレートに申し出ると、

「いやあ・・・お人の悪い。確かに馴染みです」

「（クラウス君、そいつと先に『朝霧楼』に行ってしまったって構わないよ。僕は後から追いかけるから）」

エスコバル公爵の言葉がクラウスの意識に届く。『心話』^{しんわ}と言うこの意思疎通手段は互いの魔法の能力が有りあい、心を許していると普通の会話さながらにスムーズに進む。特に女神と言葉を交わせるレベルの者同士は物理的な距離を無視してオルトのどこに居ても『心話』が可能だという。エスコバル公爵自身、クラウスやロザリアと出会うまで、これほど『心話』が簡単にできるとは思っ居なかったらしい。欠点は

「一対一の秘密の会話が難しい」点にあるようだ。一度意識を『心話』モードに繋ぐと、繋がっている者全員の言葉がわかってしまい、

特定の誰かにのみ用件を伝えたいとか、誰かには話を伏せておきたい場合は不都合なのである。「ロザリアちゃんに内緒で男同士の秘密の会話をするのは無理だな」とエスコバル公爵が冗談めかして言ったが、まさにその通りなのだ。

「いつそのこと『朝霧楼』でシュークリームを作って出来立てを皆で食べるというのはどうでしょうか」とロザリアが言った所、代官殿は大喜びして、話がまとまり、供の一人は先触れとして『朝霧楼』に急いで赴き、あちらの調理場の支度と材料の準備をさせておくことに話がまとまった。

宿を引き払う支度をして、代官殿の馬と供のものの馬、ロザリアとクラウスが乗る馬の3頭で比較的ゆっくり麓の町アルビに向かった。途中で、辺りに響き渡る岩を砕く音、働く多くの人の群れ、初めて目にする大規模な機械仕掛けの台車の列に、クラウスは思わず馬をとめた。台車はケーブルカーと同じような構造であった。

「これは我がキタイが誇る鉄鉱山です。あの大きな台車の列は長い坂を一日幾度も往復して、麓のアルビの運河まで鉄鉱石を送ります。アルビからケンブリッジの港近くの精錬所までは専用のボートを連ねて運びます」

「見事なものですね。このような機械仕掛けの車は初めて見ます」

「本当に大きな穴でびっくり。伝説の龍の巣穴より大きそう」ロザリアの言うように岩山に巨大な穴がある。

「なるほど龍の巣穴ですか。我らが摂政殿下には真の龍が宿っていると言いますからな」

「代官殿は噂の金の龍を御覧になった事はないのですか？」

「並みの人間では見る事は叶わぬとか申します。まれに目にする幸運に出くわすと、そのものは一生食うに困らぬとか、仕事や商売がうまく行くといいいます」

「福を呼ぶ神様なのですね」

「それまで何の恵も見出されなかった岩山に、この鉄鉱脈を見出さ

れたのも摂政殿下なら、貧しき漁村に新たにケンブリッジの港を開かれたのも摂政殿下でいらっしゃいます。真に生ける福の神のごとき方ですよ」

「ケンブリッジとはどのような謂れがある名前ですか？」クラウドは以前から不思議に思っていた。

「殿下の前世は異界の学者であられたそうで、『マサチューセッツのケンブリッジ』と言う町の学び舎で学問を修められたとか。その異界の町の名だそうです」

「（マーク兄様はMITが懐かしいんですか？）」

「（あれ？ロザリアちゃんMITが何かわかるの？）」

「（アメリカと言う国の名高い大学なのでしょう？）」

「（ふーん、京子さんと段々なじんでるのかな。その通りだよ）」

「（殿下、このまま『朝霧楼』に着きましたら、ロザリアに菓子作りをしてもらえば良いのですよね）」

「（そいつをとっちめるための証拠がもう少しで集まる。皆で茶でも飲んで待っていてくれ）」

そうこうするうちに、一行はアルビの町に入った。

決して大きくはないが、それなりに活気があり、レオンハート領内より人々が豊かであるのがわかる。

やがて、かなりしっかりした石造りの二階建ての建物に行き当たった。朝霧楼であった。

女将は若い頃、都にいた人で、都で公爵とかかわりがあり、5年ばかり前に生まれ故郷のアルビに戻ってきてこの店をひらいたという。恭しく挨拶に出てきた様子を見ると年のころは三十歳ぐらいだろうか、昔は愛らしい少女であっただろうと思わせるような雰囲気があった。

「こちらがお託け頂いていた書状です」

女将は、その封書が年に幾度か受け取る公爵自身からの密書であることを見て取ると、代官は目当ての娘のいる店で一番上等の部屋に通し、クラウドとロザリアは女将自身の私的な居間に通した。

「エスコバル公爵様がたまにお越しくださいます時は、こちらでいつもお休みいただくんですの」

「落ち着いた良いお部屋ですね」

「ありがとうございます。お菓子も気になりますが、頂きましたお手紙が気になりますね」

クラウドとロザリアが茶を飲んでくつろいでいると、女将が戻って来た。

そして書状を目の前のテーブルに広げて見せてから、再び恭しく頭を下げた。

「聖剣の騎士のクラウド・ド・ピネ様とレオンハート公爵家のロザリア姫様であられますか。改めまして、ごあいさつをもうしあげます、当家の女将ハリカでございます。女神様のお声が届く尊き方々にお運びいただきまして、この店も幸運に恵まれました。これから、何やら公爵様との大切なお仕事がありとこの書状では承りましたが、あの代官殿の申しとおりましたお菓子と申しますのは・・・」

「殿下は証拠固めの書類などを手配なさっているようです。今しばらく時間が掛かるし、ロザリアが作る美味しい菓子をこの店の皆さんにも楽しんでいただいてゆると待つように、と言うお考えのようです」

「・・・やはり、あの代官殿の不正の噂は本当の事なのでしょうか」
「恐らくその件でしょう」

「立ち入ったことを伺いまして、申し訳御座いません」

ひとしきり歓談後、ロザリアとクラウドは厨房のほうへ向かった。

女将は「尊い方々に台所仕事など恐れ多い」と言ったものの、心得て周りのものには身分を伏せて、

「大恩ある方の御身内」と紹介した。そう言うだけで古い奉公人はエスコバル公爵様縁の御身分の有る方々と見当はつくのだったが・

「では、御嬢様、宜しければ、その美味しいお菓子につきまして、お教え下さいまし」

厨房を預かる女将の弟は、僅かな材料から見た事もない菓子を作り上げてゆくロザリアの手つきを驚きをもって見つめていた。

「このようにとろみがつくまで煮詰めてください」うまそうな匂いが厨房に立ち込める。

「中身のクリームに季節の果物やベリー類、木の実などを和えて詰めても、美味しいです」

「なるほど、そうした工夫でまた新しい味が生まれますね」女将の弟はメモを取っている。

「後でまた、それぞれの材料の割り合いと、コツについてお話いたしましょう」

「ありがとうございます、助かります。これを店に出しますのをお許し頂けますか？」

「昨日まで逗留した宿の方にもお教えしました。こちらでもお役に立つのでしたらどうぞご遠慮なく」

僅か七歳だというが、大したものだ。皆、ロザリアの手際に感服していた。

やがてシュークリームが焼き上がり、それが代官殿のほうにも運ばれた。皆が初めて口にした菓子の感想を口々に興奮気味に語り始めていた頃、朝霧楼に向かう騎馬の一団が有った。

「（ねえ、僕の分のシュークリームも取っというてよ）」マーク兄様は結構暢気だ。

第十七章 アルビ（後書き）

次は、成敗?! 朝チュン?!?!

第十八章 人として（前書き）

時代劇風の「成敗！」っていうのも考えましたけど、
こんな形に落ち着きました。
後半は控えめなベットシーンです。

第十八章 人として

山合いの町アルビは鉄鉱山が近くに発見されるまで、街道筋の冴えない宿場、埃っぽい田舎町でしかなかった。国を貫く街道自身は往来が盛んでも、富も人もアルビを素通りする、そんな町であったのだ。

エスコバル公爵が鉱山の監督を行う行政機構をアルビに置いたため、鉱山での労働を望む者や鉄を商う商人が国の内外から集まり、町も賑わうようになった。

とは言え、遠目にも駿馬ぞろいと伺い知れる威儀を正した騎馬隊が、近頃整備が進んで広くなった道を疾走する様は目を引いた。人々は一体どんな大事件が勃発したのかと噂しあった。

その騎馬隊はあれよあれよと言う間に『朝霧楼』にやってきた。

国王直属の国政監督官とその指揮下の部下総勢20名で、件の代官くだん殿を引き立ててゆく。

この代官の場合不正行為を行ったのが主に国王直轄領ではなくエスコバル領内で、彼を任命したのがエスコバル公爵である事から、摂政であるエスコバル公爵に罷免・処罰の権限もまず認められるものだった。そうした通常の形を取らなかったのは、横流しされたのが鉄という戦略物資であり、売りつけた先が潜在的な敵国とも言うべき外国、特に現在緊張関係にある帝国に売りつけたのが大いに問題視されたからだった。

国政監督官は各地の行政官の不正を糾すのが役目だが、役人を逮捕する場合はきちんと証拠固めをし、法を厳密に適用することでも知られていた。

摂政殿下が罰を与えても、「殿下のお心にそぐわなかっただけ」ともみなされ勝ちのため、ここは多少面倒な手順を踏んでもきっちり犯罪を立証し、これからの類似事件の発生を国全体で防ぐ手立てと

する方が上策だと言う事もあった。特に敵国に利するような行動に
関しては綿密に調べ上げた方が、得られる情報も多い。

クラウドなどは摂政殿下自ら断罪し処罰すると思っていたので、事
務的で地味な逮捕劇に、少しばかり拍子抜けしたが、こうしたやり
方の方が法を守る必要性を前面に押し出した形には成るのだろうか
と感じていた。

不正を働いた代官が連行されて、全てが終わってから、摂政殿下は
ようやく姿を現した。そして希望通りにシュークリームでお茶の時
間を楽しんだ後、店の全員を食堂に集め、『朝霧楼』は廃業して、
堅気の旅館兼食堂としてやってゆく予定である事、借金がある身の
上のものについては摂政殿下が全額肩代わりして清算を済ませた事、
なおかつその金の返済を摂政殿下は求めない事を皆それぞれに証拠
の証文を渡して、伝えた。この点は皆素直に感激し、喜んだが、娼
婦を廃業した少女達を故郷に戻すかと言う話が出ると、少女たちは
暗い表情になり、中には泣き出すものもいた。

「私を売り飛ばした親の所など戻りたくありません」

「ふるさとの小さな村では私が売り飛ばされた事は村中に知れ渡っ
ています」

そうした娘達も安心して働ける店にするためにも、皆で力を合わせ
て働こうという事で一応話はまとまりはしたものの、予想以上の娘
達の過酷な状況はロザリアには衝撃だった。そして彼女達が垣間見
せた暗い思念に思わず引き込まれてしまいそうになった。

おかげで、その後の全員そろっての一見賑やかな夕食も、心から楽
しむ事は出来なかった。

その夜、客用寝室に泊まったロザリアとクラウドは静かに体を寄せ
合いながら、これからやるべき事について話し合っていた。

「ここのお店が商売がえをするにあたってのお手伝いを、しばらく
はする事になりそうね」

「料理や店の掃除・洗濯などをやってきた連中は良いのでしょうか、

店に出ていた人達をどうするかですよね。親元や故郷に戻る人は良いのかもしれませんが、戻れない人たちも多そうですね……」

「泣き出されてしまって、私も悲しい気分になってしまった」

ロザリアも、クラウドも親に売られた娘達の苦しみや悲しみに触れて、辛かった。おかげでうまく寝付けなかったのだ。眠りも浅かったようで、夜明けと共に目が開いてしまった。

近頃は二人とも様々な『力』が急激に大きくなって来ているが、十分に自己統制を取れないものもあり、これから更に修練を積む必要が有るようだった。昨日のように初めて会う他人の本音や隠している思いが何かの拍子に流れ込んでくる事もある。それが暗いもの、悲しいものであれば大きな負の作用を引き起こしかねない。

「必要に応じて、遮断するんだ」とエスコバル公爵に教えられ、「修練を積んで遮断できるようになるまでは、しばらくはこの腕輪をして置くといいよ」と渡された腕輪を二人ともしている。

クラウドは公爵の説明を至極もつとも思ったのみで腕輪を渡したその意図までは気がついていなかった。

ロザリアは「きっと、マーク兄様には、私達に伏せておきたい『大人の事情』がお有りになるのね」と感じて、腕輪をはめたのであったが……

「やっぱり、ここの女将さんにお子様を生んでもらうおつもりかしら」

ロザリアがぼつりと言ったので、クラウドははっとした。

そう言えば二人は付き合いも古く、元から男女の関係が有ったようだし、昨夜来ずっと同じ部屋で過ごしているのだから、今もまさにそうした最中なのだろうか？ いや、そう思ってしまうだけでエスコバル公爵の思念を探る作用が働いてしまうのだとすれば、確かに、迷惑だろう。

「余りに互いの思いや感情までわかりすぎるのも不都合ですね」

「そうよねえ。思いを伝えたい肝心のお相手より、『心話』しんわを交わ

す関係同士のほうがあれこれ解かってしまうというのは、辛いかも知ね」

「そう考えてみると、私は幸せ者です。未来の妻が『心話^{しんわ}』を交わし、共に人としての時間を生きる事が許されておるのですから」

「普通の人よりも長い長い時間を一緒に生きて行ける相手がこうしてそばに居てくれるのは、幸せね」

「たとえ互いに思っている時間も時間の流れの中で引き裂かれるのは辛いことでしょう」

二人の目覚めつつある力の中には、正体不明のものも色々有るようだ。

いつの間にやら人類一般の寿命の枠を超えて行き続ける存在に自分達が変わ質してしまっていたのを、摂政殿下に指摘されるまで、二人ともまるで気がついていなかったのだ。

「子を作ろうと決意すれば、いつでも子を作る事ができる」と言う話も本当なのだろうが、自分達がそれを実感するには数年待つ必要が有るだろう。今はロザリアの成長が待ち遠しい。

二人に腕輪を渡したエスコバル公爵は、念入りに遮蔽^{シールド}を施した女将の寝室で、本来の金の髪緑の瞳に戻り、寝る間も惜しんで女将と一晩中抱き合っていた。

「やっぱり、君は素敵だよ。こうしているだけで、ほら、もう」

「まあ・・・あっ・・・公爵様」

「マークって呼んでおくれ、昨夜幾度も呼んでくれたじゃないか」

「初めてと一緒に朝を迎えた日のことを思い出します」

「確かにあの頃の君は可愛かった。でも、今のしつとりと僕を包み込んでくれる君は更に魅力的だよ」

「お優しいんですね」

「優しいのは君さ。互いの一生を受け止められないとわかっていても、僕との思い出を大切に抱きしめてくれて、たまに会えばこうして情熱的に愛し合える。ゴメンよ、悪い男に見込まれてしまったね」

「私はあと、2、30年すれば此の世から消えてしまうのでしょうけれど、マークはずっとお若いままで生きてゆかれるのですね」

少年から大人の男になる道筋を付けてくれた愛らしい不幸せな少女を、惨めな境遇から救い上げて幸せにしたいと思った事も有ったが、実に傲慢だったと肌を重ねるたびに思う。どんな境遇になっても自分の運命を見つめて、できる事から一つ一つ積み重ね自分自身の手で運命を切り開く強さを秘めているこの人に、時折どうしようもなく会いたくなり、抱きしめて癒して欲しいと願うのは、自分の方なのだから。

でも人の命は短い。この大切な人が自分の前から永遠に去ってしまう前に、マークは自分の思いを形に残したかった。

「ちょっとやそつとの事では死ねないらしい。だから、昨日の話、考えてみてくれない？」

「私のように身分も無く、娼婦などやっていた者が、公爵様のお子を生んでも良いものでしょうか？」

「だって、君が僕を置いて行ってしまふ日と思うとたまらないんだ。僕はその先、五百年、千年と行き続ける。体は不老不死でも、僕の心は人そのものだ。何もかもが消えてしまふ寂しさに耐えられない。子が生まれれば、孫も曾孫もきつと生まれるさ。君との絆がこの国の力にも成る。僕が出来うる限りの誠意を持って、子供の将来も配慮するよ。君の老後だって、賑やかなほうがいいだろう？」

「私に子が出来て、孫が出来ても、マークはお若いままでしょう？」

「君の所に来るときは若くない姿に変身するぐらい造作も無いけれど、そうする？」

「やはり、本当のお姿を見たいです」

「君ならそう言うと思った」

「昨夜おいでになったときは、髪も眼も色を変えていらっしやって、役人達にもご身分を明かされませんでしたね。あの元代官殿は御手

討にされても当然な、イケナイ事を沢山していたのでしょうか？」

「あれは忠実に仕えてくれるウチの執事の甥にあたるんだ。怒りの感情をぶつけて死なせるのも、寝覚めが悪い気がしてね。面倒ではあったけれど、法の手順を踏んで都へ護送した」

アルビの町一帯への特別な思いは、そもそもこの女将に対する私的な感情がきっかけとなつての事だったが、そのことを女将に告げたことは一度も無い。しかしそう思ひもこの人は、感じ取っていてくれているようだった。

「あ……あああつ、ど、どうなさいました？」

「あんな馬鹿を代官にしたのは僕自身なんだ。何だか落ち着かない気分を鎮めてくれない？ 君の中はとても心地良いから」

「私でよろしいのでしたら……どうぞっ……」質量を増したその部分は熱く硬い。

「お願いだよ、可愛らしくて素敵な声を、もっと聞かせて、」

共にすごせる時間の短さ貴重さを思い、二人はまた熱い体を重ねた。

第十八章 人として（後書き）

まだしばらく、都には到達しない模様です。

どうも設定がわかりにくいようなので整理してみます。

・ロザリア出生の約18年前、キタイの王女であった懐妊中のギュルバハル皇后失踪。聖剣ジルニトラ、帝国より消える。アメリカ人マーク転生。『強く優れた器』成る。

・ロザリア0歳（もうすぐ1歳）で12歳のクラウドと出会う

・ロザリア5歳（もうすぐ6歳）クラウド17歳で女神と会話

・ロザリア7歳、『脆き器』のユーグ12歳と出会う。アデル妃と皇子皇女毒殺事件。同じ日にユーグの魔力が暴走。ユーグは女神に見放され、ロザリアを妃にする可能性はほぼ無くなる。あせったユーグはティボーを投獄するが、ますますレオンハート家との距離は大きくなる。

反比例するようにクラウドが成長し、女神も力を認める。同じ年のうちにロザリアとクラウドはキタイへ

その後、キタイで色々あって、

・12歳でロザリアはクラウドと共に帝国に戻る。その時点で帝国の人間はユーグの魔力で記憶を操作されている。ロザリアも半ば意図的にユーグの記憶への干渉を受け入れて居るが、これからの作戦・計画への重要な布石となって居る。それをハラハラ見守るクラウド。外部から来るべき決戦に備えるエスコバル公爵

こんな感じです。

第十九章 超人の悩み（前書き）

なんか、ベットシーン多目です。別にぬるいですが。
エスコバル公爵をめぐる女性二人の名前、確定しました。
キタイの王都の名前、変更しました。

第十九章

超人の悩み

エスコバル公爵は一人、アルビを離れ、キタイの王都・ブルサへ向かった。

「一度戻って色々片付けてくる。来月また来るからね」と言い置いて・・・

色々の中には、対決色を強めつつある帝国との外交関係や、帝国近海を外した航路を開拓する件も含まれていたし、キタイ王の後継者問題もあった。

キタイ王ファジルにはイゼル王女以外の実子は無い。イゼルは同じ年の貴族の男を夫としたが、つい最近寡婦となった。イゼルに子は無。イゼルの亡き夫は凡庸な資質の小奇麗な男だったが、夫婦仲は悪くなかった。父のファジル王はイゼルとマルクに結婚して欲しいと願ったが、「超人」とただの人間の自分では釣り合いが悪いと言うイゼルの言い分も解かるので、あきらめたと言う事情がある。

5歳年上の美しい従姉姪とは互いを「マルク」「イゼル」と呼び合って身近に感じながら育った仲だ。

エスコバル公爵は今も昔も変わらずイゼルを大切に思っている。だが、イゼルはどうだろうか？

「何をしててもマルクはすぐに私を追い抜いてしまう。酷いわ!」と泣きべそをかかれてしまったのは、いつのことであったか・・・。イゼルは元来リユートの演奏が好きであったが、ある日習い始めて間もない幼いマルクが教師が驚嘆するほど弾きこなすのを耳にして以来、弾くのをやめてしまった。

以来、イゼルはマルクを避けるようになり、マルクもイゼルを不用意に傷つけるのを恐れるようになった。

互いの思いは通じぬままイゼルは別の男を婿に迎えた。もう互いに二人きりで話すことも無いだろうと思っていたのだが、ふとしたこ

とから、二人の距離が縮まった。
たった一度だけ、肉体関係を持ったのだ。

もう古い話だ。イゼルが結婚して、まだ半年ぐらいの頃だったろうか・・・

「私って、つまらない女なのね・・・」などと、高飛車な物言いが多いイゼルにしては珍しく庭園の隅で独り言を呟いているのに遭遇したのだ。新婚の妻らしからぬ塞ぎ込み様だった。

王女は婿殿と、ファジル王の意向もあって結婚後も宮殿の一角に住み続けていた。婿殿はどうやら尻の軽い幾人かの女官たちと関係が有るようだった。それは公爵も同様では有ったが、婿殿の相手は思慮に欠けた者が多いのに対して、公爵の相手は秘密保持能力が高く、政治的な判断も出来る者ばかりだと言う違いが有った。

「イゼル、新妻の愁い顔と言うのは確かにそそられますが、王は心配なさるでしょう。どうしました？」

「！まあ、マルク、いやだわ・・・みつともない所を見せてしまつて」

「あの婿殿が貴女を泣かせたのですね？」

「いいえ、きっと私が色々至らないの。女としての魅力が無さ過ぎるのよ」

「馬鹿な！近頃のあなたは以前にもまして魅力的ですよ。並みの男では貴女の御身分をはばかって口説きに掛からないだけです。相変わらず年下の男はお嫌いなのではないかとご遠慮申し上げている内に、貴女はあんな頭が空っぽの見てくれだけが小奇麗な男を夫に選んでしまわれて・・・」

ひとしきり、そのような会話の後、「女として魅力的なら一度で良から抱いてみて」とか何とか言いながら、イゼルが体ごとぶつかって来たので勢いで止むを得ず「互いの良い思い出になるように」「十分なほどイゼルは魅力的なのだ」と自覚できるように「抱いたの

だった。場所はイゼルの独身時代の寝室だった。

「子供のころから5歳年下の貴方に何をしても適わなくて、悔しかったけれど、今日が一番悔しいかも」

「悔しいのですか？」

「感じすぎて、怖いほどだった。貴方の労わり方ってへそ曲がりね。でも、ありがとう」

「あんな婿殿に見切りをつけたのなら、いつでも仰って下さい」

「確かに、あんな男だけど私には分相応かも。マルクは・・・やっぱり普通の人間じゃないのね。貴方には小さなキタイなんかふさわしくない。きっと・・・そのうちオルト全体の人間の上に立つ者となる・・・父が昔から言っているようになるのだわ」

「金の龍が中にいますけれど、僕本人は至って普通の男です。大切な従姉姪が塞いだ顔をしていると僕も辛いのですよ」

「マルクは不老不死の超人なのでしょう？すぐに年をとって死んでしまう私など忘れてしまおうわ」

「人の世の時の流れから切り離された寂しさをわかって欲しいとは申しませんが、貴女を忘れたりしませんよ。絶対に」

その言葉をイゼルがどう受け止めたのかは解からない。でも、イゼルは元気を取り戻し、婿殿の浮気は納まった。確かに浮気者の女官3人ほどを左遷して、婿殿と顔を合わせられないように工作はしたが・・・。

以来、10年、イゼルはそれなりに「家庭の平和」と「心の平安」を享受していたはずだ。第一位の王位継承権は相変わらずイゼルの物であり、イゼルが如何に心の平安を願おうと、寡婦を通す事は難しい。

適齢期を越えた寡婦で、子の無いただ一人の王女をどう扱うか、ファジル王は悩んでいるはずだ。

都に立ち戻って王と面会すると、開口一番その話題となった。

「マルクよ、イゼルはあのような女だが、面倒を見てくれる気は無

いか？」

「僕は幼い時からあの方が好きですが、イゼルの方が僕を人外の化け物だと嫌っているのです」

「いや、嫌ってはいない。自分は龍を宿す男の妻にふさわしくないと思っているだけだろう。だが、お前は器の大きい男だ。夫に死に別れた哀れなあれにも女の幸せを与えてやる事など、造作もあるまい？ お前がその気になってくれれば、イゼルでもまだ良い子を生めるだろう。考えてはみてくれんか？」

「それよりも王御自身がお子をこれから設けられたら如何ですか？」

「わしのような爺でも、まだ出来ようか？」

「まだ壮年の若々しさでいらっしゃいます。何なら新しいお妃をお迎えになりますか？」

「イゼルの母に先立たれてから、そのような事考えもしなかったが」「お妃がご面倒なら、気の効いた女官でも、身分の軽い者の娘でも、今の後宮は空き家状態ですから、一人や二人置かれても面倒は御座いませんでしよう」

「良い妃候補でもいるのか？」

「はい。他国の姫で母君のご身分が軽いためお気の毒な立場ですが、御本人の資質は一国の王妃にふさわしいかと」

「マルクが其処まで褒める姫君も珍しい。是非話を進めてくれ」

「では、早速」

「待て、それはそれ、これはこれだ。イゼルの憎からず思ってくれているのなら、あれとの間に子を作ることと考えてくれ」

「実は、もうすぐ私に息子が授かりそうなのです」

「相手は、王族ではあるまい？」

「12才の頃から付き合いのある街の女性です」

「ならば、その息子は次代のエスコバル公爵とすればよい。イゼルの子の父はやはり、マルクが一番だ」

アルビでは、エスコバル公爵が不在の間、ロザリアとクラウドスはあ

の腕輪を外して過ごしていた。

確かに、人の悪感情の影響を受けずにすむのはありがたいが、魔法や聖剣の鍛錬をするときは色々とスムーズに行かない部分が多くて困る。エスコバル公爵が女将のハリカと夜を過ごす時だけ、必要なのだという認識であった。

ロザリアとクラウスの間で何の隠し事があるかと互いに信じていたのだが、予想外の事態が起きている。

「ハリカさんのお腹にマーク兄様は、絶対お子さんが出来たとおっしゃるけど、前もってわかるなんて、龍のおかげなのかしら？」

いつも通り静かに寝床の中で身を寄せ合って話をしていただけなのだが、話題に刺激されたのか、クラウスに勃然と性的な欲求が萌した。クラウス自身がその欲求を感じた事を、恥じているようなのでロザリアは自分から更に身を寄せ、そっと手をつないだ。

「ロザリア？」はっとしたようなクラウスの視線は鋭い。

まだ7歳の肉体しか持ち合わせていないのだから、クラウスの極自然な欲求でも、満たす事は到底出来ない。

でも、クラウスに自分を責めたり、恥じたりして欲しく無い。

そんな思いをこめて、ロザリアはクラウスの背に手を回した。

クラウスも近頃はロザリアの状態が手に取るようにわかるようになっていた。空腹か、喉が渴いていないか、疲れていないか、眠く無いかは言うに及ばず、排泄の欲求や、時折クラウスを見るときの潤んだ瞳が意味する所までわかってしまう。実に決まり悪い。

ロザリアが自分の性欲を不潔なもの。忌むべきものと見ていないのは有り難かったが、僅か7歳でも今のような視線を向けられると、自分自身の歯止めが吹き飛んでしまいそうで怖い。

「私はあなたが7歳である事を、時折忘れてしまう。私が不埒な事をしたら思い切り抵抗して下さい」

「クラウスには私を傷つける事なんて出来ない」

「そうでしょうか？私は其処まで賢くありません。今もあなたを組み敷いて体中にキスしたい。・・・ふっ、何を血迷っているのです

ようね」

「私もクラウスとキスしたい。大人のキスを・・・」

「いけない人だ。先が思いやられます」と言うと、クラウスは口角を深々と抉る様なキスをした。幼い子供のはずなのにクラウスが差し入れた舌の動きにロザリアの舌は確実に連動し、唾液のやり取りもためらわない。

なおも貪るような激しいキスを繰り返し、四肢を深く絡ませながらいつ果てるとも知れなかった。そしてそれぞれの下半身が反応して、分泌液を噴出してから、やっと我に返った。

「困ったな」クラウスは苦笑した。

「何だか、私も変」

「・・・さて、体をさっぱりさせたい所ですが、どうしますか」

この店の湯殿は天然の温泉を引き込んでいて、昼も夜も絶え間なく熱めのお湯を浴槽に湛えているのだが、今二人ではいると、更に妙な事になりそうだとクラウスが困惑していると、

「クラウスは、浴槽に浸かったら？私は体を拭いて、着替えて寝ます」とロザリアは提案した。

クラウスが浴槽に浸かっている間に、ロザリアは温泉とは別に引き込まれた泉の水で下着類を洗った。

浴槽からは高窓を通して円い見事な月が見える。

自分の想いは、想う相手に届いている。そう確信できる幸せをクラウスは噛み締めた。

第十九章

超人の悩み（後書き）

- ・ 未来の旦那様の下着を洗っちゃう7歳のロザリアは、良い子ですね。マーク兄様の子供は今のところ3人の予定ですが、どうなるかな・

第二十章 脆き器（前書き）

相当ユークは、無理してます。一方でクラウドは力をつけているようです。

ロザリアの想いは結構複雑です。

第二十章 脆き器

『朝霧楼』にロザリアの両親からの手紙が届いた。

ユークの他人の記憶に干渉する魔法の効力は相当なものであるらしく、帝国首都のオルテスでは、住民への記憶操作は深く浸透している、過去の事件を皆が忘れてしまうと、不自然なほど平和になってしまったようだ。

両親が送って来た手紙も、邸内の平和な状態を伝えてきており「病氣療養で『女神の台座』に近い城に居る」と信じているロザリアに、「体の調子はいかがですか」と尋ねている。

これらの手紙は、記憶を消されてしまう以前の両親やティボーと綿密に定めていた手順で、たとえ記憶が失われていても無事にキタイ国内のロザリアの逗留先に届くようになっていた。

帝国内に居る親しい人々の無事を知るのは嬉しかったが、自分にとって都合な過去の記憶の一切を封じると言う過剰な魔力の行使が、ユーク自身の命を削っている事を思うと、やはりロザリアは胸が痛む。その愚かしさが、どこか哀れで悲しいとは思いつつも、そのために多くの人命を失うことも厭わない狂気・妄執は疎ましい。そして、その妄執の対象が他ならぬ自分自身である事が、心苦しい。

以前、ユークの想いに応えて妃になり事を納めれば良いと考えて、その想いを口にする女神は強く反対した。

「マークの災難は『潰器』と言う龍自身の都合で起こったものだが、ユークの場合は人の世の勢力争いが原因じゃ。如何に母や妹・弟を想っての事とはいえ、一時の激情に我を忘れ、龍の力を発動させて関わりない多くの命まで奪う事など許されぬ。龍の器にあるまじき愚かしさじゃ。ロザリアの対は勤まらぬ」

だが、女神やエスコバル公爵の言うように、帝国から離れてユークの自滅の時を待つだけで良いのかロザリアは疑問だった。

帝国からの手紙が届いて数日後、何がどう片付いたのか不明だったが、エスコバル公爵はまたアルビに戻って来た。相変わらず身なりを地味にして、髪も目も褐色に変えている。

「今度は10日ばかり居るよ」との事で、ロザリアとクラウドは、又あの腕輪をして眠る事にしたのだが・・・

「・・・うっうっ・・・」

ロザリアが呻き声を上げて、涙を流しているのにクラウドは気がついて、慌てた。

「ロザリア、どうしました？」かき抱いて、背中を擦ると、ロザリアは意識を取り戻した。

「・・・あ、クラウド、私、泣いていた？」

「悪い夢を見ましたか？とても苦しそうでした」

「銀の龍がね、赤い血を吐いて苦しんでいたの。そして、私を呼んでいたの」

「それは・・・ユージュ皇太子の命があと僅かと言う事でしょうか」

「あの方は、女神様がおっしゃるように愚かかもしれないけれど、私を想って下さるのは事実なの」

「あなたに最初にキスしたのも、あの皇太子ですね」

「クラウドス！」

「すみません。ロザリア・・・私は近頃、随分と心が狭くなり焼餅焼きになりました。あなたに泣いてもらえる皇太子が妬ましかったのです」

「でも、クラウドス・・・」

「解かっています。本当に馬鹿な焼餅です。許して下さい」クラウドスはロザリアの瞼にキスを落とした。

ロザリアはクラウドスに腕枕をされたまま、やがて安らかな寝息を立て始めた。

「もう、私はあなた無しでは生きてゆけないのですよ、ロザリア」

クラウドはその艶やかな黒髪を撫でながら、これから起こるであろう異変に自分は立ち向かえるのかどうか、自問自答するのだった。

朝食の後、エスコバル公爵にロザリアが「銀の龍が赤い血を吐いて苦しむ夢」を見たと言え、公爵は表情を変えた。ロザリアのような存在が見る夢がただの夢であるはずもなく、銀の龍の『脆き器』の崩壊は目前に迫っていると見て良い。

「ユーグが大人しく死ぬとは思えない。物騒な事を引き起こさなければいいが・・・」

公爵も自分と同じ心配をしている、とクラウドは感じたが、確信は無かった。

『朝霧楼』の商売替えは「摂政殿下のお声がかかり」で有ると打ち出した事もある、妨害や嫌がらせも無く順調だった。

『朝霧楼』はアルビで唯一の妓楼であったと同時に、その天然温泉を引き込んだ風雅な風呂が評判なのだが、エスコバル公爵は新たに鉄鉦山で働く男達のために共同宿舎のすぐ近くに大きな露天風呂を作った。『朝霧楼』の風呂のように優雅な彫刻があったり床が大理石と言うわけではないが、天然の巨岩を生かしたなかなか気持ちの良い風呂で、誰でも気軽に利用でき、いつでも好きな時に入り放題というのが好評だ。朝、作業前に一風呂、そして夕方作業後に一風呂と日に2〜3度入る者が多い。あの小さな宿屋には「摂政殿下のお支払い」で誰でも毎日ビールをジョッキに2杯まで飲めるようにした。

ロザリアは『朝霧楼』の食堂部門を充実させるべく、新しいメニューを厨房で働くものたちに教えるのに忙しかった。以前帝国の首都オルテスで大評判だった制服を採用するのは無理でも、エプロンだけでも統一すると店に高級感が出るとロザリアが試作した物を見せると、女将のハリカが大層気に入って即採用となった。

「まあ、ロザリア様、なんて可愛いエプロンでしょう。しかも品がありますね」

「女将さんの優しい緑の眼と、マーク兄様の綺麗な緑の眼に因んで、この色にしました」

素材は平織りの普通の綿織物でも、同素材のフリルを付け裾はバイアス仕上げで軽やかだ。確かにこうしたデザインは従来のオルトには無い物だろう。

「フリルと言うと貴族の方がお使いになる高価なレースしか思い浮かびませんでした、こうすると、普通の布でも素敵な感じになるのですね」

「高価なレースでは手軽に洗えませんから、不衛生ですよ。綿織物なら日にも干せますし、火熨斗アイロンも当てやすいです」

「本当に何から何まで、行き届いていらっしゃる。大人でもこのような事が出来る方は居ませんでしょう。女神様のお声を聞ける方と言うのはやはり特別でいらっしゃるのですね。」

「確かに子供のはずなのに色々と奇妙な状態です。私の中に異世界の女の方がいらっしゃるのですが、そのお力でオルトには無い料理や衣服のことがわかるのです」

「その方は大人でいらっしゃるのですか？」

「お子様が3人いらして、一番上の方が結婚されてお子様が生まれた所で、オルトに來られたようです」

そう言えば・・・ふと、ロザリアは不思議に思った。クラウドと同じ寢床で眠るようになってから、京子が夢に出なくなり、代わりに京子の持っているはずの異界の知識や技能が極自然に自分自身のものとして感じられるようになった。これが一体何を意味するのかわからないが、自分の特殊能力が上昇しているのは確かだ。

「クラウド君、ロザリアちゃん的能力がこの所急に又上がったのは、君と床を共にして多少なりとも互いの『氣』を交し合っているお蔭じゃないだろうか？」

「それは、そうなのかもしれません」

「君自身の力も大きくなっているようだね」

「確かに、剣を扱うときに特に以前との違いを強く感じます」

「以前ユークが傍に居ると、いつも頭がボンヤリした感じになるとロザリアちゃんから聞いた事がある。やはりユークがいかに強く願おうとも、ロザリアちゃんの気とユークの気はなじまないのだろう。クラウド君との相性は非常に良いようなのにね」

「私はロザリアに出会うまで自分にこうした力が有るとは、微塵も思っていなかったのですが、まだ1歳にもなっていなかったロザリアに初めて会った日から、普通の人間とは違った感覚に目覚めたのです。これはどう考えたら良いのでしょうか？」

「君の力は龍の力ではない。それは確かだし、ロザリアちゃんの基になっている黒い宝玉の力とも、宿した京子さんの魂とも相性が非常に良いのも事実だ。僕も君の力のように急速に成長して行く力と言うのは、他に知らない。僕やロザリアちゃんのように異界の魂が内側を支えているというのとも違う。金の龍は君の力を『オルトが生み育てた力』と言っている。金の龍・銀の龍は、元来オルト以外の世界の存在であつたらしいよ。そうそう、以前ティボーさんが教えてくれた帝国の大神殿の古文書にあつたように黒い宝玉の力と作用して、このオルトという世界が出来たのは確かなようなんだ。僕にも白い大きな円であらわされていた物が何かわからないのだが、ティボーさんの言う所の『黒い宝玉を支える白い円』が、やはり君の根本なんだろう。女神様の言葉もそれを裏付けていると僕は感じたよ。君達の『気』がなじみやすい説明にもなるかな」

「・・・と言う事は、互いに『気』を巡らせるほど、ロザリアも私も力が強くなると言う事でしようか」

「男女としての絆も強くなるし、ね？」エスコバル公爵は悪戯っぽく微笑んだ。

「でも、まだ、ロザリアの体は幼いですから・・・」クラウドは顔を赤らめた。

「抱きしめたり、キスしたりはするんだろう？」

「はあ・・・」

「それ以上は試した事は無いの？」

「そのような事、出来ません」

「相手が幼くても、互いに心地よく男女の絆を深める方法は有るよ」

「私は、自分の欲望でロザリアを傷つけそうで、恐ろしいのです」

「一緒に風呂にでも入ったら？互いの素肌に自然に触れるのは悪くないよ」

「理性が吹き飛びそうです」

「ふっふっ、クラウス君、可愛いな、良し！マーク兄様が内緒で良い事を教えよう」

同じ頃、帝国の首都オルテスの宮殿の奥深くで、ユーグ皇太子は激しく咳き込んでいた。

「・・・！」

生臭いものが口から吐き出されたと思ったら、喀血している。

ドアを開けて、侍従で乳兄弟にあたるグレンが入って来たが、ユーグが血を吐く姿に驚き、あわてて医者を呼びに行こうとしたのを、ユーグは引き止めた。

「世の常の病ではない。口外してはならん。ここへ来い」

「はあ・・・」グレンが不承不承立ち止まると、ユーグはグレンの眼を覗きこんで、「ここを立ち去り今見た事は全て忘れよ」と命じた。すると、グレンは、ふらふらとした歩き方で部屋を立ち去った。

第二十章 脆き器（後書き）

まだしばらく、キタイ王国での話が続きます。

第二十一章 幼女玉房指要（前書き）

はつきり言って、特別製の春本の話です。
エスコバル公爵の「つがい」が誰か、明らかにあります。

第二十一章 幼女玉房指要

エスコバル公爵が「良いことを教える」と言って、クラウドに巻物状の物を渡した。

「見て御覧」と促されて、開いてみて仰天した。

「こ、これは、これも古文書ですか？」

「真正正銘、帝国の神殿に納められていた古文書だよ。ユীগに知られたら色々と厄介だからね、手に入れるために金も使ったけどちよつとばかり龍の力も使った。恐らく神殿の神官たちの記憶からこの巻物は完全に抜け落ちているはずだ。僕がこの巻物を手に入れた後で、ユীগが神殿の古文書類を封印したからね。まあ、封印を破ることは出来るが、でも気付かれてしまうから可能な限り避けている」

「ロザリアの身のためでも有りますか？」

「ユীগがそこに有るような事をロザリアちゃん相手に実行したら、あと10年かそこらはユীগは生き延びるだろうね」

「互いに気を巡らす方法なのですね」

「そうだよ。だが、ユীগ相手でもロザリアちゃんは不老不死だろうけれど、僕が将来困るんだよ」

「殿下がですか？」

「金の龍が言う『まだ定かではない縁』が固まると、僕に不老不死の『相応しいつがい』が生まれるらしいんだ」

「ど、どういふことでしょいか？」

「何年後かに生まれてくる不老不死の女の子が、僕にとって最高の奥さんと言うことらしい」

「それがロザリアと一体どのような・・・？も、もしかして・・・」

「そう。ロザリアちゃんは僕の将来の義理のお母さんなんだろうと思うよ」

「その不老不死の女の子の父親は誰ですか？」

「君しか居ないだろう。ユীগじゃ子供が不老不死って有り得ないし、ユীগの娘では僕の奥さんには出来ない」

「何年後と言うと、殿下との年齢差は相当なものになりませんか？」

「うまく行って、結婚できるのは僕が50歳過ぎてからだろうか。」

50歳だろうが60歳だろうが、長い長い時間を共に過ごすことを思えば、大したことはない。金の龍は言うんだけど、どう？」

「あまりの事に頭が追いつきません」

「ロザリアちゃんに月の物が来るようになるのは、本来は13歳らしいんだけど、君次第で早まる可能性があるようなんだ。それでこれを君に渡すんだよ。あ、将来僕も必要になるから、用が済んだら返してね」

「この巻物にあるような事を、本当にしてのけるのですか？」

「まあ、普通に見ると相当破廉恥ではあるかな。でも、互いが絆を深める意思があるなら、非常に効果的な方法なんじゃないかと思う。君達の場合、絆の強さが、そのまま『力』の強さになるようだし」

「しかし・・・ロザリアに一体どう持ちかけるのですか、今でも十分、破廉恥かもしれないのに・・・」

「へえええ・・・ちよつとは破廉恥な事もやってる？」

「幼い女の子には普通しないようなキスをする程度には・・・」

「クラウス君は正直で宜しい。君じゃあ持って回ったやり方は無理だろう。ここは正面からロザリアちゃんに事情を説明して頼み込むしかないよね。ユীগの中にいる銀の龍は未だかつて帝国の外に出たことが無いし、出るのを嫌がっているらしいから、直接的に軍隊を指揮して攻め込んでくる可能性は低いと思うが・・・女神の台座辺りでけしからん事をする可能性は高いと思ってる。女神封印の禁術に関する古文書を漁ってるらしいからね」

「女神様を封印ですか。恐ろしいことを考えますね」

「ユীগは、ロザリアちゃんが自分の手の届かない所に行ってしまったのは、女神の所為だと考えたがって居るようだよ。自分自身の愚かな行為が原因とは認めたくないんだろうな」

「女神様が封印されたら、ロザリアにも災いが及ぶでしょうね」

「まあ、ロザリアちゃんにとって、実の親よりも親のような存在だからねえ・・・」

「話の趣旨は理解できたつもりです・・・。この絵巻物の示す方法で、ロザリアと私の『気』を高めるとより一層互いの力が強くなるんですね？」

「やはり決着をつけに、君達もいずれは帝国に戻る事になる。その時、ユーグにロザリアちゃんを奪われるのは、たとえ時間制限つきでも我慢ならないんじゃないの？」

それは、確かにその通りなのだった。

だからといって、こんなマネが自分に出来るとは、思えない。いや・・・確かにやってみたかった事ばかりだが、この細密で豪華な絵巻物の恥ずかしげも無い淫らさは直視するのを憚る。

「良く研究して、役に立ててね。ロザリアちゃんにも見せたほうが話は早いだろう。・・・頭の中身は十分大人だし」

その古文書には『幼女玉房指要』と言う題がついており、年のころは7〜8歳と思しき黒目黒髪の幼い女の子と大人の男が閨で、あれこれ絡み合って「気を巡らせている」様子を描く一連の絵巻物となっていた。

男は龍を宿す何代前かの皇帝で、幼い女の子は「神慮により定まりし正妃」「神気を孕む玉女」であり、神の力を宿す神聖な存在らしい。

「このような女の子は実在したのですか？」クラウドはこんな話は聴いた記憶が無い。

「女神様に、幾度か『黒き宝玉の娘』を世に出したがどの娘も不完全だった、と伺った事が有る。不老ではあっても不死では無く、正しく『力』を扱えないとかで、多少特殊な力は帯びているけれど、

さほど世のため人のためにもならない存在だったらしい。ロザリアちゃんが、初めての『完全な黒き宝玉の娘』らしいよ。この絵に出てくる子は不完全な『黒き宝玉の娘』の一人じゃないかな。実は500年ほど前の皇帝が自らの過失で『幼き玉女』を閨房で死に至らしめた、と言う事件があったらしい。その事件の後、皇帝がどうなったかも不明なんだ。5年後に、皇太子が即位しているから、どうにか帝国内は治まったんだろうが・・・いくつもの属国が独立したと言うんだよね」

「500年ほど前に帝国の版図がほぼ半減したと言う歴史は知っていますが、その事情が伝わっていないと言うのはなぜなのか不思議でした。そうした事件があったのですか」

「この『幼女玉房指要』は父親の過失を子孫が二度と繰り返さないために、新たに即位したその皇太子の命令で作成されたらしい。もし、子孫が『玉女』を女神から賜る幸運を得たならば、今度はうまくやってほしい、そういう事なんだろう」

「皇帝は何をして幼い『玉女』を死なせてしまったのでしょうか？」

「まあ、下世話に言えば『突っ込み』だね。自分の性欲を制御できなくなったんだろう。まあ、クラウス君はその点は大丈夫だろうし、ロザリアちゃんは強くて完璧な『玉女』だからね」

「皇帝ではないものが『玉女』の夫となって良いものでしょうか？」

「まあ、女神様の最初の予定では、ロザリアちゃんはユーグとも僕とも子を作る筈だったらしい」

「ええ!？」クラウスはショックを受けた。

「それでは、誰も幸せにならないって、京子さんが怒り、金の龍・銀の龍がそれに同意した。ユーグが思わぬ大きな過失をしてしまった事とクラウス君が凄い勢いで力をつけている事が、運命を変えたんだよ。今のところ僕の『つがい』は君達の娘って事になるらしい」

「はああ・・・だから、用が済んだら返せなのですね」

「ハハハ、そう言う事。君達の絆が固まり、縁が深まれば、僕も可愛い奥さんに会えるようになる。逆にそれが上手くいかないと、銀

の龍は暴走するかもしれないな。君達の娘は『銀の龍の麗しく完き器』になる予定で、龍たちも非常に期待しているようなんだ」

「龍は皇帝か皇帝の血脈の男子に宿るのだと思ってましたが、そのような事も有り得るのですか」

「どうやらオルトの歴史始まって以来の事になるそうだ。がんばって早く可愛い娘を作っておくれよ」

「しかし、ロザリアの体は七歳相応の発育です。京子様のおかげで色々知識は有るでしょうが」

「だからさ、その巻物を良く良く熟読して、ロザリアちゃんに『春が兆す』ようにがんばって欲しい。月のものが来ないうちに挿入にまで及ぶのは、ロザリアちゃんといえども決して良い結果にならないと思う。でも、互いに気持ちよくなる方法は色々有るわけで、極端な話、挿入さえ避ければ、相当色々出来そうだよ。毎日毎晩励んでくると、月のものが来るのも予定より早まる可能性は高いしね」

「はあ・・・」

「君なら、直接女神様に納得行かない点を伺ってみてもいいんじゃないのかな？」

「このような事、伺うのはためられます」

「クラウス君、それは心得違いだ。君は次代の『銀の龍の器』を生み出す責務があるんだよ。そして女神様の大切な申し子と共にずっと生きてゆく運命を背負うことになったのだ。もっと自覚したまえ」

エスコバル公爵の意図はわかったが、これをロザリアに示すのは勇気が要る。

「天命により定まりし幼き妃と相和し気を巡らす」とあり、最初は着衣で口付けを交わす所から始まっている。「新鮮にして芳しき呼吸を受け止め、おのが口中の雫を与え、また受ける」まあ、この程度なら既にやっている事だが・・・

「衣を撥ね退け全てを露にし、細やかなる肌を意をこめて撫して愛でつつ、玉門に舌を差し入れ舐りまわし、時に応じ陰核を舌にて剥

き上げ或いは掌にてさすり、兆したる甘露を賞味し、津々たる泉を飲み干すべし」

クラウドがロザリアに「体中にキスしたい」と言う時、まさにこうした行為を念頭においているのだが、ロザリアの陰部を見たいとまだ言い出せずにいる現状では、実行に踏み切るまでに幾つかの手順を踏まなければいけないだろう。

「玉茎を含む事あたわずと言えども、その先を舌にて撫で、更に強大とならば、舌にて玉眼を押さえ、先を幾度も締めゆるめ、片指にて種袋を揉み伸ばす。子種出でなば、直ちに止め、強く玉茎を握り、片指にて下腹より玉茎根元に、上下に搔かせしめ・・・」こんな事をさせるのは、さすがにまだ早い。大体、ロザリアは自分のその部分が勃起した状態を見ては居ないはずだ。嫌悪感や恐怖感を持たれては困る。

確かに、クラウドの口で説明するのは難しい。

この『幼女玉房指要』をロザリアの目に付きやすい場所に、まずは置いてみようか。

「摂政殿下からお預かりした古文書です。是非、あなたにも眼を通して頂きたいとのことでした。出来ましたら、正直な感想を私に聞かせてください」

ごく短い手紙を添えて、ロザリアがいつも使う鏡台の上に置くことにした。

第二十二章

含羞（前書き）

エロ本のマニュアルが自分達に果たしてどの程度当てはまるものか、結構真剣に悩んでいます。やっぱりエロいです。どう考えてもロリコンです。

18禁では無いと思いますが、15禁程度でしょうか？

濡れ場がお嫌な方は、飛ばしていただいても話の流れは掴めるかと思えます。

第二十二章

含羞

『幼女玉房指要』と言う絵巻物の画風は細密で華麗で淫猥で、見るものに強烈な印象を与える。

美術品として優れているのは確かなのだろうが、あれを人前で堂々と鑑賞できる男などクラウドの知る限り、エスコバル公爵ぐらいしか思いつかない。クラウド自身は、見ただけで思わず声が上ずってしまった。あれをロザリアに見せろとは。理屈はわからなくも無いが、なかなか酷な事を言うものだ。確かに、知識は並みの大人より有るロザリアだが、体はやはり幼いのだ。ロザリアがああ絵巻物を見て示した反応に、とりあえずは合わせて行くのが無難なのだろうとクラウドは腕組みして、難しい顔で考え込みながら、ロザリアがいるはずの自分達の部屋へ戻る。

クラウドが部屋の戸を開けても、ロザリアは鏡台にじっと座り込んで動かなかった。

目の前の巻物を見つめて、クラウドの気配にも気がつかないようだ。動かないより、動けないのかもしれない。やはり、淫猥な場面を細密に描きこんだ絵に衝撃を受けているのだろう。だとすると、並みの7歳児とは違って、理解力はやはり大人並みなのだ。後は、性的な快楽の感受性や欲求が果たしてどうなのかが問題なのだろうが・・・こればかりは、本人にも誰にもわかりはしないことだ。

クラウドは後ろからそっと近づき、ロザリアを抱きしめ、耳朶にキスをした。

「・・・あ・・・クラウド」鏡越しのその顔は恥じらいを含み、桜色に上気している。

「ロザリア、あなたはどう感じますか？ 私達の絆がこうした事で強くなると言いますが、ともかく私はあなたを抱きしめる事を許され

た唯一人の男としての役割を他の誰にも取られたくありません。その絵巻物に描かれているような事をしたいと、実は幾度も思いましたが、あなたに嫌われてしまったら元も子もない。そう思っ
て自分を律してきたのです。でも、こんな物を渡されて、けしかけ
られてしまいました」

「私は・・・クラウスになら、こんな事をされても構わないような
気がするの」

「本当ですか？」

「クラウスになら、私の体のどこに触れられてもキスをされても、
きつと大丈夫・・・」

「大丈夫ですか・・・では、こんなまねをしても怒りませんか？」耳
元でささやく吐息が熱い。

衣類越しに乳首の辺りをゆったりとさすりながら、下着の中に手を入
れる。

「・・・あ、あの」

「まだここは触れてはいけませんか、でも、かなり濡れています」
そういうつつ、下着の中で器用に長い指を動かして、幾つかの場所
を確実に探り当てた。その間にもロザリアのその部分は一層沢山の
露を吐き出す。

「感じてくれていますよね。ああ、その眼です、ロザリア・・・そ
の艶めかしいその輝きが、あなたがまだ幼い事を忘れさせてしま
います」

ロザリアを軽々と抱き抱えて、ベッドに横たえると、上から覆いか
ぶさるようにして、深いキスをする。

その間もクラウスの手は勤勉に働き、上着をただけ下着とズボンを取
り去ってしまう。互いに舌を激しく絡めあっている間も、男らし
く大きな手はロザリアの首筋から胸・腰と辿りながら心地よい刺激
を与え、やがて目指す場所にたどり着くと感じやすい核を指の腹で
やわやわと刺激し、長い中指一本で狭隘な入り口付近を探る。ロザ
リアがもう唾液を受け止める事が出来無くなりつつあるのを見て取

ると、クラウドの唇は小さな乳首に移る、ロザリアの呼吸は大層荒い。幼い体でも性的な感受性は十分なようで、左右の乳首は硬くしこり、クラウドの手はロザリアの吐き出したものですっかりぬれて
いる。

「こんなにかわいらしいのに、とても感じやすいんですね」

「は、恥ずかしい」

「恥ずかしがる事は何もありませんよ。」

「何だかぐしょぐしょになっちゃってるもの・・・」

「ロザリアの体が私の事を嫌がってない証拠です。だから私は嬉しいですよ」

「ぐしょぐしょだけど、何だか気持ちがいいの」

「もっと気持ちよくなりましょう。だから・・・ここにもキスしていいですか？」そういう間もクラウドの指は快美な刺激をロザリアに与え続けているのだ。体が融けてしまいそうな気がする。でも、
恥ずかしい。

「・・・」

「恥ずかしいから嫌ですか？でも、私はしたいなあ」

「・・・どうぞ」その声は酷く小さい。眼を覗き込むと、ロザリアは顔を真っ赤にして視線をそらす。

「恥ずかしいのに、許してくれるのですね。出来れば、気が遠くなるほど気持ち良くなって下さい」

まだロザリアは尻すらも小さくて手の中にすっぽり納まってしまう。瑞々しい果実のような手触りだ。

「ロザリアは、どこもかしこも可愛い。本当に食べてしまいたくありませんよ」

一度、乳首を強く吸って、足元の緊張をほぐしてから、一気に顔をその場所に寄せ、小さな核から狭い入り口まで一杯に舌を這わせる。新鮮な果汁のような味が口に広がる。一番敏感な核の辺りを念入りに舐りまわすと、狭隘な場所からすさまじい量の蜜があふれる。同時に尻や腰の辺りを撫でさすり時折乳首をつまんでやると、ロザリ

アはクラウスも今まで聞いたことが無い甘やかな呻き声を上げて、意識を失った。

体を拭き清める間も意識は戻らない。

「初日から、飛ばしすぎたかな」

我に返ったクラウスは喉の渴きを覚えた。ロザリアは自分よりもっと喉が渴いているだろう。暖かい茶を用意して戻ってきてても、まだ動かないロザリアを見ると、幼い体に無理をさせたと言う自覚が罪悪感をもたらす。

小さな体を抱き寄せ、まんじりともしていないでいると、軽く伸びをしてようやくロザリアは眼を開けた。

「クラウス、キスして・・・」小さな手が首の後ろに回されると、クラウスは胸の奥からじわじわと喜びが湧き上がってくるのを感じた。

「ええ・・・」今度は優しく穏やかにキスをして、そのつややかな髪をなでる。

「喉が渴いたでしょう？お茶を持ってきましたよ。飲み終わったら、風呂に入りましょう。ハリカさんが離れの湯殿を私達専用にするように先ほどおっしゃったのです。あなたの体を私に洗わせてください」

「何だかまだ、力が抜けて立って歩けないわ」ロザリアは甘えるような声でささやいた。

「私が抱いてお連れしますよ」

湯殿は、今まで使っていた大浴場よりうんと小ぶりだが、浴槽は薔薇色と白の混ざった大理石、床も美しい模様入り大理石と言う贅沢さで、裸の美しい男女一对が浮き彫りになった白大理石の湯の注ぎ口からは温泉がかなりの勢いで流れ込み、黄金作りの水の栓をあけると水が流れ込み、湯の温度を好きなように調節できるのだった。

「さあ、入りましょう」

あえて、クラウスはあっさりと服を脱がせるに留め、自分も手早く

裸になるとロザリアを抱きかかえた。

背後から抱きかかえて浴槽に入ると、ロザリアの鼓動がいつに無く早いのが感じられる。

「本当に、体を洗うだけですから、大丈夫ですよ」

そう言われて、酷く落胆した自分に気がつき、ロザリアは赤面する。一体何を自分は期待していたのか・・・

何が、大丈夫なの？と聞き返す勇氣は無い。

ジャスミンの香りのする石鹸を良くあわ立てた手で、体中を撫で摩るようにして洗われると、声を放ちたいほど心地よい。クラウスの大きな手はロザリアを労る様に動き、陰部はあっさりと通り過ぎた。「さあ、終わりました。お湯でよく温まってくださいね」

クラウスはロザリアに背を向けて、体を洗いながら、実は「一発抜いた」のだが、それをロザリアには悟らせないように気を配った。ロザリアはボンヤリとクラウスの背中を見ていたが、均整の取れた男らしい筋肉の動きを美しいと感じた。クラウスが再び浴槽に戻ると、ロザリアは自分からにじり寄る。

「さあ、ここへいらっしゃい」

クラウスの膝の上で後ろ向きに抱きかかえられた。

「今日は随分無理をさせましたね。大丈夫ですか？」

「何だか、ドキドキするけど、大丈夫」

「ドキドキします？私はずっとあなたにドキドキしてるんですよ」

「あ・・・クラウスの胸がいつもよりドキドキしてる」確かに、クラウスの鼓動はいつもより激しい。それと同時にまた、その部分が先ほどの大きさと硬さを取り戻して行く。

「あ・・・」ロザリアはそう言ったきり、顔を赤らめる。ロザリアの足の付け根の辺りにそれが当たるのだ。

「・・・また元気になってきましたね。ロザリアは先に上がっていてください。私はこれを落ち着かせますから」クラウスは決まり悪そうに苦笑を浮かべている。

「あ・・・何か、お手伝いできない？」クラウスは思わずお願い

しますと言いそうになったのを押さえた。

「じゃあ、そのうちにお願ひします。でも今日は、さすがに止めておきましょう」

「解かった。じゃあ、もう体を拭いて待っている事にするね」

ロザリアがかなり本気で「お手伝い」する気であったらしい事は解かったが、先ほど気を失わせるほど激しく可愛いがってしまった後だけに、無理を重ねさせるのは気が引けた。だが、その「お手伝い」の様子を思い浮かべただけでゾクゾクする様な背徳的な喜びを感じて、激しく爆ぜてしまったのも事実で、クラウスは自分でも自分が信用できないと思うのだった。

「ロザリア、あまり男をカンタンに信用してはいけませんよ」そう、自分も含めて・・・

風呂から上がって、服を着終わった所で、クラウスがすっきりした表情で出てきた。

クラウスが何をしてすっきりしたのか、おおよその所は理解したロザリアだったが、クラウスがロザリアにその部分に触れさせるのを避けた理由は良くわからなかった。クラウスが躊躇い無く、自分のその場所を口に含んだり舐めたりするのだから、自分も同じようにしたほうが良かったのではないかと思ったのだ。あの古文書にも、そうした場面の描写は有ったのだし・・・でも、自分から言い出す勇氣は無い。

妓楼で働いていた娘達が、好ましく思わない客にそうした行為を強要されて、如何に惨めで不愉快な気分になったかという話をしていたのを聞いてしまった事があるだけに、自分が考えるよりもずっと大変な事なのかもしれない。でも、思うのだ。

「私、クラウスの物だったら大丈夫だわ」

しかし、当のクラウスがその部分をはっきり自分に見せる事すら躊躇っている以上、まだ、しばらく、そうした事は自分から言い出さない方が良いのかもしれない。こうした男女のやり取りも非常に微

妙で難しい物だなとロザリアは真剣に悩んでいた。

第二十三章 限り有る命・永遠の命（前書き）

カメラが登場します。さすがにデジカメは無理でしょうが、どうかフィルムぐらい作らないかなと思います。

第二十三章 限り有る命・永遠の命

アルビの町外れに、小さな泉があり、周りは天然の高山性植物の花畑になっている。

オルト始まって以来の「カメラ」を作り上げたエスコバル公爵はハリカを連れ出し、撮影に余念が無い。

「これで本物と同じような映し絵ができますの？」

「本当は色もそのまま同じようになる物を作り出したかったんだけど、残念ながら、まだ白黒の濃淡なんだ。でも、本当に本物そのままでの姿が残るから、生まれてくる子供に『お母さんとお父さんはお前が生れる前にこんな風にデートしたよ』って、見せてやれると思うんだよ」

ニトレートフィルムのモノクロームだが、良い記念になりそうだ。1900年発売のブローニーNo. 1を念頭において作ったカメラだが、そこそこ使い物になる。

精密機械産業はキタイの新しい力になりそうだ。キタイばかりかオルト全体の商業・出版・教育の各方面に大きな変化をもたらすことになるだろう。政治の世界にも色々な影響が及ぶと考えて良いかもしれない。

だが、写真の開発を急いだのはエスコバル公爵として言うより、マーク・ゴールドとしての個人的な感情、或いは感傷が大きな原因となっている。

自分自身が、不老不死だとされている事に、エスコバル公爵はと言うよりマーク・ゴールドは強烈な疑いの念を持っている。少なくとも自分の知る限り、宇宙に浮かぶそれぞれの天体は寿命が有るはずだし、137億歳とされる宇宙にすら寿命は有るはずだが・・・まあ、そんなことを龍や女神にぶつけてみてもはかばかしい答は返って来るわけがない。気の遠くなるほど長い時間を過ごしてきて、こ

れからも存在するから「不老不死」と便宜上しておく。ただそれだけに過ぎないだろう。

何らかの予想外のエネルギーなり、衝撃なりを受ければ、変質して、生命体としての実体を失ってしまう事も案外たやすいのではないか
と思っっている。

「女神様や龍たちも、滅ぼす何らかの方法は有るのですよね」以前
そんな物騒な質問を女神に投げつけた時、答えは、こうだった。

「何故生じたのか、長い長い時の中で存在し続けているのか、いつ
消滅するのか、全くわからない」

そして「長い長い時」とは言うものの、地球の約45億年という年
齢より古いわけでも無さそうであり、彼らの作り出したというオル
トと言うこの世界は存在する国の数も人間の数も地球よりうんと少
ない。

そもそも不老不死であつたはずの帝国の開祖はどうなったのか？

金の龍に聞いても「わからぬ。ある日を境に消えた」と言い、女神
は「自らの意思で別の世界に向かった」と言う。別の世界へ向かう
事が何を意味するのか女神には「わからない」と言う。オルトの神
は全知でもなければ全能でも無い。不老不死などと言ってもどこま
で信用できるものか実に怪しい。ひょっとして数千年ほどの時間が
過ぎると、自分自身で生命をリセットするとか消滅させるとか、そ
んな事も出来るのかもしれない。

「狭い世界をずっと見ていて飽き飽きするか、愛した者が全ていな
くなって、生きる張り合いを失うか」そんな所なのだろうか？

帝国開祖の場合、彼だけが不老不死で、妻も友人も皆彼に先立って
亡くなったとされる。彼の末裔とされる人間はアマダリア帝国の皇
帝をはじめ各国の支配者層に多く存在しているが、正確に彼の子供
が何人だったのかは解かっている。そして彼の子供は誰一人不老
不死では無く、全員彼に先立って亡くなっているらしい。

「不老不死なんてクソ喰らえだ」

地球人であつた自分にとって、不老不死であると言う事はオペラの

『さまよえるオランダ人』同様、呪いとしか感じられない。オルトの人間にはそういう発想は皆無なようだが・・・

「自分自身は死ぬ事も出来ず、神に等しいと人に言われながら愛する者の命を永らえさせる事も出来ない」そんな限定機能つきの特殊能力なんて、迷惑なものだと思うのだが、そんな感傷にばかり浸ってもいられない立場に今の自分は有るのだった。

自分は、今隣りにいるこの人がずっと好きだった。いや、今でも好きだが、この人が後数年で亡くなるであろう運命を悟って以来、酷く寂しい。この人の死後、また別の出会いが有るとしても、それは全く取替えの利かない別の物で、この人と自分の時間はもうあまり長くない。その悲しみが金の龍にはわからないらしい。

「このような儚い人間の事をお前が深く嘆く必要は無い」

「お前にはお前にふさわしい『つがい』が現れるから、その日を待て」

「開祖に倣って、あまたの場所に自らの血脈を残せばよい」

金の龍の言葉はどれも叫びだしたくなるぐらい、無神経だ。まあ、人ならざる存在には、何万年たっても人の情は解からぬものなのかもしれない。

ハリカは先ほど「月のものが遅れています」と嬉しげに照れながらマークに告げたが、実はマークにはハリカの胎内に既に息づき始めた生命体の放つ波動が思いを込めて抱き合った日から確実に感じられているのだ。

「不死ではないな。だが悪くは無い息子だ」と金の龍も言うのだから間違いないのだろう。

「子を産んでも生まなくてもこの女は、せいぜい2〜3年と言う所か」本当に無神経だ。

ハリカに自分の子を産んでもらうことで、限られた寿命を更に削る事になりはしないか気に病んでいたのだが「龍の子を宿せば、寿命

が延びる事が有っても縮む事などない」と金の龍が断言したので内心ホッとしているのも事実だ。

初めての妊娠出産が30歳過ぎと言うのは、産科医療と言う概念すら存在しないオルトでは稀な話で、いささかなりとも龍の血脈に連なる貴族の婦人か、生活に困窮して死ぬまで身を売らねばならない場末の娼婦でも無い限り、めったに聞かない。そのためハリカ自身も子を持つ事は諦めていた様だ。

「あなたのように高貴な方の初めてのお子様を、私のような女が生んで本当に良いのでしょうか」

オルトの厳しい身分差別やハリカの苦難の多い日々を思うと、そう考えるのは無理は無いのかもしれない。だが、マークは自分の内面世界まで愚かしい身分差別に汚染されるのは真っ平だった。

「このオルトには愚かしい色々な決め事がある、身分と言う物で人を色々と分け隔てするけれど、それは、ハリカという一人の素敵な女の人の価値には何の関係も無い事なんだ。僕たちが出会った時、立場や身分は違ったけれど、心は通じ合ったと僕は思っている。違う？」

「ええ。あなたに抱いて頂いて、自分の中の穢れが清められて行くような、そんな幸福を感じました」

「それは・・・僕に清める力が有ったんじゃない、君自身の力なんだと思うよ」

「身売って生きるしかなかった女に、そんな力が有ったんでしょうか？」

「他の人の事はわからないけれど、君は僕をものすごく綺麗な気持ちで包んでくれた。僕がどこの誰だなんて事を抜きにして、濁りの無い澄み切った気持ちで接してくれる君との時間は、僕にとってとても大切な物だったんだよ」

「ああ・・・それは買いかぶりです」

「買いかぶり？」

「もう既に公爵でいらっしやる事を存じ上げないで、私はあの頃あなたを『若様』とお呼びしましたが、でもどう考えても、あなたは泥水稼業の女とはまるで別世界の高貴な方でいらっしやるのは確かですもの。そんな方がわざわざ私に会いに来て下さる。そして慈しんで抱いて下さる……。その瞬間だけはこんな私が高貴なお姫様にも羨まれるような幸せな女なのだと思います。御身分を知ってから、本当にその通りだったのだと思いました。やっぱり私もあなたの仰るオルトの愚かな決め事に縛られた人間なのです」

「人間は、誰でも生まれた場所の決め事に縛り付けられてしまうものかもしれない。それでも、君の濁りの無いまっすぐな心の波動は、宮中で欲に塗れた人間を見飽きていた僕にとって救いだったんだよ。それに、なんと言っても君は僕の初めての人だからね。一番最初の時は緊張しすぎて心臓が止まりそうだった」

「まあ、そうですね？ 初めての時から、堂々とした殿御ぶりでいらっしやいました」

「そうだった？」

「ええ。男の方に抱いて頂いて心の底から嬉しいと感じたのは初めてでしたから」

「最初にキスしたんだっけ」

「そうでした……。普通、娼婦に口付けは無用としたものでしたから……。嬉しくて」

「年上のあなたに嫌われたくない一心で、結構頑張った記憶は有るんだよ」

「まだ、12歳でいらっしやったのですものね。今よりももっと、繊細な雰囲気でしたらっしやいました」

「今はぬけぬけと子供を生めとか言うぐらいには、ずうずうしくなっただよ」

「いえ……。飛んでもありません。お子様を生ませて下さるなんて、思ってもいませんでしたから、とても嬉しいんです」

「身分差別に縛られるのは嫌だと言う割りに、君を奥さんにも出来

ないでいるへたれぶりに、自分でも嫌気が差す時があるんだけど・
・それでも、子を産んでくれたら、僕達二人の縁は長く深く繋がる。
それが何より嬉しいな」

「そんな風に思っ頂けて、私もこの子も幸せですね」

「そうだ、今度はロザリアちゃんとクラウド君を連れてきて、撮影の助手をやってもらおう。そうすれば僕と君の二人一緒に写真も撮影してもらえし」

「まあ、そんなことお願いできるでしょうか？」

「クラウド君は解かっちゃいないだろうが、ロザリアちゃんはカメラがどんなものか知ってるし、センスもいいから、きっと素敵な写真撮ってくれるよ。クラウド君はロザリアちゃんの指示で荷物運びしたり雑用をやってもらえればいいんだからさ」

「何だか恐れ多いです」

「大丈夫さ、きっと。問題はこのカメラがまだいかつくて重いつて事だけだね、クラウド君との息はぴったりだろうからかなり期待できるな」

『朝霧楼』の地下室の一角に急遽暗室を作って、早速現像に精を出すエスコバル公爵の姿は、何やら秘密の魔法の研究でもするのかと思われているようだった。

「暗闇の中から何だか絵が浮かび上がるとか、そのようなお話を伺ったんですが、何か特別な魔法なのでしょうか？」などとロザリアに聞いて来る者もいた。ロザリアもうまく説明は出来なかったが、それでも、

「全然魔法じゃないのよ。光を浴びると色が変わる性質を持つ葉をうまく使って、景色や人の姿を殆どそのままに残すことができる物なの。色々な楽しみ方も出来るし、記録にもなるし、とても役に立つものよ」と言うのと、多少は気味悪く思う気持ちは薄れて、安心してもらえるようだった。

ロザリアもクラウドも事情は察しているだけに、マーク個人として

の大切な思い出を残す事になる写真の撮影が、これから上手く行ってくれると良いと願っているのだった。

第二十四章 都合（前書き）

色々人間にも、神にも都合があって、折り合いをつけるのは大人の
智恵でしょうか？今回はマークの話です。

第二十四章 都合

地球人マーク・ゴールド・20歳の魂が瀕死のギュルバハル皇后の胎内に入りこんだ際、最初にコンタクトをとってきたのは金の龍だった。

「（マークよ、異界の魂よ、脆き器をよみがえらせよ、オルトに祝福を与えよ）」

落下寸前の旅客機の中に居たはずの自分が、なぜわけもわからない空間に居て、これまた訳のわからない金ぴかの生き物に意味不明の呼びかけをされているのか、まるで訳がわからなかった。

「おい、オルトってなんだ？脆き器ってなんだ？理由も無く呪う気は無いが、僕が祝福すると良い事でも起こるのか？」

「（マークの祝福は金の龍の力となり、あまたの人々に幸いを齎す）」

「なんかご大層だな。わかった。祝福する！これで良いのか？」

「（感謝する。金の龍はマークと共に、マークは金の龍と共に！）」
なんか、どこかイカれた国の政治スローガンみたいだ、と思っている内に、いつの間にやら明るい外界に出ていた。驚いて声を上げたら、それが赤ん坊の泣き声になったので、また驚いた。

「まあ、玉のような若君様のご誕生です！」
すぐに産湯を使わされて、産着を着せられる。

「黄金のおぐしに緑の瞳でいらっしゃる。まさに金の龍の器であられるようです」

「妹の容体はどうだ？」落ち着いた感じの男の声がした。

「やはりお助けすることは叶わぬかと・・・」

「そうか・・・哀れな・・・この子も、生まれて早々母を亡くすか・・・」

この男こそキタイ王ファジルであった。

「この若君様は何事かお考えなのでしょうか？お泣きにもならず、

先ほどから一心に王の方を御覧になってますね」乳母は興味深げにこの風変わりな赤ん坊の顔を観察していたようだ。

「お前は何者だ？ いずこよりか、このオルトに召還された者か？ もし名が有るならば名乗るが良い」ファジル王はおおまじめにマークにむかってこう問いかけた。

「マーク」とハッキリ発音したはずなのだが、生まれたての赤ん坊ではそう聞こえなかったようだ。

「ほう、マルクか！ 良い名ではないか。では、そのままマルク・ド・エスコバル・ハリウスと名乗れ。エスコバル公爵を継げば良い。我が妹・ギルバルハルが隣国の皇帝との間になった初めての息子なれば、皇太子のはずだが・・・どうやらそうも行かぬようだしの。わしの身内として大切に扱おう」

エスコバル公爵家はキタイ王家の最も家格の高い分家であり、幾度も王族との婚姻関係を重ねてきた名門だが、ファジル王がエスコバル公爵家の唯一の相続人であった従姉の姫君を正妃に迎え、その正妃がイゼル王女を産んで数年後に病死してからは、「エスコバル公爵」は空位であった。

マークはなんと、オルトで生まれ変わったその日から「エスコバル公爵」となったのだ。

だが、そうは言っても、さすがに生まれたての赤ん坊では公爵の役目は果たせないわけで、それから立って歩いて、周りの人間との関係を築き上げるまで、マークの身の上には様々な事が起こったのであった。

ファジル王の一人娘イゼル王女の周辺は、最初からマークに対して敵対的な雰囲気が強かった。

ファジルが余りにマークを「賢い」「凄い」と褒めるので、イゼルの王位継承権が揺らぐのではないかと危惧したという理由もあるが、「結婚前はエスコバル女公爵であったイゼルの母の領地と財産を乗

っ取られた」ようにイゼル自身が感じていた、と言う厄介な事情も有る。

「お父様、なぜあの赤ん坊にお母様のお城や領地をやっておしまいになるの？」とイゼルは父王に尋ねた。

「城や領地はそもそもお母様の物ではない。民の物を委ねられているのだ。やるのではなく委ねるのだ。あの赤ん坊は金の龍の器だ。真の身分はこの上なく高貴で、やがては在るべき場所に戻ろう。幼いそなたにはまだ理解できぬかも知れぬな。ただ、これだけはハッキリ言っておこう。そなたに理解できぬこともあの赤ん坊は既に理解しているのだ。そして、エスコバル公爵領は豊かな良い国となる」

当時5歳のイゼルは、自分には出来ない事、わからない事が多いためか父の信頼を得られ無いのが悔しかった。それに引き換えあの赤ん坊には金の龍やら自分勝手に動く聖剣やら、おかしな物が手を貸してズルイ。・・・とまあ、こんな風にマークはイゼルに最初から「ズルイ」と思われていたのは確かだった。

「なぜ生まれたての僕をいきなりエスコバル公爵になさったのです？」とつい最近ファジル王に尋ねた折、王は当たり前の事だといわんばかりの顔でこう答えた。

「見るからに金の龍の器であり、血脈をたどれば帝国の皇太子であるべき身であり、異界の賢者の魂を宿す者を遇するのに、他にふさわしい仕様は思いつかぬでは無いか。我が子として世に披露してしまえば、真は従姉であるイゼルと娶^{めあ}わせる事はまず出来ぬし、帝国に立ち戻って帝位につく折も面倒であろう」

「マーク・ゴールドは異界の者ですが、賢者かどうかは怪しいです」「金の龍がわしの夢にまで出てきて保証したのだ。実際お前は十分すぎるほど賢い。間違いではない」

それにしても、ファジル伯父は自分とイゼルの結婚をまるで諦めていないのだと今更ながらに強く意識させられるような答えだった。

そして、自分が皇帝の位を継ぐと信じている。

「おいおい相棒^{メイト}、何かと言うとお前は夢枕に立って、ファジル伯父を焚き付けているのか？」

マークは怒りを含んで内なる金の龍に語りかける。

「（焚き付けてなどいない。ファジルの問いに答えるには夢枕に立つ以外方法が無い。お前こそ本来の帝国皇太子であり、次代のキタイ王の父親に一番ふさわしい）」

「ふん、御免こうむるね」

「（でもお前は次期皇帝だ。次代のキタイ国王も早く作れ）」

「早く作れって、僕がイゼルの子供の父親になるのは無理だ」

「（別に無理ではない。お前がイゼルに生ませる子をキタイ王にするのが最も良い）」

「最も良いって、勝手に決めるな！ハリカが生きている内は絶対ゴメンだよ」

「（では、あの身籠った女が亡くなってからで良い。まだ間に合う）」

「間に合うって・・・じゃあ、せめてその短い時間だけでも、僕をそっとしておいてくれ」

「（いずれしても、あの女は三年はもたぬ。その間は帝国の事も次期キタイ国王の件も放置するのか）」

「マーク・ゴールドとしてはそう願いたい。でも、無責任だって責めるんだな」

「（お前は望んで我が器になったわけでは無い。だが、既にお前は我が器なのだ。為すべき事を為せ）」

「本当に酷い事ばかり言うよ。イゼルだって、はい、そうですかって、僕と子供を作る気になるものか」

「（王女とは一度契ったであろう）」

「あれは一種のセックス療法。変な男をあてがうわけに行かないじ

やないか。まだ女として十分大丈夫だと納得させるために必要だったただだよ。僕とイゼルの関係はあっさりしたものさ」

「（王女はあっさりしておらん。抱かれないのに言い出せず耐えている）」

「おい！それはまだ夫の喪に服しているイゼルに対して、無礼だぞ」

「（人の礼儀など知らん。だが、王女はお前を強く欲している）」

イゼルが自分を「強く欲している」と言う金の龍の言葉は、マークとしては信じ難い事であったが、根も葉もない思い過ごしと一笑に付す事も出来ずにいた。金の龍に「思い過ごし」など有りえないからだ。

マーク個人としてはハリカに残された時間は、精一杯彼女のために尽くしたいし、たとえハリカが許すとしても、別の女を抱く気にはなれない。こうして離れて都の宮殿に居ても、心はハリカのもので居たい。

「（では、軽い気もちで王女を抱いてやれ）」

塞ぎこんで月を眺めながら、花園で一人寂しく酒を飲んで居ると、金の龍はまた勝手なことを言う。

「そんな気分にならんよ、御互い」

「（だが、女は抱きたいだろう）」

「黙れ黙れ！どうしてお前はそうもうるさいんだ！！」

「（向こうからお前に抱かれたがっている女がやって来るからだ。もう黙ることにするが、面倒は見よ）」

「面倒は見よ、って・・・あ？あれは・・・」

黒いドレスを身に纏い、ふらふらした足取りでこちらへやって来る女が確かに居る。イゼルだ。

ここは王族の住まう一角の花園で、一般のものは出入りはそもそも許されていない。確かにマークが摂政となってから、宮中の夜の治安も格段に良くなったが、だからと言ってこのような時間に女の身で一人ふらふら出歩くなど無用心極まりない。

「イゼル！イゼル、一体どうなさったのです？」思わず抱きかかえると、イゼルはマークを見て笑った。

「まあ、これはこれは麗しの摂政殿下！」もはやまっすぐ立てないという感じだった。

「随分と酔ってらっしゃいますね。こちらに腰掛けて、お休みになりませんか」

「是非喜んで」

「何がありました？飲まずに居られぬほどのお悩みを抱えておいでようですが・・・」

「まあ・・・あなたがそれを尋ねるの？残酷な人ね」

「僕が残酷？」

「父に言われました。身を捨てて慈悲を請えと。でも、あなたは受け容れて下さらないでしょう？」

その深く傷ついた悲しげな声と縋る様な視線がマークの気持ちを大きく揺さぶる。

「イゼル、貴女の心からの願いと有らば、僕に受け入れる覚悟はあります」

「愚かな酔いどれ女の戯言たわごとと聞き流して下さっても良いのよ」

「では、あの明るい月に向かって打ち明け話でもなさるおつもりで、お話をさい。僕も伺いますから」

「私は、5歳年下の従弟が子供の頃から好きでした。でも、生来の負けず嫌いおこづと臍曲がりな性格のせいで、『好き』と相手に言う事が一度も出来ませんでした。それでも賢い従弟なら私の気持ちを察してくれるかと思っていたのですが、大きくなって私以外の様々な女の人たちと付き合うようになって、私に向ける視線は相変わらず『気の合わない年かさの従姉』を見るものでした」

「・・・イゼル、僕も貴女のことを幼い頃から好きでした。でも、そんな風に思ってた下さっていたのですか」

「何でもできる、何でもわかるあなたになら、私の気持ちなんて、とうにお見通しだと思っていたのに」

「案外、わからぬものですよ。嫌われているという思い込みもありましたし」

「・・・一度だけ、抱いてくれたでしょう？あの時は、どうだったの？」

「和解できたと思いました。そしてイゼルが明るくなって良かったと思ったのです」

「私、あの時も『悔しい』とか言ってしまったし・・・でも一応新婚だったのよね」

「そうでした。あれはいわゆる不倫ですから」

「今は・・・もう御互い自由だからと思っていたら、大切な方が居るの？お子が出来たって・・・」

「御父上からお聞きになりましたか」

「私が間抜けだから、別の女の方に先を越されたと叱られました。父は私の気持ちに気付いてます・・・」

「フッ、一番の間抜けは僕なんですネ。金の龍に言われているのです。貴女を抱けと。でも、僕はあなたが嫌だろうと思ってました」

「大切な方は居るし、私はこんな捻くれ者だし、5歳も年上だし、今更『実は愛してます』とか言われても困るわよね・・・」

「愛しているのですか？イゼル」

「アハハ・・・私って昔からマルクに厄介事ばかり持ってくる巡り合わせみたい」

「笑い事ではありませんよ。御互い素直になりますか。結論はそれからにしましょう」

「まあ、マルクのココ、大きくなって」イゼルは嬉しそうだ。

「はしたないなあ・・・さっきからずっとです。じゃあ、今から大人同士の話し合いですね」

「そうそう！夜はこれから！」

酷く、御都合主義な展開だが、イゼルの気持ちの重さを感じてしまった以上、今更無視も出来ないと言うのも正直な気持ちなのだ。体は・・・随分正直だ。あきれるほどに。

さて、この顛末がどうなって行くのか、マークにはわからない。

第二十四章 都合（後書き）

次は、ロザリアの話の予定です。

第二十五章 多情と純情（前書き）

ベッドシーンだらけです。多分作者の脳内妄想のせいです。すみません。

次回は違うと思います。

第二十五章

多情と純情

ロザリアはクラウスに抱きしめられて眠っていたのだが、ふと目がさめた。

「ねえ、マーク兄様の『気』が奇妙な感じがしない？」

その言葉にクラウスが眼を覚ました。

「はあ・・・確かに・・・今はブルサの宮殿内部においでのはずですよね」

「イゼル王女という方は兄様にとって姉のような方と伺ったけれど・・・」

「色々と複雑なのでしょうか？」

「また、ハリカさんに言えない事が増えたみたいね。何だか兄様に悪いから、頂いた腕輪しようかな。そのほうが眠れそうな気がするし」

「そうですね。私も嵌めましょう」

「これからは、寝るときはずっとしたほうが良さそう」

『心話』を遮断する腕輪をすると、マークのひどくざわめいた気配を感じなくなったが、いつも陽気に安定した気配しか知らなかっただけに、気にかかってならない。でも、個人的な『秘め事』を覗き見るのはやはり慎みたい。

「凄く悩んでますね、ロザリア」

「酷く兄様がご自分を責めていたのが、何だか心配で・・・」

「王女様もハリカさんも大切にしたいから、悩まれるのでしょう」

「そうよねえ・・・何だか切ないわね・・・どちらの方も兄様と余り長い時間は一緒に過ごせなさそうだし」

「王女様も殿下のお子を産むのかもしれませんがね」

「私もそう思うわ」ロザリアは思わずほうっと溜め息をつく。

「ロザリアが私の子を生んで下さるのは、何時になるでしょうね。気長に待つ覚悟はしてますが」

「自分でも待ち遠しいわ。早く大人になれば良いのに」ロザリアの顔が赤らんだ。クラウスはそんな変化を見逃さなかった。

「おや、殿下と王女様の気配に当てられましたね？濡らしてますよ。ぐしょぐしょ・・・」

「い、イジワル！」下着の中のクラウスの手は拒まれていない。ロザリアのその部分は又蜜を吐いた。

「折角、可愛がってあげたいと思ったのに・・・やめますか」わざと手の動きを完全に止めると、幼い腰はもどかしげに揺らめき、真っ赤になった顔には涙が浮かぶ。

「・・・」ロザリアは唇をかみ締めている。

「いけませんよ、唇をかみ締めては」クラウスは幼いけれど妖艶な美しさを湛えた顔を両手で挟み込むと、貪る様な深いキスをする。

ロザリアの鼓動はさらに早くなり、腋の下が微かに汗ばんで、まだ青い柑橘類のようなそれで居て男の官能に火をつけるような芳香を漂わせ始める。夜着をはだけ、腋の下や胸、臍の周辺にも舌を這わせる、幼女とは思えない艶めいた呻き声がその口から漏れる。その声にクラウスの器官は敏感に反応する。

「あなたに泣かれると弱いんです。どうせなら、感じて泣いてください」

近頃はロザリアも少しずつ快感を得るのに積極的になって来たが、まだはつきり言葉にするのは抵抗が大きいようだった。クラウスは、折りを見てその器官をロザリアに見せたり触れさせるようになったが、さすがに「お手伝い」をさせる踏ん切りは、まだついていない。一度、頬ずりされた事が有って、爆発しそうだったがどうにか耐えた。クラウスにとってある種神聖な存在であるロザリアの顔が、自分の物で汚されるのを見るのは耐え難い事のように感じたからだ。だが、そんなロザリアの顔を思い浮かべると、酷く興奮してしまう自分の神経に男と言う生き物の厄介さを感じている。

いきなり強すぎる快感に晒されると意識を失う事も珍しく無いロザ

リアだが、ジワジワと追い上げて行つて臨界点に達した場合は、切なく甘やかな声を切れ切れに漏らしながら体全体を薔薇色に染め啜り泣くようになる。ロザリアの全ての感覚がクラウスの与える刺激に反応し、更なる刺激を貪欲に求めるのだ。その啜り泣きを聞くと、無常の喜びを感じる。失神寸前になると刺激を与えるのをやめ、愛らしくも淫らな姿を鑑賞する事もしばしなので「クラウスの意地悪」と言われて、本気で怒らせてしまった事もあった。

今夜は「意地悪」をするつもりは無いが、可愛らしく淫らな姿を鑑賞する喜びを放棄するつもりも無い。

「マルクが大して私を好きでなくても、私はマルクが大好き」

「好きなの。本当に好きなの。愛してしまったの」

そんな言葉を口にしながら、イゼルは必死な様子ですがり付いてきた。其処には何の打算も無い。見た目は十分に成熟した大人の女でありながら、初々しい風情が抱きしめている側にも伝わってきて、好ましい。

「マルク、マルク、私の名を呼んで」切ないその声は、マークの中の何事かを打ちのめした。

見捨てられる事を恐れる幼い子供か小さな動物のような保護欲を大いにそそる雰囲気があって、とても放っては置けない。「はしたない」のはイゼルなりの照れ隠しであるのは良くわかった。

少しへそ曲がりで癪癪持ちで、正直で、あけっぴろげで、可愛い。

「イゼル、あなたはとても可愛い」気がつくと、激しい接吻を浴びせかけ、そこら中に花卉を咲かせ、イゼンを幾度も失神させてしまっていた。

「僕みたいな多情な男に惚れると苦労しますよ」

「多情でも薄情ではないから、いいの」

「貴女に酷い事をしていると言う自覚は有るのに、もう、止まらなくなってしまうました」

「止めないで。お願い」

結局、夜が明けるまで、殆ど一睡もせず共に時を過ごした。

爛れた風情の寝室を出て、テラスで一緒に朝食を取り、その後は何事も無かったかのように別れたが、イゼルの背筋をまっすぐ伸ばしたその後姿が「とても綺麗だ」とマークは感じた。

マークが「子を作る覚悟も無い」「何一つ約束を交わせない」と伝えると、イゼルはふわりと笑って「いいの、そんな事は気にしないでいいの」と答えたのだったが・・・内心忸怩たる物が有る。

イゼルが去った後、ハリカの写真を前に、どう言い訳しようかと考え込んでしまったが、言い訳など何の意味も無いのは確かだった。ハリカとは結婚の約束を交わしたわけでも無く、互いに互いの異性関係について尋ねた事も無い。それがハリカとのルールでも有ったのだ。

12歳のマークの前に初めて現れたハリカは、幾人かの豊かな若くない最良客を持つ一流所の娼婦であって、ハリカの体を抱くのは自分一人ではないのは自明の理であったからだが・・・愉快ではなかった。だが、ハリカを責める訳にもいかず、過去のいきさつや義理やしがらみがあって、マークが身請けするとも言い出せなかった。マークは客として最も良い客であろうとした。ハリカが自分の才覚で自由の身になるまで、ただ、客として通い続ける以外の事は出来はしなかった。

それでも、ハリカとの間には仮初めでは無い何かがあると、ずっと信じていることが出来た。

「今、ここで互いが互いにとって一番愛しいと思えるなら、それで十分幸せです」

ハリカは未だにそんな事をよく言う。

閨の中で、別の男の噂はしないのが妓楼のしきたりだ。ハリカはそのしきたりを守っているとも言える。

ハリカを水揚げした豪商や、鼯顧客だった王族や富豪達のことをハリカに尋ねた事は一度も無い。恐らくこれからも尋ねることはないだろう。商売抜きで一番惚れられているのは自分だという妙な自信も有る。でも、それを口にして、ハリカに尋ねた事は無いのだ。

「ハリカが僕に何も問い質せないのを良い事に、僕は従姉殿とのおつぴきならない仲になってしまったよ。怒るかい？」写真に向かつてそんな言葉を投げかけてはみたが、本当はそんな事は有り得ないだろう。

見てみぬフリをしてくれるであろうハリカの心の平安を、可能な限り乱さないようにする、それが多情な男なりの誠意なのでは無かるか・・・マークはそんな風に思うのであった。

「クラウス君は、うらやましいよな」

オルトで一番の果報者は、あの堅物の若者かもしれない。ただ一人の大切な女を守る・・・本当はその役目は自分が請け負いたかったようにも思うが、自分にあの直向きさは無い事も十分自覚しているマークだった。

その堅物な若者が幼いロザリアの体にどのような真似をしてのけているのか、実は把握していない。自分自身が女性との関係に夢中になると他の事まで気にはしていられない所為も有るが、あの二人の気のめぐらせ方は龍のものとは違っていて、帝国にいるユークの気を読むより難しいのだ。

「僕の気はあの二人に読まれてしまうのかな」

「(昨夜のマークの気の乱れぶりはひどかったから、ロザリアにもクラウスにも伝わったらしい。礼儀として腕輪を嵌める事にしたようだぞ)」

「途中まではつつ抜けか。恥ずかしい」

「(二人はマークの気が乱れたことを感じ取ったままで、闇で何をしているかまで知られては居ないはずだ。別に恥じる事をしていたわけでも無いのだ。心配するな)」

「で、あの二人は静かに寝たんだろうね」

「（お前に合わせて、激しかったぞ。ロザリアは感じすぎると気を失ったり泣いたりするのだ）」

「おいおい、7歳児に何をしてるんだ」

「（お前が古文書で教えたような事をしているだけだ。二人とも良く学んでいる）」

「え？ えええ？ そうなのか・・・」

あの律儀なクラウドスがネチネチとロザリアを追いつける様子が思い浮かんでしまい、どうにも困った。

「（マーク、何を照れている）」

「お前、こんな話、よそでするなよ」

「（当然だ。不老不死の者同士の親密な気の交し合いは、並の人間が知るべきでは無い秘儀だ）」

「あの二人の場合、秘儀なんだ」

「（お前の子作りも意義は深いが、あの秘儀はオルトの存亡にも関わる一大事だぞ）」

思い浮かぶ甘く淫らな光景が「オルトの存亡にも関わる一大事」とは、どうもこの世界の仕組みはいまだにマークの理解を超えていて、奇妙だ。

「僕としては、あの二人が心置きなくイチヤイチャ出来る様に努めなくちゃいけないんだな」

七歳児に官能の喜びを齎したらしいあの律儀なクラウドスの思いは、純情でありながらある種、実に淫らだ。

あの二人から見て、自分の思いはどう見えるのか？

多情と純情の境目は曖昧で、何万年生きようとも、完全に理解することなど出来ない難問で有るのかもしれない。

第二十五章

多情と純情（後書き）

次回は、写真ねたかな？

第二十六章 掌中の珠（前書き）

クラウドスのロザリアへの想いの強さを、マークの視点で見えています。

第二十六章 掌中の珠

もうすぐ、キタイにロザリアとクラウドが入って1年経つ。

二人のいわば世話役でも有るマークは、都のブルサとアルビを一ヶ月の間に2往復してほぼ半々ずつ過ぎすという、余り落ち着かない暮らしぶりだ。イゼルとの仲は一進一退を繰り返し、宮中でも極限られた人間しか二人の関係を知らなかった。

ロザリアとクラウドは決してイゼルについて尋ねたりしないし、ハリカにも周囲にも内密にしてくれているようでは有るが、一応『心^{んわ}話』で、

「（まだ、ハリカには言うつもりは無いし、まだ知らないフリをしていて欲しい）」とだけ伝えた。

ロザリアが『朝霧楼』のために色々力を貸したおかげで、都でも食べられないような美味しい料理と洗練された気の利いたもてなしが評判となり、旅館としても食堂としても商売は繁盛している。

ハリカのお腹の子は順調に育っている。

ロザリアの提案で写真専用のスタジオを作ったが、これが又評判を呼び、アルビの『朝霧楼』で撮影するのが近頃では街道を行きかう人間の間でちょっとした流行になっている。

妊娠中のハリカのアルバムを作ろうと言い出だしたのもロザリアだ。ロザリアもクラウドもハリカの残された寿命の短さを知っていて提案したものだろう。毎月一度、何気ないハリカの表情を捉え、それを5枚、10枚と続けて見ていると、妊娠中のちょっとした変化が伺われ、大変良い記念になりそうだ。

撮影は主にロザリアが担当するが、現像は暗い中でも眼が十分利くクラウドが担当していた。

今は薬液の濃度を少し変えて、色の雰囲気を変える方法をマークは

教えている所だが、動作に無駄が無く、飲み込みが早い。

「これで、色の上がりを淡い感じに仕上げる事ができるよ」

並んで立つとクラウドの身長が伸びたのを感じる。最近又急に伸びたようで地球風に言うところと190センチと言うところか。マークが183センチ程度だから、貴族としては高からず低からずほど良い感じなのだが・・・

若いクラウドはまだまだ伸びそうな勢いで、その高さは端正な風貌とあいまってかなり目立つ。

キタイに來たばかりの頃は殆どマークと同じぐらいの背で、魔法で髪の色を変えたマークとは良く兄弟に間違えられたが、今は何だか雰囲気も変わってきた。

以前は「穏やかで心優しい好青年」と言う風情であったが、最近は表情が研ぎ澄まされて、時々恐ろしく感じることも有る。常に戦う事を意識している所為だろうか。しかし、どうかするとその手の動き足の運び一つにも華やかさと艶を含み、男の色気を漂わせ、幾らでも女が寄って來そうな雰囲気をも出し出している。「ロザリアは感じすぎると気を失ったり泣いたりする」と金の龍に以前聞かされた所為か、マークはクラウドの手の動くようすを「確かに器用そうだ」とまじまじと見てしまう事も有る。

何かというと、気になる男になっている。これでまだ、20歳前なのだから、未恐ろしい。

「ヌード写真ってものが有るよ。その人物の裸を撮影するわけなんだが・・・芸術作品のほかに、親密なもの同士でしか見ない秘密の思い出って言う意味合いの写真も有る。僕はハリカのおながが大きくなって行く様子を記録に残したいと思うけれど、ロザリアちゃんの場合、成長の記録を残すのは素敵かもしれないね」

「裸ですか・・・そのような物を残しておけば、予想外の事態が起

きて何者かにその写真を見られてしまう可能性もあるわけですね」

「確かにその危険性は有るけれど、僕なら撮影する。その時期にしか見られない表情なり風情なり、やはり少しは残しておきたいから」

「殿下の居られた地球では、そうした事は珍しくないのですか」

「珍しくは無いね。クラウス君には信じがたいかもしれないが・・・」

「

それにしても、なぜ自分はヌード写真なんてものの話をはじめてしまったのだろう。マークは自分で話をふっっておいて、決まり悪い気分を味わっていた。ハリカのヌードを撮り、イゼルの写真も撮るとなると、クラウスはどう思うだろう。芸術としての作品を追求するというわけでは無いのだし・・・恥ずかしげも無いとか、根っからの浮気性だと思われても仕方が無いかもしれない。それに、ロザリアに言及したのは不味かった。クラウスにしてみればロザリアの裸の記録を残すなんて、他人に言われたくは無いだろう。

クラウスが怒ると『本当に』怖いとマークは思う。神の力に近づきうる強い意志と彼だけが持つ龍も寄せ付けない特別な力の全てを使って、相手を叩きのめそうとするだろう。ロザリアが絡むとなるとどれだけの破壊力を発揮するだろうか・・・本当に、このオルトが壊れかねない。

先ずは暗い暗室から出て、雰囲気を変えよう。

さっさと作業を終えて、明るい庭先に出ると、クラウスの機嫌は別に悪くは無さそうだった。

ちようどうまい具合に昼時の片づけが終わったロザリアが、お茶にしようと誘いに来た。

「美味しいカボチャが手に入ったから、プリンにしてみたのよ」

「懐かしいですね、カボチャのプリン」クラウスは事も無げにロザリアを抱き上げる。

「初めて一緒にカボチャのプリンを食べた日の事、ちゃんと覚えているわ」ロザリアはクラウスの首に手を回し、いかにも大切でたま

らないと言うように、頬を寄せる。ここまで堂に入ったイチャつき振りは、見事なものだ。まあ、事情をまるで知らぬものには無邪気な兄妹の触れ合いに見えたりするのだろうが・・・

「さてさて、じゃあ、行こうね」マークはからかう気もそがれていた。

先に立って歩く二人の後姿を改めて見ると、クラウドの腕が当然のようにロザリアの尻をがっしり支え、さも自分のものだと言わんばかりに腰に手を回している。ロザリアの体は幼いながら媚を含み全身でクラウドにしなだれかかっているようにも見える。

「小さくても一人前にぐしょぐしょになるのかな」と、考えて、マークは自分でギョっとした。クラウドもロザリアも自分も思念を遮断する腕輪をしていることを確認して、ホッとする。

おやつのカボチャプリンをハリカも交えて4人で楽しく食べた後、久しぶりに、「手合わせが見たい」と言われてしまった。ハリカは一度も『ジルニトラ』と『パンテラ・レオ』の舞い踊る様を見た事が無いと言う。

「大層な見ものだ、町の人の噂ばかり聞きますが一度も自分で見た事が無いのがどうにも残念です」

そうまで言われてしまうと、マークの性分としては断れなくなってしまう。

「最近、クラウド君は腕を上げてるから、お手柔らかに頼む」

「私など、まだまだです。殿下の剣を見切るだけで精一杯ですから」

「見切られちゃうから、困るんだよ。そんな事ができる人は、僕の知る限りクラウド君だけだからね」

このごろのクラウドがどれ程強いのか、剣を取らせると良くわかる。マークの十八番である相手の機先を制する大胆な剣さばきを近頃は完全に身につけ、以前の「防ぎながら好機を待つ」という姿勢より、ずっと戦闘的で動きの切れが凄みを増している。

今日はいきなり鋭く切り込んできて、マークは防ぐのに躍りになった。動きがより早く、より強く、よりしなやかになっており、本当に厄介だ。

二本の聖剣が鋭い音を立てて打ち合う。

時折金の粉が舞い、虹が見える。

ほのかに爽やかな香りが立ち上り、白い花びらが舞い上がる。

そして、今回は巨大な獣の気配がして、そのほえる姿が揺らめいて見えた。

一方で黒い羽の生えた龍が羽ばたく姿が見える。

それぞれの聖剣が力を尽くして打ち合っているのだ。

五十合を越え、さらに打ち合う事、数合、強烈な閃光が走り、爆音が響いた。

気がつくとき、マークもクラウドも弾き飛ばされ、双方の剣は鞘に納まっていた。

「これは・・・一体？」

「聖剣同士が勝負をやめたんだろう」

「？」

「どちらかが命を失いかねないほどの勝負になった時、相性の良い聖剣同士の場合は勝負を拒否する事が有ると言う話は聞いたことがあるが、遭遇したのは僕も初めてだ」

聖剣の盟主とも頭とも呼ばれる『ジルニトラ』は、他の聖剣の動きを抑えることができると言う。そして、とりわけ『パンテラ・レオ』は『ジルニトラ』の意思に従うとされる。純粋な戦闘能力自体はしばしば『パンテラ・レオ』の方が上で有る場合も多いらしい。今日は、どうであったものか・・・マークとしては一切の手抜きをせず本気で勝負したのだが・・・クラウドは強い。だから『ジルニトラ』は特殊能力を発揮して、主を庇^{あるじ}ったのだろう。クラウド恐るべし・・・

クラウドの強さは「ロザリアを守りたい」と言う思いの強さ、純粋

さが齎^{もたら}した物だ。

聞けば、女神が最初にクラウドを見たとき、魔力は不十分で剣もさほど強くは無かったらしい。

「もう少し魔力さえあれば、夫となることも叶うのだが・・・惜しいの」と女神に言われた事が奮起を促し、ついにはロザリアの未来の夫となる運命を手にしたのだから、凄まじい執着と言っても良いだろう。

「クラウド、クラウド、何だかものすごかったけれど大丈夫だったの？」駆け寄るロザリアをクラウドは抱き上げて、何事か耳元で囁いている。「・・・え？やだあ・・・べ、別にいいんだけど」などと赤くなりながらロザリアが答えている所から、何だか推測はつく。『黒き宝玉の娘』を守るのがクラウドの運命付けられた役割だろうが、それに止まる事無く、誰よりもロザリアを求め想っている。

クラウドは又、例によってロザリアをしっかり抱きかかえ、宿へ向かう。その姿は宝玉を握り締めた伝説の霊獣に似ていなくも無い。霊獣から宝玉を奪おうとする物には恐ろしい死が待ち構えているとも言う。

「確かに、ロザリアちゃんは宝玉に違いないもんね。まさに『掌中の珠』ってわけだな」

ロザリアとクラウドの絆がいかなる魔法でも揺るがないほど強くなった時が、恐らく帝国との決戦の時にもなると思うが、後どのくらいの時間が有るのだろうか？。

「この分なら、ロザリアちゃんの体が大人になるのも、案外早いかもしれないな」

何せ、クラウドが強い思いを込めて日々愛で続けているのだから、結果が出るのは予想以上に早いかもしれないのだった。

第二十六章 掌中の珠（後書き）

都行きは、どうしましょうか

第二十七章 黒鈴蘭（前書き）

黒い鈴蘭は架空の花です。

第二十七章 黒鈴蘭

剣の手合わせが済んで、クラウドはホッとした。

最初はどうにか踏み込めたと思いきや、今日の摂政殿下はいつもより凄みが有った。

華麗で大胆不敵、まさに飛翔する黄金の龍と言う風情で、強く美しく、見るものを魅了する力に溢れ、まさに「王者の剣」だと思う。それにしても、それぞれの聖剣に宿るとされる聖獣たちの姿を垣間見る事になるとは思わなかった。それだけ自分も摂政殿下も本気を出していたという事なのだろう。

しばしば『剣聖』とも称えられる摂政殿下に勝てるとは思わないが、後れを取りたくないと思ってクラウドは日々精進してきた。これだけ剣の修行や魔法の習得に強い熱意を傾ける事ができたのは、それがロザリアを守るうえで必要だと思うからだ。クラウドの行動と正しいの全ての中心にロザリアがいる。

自分とロザリアの関係が当初の女神の予想を超えて深いものになったのは、何かそれなりの訳が有りそうだとクラウドが強く意識するようになったのは、以前ティボーとレオンハート公爵邸で『根本原理の図』と言う謎の多い絵図面を見た事がきっかけになっている。その後、女神にこの絵図面について尋ねたが、女神にも由来や意味がハッキリわからないらしい。近頃の女神は何処にいてもクラウドの思いにすぐに応じる。それだけ、クラウドの力が大きく育ったからなのだろうが、なぜ、そのような力の成長と増大がクラウドの身の上には起こりえるのかと言う点について、女神は答を持っていないと言うのだ。

実を言えば女神はかつて一度消滅の危機に瀕した事があって、その

折の原因は銀の龍と反応した器の嫉妬心・独占欲であつたらしい。その暴発した『銀の龍の器』が帝国の皇帝であつたのか或いは違つたのか、女神の記憶は混濁して具体的な事情を殆ど何も覚えていないと言う。

「御記憶が無いなら、どのような可能性をお考えですか？」と言うクラウドの問いに対して、

「あの絵図面の白き円はやはり黒い宝玉の支えであろうな。暴発した『銀の龍の器』たる者の激しい嫉妬或いは憎しみを受けたことが元で、『白き円』が何者か後世に伝える記録まで大半根絶やしにされたのであろう」

「銀の龍の魔力の所為で『白き円』の由来も働きも知る者がいなくなつたと言う事ですか」

「今も存在する銀の龍の所為と言うよりは、その時に銀の龍を宿していた『器』の想いが主な原因であろう。ユーグに宿る銀の龍には、恐らくあの昔の暴発の記憶は残っていない。器の及ぼす力は思いの他大きいのだ」その後、女神は「推測に過ぎぬが」と前置きしつつも興味深い事を教えてくれた。

「今逗留中の場所のそばに、年中黒鈴蘭の咲く場所があろう。あそこは、何代か前のピネ家ゆかりの騎士と黒き宝玉の娘の悲恋に関わりが有りそうじゃ」

「その凄まじかったかつての『銀の龍の器』の暴発と関係が深い事件ですか？」

「つい先ごろまで忘れていたのだがの。クラウドと話す事が重なる内に思い出したのだ」

確かにこの宿の裏手に、年中珍しい黒鈴蘭が咲いている場所がある。地球で咲く白い鈴蘭の花弁が漆黒になったと言う感じの花で、その根から貴重な香料が取れる。煎じて飲むとかなり強い媚薬になることでも知られている。

クラウドもロザリアも朝霧楼に滞在するようになった当初から、この黒鈴蘭の群れの辺りで、奇妙な気配を感じてはいた。危険は無さ

そうなのだが、誰かの暗く悲しい思念が感じ取れるのだ。

誰かの思念に似ていると、気になってならなかったのだが、それが他ならぬロザリアと自分の思念に似通っていると気がついたのは、つい最近の話だ。

「古の黒き宝玉の娘と、当時のピネ家の男が恋仲になり、『銀の龍の器』であった皇帝が激しく怒り妬んで暴発したと言う事でしようか？」

「しかと記憶はしておらぬがな。今は恐らくそうした事情だったのではないかと考えておる」

「確かめる方法はないのでしょうか？」

「クラウスとロザリアが力を合わせれば、或いは、と思う方法が有るには有るのじゃが……」

「成功の確率は余り高くないですか？」

「黒鈴蘭の咲いているあの場所へ二人で出かけて力を合わせれば、その場に残る思念の欠片から幾つかの忘れられた真実を突き止める手がかりが見つかるやもしれぬな」

「今までも暗い思念は感じ取っていましたが、近づきすぎて危険と言う事は無いでしょうか？」

「死霊の暗い思念の闇に囚われると言う事が一番の心配であろうか。今のそなた達ならば大丈夫なのではないかと思うが、用心に越したことは無い」

その夜、クラウスは女神に聞いた黒い宝玉の娘とピネ家の騎士の悲恋、そして黒鈴蘭の辺りで感じる残留思念についてロザリアに語った。

「私もとても気になっていたの。今夜のように月の明るい夜になると、あの黒鈴蘭は一際強く香ると言うわね。その事と、残留思念の集めやすさと関わりが有るのではないかしら……」

「今から出かけますか？」

「それが良いのではないかと私は思うけれど、どう？」

「一応、殿下に出かける事だけは伝えておきますか？」

「この部屋のドアノブにメッセージボードをかけて、行き先をお知らせしておけば十分ではないかしら」

「死霊と言っても出るのは多分前世のあなたと、私の先祖ですからね」

外は満月で、星は殆ど見えない。月明かりの中で、黒鈴蘭は花開き、芳香をあたり一面に漂わせていた。

クラウスは武装して剣を持ち油断無く目配りしていた。ふとロザリアは奇妙な感覚に引きずられ、足を止める。

「どうしました、ロザリア？」

「クラウス！クラウス！私を抱きしめて」ロザリアは涙をボロボロとこぼし、体を震わせている。

「クラウスが、いいえ、クラウスによく似た人が……」

「銀の龍に！……」

「爆殺されましたか？」

ロザリアは首をガクガクとさせて、クラウスの問いを肯定する。

その眼には今、惨たらしく破壊されたピネ家の騎士であった男の肉体が見えているのだろう。

「今度は、今度こそは大丈夫です。こうしてあなたと共に有る事を許されたのです。もう決して負けませんよ。だから、安心して下さい。だからもう、泣かないで。私の宝、私の希望」

クラウスはロザリアを強く抱きしめた。

知らず知らずクラウスの眼からも涙があふれ、激しい悲しみの気持ち心が心を満たしたかと思うと、次の瞬間には強烈な喜びが湧き上がるのだった。

「ああ。私は今『彼』の想いを受け止めたようです」

黒鈴蘭は、いっせいにその花卉を震わせ、息苦しいほどの芳香が夜のしじまを押し包む。

クラウドはその場に腰を下ろしロザリアを膝の上に抱きかかえた。そして互いに互いの唇を求め、幾度も幾度もキスを繰り返している。角度を変え方向を変えて、一向に止めようとしめない。長い長い間口付けを交わす事も許されなかった恋人同士の想いを受け止め、さらに互いが互いを思う気持ちが深まる。

「愛しています、私の宝」

「愛しているわ、私の支え」

恐らく生前二人は互いをそう呼んでいたのだ。美しく切ない想いが二人を満たす。

次第に空が白み始めると、二人を呼ぶ声が聞こえた

「ロザリアちゃん！クラウド君！大丈夫か？」

『闇を破り光をもたらす金の龍』、朝日を背に浴びて二人に向かって手を振る摂政殿下は、まさにそのような明るく陽気な波動をもたらす。

「徹夜になってしまいましたね」

「でも、来てよかったわよね」

二人は互いに微笑を交わし、仲良く揃って手を振って答えた。

「女神様におおよその所は伺ったけれど、ひょっとして、僕ってお邪魔だった？」

「いいえ、飛んでもありません。マーク兄様が明るい波動を齎して下さったおかげで、この場所を覆っていた暗く悲しい思念が完全に浄化されたように思います」

「ロザリアちゃん、ありがとう。でもクラウド君は何気に不機嫌じゃない？」

「いえ、決してそのような事は……」

「ふふふ、そうかあ？背中から漂う気配が怖いよ」

「申し訳ありません」

「二人とも夜を徹して、お取り込みだったから、まずは熱いお茶でも飲んで、朝食を食べてから寝たら？」

「いえ、それは余りにも……」

「クラウド君は頑丈だけど、ロザリアちゃんの睡眠不足はまずいだろう？」

「はい。それではお言葉に甘えて、今日は休ませて頂きます」

「そば粉のパンケーキ、結構旨いよ？ 僕の好みでベーコンエッグとリンゴを添えたけれど」

ハチミツをたっぷり添えたそば粉のパンケーキはマークの得意料理で、文句無く旨い。

この方は何をやらせてもつぼと言うものを心得ている。自分などは遠く及ばぬ所だとクラウドは思う。

「このベーコンエッグもとても美味しいです。マーク兄様がベーコンを仕上げて下さったから、他にも色々使えそうでとてもありがたいです」ロザリアも嬉しそうだ。

3人で朝食を食べ終わった所で、ハリカが起きて来た。

「まあ、皆様、おそくなりまして」ハリカは恐縮しているが、いつもの時間なのだ。

「いや、全然遅くないよ。この二人がちょっとばかり大事な取り込み事があったね、外で一晩中大変だったから、早めに朝食を取って貰ったんだ。今日は二人が一日、休んだって大丈夫だろう？」マークの言葉はいつも明るく陽気に響く。確かに言われて見れば鉄鉱山も七日に一度の休業日で、それにあわせて仲買人や商人の出入りも無い日なのだ。この「七日ごとの休業日」をオルトに普及させたのは、ほかならぬマークだ。

「ほら、僕は元がアメリカ人だからさ、週単位ってのが自然に感じるんだよ」

おかげでロザリアもクラウドも心置きなく自室にこもることが出来る。

「さて、朝風呂でもいかがです？」

「一緒に？」ロザリアは顔を赤らめた。

「嫌ですか？」

ロザリアは首を横に振る。

「では、参りましょう」

ロザリアがその姿を見たと言う自分の先祖は、自らの思いを貫徹な
いまま、非業の死を遂げたらしい。

自分の中に流れ込んできた想いは、自分のものと殆ど区別のつかない
ほど強く激しかった。

「今度こそは」絶対に失敗しない。

摂政殿下の謀が、いかなる物か薄々見当がつくようになってきた。

ロザリアと自分の「絆の強さ」が帯びる意味合いは日を追うごとに
重要性を増していると考えて良いだろう。でも、思うのだ。こうし
て日々暮らしを共にし、思いを重ねる事で、自分達の絆は確実に強
くなっているのだと。

ロザリアは嬉しそうにクラウスの手を握る。随分自分とは大きさが
違うが、この小さな手に幾度も救われた。

「いつまでも、こうやって、一緒に手をつないで生きたいですね」
クラウスは今ここに有る幸せに心から感謝するのであった。

第二十八章 恋の手ほどき（前書き）

後半はR15程度でしょうか？

古代ローマのオウィディウスと言う人の詩をネタに使ってます。

第二十八章 恋の手ほどき

「密事^{みそこと}をさらけ出そう。生ぬるくなった心を燃やしてやろう。浮気をほのめかして、青ざめさせてやろう。

聞きたがらないその耳に悪行を伝えてやろう。

逆上して髪を引きむしれ。頬を爪で引っかけ。

涙を流してにらみつけろ。恐ろしい眼で見つめるがいい。

泣き崩れる君を抱きとめてあげる。

泣きぬれた顔にキスをしよう。

共寝の和睦を受け入れるが良い」

マークは久しぶりにリ्यूートを爪弾き歌を歌った。

この歌はマークがハリカと出会ったばかりの頃、戯れに作った歌だが、今ではオルト中の妓楼で歌われるようになった。『恋の手ほどき』と言う帝政ローマ期の詩の一節をアレンジしただけなのだが、キタイの通人・訳知りとよばれる連中の間で酷く評判を呼び、この歌の流行がきっかけとなって「摂政殿下はお若いのに大した通人でいらっしやる」と言われるようになった。

だがしかし、「私は同時に二人の恋人を持つようお勧めする」とか「慰めをわが身に二つに用意していた人は以前から高き砦の勇者だったのだ」とか「たった一人の女に間違っただけだ君は、まずは今や新しい恋を見つけないといけない」とか、この古代ローマの詩人の言葉は、マークの価値観とはまるで噛み合わない。ハリカもイゼルも、それぞれにとっても大切で、用意した慰め、などという存在ではないのだ。たった一人の女にほれ込む事ができるクラウスは本当に羨ましい。

「まあ、懐かしいですわ」ハリカは、ふと遠い目をした。昔の事を

思い起こしているのかもしれない。

「君は僕の髪を引きむしったり、頬を引っかいたりしないよね」マークの真面目な口調にハリカは眼を見張った。一種沈痛な面持ちで、いつも陽気な彼には珍しい事だ。

「でもね。ハリカがそうしたくなったら、してくれて構わないんだよ」

「そんな事、出来ようはずがありません。でも、泣き崩れたら抱きとめて下さるのですよね？」

「君が望んでくれるのなら、いつだってね」

「では、今、キスして下さいますか？」

「喜んで」

マークの震える感情が伝わってくるような切ないキスに、ハリカの思っても掻き乱される。

「何か、お悩み事が有るのですか？」

「うん。僕が悪いんだ。……でもね、僕は悪い男だけど約束は守るよ。絶対に。其処は信用して欲しいかな。ちょっとあつかましくはあるんだけど……」

「おっしゃりにくいお悩みなのですね。でも、私の事で悩んで下さっている。……ならば、それで十分です」

「十分じゃない。少なくとも僕は僕が許せない」

「……もしかして、王家のお世継ぎの事でしょうか？王女様と御婚約の話でも御座いますか？」

「うん。国王陛下からお話は有った。君と子供の話をしたら、『次代のエスコバル公爵とすればよい』と仰せだった」

「では、この子は未来の公爵様ですか」

「うん。……ゴメンよ、ハリカ。本当に髪の毛を引きむしっても良いよ」

「まあ……あなたという方は……」ハリカはマークの胸に顔を埋めた。ハリカは自分を許してくれている。それがはっきりわかるだけに、やはりマークは自分が許せないのだった。

ロザリアとクラウスは湯殿を出て、しばらく庭で白いノイガーの花を見ていた。小さいけれど、清楚で愛らしい。地球では聖母にささげられたという伝説があるクリスマスローズと呼ぶ花のようだ。オルトでは女神の祝福を表す縁起の良い花とされている。寒さにも良く耐え、根は薬草にもなる。

「ロザリアは花よりもずっと愛らしい」クラウスが大真面目な口調で、ぼつりと言った。

近頃の彼は、自覚しているのかいないのかわからないが、その言葉や動きに華やぎと艶があつて、眼が離せないと感じるのだが、こんな恥ずかしい事を真顔で言うのだから始末が悪い。

すると、マークが歌う『恋の手ほどき』が聞こえてきた。

「殿下はあの曲を僅か12歳でお作りになったようですね。まさに超人的な方だ。……でも私は、あの歌のような心情は理解できませんし、したくも無いです。朴念仁でも野暮天でも一向に構わないと思ってますから」

「私も、わかりたくないわ」

「良かった。意見が合いましたね」クラウスは極自然にロザリアを抱き上げ、顔をまじまじと見つめた。

「クラウスが悪行を働くとしたら、原因はきっと私よね」

「そうだと思いますよ。フツ……一番最後の言葉だけは、私でも意味合いがわかりますが」

「まあ……」ロザリアは顔を真っ赤にする。

「では、部屋に戻りましょう。体を冷やしすぎたらいけませんから」

床に入ると二人は当然のように体を寄せ合った。

ロザリアはクラウスの寝巻きの前をはだけて、顔を突っ込んだ。

「ロザリア？」

「私ね、クラウスのこの香りが好きなの。お父様やお母様みたいに銀の龍の魔法でクラウスの事を忘れさせられたとしても、この香り

を覚えていれば、きっと思い出せるわ」

「たとえば、そのような事があっても、私がだけがこうしてあなたに触れていた事を、きっと思い出して下さいね」

「あの、記憶を捻じ曲げる魔法はとても強いから、もっともってクラウスの事をたくさん覚えなくてはいけない様な気がする」

「また体を洗う羽目になるかもしれませんが、あなたを思い切り可愛がりたいんです。良いですか？」

「眠る時間が無くなるかしら……」

「ロザリアは疲れたら眠ってしまって構いませんよ。ちゃんと後始末はしますから」

近頃はクラウスのそうした言葉一つにロザリアの体は敏感に反応するのだが、まだ乳房はまるで無いし、大人の体に近づくのはまだまだ先のようで、何だか悔しい。

「ロザリア、まだ先は長いですし、あせらなくて良いですよ。今のあなたには、今しか無い魅力もあるんです。私はあなたの事に関しては、何一つ見逃したくないのです」

いつものように、互いに唾液のやり取りを行うようなキスから始まり、クラウスは大きな手でまだささやかな乳首を撫でさすってやる。時折指で軽くつまんだり弾いたりすると、ロザリアの体温は上がり、下着の中はまたたくさん露を含む。

「きっと、大きくなったら、あなたの乳房は豊かに実るのでしょすが、私は今の平らな可愛らしい胸を決して忘れませんよ。小さいのに私の思いに懸命に応えようとしている。とても素敵ですよ」

こうした時の情欲にけぶるようなロザリアの表情もひどく魅力的で、ロザリアが大人になったらもはやこのような顔は見られないのだと思うと、今のこの一瞬がクラウスにはひどく貴重に感じられるのだ。「あなたは私の香りが好きだと言ってくれましたが、私は場所ごとに違うあなたの香り全部を覚えておきたいのです。わきの下が少し汗ばんだ時の香りをかぐと、あなたが少しは快感を感じ初めてくれていると嬉しくなります。へその辺りも、そして此処も、皆趣の違

う魅力的な香りで、毎日飽きる事はありません」

「嬉しいけれど、なんだか恥ずかしい」

「二人だけの秘密ですからね、照れなくてよいんです。気持ちが良かったら、どうか素直に教えてください」

「ねえ、クラウス、私もクラウスの体中の香りを知りたいの。ダメ？」

「もちろん構いませんが…」

「じゃあ、こんなキスはどうかしら？」

ロザリアはクラウスの広い胸をはだけさせると、頬を摺り寄せ、乳頭を銜え舌で転がした。もう一方は指で軽くつぶしたり揉んだりして刺激を与える。

「ロザリア！」

「あ、いけなかった？」

「いえ、余りに気持ちが良いすぎて驚きました。その……」

「思わず、下の方が強烈に反応してしまって……」

「ご、ごめんなさい」

「いえ、いいんです。ロザリアがとても上手で驚いただけですよ」

「そのうち、下のほうもキスして良いかしら？ 出来ればキスだけじゃなくてもっと色々したいけれど」

「それは……とても魅力的な提案ですね。でも、ロザリア、私にはまだ、ためらいがあるんですよ」

「そう言うもののなの？」

「そんな事をしていただいたら、きっとあなたのその可愛らしい顔を汚してしまうでしょう。そんなあなたの顔をまだ見る勇氣がありません」

「クラウスの体から出る物なら汚いとは思わないのに……」

「ロザリアがそう思って下さるのは嬉しいんです。でもね、あなたのその清らかな美しい顔を冒瀆するようで、私はやはり決心がつきません」

「何だか、色々と難しいのね……」

ロザリアが落胆してしまったのを見て、クラウドは切なくなった。

「では、キスではなく、まずは手で触れて頂く所からはじめませんか」

「いいの？」

「ええ。どうぞ優しくしてやって下さいね」

大きなクラウドの体の上にロザリアは馬乗りになり、難しい顔をして一心にクラウドのその部分を撫でさすったり握りこんだりする。

酷くつたなくて、快感をかき立てるには程遠いはずなのだが、大真面目なロザリアの

顔を見ていると、こんなのも悪くは無いと思われてくる。

ロザリアはロザリアで、クラウドの気持ちや思いを理解しながらも、実際に何をどうするとクラウドの快感や喜びにつなげる事ができるのか、具体的な答えが見つけれられず悩んでいた。

「私って、要らない事をしようとしたのかしら」

「そんな事はありません。何でも物事にはふさわしい時期と言う物も有りますし」

「大人になったら、クラウドの大事な所にキスしても良いのかしら？」

「ええ、たぶん」ふと、クラウドの脳裏に以前夢で遭遇した豊かな胸のロザリアが自分に施した巧みな口淫の様子がありありと思い浮かんだ。そのとたんに勃起してしまったのだが……

「お願いがあります」

「なあに？」

クラウドの申し出はロザリアのまるで考え付かなかった方法だったが、激しい律動に突き上げられながら

「まるで、大人になったときの予行練習みたい」で、悪くないのかもしれないと思った。

クラウドはクラウドで「ぐしょぐしょになる」事をのぞけば、ロザリアの体も損なわず、自分も楽しめる良い方法なのに、ついさつき

まで、まるで思いつかなかった自分の頭の固さに苦笑していた。

なかなか、こうした問題はデリケートで誰にとっても厄介な物なのだろう。

あの、摂政殿下ですら正解を見つけられず悩むのだから……。

クラウドは『恋の手ほどき』を一番必要としているのは、ひょっとしてあの歌を作った殿下自身なのかもしれないと思に至るのだった。

第二十九章 キタイの経済学

マークは雄弁だ。

難解な概念や新しい思想も、聞く者が理解しやすいよう、実に見事に解説する。

どんな人間でも思わず引きこまれてしまうような魅力にあふれている。

クラウスにとって、まるでなじみの無い異界の進んだ社会制度や科学も、なぜ其れが今オルトに必要なのか、わかりやすく教えてくれる。

今日は、マークがロザリアとクラウスに「ハリカには、王家の後継問題がらみで、僕とイゼルの結婚も有りえるって伝えておいた」と報告した事がきっかけとなって、人身売買の撲滅や、女性の地位向上といった話になった。

マークがキタイ国摂政として政治的な活動が始めるまで、このオルトと言う世界には「国民」とか「基本的人権」とか「公共の福祉」などと言う概念はまるで存在しなかった。神に近いとされる貴族・王族・皇族といった支配層が無知蒙昧な民を導き、民は支配者の言うままに年貢を納め、労働する……そんな原始的な社会構造しか存在しなかったのだ。

嘗ては、奴隷が当たり前のように存在し、貿易も商売も略奪行為や物々交換と大差ないレベルだった。

民を「基本的人権を持った国民」とみなし、初等教育5年間のみとは言え義務教育を実施して国力を高める、などという政策はマークがはじめるまで誰も考え付かなかった。役人の採用に試験制度を導入し、身分に関係無く人材を広く求めるようになったのもマークの

政策である。不況対策などの金融政策を行ったのも無論マークが初めてだ。

「サミュエルソン先生の『経済学』をどうにか理解できた程度のレベルなんだけどさ」

マークは記憶していた『経済学』のテキストの内容をキタイで出版し、役人を養成する大学では必修項目とさせた。同時に、近代的な商法や法体系の概念もかなり定着させた。

「サミュエルソン先生って、マーク兄様のいらっしゃったMITの高名な先生ですね」

「大学者だね。ああいう方がいらっしゃる場所で学べて、僕は幸せだよ。もっとも経済学は全くの専門外なんだがね。それでも先生の御本がこんな所で大いに役に立ってるなんて、先生もびっくりなさるだろう」

民からの年貢は取り立てられるだけ取り立てればよい、などと考える馬鹿な領主はもうキタイでは存在自体許されなくなって、状況はかなりマシにはなっている。初めて減税を行った時の貴族たちとの摩擦の大きさを考えると隔世の感がある。

「少なくとも、餓死者はここ数年殆ど出てないはずだよね」

今、キタイの国民は大半が文字を読み書き出来るし、四則演算もごく当たり前に出来るようになった。このことで国民自身が考え、自らの人生を決める事が可能になってきた。

「早くハリカみたいに親に売られちゃう子供を無くしたいんだけどね」

まだ、女の子の社会的な地位は男の子よりも低く、弟や兄の学費のために姉・妹を売り飛ばすと言う事も珍しくない。まあ、嘗ては男

の子も学校で学ぶ事はめったになかったのだから、今は、進歩のた
めの途中の段階と言える事は言えるのだが……

「だからって、割を食うのがいつも女の子って言う状況は改善しな
くちゃ」

女の子だって社会的な活動を行い、立派に自立できるような国にし
たいのだが、人々の意識に深く根付いた男尊女卑の観念はなかなか
改まらない。

「女神様は女なのを皆忘れちゃいないか？」

オルト創生の神話に真っ先に登場するのが女神であるにもかかわら
ず、なぜ今のような有様になったのか？

女神が言う所の「不手際」と異界からオルトに來た金銀の龍、そし
てオルト中の支配者の先祖とみなされる帝国の開祖、これらが関係
しているのかもしれない。

女神の「不手際」とは一体何か？ 相対的な女神の地位の低下が、人
間の女の社会的な地位に反映されているのか？ マークにはいまだに
良くわからない。

「女性の社会企業家がもっと育ってくれないと、話が進まないよな」

ここで、女神の申し子のロザリアにもっと力を貸して欲しい所だが、
隣国の皇太子であるユークにロザリアの所在を今知られるのはまず
い。名前を出さないような格好で、何か女の子のための自立を手助
けする活動に参加してもらえないだろうか……というのが、ロザリ
アに対するマークの希望だった。

「女の人は親の財産を相続できない場合が殆どですよ。それに離

婚するときには元の夫からは何ももらえないし、オルトには慰謝料と言う制度も無いし、社会的な信用がないからお金もめったに借りられませんでしょう？」

「確かにその通りだよ。女の人がまとまったお金を獲ようとする、身売りでもするしか方法が無い」

「元手が用意できなければ、なかなか商売も始められませんよね」

「確かに。ロザリアちゃんみたいに商売の元手が最初から有る女の人、人は珍しい」

「ですから、マーク兄様のお力で、真面目で有望な女の方にごく低い金利でお金を貸してあげる機関を立ち上げるって事は出来ませんか？」

「ああ！それは良いアイデアだ」

「貸付の審査基準はどのようにするのが現実的で効率がよいのか、私にはわからないんですけれどね」

「後は、どんな商売だったら女の人でも始められそうかって所も、見極めておいたほうが良さそうだ」

「私はせいぜい、食べる物・着る物に関係した商売か、家事や育児に関係あるサービス業のような物ぐらいしか思いつきません」

「オルトの現実には確かにそんな所だろうな」

「後は協同組合とか、異業種間の交流とか、兄様が積極的にまとめられたらどうでしょう？」

「いいアイデアだな！協同組合は僕もちょっと考えて、農村や漁村のおかみさんたちで生活改善のグループ活動が活発になるような後押しをしたらどうかって思ったんだよね。異業種間の交流の方は、僕以外の出来れば女の人の視線でキタイ各地の有望な人材を見つけ出して、ネットワークを作るほうが良いような気がする。ロザリアちゃんが良い人をスカウトする気、無い？」

「私がですか？」

「ユークとの最終決着までは、まだしばらく有りそうだ。ロザリアちゃんは何と言ってもオルト初の女性企業家で帝国での商売の経験

もあるから、眼の付け所が並の人間とは違うよ。それに、そうした人たちのネットワークがまたロザリアちゃんが帝国に戻って商売するときにも役に立つと思わないか？」

「女の子が売られちゃうって話は、地方よりもブルサの貧民窟の方がずっと多いって、この人に聞いたんですけど、実際どうなのかご存知ですか？」

「ああ……クシャダスの事か。あそこの場合、事情が特殊なんだ。差別問題が絡んでいる」

「差別って、民族的に違う人が多いのですか？」

「同じキタイ人だけど『裏切り者の末裔』と言われてるんだ。いまだにあそこの人たちは忌み嫌われている。でも、その故事来歴は誰も覚えちゃいない。僕も以前興味があって、クシャダスの出来上がつたいきさつを調べたんだが……わからないんだ。これが」

「記録も無いのですか？」

「全然無い。キタイの王室が保管していた古文書の記録が一番古いだろうけれど『クシャダスの裏切り者どもに呪いあれ』って言葉しかないもん」マークもお手上げらしい。

「銀の龍の魔法の暴発と言う事は無いですか？ブルサは古くは帝国領内でしたから」クラウスが言うと、マークは眼を輝かせた。

「クラウス君、其れだよ。きっと其れだ！銀の龍がらみなら、あの異様なまでの記録の無さも説明がつく」

「いや、ふと思いついただけのことです」

「年代的にも辻褄が合うんだよ。君達に渡したあの古文書に出てくる皇帝だけど、今となっては宿した龍の色すらも解からないんだが、ブルサが帝国の版図から外れたのはあの皇帝の死後すぐの可能性が高い。5年後に、皇太子が即位するまでの帝国の記録はすっぽり抜け落ちていくわけだし、その混乱振りからすると銀の龍だったのかもね」

「それにしても、どうせ誰も覚えていないのに、差別だけは残るって、困りますね」

「ひょっとして、銀の龍の呪いかもね。肝心の事は忘れるのに、悪い感情だけが生き残るんだから…」

「自分よりも更に貧しい差別されている人を見て、自分の方がまだマシだと思いたがる人間は多いんじゃないんでしょうか？」クラウドスは難しい顔で言った。

「ああ、確かに、クラウドスの言う通りだと思うわ」

「なるほど、そういう心理は働くよね。そしてその差別を利用して『あの連中よりは楽なんだから』とか何とか言ってまた年貢を搾り取るのに利用するとか、多分あったはずだよ」

「マーク兄様、そのクシャダスの差別と貧困の問題ですけど、銀の龍の呪いが関係しているなら、私達も色々調べる必要があるかもしれないですね」

「其れはそうなんだが……治安がひどく悪いし、不衛生だ。ロザリアちゃんも調査に入って、何か危険な事に巻き込まれたら困るし、別のものに調べさせるよ」

「でも、龍の呪いが及ばない人間って、クラウドスと私ぐらいしか居ないのでしょう？」

「うーん、其れはそうなんだが」

「ロザリア、お気持ちは解かりますが、余りに危険な事はやはり止めておきましょう」

「何かクシャダスの女の子の自立の役に立つことが出来たら、それがきっかけになって、問題の解決に近づけるかもしれないって気がするんですけれど」

「じゃあさ、無料の給食サービス付きの小学校をクシャダスの近所に作って、その先生とかやってみる？」

「お昼ごはんがタダで食べられるなら、来てくれる人は居ますよね」
「年齢制限無しで、文字の読み書きと計算を教えるって言うのがいいかな」

「ロザリアがそのような危険な場所で働くのは、私は反対です」

「クラウドス君の心配は尤もだ。じゃあこうしよう」

マークの提案はこうだった。

まず、クシャダスに給食を食べさせる完全に無料の学校を作る。そこでは読み書きと計算を教え、その学校である程度の良い成績を取った生徒をロザリアの監督する店で雇い入れる。その店では、キタイ各地の女性が生産しているものから、選りすぐった品物を扱う。その品物を買うときは仲買人を通さず直接ロザリアの店が適正な価格で買い取る。

「ふうん。それなら、大丈夫かもしれませんね」

「まずは、手近なアルビ周辺で、何か作ったり栽培したりしているような女の人を探してみたらどう？」

「ある程度品物が揃ったら、クシャダスの子達を雇えるお店に置くのが良いでしょうか？」

それでも、やはり実際にクシャダスに行って、きちんと調べる必要があると、ロザリアは思うのだった。

第三十章 焼餅焼き（前書き）

アルビを離れる方向に話が運びます。
焼餅と言うのは厄介な感情ですよね。

第三十章 焼餅焼き

銀の龍の魔法の暴発と、キタイ最大の貧民窟クシャダスが出来上がった経緯がどうやら密接に関連していると言うクラウスの指摘とマークの話は、ロザリアに取って、衝撃だった。

「だって、これからクラウスと私の間に生まれる女の子が新しい銀の龍の器になって、マーク兄様と結婚するって言う話が本当なら、自分の娘が魔法を暴発させちゃったりしないためにはどうすれば良いのか、未来の母親としては知っておきたいじゃない？」

それにしても、マーク兄様の「つがい」がクラウスと自分の娘なんて、気の長い話だ。確かに兄様も自分たちも不老長寿であるならば、人間の時間の流れとは分けて考えるべきなのだろう。でも、母親より18歳年上の男性と娘が結婚って、やはり随分奇妙に感じる。オルトの歴史を見る限り、いつも暴発しているのは銀の龍で、陽気な金の龍に比べて色々と厄介そうだ。

銀の龍の器として生まれると言う自分たちの娘が、焼餅焼きで難しい性格の女の子だったりしたら……

「ロザリア、やはり今回クシャダスの件は見送りましょう」

「クラウス君の心配ももっともだから、あらかじめ僕のほうで幾つか打てる手は打ってから、また改めてお願いすることにする。それで良い？」

「銀の龍っていつも随分人騒がせな事ばかりやってしまうようだけど、大抵の場合原因は焼餅なのかしら？」

「ロザリアちゃんの娘は銀の龍の器になりそうだから、気になるよね」

「小さな女の子で何の分別も無い内から、爆殺みたいな物騒な魔法

が使えたりするのって、相当困った事になりそうだと思うんです」
「確かに、小さな女の子に爆殺の能力が備わっているのは、厄介だな」

「そのようなことは考えても見ませんでした」

「私がつつと先回りしすぎで、クラウスが普通なのよ。きつと」

「でも、先日ロザリアが見たヴィジョン通りなら、私に良く似たピネ家の先祖は爆殺で命を落としたようですから、私ももっと色々考えたほうが良さそうです」

「問題は見えてきたから、あらかじめ出来そうな事は考えるとしても、考えてもどうにもならない事まで考えるのは止めておこう」

「そうですね。マーク兄様のおっしゃるのも、もっともです」

「銀の龍がらみの件は色々手間取りそうだから、まずは純粋に貧困対策で片付きそうな話から進めてゆくよ」

「私もそれがよろしいかと思います」

クラウスはクラウスなりに銀の龍の問題の厄介さを意識したようだ。

貧しさから抜け出すために、学問が必要なのは確かだが、自分たちで自分たちの生活を改善していこうと言う意識を盛り上げる事が何より大切だとマークは言う。

「エスコバル領内だけで試験的に村落会議を立ち上げて5年になるんだけど、どうにか機能しているようだ」

「人民公社みたいなものですか？」

「無論参考にしたけれど、共産主義的な集団所有って難しいんだよね。インドやネパールのパンチャヤット制を参考に、5人程度の村の代表を直接選挙で選んで、身近で出来る事から着実にやってゆくことにしたんだけどね。生活改善の方法に関しては日本の二宮金次郎や大原幽学の思想や業績が参考になったよ。キタイの村でも実行可能なプランじゃなくちゃ意味ないからね」

「おかみさんたちの生活改善のグループの後押しもしなくちゃいけませんね」

「その為にも村落会議には必ず女性メンバーを一人入れるようにしてる。これもインドのパクリだね」

「その女性はちゃんと発言できているんでしょうか？」

「なるべく女性の間で人望があって、村の男にも気後れせずに意見を言えそうな人が選ばれるようにしたけどね。共同水場の管理とか次の年の種粃や種芋の管理とか、それなりに実績を上げた人は居るらしい」

「日本の農村や漁村の女の人たちがやってる生活改善グループみたいに地元の特産品を加工して、付加価値をつけて売り出す活動も軌道に乗せたいですね」

「或る山村の乳製品と、漁村の魚の加工品で気になるものがあるんだけどさ、一緒に見に行かないかい？」

「いいですね、ぜひ！」

「それはどういった場所でしょうか？」 クラウスは心配そうにする。

「ゾル山のなだらかな斜面で放牧を行っているボルと、魚の干物加工が盛んな漁村トラブゾンだよ。どっちものんびりした素朴な村だし、犯罪もめったに起こらない場所だ。ボルもトラブゾンも、このアルビから馬で一日って感じかな。泊りがけになるね」

「兄様はどちらも出かけられた事があるんですか？」

「通りがかりに昼食を食べた程度だよ。どっちの村も、それぞれ、宿屋兼食堂って一軒しかないんだ。素朴で田舎臭くはあるけれど、出された料理の素材と味は悪くは無かった。まあ、色々と改善の余地はありそうなんだけだね。最悪、宿屋が手当てできなければ『特別通行滞在許可証』を村長に示せば、如何にかしてくれるだろう。実際、別の村でそういう手を使った事はあるんだが、多分大丈夫じゃないかと思うよ」

「ロザリアは女の子ですから、何かと心配で」

「君と僕、オルトを代表する剣豪二人が護衛するんだ。大丈夫さ。それに、ロザリアちゃんはクラウス君の魔法の師匠だろう？ なんか僕も知らない色々な魔法がありそうじゃないか」

「確かに、おっしゃる通りかもしれませんが……」

「おかみさんたちの起業の件も有りますから、やはり私も行きたいです」

貧民窟クシヤダスは、銀の龍関係の問題を抜きにしても、前もっての準備や人材・資源の投入が必要なことは目に見えているので、ロザリアの訪問はとりあえずは先送りとした。それだけに、すぐに活動に着手できそうな村を訪問することをロザリアも強く願っているのだろう。マークの見る所、農村漁村の特産品の商品開発と販売に関しては、ロザリアほどの確かな意見を述べられる者は他にいない。

そもそも、オルトの農村や漁村の人間には、販売戦略とかマーケティングと言う発想自体存在しない。イメージ戦略やブランドの確立なんて、口で説明しても伝わらないだろう。実際にレオンハートの蜂蜜と、その関連商品の開発から販売まで一貫して行った実績の有るロザリアの経験は貴重だ。

「ロザリアちゃんなら、おかみさんたちに可愛がられるだろうし、料理にも詳しいから、きっと意見も取り入れてもらいやすいと思うよ」

クラウドは無言だ。危険があったら困るという事なのだろうが、行き先がボルとトラブゾンならば杞憂に過ぎないだろうとマークは思う。

「クラウド君、そんな難しい顔しない」

「心配しなくちゃいけない危険って、そんなに無いと思うけれど、クラウドは心配？」

「前もっての根回しや連絡も無しでは、野宿する羽目になりませんか？」

「村総出で作業でもしていたら、絶対無いとは言えないけどさ。綺麗な星空を見て野宿も乙じゃないか」

「私も平気ですが、ロザリアが……」

「私は、クラウドが隣にいてくれたら全然平気よ」

「ロザリア……」

ロザリアとクラウドの仲がより一層親密になることが、オルトのためにも、自分にふさわしい「つがい」が生まれるためにも必要なのだともマークも十分承知している。でも、どこかに本来は自分にも有ったロザリアに子を産んでもらう権利を、自発的には有ったが、やむなくクラウドに明け渡したと言う意識が働くようで、余りにも幸せそうなクラウドを見ると、どうしても、からかいたくなる。

「これって、何気に焼餅焼きだよな」マークも自覚はしているのだ。「でも、デレデレと甘ったるい表情を見せ付けられると、ちょっとばかり癪に障るよ」

そんな自分を馬鹿だとも思うが、つい、度の過ぎた、からかいの言葉が出てしまったりする。

ロザリアとクラウドに会う以前は、自分の中に嫉妬の感情を見出す事がまるで無かっただけに、マークはこれまで知らなかった自分の一面に少々困惑もしている。

今まではどんな女とも「来る者拒まず去る者追わず」と言う基本スタンスで付き合ってきた。

考えてみればロザリアとクラウドに会ってからハリカやイゼルとの仲も急に進展しだった。

自分にも特別な相手が欲しいと言う欲求が生まれた所為なのだろうか？

マークにもどうも良くわからない。

話し合いが済み、予定が決まった所でロザリアは厨房に戻り、マークとクラウドに茶を淹れ直してくれた。

「これ、さっき焼けたクッキーです。じゃあ、私は明日の荷造りをちよっとしてきます」

ロザリアは本当にきびきびと良く働き、見ていて気分が良い。それにしても、最近のロザリアは「美少女」から「そそる美少女」になったとマークは感じている。

クラウドとロザリアは毎晩どの程度「気を巡らせて」いるのだろうか？最近はまだピンクのハートが飛び交う新婚夫婦のノリだが……

「まだだ。クラウド君、デレデレじゃないか。やっぱり、そうなのか？」

マークは好奇心を抑えられなくなって、つい、言ってしまう。

「クラウド君、なんかすつきりしてるね、近頃。ね、あれかい？やっぱり、昨夜は素股^{すまた}？」

「うっ……」クラウドは飲んでいた茶を詰まらせた。

「あ、ごめんよ」

「殿下、急に何をおっしゃるんですか」

「ハハッ、さては凶星だね」

やっぱりそうかと、納得しつつも、マークは冷静ではいられなかった。

「おい、七歳児だぞ？いいのか？ああ、いいんだけどな」

金の龍に言わせれば「秘儀」だから、一向に構わないのだろうか、マークはやはりあれこれ考えてしまう。

「（お前の「つがい」を生み出すためにも、あの二人の秘儀は重要なのだぞ）」

「（言われなくても解かってるって）」

「（それにしても、お前の気の乱れ方は変だ）」

金の龍にまで指摘されるほど動揺しているらしい。こんな風で、あの二人と一緒に旅が出来るのか、正直な話、ちよっとばかり、マー

クは気が重い。

第三十一章 ゾルル山の麓（前書き）

ロザリアにもふさわしい剣が見つかったようです。

第三十一章 ゾルル山の麓

地球人マーク・ゴールド的な言い方をすれば、ゾルル山の麓一帯はヨーロッパアルプスと気候や土壌の条件が似通っているが、ゾルル山そのものの高さはせいぜいが3000メートル程度で、その為か冬の冷えこみもスイスやオーストリアの山村よりきつくは無い。南側の比較的なだらかな斜面でヤギと牛の放牧を行い、そのほかの農産物の生産は余り振るわない。と言った所だろうか。

ゾルル山自体は神話や創世伝説と関連付けられる事は余り無いが、この山麓のどこかに帝国開祖の協力者であった女性戦士が晩年隠棲し、彼女の死と共に愛用していた聖剣が姿を消したと言う伝説がある。彼女は終生夫を持たなかったが、息子を一人生んだ。その息子はこの地域を開拓してボルの村を作ったとされる。

「どうやら、ここの村長はその女性戦士エミーネのただ一人の息子イエテルの直系の子孫らしい」

「そのような人なのにずっと農民として、暮らしてきたのですか？」

「エミーネの遺言らしいんだ。『畑を耕し、牛を飼い、ボルの村を守れ』って」

「ずっと行方不明の聖剣はどうなっちゃったんでしょう？」

「どうやら『ふさわしき戦乙女いくさおとめの元に再び現れ、共に戦わん』と言う言葉が伝わってるから、使い手は女の人って事に決まってるようなんだ。それまで、一体どこに隠れているのか誰にもわかんないと言う事らしい。もうずっと世に出てこないんで、今ではその聖剣チエックの存在自体、事実であったのかどうか疑われているんだ」

「殿下のジルニトラが他の聖剣の盟主であるなら、誘われて出てくると言う事はないですか？」

「僕もそれは考えたよ。でも、チエックを愛用したエミーネは皇帝との間に何がしかの軋轢があって、貴族社会や宮廷と縁を切った

ようだし、チチェック自体『戦乙女』が愛用すべき剣だしね。それに……」

「他にも何か有るのですか」ロザリアも強い興味を感じているようだ。

「一人息子の父はパンテラ・レオの使い手だったバラムだと言う言い伝えも有る」

「ならば、レオンハート家とも縁が有るのですね」

「前回、僕が一人でここに来たときはチチェックらしい波動はまるで感じられなかった。でも……」

「乙女とパンテラ・レオが揃えば事態は変わるかも知れないということですね」

「その通りだよ、クラウド君。ロザリアちゃんにもふさわしい剣が有るんじゃないかと僕は思う」

「チチェックが現れると言う事は、ロザリアが『ふさわしき戦乙女』に認定されてしまうわけで、私としては複雑です」

「ロザリアちゃんが、危険な戦いを強いられるのではないかと心配かい？」

「どの道戦う運命にあるならば、聖剣の力は大きな助けになるのでしょうが」

「あれ？あの音は何かしら？」

街道に面した緩やかな斜面の上のほうから、何か地響きが聞こえてくる。

「牛だ！群れが暴走している。逃げよう」

「待ってください」ロザリアは馬を下りた。

「ロザリア！」

「大丈夫よ、クラウド」ロザリアは大きく手を広げると、暴走する牛の群れに向かって叫んだ。

「スリプル！」そのとたん、群れの牛の歩みが止まり、体を伏せたり転がったりした。

「あれ？一体牛達はどうしちゃったんだ？」

「眠っているはずです」

「初めて見たよ。リアルなスリプル。FFかと思っちゃった」

「いや、本当にFFなんです。京子さんの趣味でして」

「いいなあ！じゃあさあ、ヘイストとかスロウも有り？」地球にいた頃は日本製のRPGで良く遊んだと言うマークは目をきらきらさせる。

「有りますよ」

「じゃあ、召喚獣は？」

「どうも呼び出せません。私の魔法のレベルの問題なのか、そうじゃないのかわかりませんが」

「クラウス君もこんな感じ？」

「私が使える魔法は余り多くありません。ヘイストとスロウはつい最近習得しましたが」

そうこうする内に、牛達は目を覚まし、ボンヤリ地面に臥せっている物、立って草を食む物、色々だが、暴走の危険性は去ったようだ。「おーい、旅の人たち、大丈夫でしたか？」手を打ち振り、黒い犬を連れた男が斜面を降りて来た。

「凄い勢いで牛が押し寄せて慌てたけれど、何だか急に止まりましたよ」マークはやってきた男に向かって、にこやかに答える。

「（魔法かける瞬間は目撃されてないと思うけど、用心しておこう）」

「（確かにそれが無難でしょうね）」

「（交渉役は兄様におまかせします）」

こういう場合、3人揃って『心話』^{しんわ}が使えるのは便利だ。

「いきなり牛が全部ものすごい勢いで駆け出したんで、驚いちゃったが、それがまた、何で急に止まったのかねえ」

「何か牛が脅えるような音とか気配でもありましたか？」

「この、クロの奴が普通じゃないけたたましい吼え方をしたんですね、俺には理由がわからない。そうこうする内に牛が一斉に走り出したんです。人の目に見えねえ化け物でも居るんだろうか？」

「化け物ですか」

「そうでもなければ、いつもは静かなクロや牛達の騒ぎようは説明がつかないです。上の牧場に戻っても大丈夫なんだろうか……なんとも心ぼそいなあ。お前様方、いい馬に乗りなさって剣をお持ちです。ね。ちよつとした化け物退治の腕前ぐらい、お持ちなんじゃありませんか？」

「化け物と決まったわけじゃないでしょうけれど、ご一緒しましょうか？」

「（何かあるのは確かだけど、化け物だろうかね？）」

「（行きますか？）」

「（クラウド君、どうする？）」

「（行かねばいけない状況みたいですね。ご一緒します）」

「あれまあ、ありがとうございます。馬連れでいらっしゃるから、この道から牧場へ参りましょう」

マークとクラウドはそれぞれ馬を引き、ロザリアはクラウドの引く馬に乗っている。

男は年の頃は30代後半から40歳といった所か。がっしりした体つきで灰色の髪に灰色の目、そして灰色の短いあごひげが特徴的だ。つれている黒い犬は大きな毛糸だまのようなむくむくした感じの毛並みだ。

主人を護衛するように、足並みをそろえて歩く。

牛達は今はノンビリと斜面で寝そべったり、草を食んだりして、落ち着いている。

しばらく、坂になった道を上ってゆくと、二本の聖剣が響きあいはいじめた。

「何だろ、この奇妙な音、さっき、牛達が暴走したときの音と似てますが」男は首をひねった。

「（と言う事は、聖剣が近くに存在するって事だよな）」

「（やはりチチェックでしょうか）」

「（何だか色々な花の香りがしませんか？）」ロザリアは不思議に

思った。

やがて、牧場にたどり着くと、音の響きはもっと強くなっている。

「おっかしいな、今の時期、花なんて咲いてないはずなのに春の花盛りのような香りがする……」

バーン！と大きな音がして、いきなり男の目の前に落ちてきた細長い木の箱があった。

「あれま、蔵に置いてあった『戦乙女の箱』が、なんでここに落ちて来るんだか」と、男は驚いている。

「これは、お宅の蔵にあった箱ですか」マークも驚いている。

「うちのご先祖から守り伝えてきた宝物の箱なんですが、誰も空けられない謎の箱なんです」

「では、箱の中身もあなたはご存じないのですか」

「口伝では『戦乙女』となる女性しか開けられない箱だと言います」

「聖剣チチュックが入っているのかな」

「あれまあ、良くご存知で。確かにそんな言い伝えもありますが、箱が開かないんで確かめようが無いです」

「なんか音が大きくなってきたね」

「その箱、私に触らせてください」とロザリアが言うのと、

「お嬢さんなら『戦乙女』になれるそうですね。どうぞ。ダメもとで明けてみて下さい」

持ち主である男の許可が出たので、ロザリアは箱の蓋を開けた。

「うわあ！開きましたか、見た事もない綺麗な剣ですね」男は驚いている。

音の響きは更に大きくなり、箱から剣が勝手に飛び出し宙を舞うと、ロザリアの膝の上にぽとりと落ちた。

「剣を抜いてみますね」真っ白い鞘から剣を抜くと、薄桃色に刀身が光る。一払いすると、薄桃色の光がこぼれ色々な種類の花の花びらが舞い落ちる。

「驚きましたよ、お嬢さん、その剣はお嬢さんがお持ちになるべき

物のようです。申し遅れました。俺は、この村の村長のゼキと言います」

「僕は聖剣ジルニトラの主・マークです。こちらは聖剣パンテラ・レオの主・クラウス、そして可愛いこの子はクラウスの妹のロザリアです」

「おお！さようございましたか！聖剣の主の方とお会いできるなんて光栄です。この剣は聖剣チエックだと言い伝えられて来ましたが、あの箱から出てきませんので、姿を見たのは俺も初めてです。そういえばアルビに素晴らしい剣の使い手がお二人逗留されていると噂に聞いてましたが、あなた方でしたか」

ゼキは非常に喜び、是非自宅に逗留するように、と三人を誘った。

「チエックの新しい主となられるお嬢さんに、我が先祖からの口伝もお伝えしたいですし」と聞かされれば、これはもうゼキの家に泊めてもらう他は無さそうだ。

三人は馬を預けると、ひとまず『広間』に通されて、茶とチーズでもてなされた。

ゼキの家は、普通のこの辺りの家よりはかなり大きい。宿屋でも出来そうな広さがある。だが、聖剣の主で帝国開祖の協力者であった人物の直系の子孫の家とすれば、随分質素で小さいとも言える。

一階は村落会議を開く時にも使うと言うこの『広間』と台所・洗濯場・浴室・手洗い、家族が使う居間、食料庫・物置と言う感じで、二階は家族それぞれが使う寝室と客用寝室が二つと言う間取りのようだ。

「なにぶん山の中ですので、お茶うけも自家製のチーズぐらいしかありませんが」と言われた。

少し塩気が強いが、しっかりした旨みが有り芳醇な味わいが広がる。「とても美味しいチーズですね。色々お料理にもお菓子にも使えそうに思いますが、普段はこうやって召し上がるんですか？」ロザリ

アはあれこれメニューを思い浮かべる。

「せいぜい、茹でたての芋に添えるか、パンに乗せるぐらいしか思いつきませんが、色々出来そうですか？」

「チーズのグラタンや焼き菓子にも色々使えそうに思います」

「このチーズだよ、ロザリアちゃん。僕が君に紹介したかったのは」マークはゼキに向かって、今回3人でこの村に来た目的について説明を始めた。

「すると、このロザリアちゃんはあの朝霧楼の食堂を切り盛りされているのですか」

「随分色々と美味しい料理をつくれるから、ここのチーズをもっと売り出すにあたっても良い智恵を発揮してもらえるんじゃないかと思ひましてね」

「あなた方御三人は、それぞれ聖剣の主でいらっしゃるようだし、何か並みの人間とは違う気品をお持ちだ。御身分を隠しての御視察ですか」

「まあ、一応こういうものを持っています。また必要な時期が来たら、色々細かい話はしますよ」

そう言って、マークは自分とクラウドがいつも携行している『特別通行滞在許可証』をゼキに示した。

第三十二章 チーズと卵（前書き）

美味しいチーズと卵がこれからの話に繋がってゆきそう。

第三十二章 チーズと卵

聖剣チチェックに関する先祖の覚書とか口伝を書きとめた物が、なぜかごっそり見当たらないらしい。

「おかしいな、きちんと箱に封をして蔵の棚に置いておいたはずなのに、その箱が…」

ゼキは不審でならないようだ。

「チチェックの意思とか、力が影響してるんじゃないか？」マークはそう指摘した。

「新たな主であるロザリアちゃんに、この土地に滞在して馴染んで欲しいと願っているとかね」

「はああ……」ゼキにとっては考えてもみなかった事の様だ。

「それに、これは内密に願いたいけれど、ロザリアちゃんもクラウドス君もバラムの末裔に当たる」

「そうなんですか！それは、ウチの先祖とは浅からぬ因縁がある血筋でいらっしやると言う事ですね」

「だからゼキさんの御先祖の魂の影響か、チチェックの力かはわからないが、その口伝を知る以前にロザリアちゃんに、ここボルの村でやって欲しい事が有るんじゃないのかな？」

「自分で蔵を飛び出して新しいご主人の所に姿を現すぐらいだから、そう言う事になるんでしょうね」

そう言うわけで、チチェックの謎は、とりあえず、まだ当分謎のままになりそうだ。

考えても仕方の無いことは後回しにして、出来ることからやるしかない。まずはボル名産のチーズをどう売り出すか考える事から詰めて行こうと言う話になった。

「やあ、これは旨い」ゼキはよほど気に入ったのかして、3杯目の

おかわりを注いだ。

泊めてもらうお礼に、夕食を作らせてくれとロザリアが申し出て、具沢山のホワイトシチューを作ったのだ。

ロザリアたち一行3人とゼキの家族4人の合計7人でテーブルを囲んだ。

「こんなに美味しいシチューは初めて食べます」ゼキの妻も驚いている。3歳と5歳だという二人の息子たちは物も言わずに夢中で食べている。

「隠し味にこちらのチーズを使いました。味が膨らんで美味しくなりますね」

「いつもながら、ロザリアちゃんの料理は旨い」

「今日も大変美味しいです」

この家の台所には焼き型が見当たらなかったのも、オーブンの鉄板に生地を伸ばしてチーズケーキを焼いたが、これも評判が良かった。ちょっとした工夫で、フレッシュなベリーのソースを添えたのも狙いが当たったようだ。

「チーズでこのようなお菓子ができるなんて、知りませんでした」ゼキは驚いている。

「ベリーをつぶしてソースを作って、お皿に花を描いてあるなんて綺麗だし気が効いてますね」妻はこうした演出は初めて目にしたらしい。

「お花、きれいなね」

「お花、美味しいね」子供たちは夢中だ。

「またお菓子作ってね」

そのリクエストに答えるには、どうやら卵が不足している。ミルクや小麦粉は十分にあるのだが……。

先ほどケーキに使った卵は腰のしっかりした実に良い卵だった。こんな卵がもう少し欲しい所だ。

翌日の朝食の折に「卵はどこで手に入りますか？」とロザリアがた

ずねると、近所の農家で牛乳と物々交換して手に入れているという返事だった。牛の乳搾りは朝晩2回行うのだろうが、いつも決まった大きさの樽に一杯分で卵10個と交換らしい。

まず、近所の農家に行ってみる事にする。クラウスに一声かけると「一緒に行きましょう」と付いて来た。

ロザリア一人だと7歳児の見た目の所為で最初は話を取り合って貰えなかったりする。その意味でも、クラウスがいてくれたほうが安心なのだ。

「お金で卵を売って貰えるかしら」

「たぶん大丈夫でしょう。農家だって多少の現金は必要でしょうから」

茶色の脚がたくましい雄鶏が囲いの中にいて、時折大きな声で鳴く。卵は朝一度集めたのだろうが、まだ若干残っているように見えた。青草を食べて広い囲いの中を走り回っている鶏たちの産む卵は、工場のような養鶏場の鶏の卵より遥かにおいしそうだ。

「ごめんください」ロザリアががっしりした石造りの二階家の中に声をかけると、老女が現れた。白髪で完全に背骨が曲がっていて、よちよちと歩いてくる。

「おやまあ、可愛いお嬢ちゃん、卵がいるのかい？」

「昨日からゼキさんの所に泊めていただいているものです。こちらの卵があまりにおいしかったので、お菓子を作るためにもう10個ほど分けていただけたらと思って来ました」

「おやまあ、お嬢ちゃんがお菓子を作るかね。どんなお菓子なの？」

「スフレチーズケーキとチーズプリンです」

「何かね、それは」

ロザリアが製法をかいつまんで説明し、卵の良し悪しが大きな味の決めてだと言うと、老婆は

「お嬢ちゃんは、見ればまだ小さいようなのにたいしたもんだねえ。いいよ、気に入った卵を持ってお行き」と言って鶏の飼われている囲いの扉を開けてくれた。

ロザリアの卵を集める様子を見ていた老婆が関心したように言った。
「お嬢ちゃんは雄鶏につつかれもせず、たいしたもんだ。うちの孫息子なんかあの一番大きな雄鶏にとび蹴りを食らうよ」

10個の卵を選んで外に出ると、

「御代はいいよ。その代わり、スフレチーズケーキとやらが出来たら食べさせておくれ」と言われた。

そうは言っても、これから毎日卵を今までより余分にほしいから、代金を払うとクラウドが言うと、

「そうかね。こちらさんは騎士様でいらっしゃるようだね。じゃあ、金貨一枚頂きますよ。とりあえず一月分と言う事で、どうかね？ロザリアちゃんが自分で卵集めをしてくれるって条件で。うちの雄鶏は良い鳥だが、気難しいんでね。機嫌を損ねると雌鳥の気分にも影響するんだよ。ロザリアちゃんなら心配無いようだ」

「一月は居ないかもしれないが、かなりたくさんの卵を使うことになるかもしれません。もっとお支払いする必要があるら、おっしゃってくださいね」

「その時は、また遠慮なく申し上げますよ。お二人は御兄妹なんかね？」

「えっと…婚約者です」ロザリアの顔が真っ赤になる。

「おや、そうかね！こりゃたまげた」

その後は、やれ未来の旦那様が良い男でよかったのだ、ロザリアはすごい美人さんになるのは間違いないのだと、老婆が一人で盛り上がっていたが、ひとしきり話が済むと、

「明日も来て下さいよ。その10個は御勘定には関係ないからね」と言ってくれた。

ゼキの家では朝絞った分のミルクの大半はハードタイプのチーズの製造に回すようだが、夕方絞った分のミルクの活用方法をさらに別に考えてみる方が良いかも知れないとロザリアは思う。ヨーグルトを少し自家用に作るようだが、これももっと活用法があるだろう。

とりあえずはスフレチーズケーキだ。

朝になってよくよく話を聞いてみれば、ゼキの妻は「一度も使ったことが無い」ケーキ型を持っていた。都からおいしい様々なケーキのうわさは届いていて、行商人からわざわざ買ったのだが、活用法がわからなかったらしい。奥にしまいこんでいて、昨夜はそのありかが思い出せなかったようだ。

泡だて器や計量カップを持ってきておいて良かった、とロザリアは思う。単発で美味しいものが出来ても、次回忠実に再現しやすいものでないとレシピとしての実用性は低い。このスフレチーズケーキだって色々なレシピが地球には存在したが、シンプルでおいしいレシピは案外と少ない。

単純で、それでいて無駄の無い食材の美味しさを十分に発揮したレシピ、そんなレシピが理想だ。

このあたりでは、スフレチーズケーキ作りでよく使うクリームチーズは作らないらしい。チーズと言えばハードタイプが主流のようだ。クリームチーズが無くても暖めたミルクでチーズを伸ばし、卵黄を配合し、別にしっかり卵白でメレンゲを作れば大丈夫なはずだ。

「身近な材料で手軽に美味しく」そんなレシピじゃないと、皆に受け入れては貰えないだろう。

「こんな感じで如何でしょうか」ロザリアは焼き上がった試作品をお茶の時間に出した。

子供たちの反応が非常にわかりやすかった。

「何これ、すごく美味しい」

「すぐくふわふわ、もっと頂戴」

「朝もらってきた卵はやはりずいぶん役に立ちましたか？」

「うん。とっても良い卵だから卵白を泡立ててもしっかりしていたわ」

「よくまあ、あの気難しいおばあさんから卵を10個も譲って貰いましたね」ゼキの妻は驚いているようだ。

「あのおばあさん、そんなに気難しい方なんですか？」

「私は口を利いてもらうまで一年かかりました」ゼキの妻はあの老女が苦手らしい。

「ロザリアちゃんは、きつと、あの雄鶏に気に入られたんじゃないですか？」とゼキが言ったので、

「あの雄鶏に突っつかれなかったんで、おばあさんに褒められました」とロザリアが答えると、

「やっぱりそうだ。あそこのおばあさんは、あの雄鶏が突いたり蹴ったりする人間は信用しないって、常日頃から言ってるんですよ」と言う事だった。

「でも、お孫さんもあの雄鶏の飛び蹴りを食らったそうです」

「孫には仕事を継がせられそうも無いって、時々嘆いてますよ」ゼキの妻は言った。

「へえ、ロザリアちゃんは気難しい雄鶏にまで気に入られたのか」マークも興味深げだ。

「確かにずいぶん大きくて強そうな雄鶏でしたが、そんなに気難しいようには見えませんでした」

「クラウス君は、その雄鶏を見たんだね？」

「ええ、見てきました。200羽程度いる囲いの中の鶏の大半が雌鶏でした。雄鶏は10羽しか見つけれなかったのですが、その一番の大きな雄鶏は出入り口付近に陣取って、にらみを利かせているようでした」

「群れ全体の親分って感じかな」

「確かに、あの雄鶏の気分が群れの雌鶏たちに大きな影響を与えるって、おばあさん言ってました。だから、卵あつめはやたら人間に任せられないのだそうです。私の事をあの雄鶏なりに認めてくれたのかな？」

「あの雄鶏は油断なくあたりを見張ってましたが、ロザリアが卵に

触れるのは最初から認めている感じでしたよ。やはり、鶏なりに何事かをロザリアから感じていたのではないかと思います」クラウスなりに色々観察していたらしい。

「何はともあれ土地の生き物に、ロザリアちゃんが受け入れられていると言うのは良い傾向だよ。気難しいおばあさんにも気に入ってもらえたようだから、地元の皆さんたちとも上手くやって行けそうだね」確かにマークの言う通りだろう。

ボルの土地、そして人々と良い形で縁が繋がって行けそうだと、ロザリアは楽しみになった。

第三十三章 村落会議婦人部（前書き）

大きなことは出来ません。小さなことからコツコツと、と言う話

第三十三章 村落会議婦人部

聖剣チチェックは、今、ロザリアが首から提げている小さな袋の中に入っている。

どうやらこの剣は大きさを変更できると言う、特殊能力が有るらしい。

拡大する事は無理なようだが、元のサイズより縮めるのは簡単なようだ。

そもそも最初にその事に気がついたのは、クラウドだった。

「チチェックは、女性が持つのにふさわしい美しい剣ですが、今のロザリアが使うにはいささか長すぎますよね。もう少し刀身が短いと良いのですが」

そのとたん、チチェックが光った。

「ロザリア？今チチェックが縮みませんでしたか？」

クラウドに言われて、鞘から抜いてみると確かにロザリアが扱いやすい長さになっている。

それにあわせて鞘も柄もちょうどつりあった長さに変化していた。

「あら、面白いわね。長い剣を持って歩くのは本当は具合が悪いから、うんと小さくなって、ポケットの中にも入るぐらいだと良いのに。要るときに元の大きさに戻るなんていう風だと理想的よね」

すると、また強く光って、手のひらに乗るぐらいのミニチュアサイズになってしまった。

「使うときは戻れるの？」

また光ると、ロザリアが使いやすいサイズに戻る。使いこなすには多少の訓練も必要だろう。

外に出て、うんと縮小サイズのチチェックをノーマルサイズに戻して抜刀する練習を試みる。

「縮め！」と言うと小さくなり、「戻れ！」と言うとノーマルサイズに戻る。

すばやく攻撃態勢に入るまでに、幾度か試行錯誤を繰り返す。その間中クラウスがそばで見ている、剣の構えや攻撃法についてアドバイスをした。おかげでロザリアは効率の良い命じ方と構え方をどうにか体得できた。

「剣を持っていると人に気づかれないで済むのは、やっぱり助かるなあ。村の女の人たちとの話し合いにも剣を持ってだと、ちよつと引かれちゃう部分が有ると思うのよね」

確かに料理や食品の話をする場所で、大きな剣を持った人間が混じると違和感が大きいだろう。可愛らしさがいわば、ロザリアの『売り』なのに剣持ちでは戸惑われてしまいそうだ。

今日の午後、ゼキの家で村落会議の婦人部の会合が行われる。

そこにロザリアも混ぜてもらおう予定だ。

いつも議事進行役はゼキの妻が行うのだが、何かと言うと事態が紛糾して上手くいかないらしい。

皆、一癖も二癖も有るおかみさん揃いで、村長の妻ではあっても、特にこれと言って村人に認めてもらうほどの特技も経験も無く、子供も幼いので、本人に言わせると「なめられてる」らしい。

「私、気が小さいもんですから、にらまれたり大声を出されたりすると疎んでしまうんですよ」と言う、いわば本人の胆力の無さも災いしていると思うが、何かやり様は有るように思う。

「ろくに話し合いにもならないし、揉め事の種になるのが落ちだから、婦人部自体、解散したらどうか」と言う話も村落会議の全体会合で出たらしいのだ。

なかなか、緊迫した空気の中での会合となる可能性は大きい。

ロザリアはスフレチーズケーキとチーズプリンを用意した。

新たに、ヨーグルトと牛乳からクリームチーズを作り出してプリンに使ってみたのだが、思いのほか上手くいったようだ。これをまず、集まったおかみさんたちに食べさせて、雰囲気と和ませてから話し合いに入ろうと言う作戦を立てた。

「これは、なんと言うか食べたことも無い良い味だねえ」

「へええ、卵とチーズとミルクねえ。で、こっちはヨーグルトを使うんだ」

「これだけ良い味なら、街道筋で売っても売れそうだね」

「お前さんのところの旅籠で出したらどうだい？」

「そうだね、あたしもそう思っていた所さ」

集まったおかみさん連中は皆口々に好き勝手なことをしゃべりながら、スフレチーズケーキとチーズプリンをばくついている。ともかく、味のほうは合格らしい。

ゼキの妻が議事を進行しようとする、と

「あんたが取り仕切るより、この上手いお菓子を作りなされたお嬢ちゃんのお話が伺いたいよ」

「あの朝霧楼の食堂を切り盛りされてると聞いたよ。たいしたもんじゃないか」と言う声が出て、成り行きでロザリアは皆の前で2種類の菓子の製造法を説明することになった。

「このミルク2に対してヨーグルト1と言う割合が作りやすいです。沸かしたての湯よりはぬるく、熱い風呂よりはさらに熱いと言った程度の温度を保つことが大切で、今回はぼろ布や綿をつめた木箱にミルクとヨーグルトをあわせて暖めた鍋を入れて、時折布でくるんだ焼け石を入れたりしてみました。ともかく、最初に鍋で暖めるときに、沸かしてしまっただけは絶対にいけません。でも暖め方が足りないと上手くいきません。本当は都で売っている温度計があると話は早いんですが。温度計の70度に保つことが出来るのが一番良いのです」

おかみさんたちは、熱心に聴いている。中にはメモを取るものもい

る。

「そのクリームチーズって、このプリン以外にも使い道はあるかね？」旅籠のおかみは特に熱心だ。

「サンドイッチの具やグラタンにも使えますし、お芋やかぼちゃその他の野菜を使っておいしいサラダを作れます。魚との相性も良いです。近所の湖で取れる鱒とあわせたりすると、おいしいものが出来そうです」

甘いものばかりではない証拠として、唐辛子やハーブ・酢とあわせたソースも出して、茹でた野菜につけて食べさせてみる。

「こりゃ辛いけど、お酒がすすみそうだ」

「お嬢ちゃんなら、チーズを売り出す良い考えもおありになさるんじゃないかね？」

そういう声がいくつかあがった所で、ロザリアは言った。

「良いミルクはチーズ作りの命です。基本です。ミルクがまずかったら良いチーズは出来ません。ボルの村のミルクは質がよいとは聞いてましたが、ずいぶんお宅によって味の開きがあります。正直言っておいしいチーズをつくのはとても無理と言うお宅もありました。そんな中で本当においしいミルクを絞れる牛を育てているお宅があります。ここのお宅です」

「そんなに違うかい？」

「違いますねえ。牛は神経が細やかです。綺麗で気持ちの良い寝藁でゆっくり体を休めると、良い乳が出ます。それに、この奥さんは毎日牛の体を丁寧に拭いてやります。手抜きをしないで、きっちりやるべきことをやらないと良い物、おいしいものは出来ないと思います。ミルクがまずかったお宅の牛は艶が悪かったですし、小屋の寝藁も古くて汚れたままでした。私の言ったことが本当だって、皆さん、今から牛小屋に行つて確かめませんか？」

牛小屋の見学をロザリアの先導で無事に終え、また部屋に戻るころにはゼキの妻に対する皆の評価は大きく変化していた。

「私からの提案はまず、ミルクの品質を村全体で向上させようと言う事です。それと平行して、お菓子の作り方、チーズを使った料理の仕方をお教えますから、こういったものが一番売り出すのに向いているか、皆さんでそれぞれお考えいただくと言うことです」
こうして、ミルクの品質向上のための指導をゼキの妻が行うこと、そして、ロザリアが会合ごとに料理や菓子の製法を教えることが決まった。

「今度の会合でも又美味しいものが頂けそうで、楽しみだねえ」そういう声も多かった。

たとえ食い気につられてにせよ、会合への出席率が上がり、親睦が深まり議論が活性化するのは良い事だとロザリアは思うのだ。
とりあえず、会合は和気藹々のムードで無事終了した。

ゼキの妻は皆に認められ褒められたのが、よほうれしかったらしい。

「ロザリアちゃん、本当にありがとう」と目に涙まで浮かべて礼を述べた。

ゼキの妻が手抜きをしないで丁寧に牛を育ててきたから、良いミルクがとれるのだが、ロザリアが指摘するまで、誰も地道な彼女の努力に目を向けなかっただけの事なのだ。

「私は、本当の事を言っただけです。自分のされてきた事に自信を持って下さい」

「私なんて、何の特別な事も出来ないと思っていただけで、小さな積み重ねが大切なね」

「小さな事から、出来る事から少しずつでも変えてゆけば、その内大きな結果が出ると思います」

ロザリアはにっこり微笑んだ。

それにしても、とゼキの妻は思った。

七歳だと言うこの愛らしいお嬢さんは、大した方だと。

自分のやってきた事にどのような意味があり、それがどのような結果を生むかなどと言う事は、普通の人間にはなかなか解らないのではないだろうか？

自分は大して深い考えも無く、寝藁を取替え、牛の体を綺麗にしてやっただけだ。

それが美味しいミルクを得るための大切な手順だなんて、考えたことも無かった。

大体、よその牛小屋の寝藁が汚いなんて、生まれた時からボルに住んでいるのに、気がつかなかった。

自分はずいぶんと、色々なものを見落としてきたのかもしれない。

「この、お嬢さんほどはとても無理だけど」せめて自分も自分なりに、毎日の暮らしをきちんと見つめなおす事が大切なのではないか、そんな風を感じていた。

ふと、外を見ると、牛たちが草場から小屋を目指して戻ってくる所だった。

ロザリアは犬のクロと戯れている。

「ああしている所は、確かに七歳のお嬢ちゃんんだけどね」

でも、気難しいクロが、ゼキ以外の人間とあれほど一緒になってじやれ会うのは見た事が無い。

「クロもロザリアちゃんは特別な人だって解っているのかもしれないね」

山々に赤みを帯びた夕日が差し、ヤギを集める角笛が響く。

「本当に素敵な景色」ロザリアが頬を染めて誉めそやしたこの眺めも、自分にはあまりにも見慣れた景色でさほどすばらしいとも思えないのだったが、「身近に有りすぎると本当の価値には気がつきにくいのかしら」

案外人間なんてそんな物かも知れない。自分は生まれたボルの村で小さな一つ一つの事も大切に、少しずつ幸せになろう。

ロザリアは、ゼキの妻がそんなことを考えているとは知らなかったが、自信を取り戻し、自分の仕事に意義を見出し、村の暮らしに明るい見通しを持ってくれたら良いと思っていた。

「クロはこの村が好きでしょ？」

大きな黒いむく犬は、うれしげにワン！と一声吼えた。

第三十三章 村落会議婦人部（後書き）

アルファポリスは1日1回ですが、
投票して下さると大変励みになります。よろしくお願い致します。
更新は年明けになりそうですが、がんばります。

第三十四章 謎と未来（前書き）

R15で内容はR18になってしまいました。

お嫌いな方、すみません。

また新しい謎が出てきました。これからの旅と関連してくるはずで
す。

第三十四章 謎と未来

聖剣チチェックの口伝書や覚書は、相変わらず一切見当たらない。自在に大きさを変化させるという特性は、たまたまクラウドが気づいたが、他にも何か秘密がありそうだ。

「チチェックを持って歩いていると、人との話が上手くまとまりやすいような気がするのよね」

はつきりとしたデーターが有るというわけでは無論無いが：

「チチェックはいつも花の香りをさせていますよね。それも関係しているのでしょうか」

ただ、あまりに花の香が強すぎると料理をするときなどは困る。

「そう言えば、お菓子を作るときは花の香がきつすぎると困るなって思っていたら、ちゃんと弱くなってみたい」

「夜眠るときも、あまりに香り過ぎない方が良いですね」

「確かに、あまりに香りが強いと息苦しいわ」

「それもそうなんですが……」

「？」

「私はロザリアの香りが十分に感じられなくなるのが嫌です」

「わ、私の香り？」

「さらさらした髪の手触りとか、軽く汗ばんだときの香りとか、肌が温まったときの香りとか……」

今夜は、マークが一時的にアルビにハリカの様子を見に戻ったため、クラウドは大胆になっている。

こうした時のクラウドの目は艶めいて、その視線を受け止めるだけでロザリアの体温は高くなる。

いつの間にか寝間着の前がはだけて、キスが落とされて行く。

「……クラウド」

「こうした瞬間の香りです。ゾクゾクします。何者にも邪魔されずにロザリアの香りを感じたい」

そう言うクラウド自身の香りはロザリアにとっては魅力的で、いつも、いつまでも感じていたい魅力的な香りなのだ。

「私も、クラウドの香りを感じたい」

「そんな風に思ってくれていますか？」

「何だか、ドキドキするの。好きよ、この香り」

ロザリアはクラウドの脇の下に顔を埋める様にして、深呼吸する。

「……ロザリア」

クラウドの手の動きは更に熱を運び、ロザリアの甘やかな声を紡ぎ出す。

チチェックは花の香りを放つ事を完全にやめ、代わりに二人の香りが絡み合い、夜の帳とぼりの中で次第にその濃度を増すのであった。

久しぶりに二人が濃密な秘儀を交わして、深い眠りに入ると、チチェックが薄桃色の光を放ちはじめた。

「あれ？クラウド？」

ロザリアは夢の中でその男を見た。クラウドとどこか似た気配を纏っているものの、クラウドではない。

地球的な言い方をすれば、身長190センチのクラウドより更に背が高く逞しいようだ。

どうやら場所はゾルル山の麓の森の中のように、ロザリアが鱒を釣った事が有る湖が遠くに見える。

灰色の髪に鋭い灰色の目のその男は、一人の女をじっと見つめていた。

その女は森の中の斜面の上に生えている一際大きな木の傍らに立って、男を見つめ返している。

女もかなり大柄で、鍛え抜かれた鋼のような体つきと『端正』とか『凛々（りり）』しい』と言う印象を与える整った容貌をしており、艶やかな髪と輝く瞳は共に琥珀色だった。

チチェックを愛用していた女戦士エミーネなのだろうか？

二人は離れた場所から長い間無言で互いを見つめていたが、突然ほぼ同時に相手に向かって走り出した。

森の下草をかき分け、まるでつがいを求める獣のようにひたむきに互いの姿を見つめて走る。

ようやく二人の距離が十分に近づくと、互いに相手の背中に手を回し、強く抱きしめあった。

汗ばむ二つの鍛え抜かれた肉体と荒い呼吸は、まるで自分の欲望に忠実な野の獣を思わせる。

やがて熱を帯びた接吻が交わされ、二人の体は丈の高い草の中に隠れた。

何一つ言葉らしい言葉は交わされず、ただ、激しい愛の交歓を思わせる気配と物音が響く。

その傍らでパンテラ・レオとチチェックは、互いに纏わりつきながら宙を舞い踊っている。

「聖剣たちも嬉しいのね」と呟いたロザリアの言葉は夢の中のもののなか、そうではないのか、どうも判然としない。一對の男女の醸し出す濃密な空気は辺りの森を覆っているかのように感じられる。

「バラムとエミーネはこんなにも熱烈に愛し合ったのですね」

クラウドの声がする。これが夢の中であるならばクラウドも同じ夢を見ているのだろうか？

「パンテラ・レオとチチェックの記憶なのかしら？」

そのとき、轟音とも爆音とも形容しがたい、凄まじく大きな音が鳴り響いた。

「あれ、見てよ、何？」

「わあ、どうなっちゃってるんだろう」

「お前たち、勝手に触らないほうが良いよ」

「危ないかもしれないわ」

夜が明けきっていないのに、庭がひどく騒がしい。クロがけたたま

しく吠えている。

ロザリアとクラウドは飛び起きて、庭へ急いだ。

庭に生えた一本の大きな木の根元に、人が一人入れそうな穴が開き、そこからほのかな光が漏れている。

あの夢でエミーネが立っていた場所は、この木の傍らであったようにロザリアには思われた。

ゼキの子供たちは大騒ぎしているが、ゼキと妻は子供らに触れさせないように押しとどめている所だった。

皆、取るものもとりのあえず庭に飛び出したようで、寝巻きにそこらのものを適当に羽織っている。

ロザリアとクラウドが剣を持ち身拵えをして来たのを見て、ゼキの妻は自分のなりを恥ずかしく思ったらしい。顔を赤らめて「ご無礼いたします」と一言言うと、顔を洗い身なりを整えるように子供たちを促して、その場を離れた。

「一体これは何なのでしょうね？ 危険な禍々しい物ではないという気はしたんですけど……」

クロを撫でてのんきな調子で話すゼキは、よくよく見ると夢の中のバラムと髪と目の色が同じで、顔の造作もかなり似ている。だが、あの精悍さと目つきの鋭さはかけらも無い。どこまでも温和な好人物だ。

「ロザリアと私は、つい先ほどまでバラムとエミーネらしき人物が出てくる夢を見ていました。どうやらその事とこれは関係が有るように感じます」

「へえ！ お二人同時に同じ夢ですか」

「ええ、そうです」

「凄いですね、お二人の聖剣の力ですか？」

「それは、わかりません」

空が完全に明るくなると、不思議な光は消えた。

すると、穴から布に包まれた箱のようなものが見えたので、クラウスが引き上げる。

「わあ、これは、蔵に置いてあったチチックに関する口伝や覚書を入れた箱ですよ」

ゼキがそう言うので、布を解いて、封を開けた。

すると幾つもの手紙や日記のようなものが出て来る。

広間に持ち込んで、ゼキも交えて3人で内容を確認する事になった。

朝食後、3人で中身の整理をしていると、マークがアルビから戻って来た。

早速、仲間に加わる。

「これがこの家に元々あった記録の類なんだね。ゼキさん、紛失したものは無いですか？」

「どうやら全部そろっていますよ」

「内容を今、ざっと整理してみたのですが、すでにロザリアと私が承知していることが大半でしたが、2点だけ、非常に興味深い話が出てきました」

「へえ、どんなものだったの？」マークは興味津々だ。

「ほら、これです、兄様」ロザリアは古い手紙を差し出した。

「どれどれ『小生はブルサのさる貴族の邸宅で興味深い古文書を見ました。それにはいまだ行方不明の聖剣に関する覚書がまとめられておりました。主な内容は以下の3点であります。』

1、チチェックはパンテラ・レオの主のつがいとなる女性の物である。

2、チチェックは後の剣【ヴィーヴル】を呼び覚ます。

3、チチェックは水の剣【シャボンヌ】を呼び覚ます』

後の剣とか水の剣とか初めて聞く話だなあ」

「どうも、パンテラ・レオが傍に有ると『大いに力を増す』らしいです。ほら、兄様、ここです」

「本当だね。たぶん、パンテラ・レオの方もチチェックが傍に有る

ほうが威力が増すんだろうな」

このマークの類推はクラウスもロザリアも賛成だった。

「もうひとつは、こちらの覚書のような物です」

「どれどれ……チチェックは後の剣『ヴィーヴル』のふさわしき主を探し当てる力を持つ。それがたとえ遠き異界であっても飛来して、オルトに迎え入れる助けとなる。また、水の剣『シャボンヌ』の主がオルトに生じるのを大いに助ける」

「これでいくと、後の剣の持ち主は異界の者で、水の剣の持ち主はオルトに生じるもの、となるようですね」クラウスも色々と考え込んでいるようだ。

「后って、誰の後なんでしょうか、やはり普通は皇后を真っ先に思い浮かべますが……」

ロザリアは将来の自分の娘の運命に関わりが有りそうなこの言葉が、気がかりだった。

「そうだよねえ。将来の不老不死のつがいの女の子は、どう言う事になって行くんだろうか」

「後の剣・水の剣の性質や力も謎ばかりですね」

三人の雰囲気は暗く重いのは、事情はわからないながらゼキにも伝わる。

「考えているだけでは、わからない事もきつと多いのでしょうか。まずは、昼食でもいいかがですか」

ゼキの妻も近頃では色々と新しい調理法も取り入れ、以前より格段に美味しい料理を作る。

この日の昼食は大きな鱒のグリルト、野菜ときのこのシチューだった。

マークがその美味しさを褒めると、顔を赤らめ「ありがとうございます」と嬉しそうに礼を述べた。その表情は以前よりも明るく、生き生きとしている。

村全体の雰囲気も大いに変わってきた。

婦人部メンバーの連携も格段に良くなり、地元の良い物を積極的に育て上げて行こうと言う気運が大いに高まっている。

「ボルでのチーズの売出し計画も、そろそろ仕上げの段階にはいつてきたんじゃないのかい？」

マークがアルビに戻ったのは、出産が近いハリカの様子が気になったからでもあったが、チーズを包む包装紙を色々見繕ってサンプルを持って来てくれたのだった。

「地元の皆さんにお任せ出来る段階に入ったと、私も思います」マークの指摘にロザリアも賛成だった

「ロザリアは村中駆け回って、良く働きました」

「ロザリアちゃんが率先して働かれたものですから、村の連中の意識も大きく変わりました。村の中にも色々の良い物があるのだから、皆で力を合わせて育て上げようと言う気持ちになって来ましたよ」

「ロザリアちゃんは可愛いからなあ……」

「高貴なご身分のお嬢様が百姓仕事や山仕事をなさって、それがまた、どれも様になってらっしゃるのが凄いと、おかみさんたちは驚いてますよ。それに、色々なことを良くご存知で、おかげさまでミルクの質も良くなりました。美味しいチーズの料理や菓子作り方も皆に教えて頂きました。何より、小さなことを手抜きしないできちんとして行くことが非常に大切だと改めて教えて頂けて、本当に良かったと俺は思います」

こう述べたゼキの表情は穏やかで威厳が有り、改めてバラムとエミ―ネの末裔にふさわしいと感じさせる。

明日にでも婦人部の会合を開いて、皆でチーズの包装紙のデザインを決めて、売り出し作戦を固めようと言う話になった。チチェックの覚書も見つけたことだし、ボルの村を離れる日は間近に迫っているようだ。

第三十五章 街道を南へ（前書き）

謎が謎を呼ぶかな？

第三十五章 街道を南へ

ボルのチーズの売出しは、街道沿いのいくつかの町の旅籠と提携して行われた。

アルビ周辺では朝霧楼の名前はひとつのブランドになっており、朝霧楼の厨房の責任者がその味の良さを保証したとなると、結構な宣伝効果が見込めた。それに、マークが持ち込んだ高級感の有る緑色の包装紙も朝霧楼の職員のエプロンや看板に採用された色に合わせたものだった。

人々はその包装紙を見ると、朝霧楼の評判の料理のイメージを、このチーズのイメージと重ねるようになった。

ボルを離れるにあたり、マークは魔法を解いて自らの身分を明らかにし、チーズの生産と販売に関して、エスコバル公爵家がバックアップする事を約束した。そして、自らのサインと金色の手形の入ったチーズの推薦状をゼキに託した。

「色々世話になったね。何か厄介事が持ち上がって困ったら、朝霧楼に連絡を入れてくれるかい？ 都のほうの屋敷でも構わないが、遠いから不便だろう？ すぐに何とか手を打つようにするよ」

「何から何まで、細やかなご配慮、ありがとうございます」ゼキは大いに感動していた。

幼い子供たちはマークの金色の髪と緑色の目を見て、目を丸くしていた。

「本物の公爵様だ」

「金の龍様だ」

「ロザリアお姉ちゃんとクラウドお兄ちゃんも、魔法で髪の色や目の色を変えているの？」

「クラウドはあのままの琥珀色だけど、私はちょっと変えているわ」

「お姉ちゃんの髪と目は何色なの？ 金色？」

「ごめんね。今はまだ内緒なの。もう数年したら、本当の色で又ボ
ルに来るわね」

「あの、ロザリアちゃんは、やはり高貴な姫君でいらっしゃるので
すよね」ゼキの妻は恐る恐る尋ねる。

「このオルトの天地にとって、ロザリアちゃんは特別な女の子なん
だ。今は細かい事は言えないが……」

マークのその言葉の意味をこの村の人々が知るのは何年後になるだ
ろうかと、クラウドはふと思った。

街道筋に出ると、村人が総出で見送りに来ていた。

「どうぞ、お元気で」

「是非又、ボルにおいで下さいね」

「皆さん本当にお世話になりました。きつと又ここに伺いますね」
ロザリアはにこやかに微笑んで手を振った。すると花の香りが立ち
上り、花びらが舞った。

ボルを朝出発した一行三人は、夜にはアルビの朝霧楼へ無事に戻る
事が出来た。

出迎えたハリカのお腹は、もうすっかり大きい。

すぐにハリカも交えて四人で夕食を食べて、ようやく人心地つく。

「赤ちゃんがもうすぐ生まれそうですね」

「ええ。このごろは痛いぐらいお腹を蹴飛ばします。元気な子のよ
うで、うれしいです」

「あっちの世界みたいに、超音波検査も出来ないし、出産予定日の
割り出しもちゃんと出来ないから、心配でたまらないけれど、オル
トの人はこんなアバウトな状態でも何とかやっているんだよなあ」

「兄様が、そのうち検査の方法を考え出されたら良いかも知れませ
んね」

「僕の研究テーマは『革命的な食糧生産体制と都市機能の調和』だ
ったからさあ、無理だろうな」

「魔法でお腹のお子の気配や様子を探る事ぐらいは出来ませんか？」
クラウドがこう言うと、マークは

「そうだね！その手があるじゃないか」と手を打った。

「じゃあ、僕、今からハリカのお腹の様子を探る事にするから、又明日ね！」

その様子に、クラウドもロザリアも苦笑してしまった。

「今からじっくりハリカさんのお腹を探られるんでしょうか」

「たぶんそうでしょう。兄様、何だか子供みたいね」

二人はしばし無言で自分たちの部屋に向かう。

「久しぶりにゆっくり風呂に入りますか」クラウドとロザリアは手を繋ぐ。

「ハリカさんが、せっかく手配して下さったようだし……一緒に入りましょう」

そう言うロザリアの顔は真っ赤だ。

ほぼ半年振りになる湯殿の湯は、相変わらず豊富で心地良い。

二人は互いに、互いの体を洗った。その間にクラウドはかなりの『いたずら』をしてのけたので、湯船につかる頃にはロザリアはぐったりとクラウドに体を預けていた。

「疲れさせてしまいましたね。このごろのロザリアは前にも増して綺麗ですから、つい、色々してみたくなってしまっ……すみません」

「……私の体、なかなか大人にならないわ。クラウドは待っていてくれるのに」

「焦る必要は有りません。私は今の可愛らしいロザリアが大好きです。それで時々こんな真似をしたくなるのですが、許して下さい」

「クラウドが大好きだから、別に嫌じゃないの。でも体が行けない……眠くてたまらない……」

ロザリアは湯船に浸かったまま、眠ってしまった。何もかもクラウド

スに預けて、安心しきっているようだ。

「こんな風にされてしまったら、何も悪い事が出来なくなりますよ」手早く体を拭き寝巻きを着せて、部屋に抱いて帰ってもロザリアはぐっすりと眠っている。

寝床に入ってクラウスが抱き寄せると、ごく自然に体を丸めてしがみつく。

「明日の出発は無理かな。もう一日、休ませてもらいましょうか」これから向かう予定のトラブゾンはアルビから街道を南に向かって辿り、馬で丸一日がかりという位置関係になる。ボルからの戻りも結構強行軍だったので、幼いロザリアの体には負担だろう。

翌朝、ロザリアは目覚めると、一人でなにやら照れていたが、クラウスはあえて気がつかないふりをした。

朝食の際に、出発を一日伸ばそうというクラウスの提案がそのまま通り、皆のんびり過ごすことになった。マークもハリカと別れ難かったようだ。

荷物の整理をしていると、すぐに昼時になる。

昼食時の食堂はかなり混雑しているが、今日はロザリアもカウンタ―に座って客扱いだ。

「ロザリア様、早速ボルのチーズで試してみました。味はいかがでしょう？」

調理を担当しているハリカの弟が、野菜のチーズグラタンを出してくれた。

「とっても美味しいです」

「うん、すごくいい味だよ。さすがだね」マークも文句無しに褒めた。

するとそこへ、大柄な男の客が入ってきた。カウンターに座り込むと、嬉しげな声を出した。

「や、うまそうだね！俺にもそのお嬢さんが召し上がっているものを貰えまいか？あと、ビールを頼む」

「おや？誰かと思えば……海辺の調査は順調かい？結構、期待してるんだよ」

男は怪訝な表情でマークを見た。

「ああ、お前はこうしないと主の顔あるじもわからないのか。情けない奴だなあ」

マークは魔法を解いて金の髪と緑の目をあらわにした。

「ああっ！こゝ」男はよほど驚いたらしい。

「しいーっ」マークは又、髪も目も褐色に戻す。

「だめだよ、気をつけなくちゃ。料理と酒は、あっちに運んでもらおうか。中間報告を聞かせてくれ」

「は、はい！」男はガチガチに緊張している。

「お前、緊張しすぎだ。しょうがない奴だな」マークは苦笑している。

「じゃあ、僕は、ちょっとこいつの話を聞く事にするよ。又後でね」マークはロザリアにひらひらと手を振った。

「何のお話かしらね？」ロザリアは海辺という言葉が気になった。

「あの身なりからすると、殿下直属の巡視員でしょうが、正確な地図を作る仕事を進めているとおっしゃっていた事と関係あるのかなあ？」クラウドはそのぐらいいしか思い浮かばない。

「なんでも、正確な海岸線の形を調べておいでと伺いましたよ」ハリカの弟がそんな事を言った。

「明日向かうトラブゾンも、ちゃんとした地図が無いのよね。岩の多い海岸沿いだって、以前兄様から伺ったけれど、どんな所かな」

「海は綺麗で魚はうまいですが、他には何も無いですね。本当に田舎です」

ハリカの弟は以前トラブゾンにマークの供をして行った事が有るらしい。その時に目新しい魚料理でも無いかと探したそうだ。

「生の魚を塩をしてただ焼くだけでした。後は干物でしょうか。味は悪くないですが、相当塩辛いですね」

昼食の時間がすんで、ロザリアもクラウドも後片付けを手伝った。午後のお茶にはもう一息という時間になって、マークはようやくこちらに戻って来た。

「ね、ね、ロザリアちゃん、ちよつと、面白い話を仕入れたよ」

「何か先ほどの方の報告で、わかったんですか？」

「クラウド君も聞いてくれるかい？あのさ、水の剣『シャボンヌ』って、どうやらトラブゾンに大いに関係があるようだよ」

「伝承とか言い伝えがあるのでしょいか？それとも守り伝えている人でも居るのでしょうか？」

「なんかさあ、この街道のドン詰まりというか、南の端に当たる位置に、容易には動かせそうも無い小山ほどの硬い岩があって、その岩の名前が『シャボンヌの岩』って言うんだって。どうやら言い伝えが色々中途半端みたいで、地元の間人はその『シャボンヌ』が何なのかまるで知らないそうだよ。ただ、『チチェックにより岩は砕け、シャボンヌは現れん』という言葉だけが伝わっているらしい。地元の人はチチェックが聖剣の名前とは知らないから、わけのわからない謎の言葉って事になってたようだねえ」

その岩は、半島になっているトラブゾンと近隣の村をつなぐ街道を塞いで居るという。岩さえ無くなれば街道を半島を一周する形で敷設出来るらしい。

「ロザリアがチチェックと共に、その『シャボンヌの岩』を訪れると、岩は砕け散るのでしょうか？」

「派手に吹っ飛ぶのかな。まあ、聖剣の主たるものそんな岩は恐れるに足りないだろう」

「ロザリアに危ない事が無いければ、良いのですが……」

「何か有っても、魔法できっと防げらと思うわ」

「その手があるね。兎も角、ロザリアちゃんとチチェックがその場に行かない事には、話が進みそうに無い」

「そうですねえ……『シャボンヌ』が出現しても主人はどこなんでしょうね。それに後の剣『ヴィーヴル』の謎とも、ひょっとして絡んでくるのかも知れませんか……」

「僕もクラウド君同様、後の剣との絡みを予想してる」

「ゼキさんのお宅で見た書類の通りなら、そうなりますものね」

謎の多い二つの聖剣は、この先、自分の運命に大きく関わって来そうだとロザリアは感じている。

まず明日は、トラブゾンに向かって、その岩に対峙しなくてはならないだろう。

朝霧楼の前を通る街道は、南へ緩やかな下り坂となって続いている。ここからは、まだ海は見えない。

「きっと、万事、うまくいきますよ」

クラウドは南のかなたを見つめるロザリアの後ろにそっと立ち、艶やかな髪にキスを落とした。

第三十六章 海辺の宿にて

「まあ……綺麗！」

ロザリアは生まれて初めてオルトの海を目にした。

太陽はもう西に傾き始めていて、海面には薔薇色の光線が反射している。

帝国の首都オルテスにはオルトでも有数の大きな港が有るが、ロザリアは港まで出かけた事が無かった。

京子の記憶にある日本の海や外国の海の中にも美しいものが有るようだったが、ロザリア自身の体験としては今回が初めてとなる。

「ブルサの近海もそこそ綺麗ではあるけれど、この美しさは格別だねえ」

岩の多い海岸線をたどって街道を進み、ようやくトラブゾンに一軒しか無い小さな旅籠にたどり着いたときは、もう日が沈む寸前だった。

ボルの村の滞在期間は当初はせいぜい一月程度を予定していたのに、チーズの売出しを軌道に乗せるのに結局半年かかった。このトラブゾンは一体どの程度滞在する事になるだろうか？

それにしても……この夕食は……

三人は魚の焼いたものとパンと貝のスープ、そしてデザートに小ぶりなオレンジという夕食を食べながら、色々と改善の余地が有りそうな調理法について話をしていた。

「良い魚だね。新鮮だし。でも、やっぱり塩がきついかな」

「肉体労働をする人は強い塩加減のものを好む傾向があると思いますが、スープはさすがに塩辛すぎますね」

「塩以外の調味料が貴重とか、手に入りにくいのかもかもしれませんが、塩はきついですね」

調理場の方からこの旅籠の亭主がやってきた。3人の様子を見て、ケチをつけられたと、腹が立ったらしい。

「お客さん方、お気に召さないなら召し上がって頂かなくて結構ですぜ」

「おいおい、仮にも客商売でそういう口の利き方は無いだろう。僕らは今朝、朝霧楼を発ってここにたどり着いたんだ。塩がきついのは、本当の事じゃないか。もうちょっと考えてものを言ったらどうなんだ？」

いつもは穏やかなマークが珍しく怒っている。

「自分の工夫が足りなくてせつかくの良い素材を台無しにしているのに、どうしてそうも横柄なんだ？」

「旦那方に魚のさばき方なんぞ解るもんですか。利いた風な口をお聞きになるのも大概にしなせい！」

「僕だって、これよりはましな味付けができるけれど、この子は君なんかよりうんと美味しい魚料理ができるよ。嘘だと思ふなら、試してみるか？」

「兄様！」

「いいんだよ、ロザリアちゃん、こんなひどい料理の仕方じゃ魚や貝に失礼だ。そう思うだろう？」

「そこまでおっしゃるんなら、その『うんと美味しい魚料理』とやらをご披露いただきたいもんで。俺をうならせるぐらい旨けりゃ、さっくり詫びを入れやしよう」

馬に積んできた荷物から、ロザリアは包丁のセットと調味料、泡だて器を取り出して、宿の調理場に入った。

この塩辛すぎる料理を作った男はこの旅籠の主人であり、調理人でもあるらしい。褐色の濃い口ひげを蓄え、頭が禿げ上がった腕っ節の強そうな男だ。背はクラウスと大差ないので大男の部類に入るだろう。傍らに善良そうで物静かな、灰色の髪と目をした小柄な中年の女がいる。どうやら男の妻のようだ。

「お前さん、お客様方はどこと無く品がお有りだし、乗ってらした馬は立派だし、御身分の有る方々じゃないかと思うんだけどね。あんな無茶な事を言って後でお咎めがあるんじゃないかい？」そんな事をひそひそ亭主に向かって言うのと、亭主のほうは「知るかよ！」と吐き捨てるように言って、眉間にしわを寄せている。

ロザリアはとりあえず今、台所にある素材を使わせてもらおう事にした。

先ほどの塩辛すぎる焼き魚は、鰹を思わせる大きな魚で、まだ、半身が残っている。

ほかに、まだ新鮮な小エビがザルに一杯有った。

ミルクやバターはどうやら貴重品らしいが、オリーブオイルやにんにく・しょうが・それに幾種類かの生のハーブがあった。

鰹っぽい魚はカルパッチョ風に仕上げる事にした。小エビはハーブの風味を生かしたフライにする。

まずカルパッチョは魚の身から血合いを取り除け、背と腹にわけ、背は軽く炙る。腹は皮に熱湯をかけすぐに水気をふき取る。次ににんにくとハーブ二種類、オレンジ果汁とオリーブオイルをあわせてドレッシングを作る。それから背と腹それぞれを綺麗に切り分けて皿に盛り、作ったドレッシングをかける。

横から見ていたおかみさんの方が歓声を上げた。

「わあ……綺麗ですね。いい香りです」

小エビは殻をむき、背わたを取り、尻尾を斜めに落とし、身に切り目を入れて、一度小麦粉と塩をまぶしてから真水で洗い、水気を切ってハーブ入りの衣をつけ、カリッと油で揚げた。

皿にフライを盛り付けた瞬間、亭主の方がごくりと喉を鳴らした。

「さ、出来ました。あちらで御一緒に頂きましょう」

ロザリアがあくまでにこやかに言うと、夫婦もそろって一緒にテー

ブルに着いた。

「どうぞ召し上がれ」

ロザリアに促され、皆思い思いに取り分ける。

マークもクラウスも満足げだ。

「な、なんだこれ、うめえ！」その亭主の大声に、皆、笑い出した。当の亭主も決まり悪そうに顔を赤らめる。

「あんた、お詫びは？」

「わ、わかってらい！」亭主は席を立ち、頭を深々と下げた。

「……先ほどは御無礼申し上げました。俺は、こんな旨い料理は食った事が無くて、ただ魚が新しければ、それでどうにかなるだろうと言う程度のいい加減な了見で調理場に立っておりました。その……こちらのお嬢様の見事な腕前を拝見して、料理も作りようだと思知りましたです。つきましては、俺にもその料理をお教え願えませんか？」

「兄様、かまいませんよね？」

「色々教えて貰うと良いよ。このロザリアちゃんは、朝霧楼の食堂のメニューを考えたんだし、ボルで美味しいチーズ料理の作り方も指導したし、すごい女の子なんだよ。そうそう、お茶用のお菓子の作り方や気の利いた酒のつまみの作り方も教えてもらえば？」

「へええ、魚だけじゃなくて、チーズや菓子や酒の肴まで、色々御存知なんですね」

亭主は本当に驚いたらしい。

「ロザリアは身近な材料でも工夫して、色々美味しい物を作ってくれるのが特に凄いと思います」

「材料が色々そろわないこんな田舎でも、お嬢様なら色々お考え下さりそうですね」

おかみさんは目をキラキラさせている。

「私、洒落たケーキとかパイとか、あこがれているのですが作り方を教えてくれる人も居なかったんですよ」

「なるほどね、大丈夫だよ、おかみさん。ロザリアちゃんに任せて

おけば」

こうなると、後は皆が打ち解けるのは早かった。

地下の蔵から亭主秘蔵のシェリー酒は出るわ、おかみの好物の干しぶどうの蜜漬が出るわ、なかなかに気前が良い。

亭主はアフメトと言い、トラブゾンの網元で村長のルステムの甥だと言う。

おかみのデニズは、腕の良い海女らしい。海が荒れていなければ、大きな海老や美味しいあわびも取り放題らしい。旅籠を建てた資金の大半はデニズの稼ぎだと言う。意外にもこの夫婦は「かかあ天下」のようだ。所帯を持って、もう10年になるが一向に子宝に恵まれないのが悩ましい。

「やるこたあ、ちゃんとやってるっていうのに」とアフメトが酒の勢いで口を滑すと、デニズが頭をはたく。

「あの忌々しいデカイ岩がいけないですよ。きっと」デニズの言う所によると、海辺の『シャボンヌの岩』が砕け散ったら、子供が出来るだろうと言う夢を幾度も見ているのだと言う。

「夢占いのおばあさんに聞いても、神殿の神官様に伺っても、その夢は正夢で、あの岩が砕けない限り私に子が出来ないって言われるんです」デニズは『シャボンヌの岩』にごく近い場所で生まれて育ったため、岩の中に閉じ込められている力に影響されているらしい。「その、岩の中に閉じ込められている力って、どんなものか何か知ってる？」マークは真剣な顔つきだ。

「神官様のお話ですと、大層大きな力が封印されてるそうで、その封印を解くことができるのは村から遠く離れた場所からやってくる聖剣の主様あるじだそうです」

「ふーん。封印は解けるんだろうけれど、どんな力かはやってみなくちゃ解らないか」

「いよいよ明日ですかね、ロザリア」

「危ない砕け方をしないと良いのだけれど……」

夫婦は怪訝な顔をしている。

「ああ、僕ら3人ともそれぞれ聖剣の主なんだ。僕の剣が『ジルニトラ』、このクラウス君の剣が『パンテラ・レオ』、そしてロザリアちゃんの剣が『チチェック』だよ。じゃあ、明日、僕らは『シャボンヌの岩』に行く事にするよ」

「あ……私達もぜひお供させてください」

「岩が碎けるのなら、ぜひその様子を見せていただきたいんですが……」

夫婦もついて行く気らしい。

「クラウス君、この人たちも連れて行って良いよね？」

「はあ……でも、岩のかけらが飛ぶかもしれませんから十分気をつけて下さいね」

「ねえ、プロテスとシエルを同時にかけたら、大丈夫じゃないかしら？」

「そうですね。それならきつと大丈夫でしょう」

慎重派のクラウスの許可が出て、明日は5人で『シャボンヌの岩』に向かう事になった。

部屋割りは、どうやら男部屋と女部屋で分けたらしかったが、マークが一人部屋、ロザリアとクラウスが二人部屋になるように荷物を入れかえる。

「私とクラウスが許婚って、なかなかわかつては貰え無いわね」

「ロザリアが殿下を兄様と呼ぶから、余計にわからないかもしれないかもしれませんね」

「普段はこうして、クラウスと髪や目の色もあわせているのに兄弟には見えないかしら？」

「私のことも兄様と呼びますか？そうすれば、私のほうが本当の兄に見えるでしょう」

「そうね。考えてみようかな」

「今は、元の色に戻しましょうね」クラウスはロザリアの魔法を解

いた。このごろはこの程度の魔法なら、互いの魔法を簡単に解けるようになった。二人の力の親和性が増した所為らしい。逆に二人の力を合わせるのも簡単で、以前よりもっと威力を増したようだ。

「プロテスとシエルも、私達二人の力が合わされば、今までより更に強力に働くでしょう」

おそらく、帝国の首都オルテスで、ティボーを救うために初めて二人の魔法をあわせたときより、ずっと強くなっているはずだ。そういえば、オルテスのレオンハート邸の図書室で、遺言書と日記帳にプロテスとシエルをかけたが、あの日記帳は無事だろうか？

「きっと無事です。遺言書はこうして私がいつも持っていますしね」

クラウドが持つ遺言状を纏め上げた事を、父も母もティボーも、ユーグの魔法の所為ですっかり忘れてしまっているのだろう。

「私はクラウドを忘れたりしたくない」

「たどえそうなくても、私がきつと、ロザリアの記憶を取り戻します」

背中を撫でるクラウドの大きな手は、ロザリアの心細い気持ちを癒してくれるのだった。

第三十七章 シャボンヌの岩（前書き）

今回は、なぜかロザリアが熱を出しました。

第三十七章 シャボンヌの岩

目にしてみると、聞きしに勝る巨大な岩だった。黒光りして、まるで未知の金属の塊のようだ。

これが本当に砕け散るなどと言う事が有るのだろうか？

初めて目にした『シャボンヌの岩』は異様な存在感を持って、街道をガツシリ塞いでいた。

ロザリアが触れてみると、何か磁力か電磁波のようなものを感じた。この岩に閉じ込められたと言う聖剣シャボンヌが放ち続けている波動の所為だろうか？

先ほどから、3本の聖剣が異様な波動を放ち始めている。初めて聞く腹の底に響くような低い音程の波動だ。

「何だか、こいつらの騒ぎ方が異様だね」

「禍々しい感じを受けます」

聖剣チチェックはロザリアが元の大きさに戻して手に持っていたのだが、急に鞘ごと手を離れ、飛んで行ってしまった。

「どうするのかしら？」

岩の真上にポトリと落ちると、鞘から刀身が放たれ、強烈な桃色の光を放ち始めた。

すると、パンテラ・レオが後を追うように、宙に浮き、岩の周りを旋回始める。

更にジルニトラがうんと高い位置に浮き上がり、三つの剣の間で強烈なバイブレーションが発生した。

「ロザリア！」クラウドの声は危険を察知してか緊迫している。

「では、クラウド、お願い！」ロザリアの魔法発動の気配とクラウドの動作が滑らかに連動する。

「プロテス！」「シエル！」裂帛の気合と共に強固な結界が発生す

る。

次の瞬間、すさまじい爆音が響き、巨岩が砕け散る。膨大な量の砂埃と巨大な水柱が立った。

だが、結界はその場にいる5人を完全に守った。

3本の剣がそれぞれの主の下に戻ってきた。だが……聖剣シャボンヌは姿を見せない。

「どうしたんだろうね？」

「シャボンヌを呼び覚ますのは、チチェツクの役割ですよね」クラウスも考え込んでいる。

「私、チチェツクを持って岩の有った所に行ってみます。何かもう一つ別の性質の封印が施されているような気がしてならないんですが、様子を近くで見ないと、何とも言えませんから……」

ロザリアはチチェツクを抜き放って、構え、岩のあった場所に近づく。強い力を感じるが見る事ができない。

「臨^{りん}！兵^{びよう}！闘^{とう}！者^{しゃ}！皆^{かい}！陣^{じん}！列^{れつ}！在^{ざい}！前^{ぜん}！」素早く九字を切ると、チチェツクの力が瞬間的に強くなり、見えなかった力に作用したようだ。

「パリーーーーン」と言う高い音が響いて、何物かが砕け散った。すると、水色の球体の光が海から浮かび上がる。そして、ロザリアの視線の位置まで持ち上がると、その光が消え、中から淡い青色に輝く一振りの剣が姿を現した。

ロザリアがチチェツクを鞘に納め、その青く輝く剣に手を伸ばしたとたん、剣はいきなり上空へ飛び上がり、すさまじい勢いで遠くに霞むレオンハート峰の方角へ飛び去った。

「ロザリア！大丈夫ですか？」

クラウスが駆け寄ると、ロザリアはぐったりと体重を預けた。熱が

高い。

ロザリアを抱き抱えて戻ってきたクラウドのただならぬ様子に、マークも驚いた。

「どうしたんだ！」

「ロザリアが熱を出しています」

「急いで寝かさなくては」

「それは大変！」 旅籠の夫婦も大慌てで戻る。

清潔なベッドに寝かして、額を冷やしたが、他に何をどうしてやれば良いものか、クラウドも途方にくれる。

「これは一体どうした事でしょうか」女神にクラウドは問いかける。
「古い時代の強烈な怨念の波動を浴びたのじゃな」

「剣を閉じ込めていた目に見えない結界を作っていた力でしょうか？」

「そうだろう。ロザリアが異界の呪文で結界を無理にこじ開けた所為で、禍々しい力が降り注いだのだろう」

「あの中の剣はロザリアの呼びかけにこたえて目覚めたようでしたが、なぜ飛び去ったのでしょうか？」

「あの聖剣シャボンヌの主はこのオルトに今は存在しないからだろう。レオンハート峰の清らかな泉に自ら沈み、穢れを清め、真の主の出現を待つと言う事ではないか？」

「真の主はどなたでしょうか？」

「おそらくはロザリアに近いもので、まだ生まれ出でていないものだ」

「そうですか……。ロザリアが回復するには、どうすればよいのでしょうか？」

「お前がロザリアの回復を強く願いながら、抱きしめてやればよい」

「本当にそれだけでよろしいのです？」

「他の方法はおそらく無いぞ。お前がロザリアを想う気持ちが強ければ強いほど、回復も早まるだろう」

そこで女神の姿は消えた。

するとすぐに部屋のドアをノックして、マークが声をかけた。

「クラウス君、どうせずっと、ロザリアちゃんの看病をする気だろう？ って言うか抱きしめるんだよね。嫌でも女神様の意識が流れ込んできたから事情はわかった。だから、これだけでも食べて、君も添い寝してあげなよ。あ、食器は明日の朝までそのままで良いからね」

マークが作っただけらしい海老入りのガレットとフレッシュなオレンジはなかなか美味だった。ロザリアほどではないにしても、殿下の料理の腕は大した物だとクラウスは感心する。何より、人に振舞うタイミングがいつも絶妙だと思う。自分とロザリアの関係にいささか屈折した感情をあの方なりに持っているようだが、めったにそれを外には現さない。その自制心の強さもさすがだとクラウスは感じ入っている。

まだ日の高いうちから、ロザリアと共寝ともねするのは気が引けたが、女神の言葉やマークの薦めもあることだから意を決して、抱きしめて添い寝する。

ロザリアがチェックを振るって、聞いた事もない異界の呪文を唱えたのを見て非常に驚いた。が、それより更に驚いたのは、中から出てきた剣が飛び去ってしまった、その後ロザリアが発熱した事だった。

「あなたと居ると本当に驚く事ばかりです。どうか早く元気になって下さいね」

相変わらずロザリアの体温は異様に高く、鼓動はいつもよりかなり早い。

これほどの害を及ぼす『強烈な怨念』とは何か？ 一体誰が何を恨んで聖剣シャボンヌを封じたのか？ シャボンヌの主は『まだ生まれ出でていない』ロザリアに近いものだと言うが……

「ほら、こっちにいらっしやい！」何だか今よりも若干大人びたロザリアが誰かに呼びかけている。

場所は慣れ親しんだオルテスのレオンハート邸の庭のようだ。どうやらまたロザリアと同じ夢を見ているらしい。

「あゝい！」愛らしい子供の声がする。

「あんまりそっちに行っては危ないわ」ロザリアは駆け寄ってきた子供を抱き上げる。

「あゝい」

返事をするその子供は青い瞳に淡いブルーの髪、珍しい、と言うか見た事の無い色の髪だ。

非常に美しい面差しで、何処かロザリアに似ている。

「あっちの方に沢山お花が咲いたから、見に行きましょうね」

「あゝい」

この子はロザリアと自分の息子だろうか？最初の子供は娘で殿下の将来の『つがい』になるのだとばかり思っていたが、違うのだろうか？

疑問が解けない内に、場面が変化した。その青い瞳と髪の子供がすやすやと眠っている。

その枕元で青く光るものが有る。あの、飛び去った聖剣シャボンヌだ。

「ああ、この子がシャボンヌの主ですか」

自分が声を出してしまった所為だろうか、夢はそこで途切れてしまい、幾つかの謎はやはり謎のままであることを、クラウドは齒がゆく思った。

意識が戻ると、すでに真夜中になっていた。

ロザリアの体温は普通になったようだ。ただ、ひどく汗をかいたように、着替えさせてやらねばならない。

クラウドは起こさないように細心の注意を払って、着替えさせたつ

もりだったが、途中でロザリアは目を覚ましてしまった。

「ああ、すみません。起こしてしまいましたね」

「あの……私、どうなっちゃったの？」

「シャボンヌが飛び去った直後に高い熱を出して、意識を失ったのですよ」

「それで、クラウドが……着替えさせてくれたのね」

クラウドは本当に体を気遣ってくれただけなのだろうけれど、ロザリアにしてみればやはり恥ずかしい。

「随分沢山汗をかきましたからね。喉が渴きませんか？」

クラウドは窓辺に置いてあった水差しの水を薦めた。

「そういえば、カラカラかも」

「お腹はすいていませんか？オレンジが有りますが、どうです？」
「頂きます」

クラウドは小さな果物ナイフを器用に使って、オレンジの果肉を取り出して綺麗に皿に盛る。

「ああ、スプーンかフォークが無いなあ……」

「そこにある、クラウドが使ったので十分よ」

「良いんですか？」

「うん。ぜんぜん平気」

ロザリアはぜんぜん気にしていない風だったが、クラウドは気恥ずかしい。だが、嬉しいのも事実だ。

「随分高い熱でしたから、どうなるか心配でしたが、思いのほか早く引いて、本当に良かった」

クラウドの何処か熱のこもった視線が、今は何だか照れくさい。

「なぜ熱なんか出ちゃったのかしら？」

クラウドが女神に聞いた話をする、ロザリアは目を丸くした。

「あのまじないは、そんな特殊な物じゃなくて、結構地球では知ってる人も多いらしいの」

「でも、あのまじないの所為で急にチチェックの輝き方が変化したようでしたよ」

「それは私も感じたわ。苦し紛れに出しただけって言う感じだったのね。不思議」

そして、あの九字切りは未熟者がやると逆に悪霊に付け入られたり、寄り付かれたりすると言う逆効果もあると言い伝えられているらしいと話すと、クラウドは考え込んだ。

「……あのまじないのおかげで、確かに見えない封印が解けたのだと思いますが、思わぬ反作用が働くのかもしれないですね。危険性も高そうですから、今度何かあった時は必ず私を呼んで下さい。ロザリアに護身の魔術をかけてからなら、かなり危険は避けられるのではないのでしょうか？」

確かに、そうだ。なぜそれを考えなかったのだろう。

「本当にそうよね。勝手な事をやって、クラウドにも迷惑をかけて、ごめんなさい」

クラウドはロザリアの手を両手で包み込んだ。

「迷惑だなんて思いません。いつもロザリアのために何かやれる自分で居たいですし、ロザリアのためなら何だってやりますよ。でもね、熱が出たりすると心配でならないのです。わかってくれますか？」

「うん。ありがとう」

クラウドはふわりと優しい微笑を浮かべた。

「まだ半分、オレンジが残っています。剥いたら食べませんか？」
クラウドが剥いてくれると、ただのオレンジがとても美味しく感じられるとロザリアは思ったが、何だか気恥ずかしくて言い出せずに居るのだった。

第三十八章 岬の神殿（前書き）

謎が謎を更に呼び、やがて、キタイの都・ブルサへ向かう事になり
そうです。

第三十八章 岬の神殿

大轟音を立ててシャボンヌの岩が砕け散った際、付近の土地もかなり揺れた。

ただ、この辺りは殆ど人家もないので被害はたいしてなかったが、唯一大きな影響を受けた建物があった。

岬を見渡す丘の上の小さな神殿だ。

旅籠のおかみデニズはたびたびここに詣でて、神殿に一人きりで住んでいる年老いた神官に色々と相談をしていた。ロザリアが旅籠で寝込んでいた頃、デニズは老神官を訪ねていた。

「神官さまあ！ご無事でしたか？」

神殿の石柱は折れ、屋根は半ば崩れていたが、神官は無事だった。

「おお、おかみさん。お前さん方は大事無かったかね」

「うちに御逗留いただいている聖剣の主様方が、守りの魔法をかけて下さいましたから、傍で見えておりましたが怪我は全くしておりません。旅籠も無事です」

「そのような方々がおいでなのかね。わしもぜひ、お目にかからねば」

岩が砕け散った後は、マークの計画では分断されていた街道をつなぐ予定だった。

そこで、下調べに向かうことにしたのだが、奇妙な力の波動を感じる。

「（強い力だ。邪悪ではないが、力無き者には受け止めきれまい）」

「（邪悪ではない？本当か？では一体どんな力なんだ？）」

「（強いて言うなら聖剣の力に波動が似ている）」

「（未知の聖剣か？）」

「（わからんが、事に当たるときは、三人で協力するべきだろう）」
金の龍の忠告を待つまでも無く、ロザリアも熱が引いた事だし、三

人で様子を見に行こうとは思っていた。
正体不明の力が存在している状態では、工事を進める事もできないからだ。

魚の燻製とハーブと貝のスープにオレンジと言う朝食が済んで、マーク・クラウス・ロザリアの三人でこれからの作戦計画を練ろうとしていた矢先、デニズが一人の老人を連れて来た。

「この方は私がいつもお世話になっている岬の神殿の神官様です。
聖剣の主様方に、御報告やら御相談やら色々お有りとお伺って、お連れしたんですが……」

「ああ、かまわないよ。お話を伺おう。どうぞおかけ下さい」
マークはにこやかな表情で、椅子を勧める。

汚れた神官の衣装をまとったみすばらしい老人は、最初、気おされてオドオドした感じだったが、ほっとしたようで、話し始めた。

「私のおります神殿は、小さいですが、創設年代がいつかわからぬほど古く、それなりの由緒も御座いまして、日々村の人々の平安を願ひ、キタイ国の平和と繁栄を願って、長年過ごして参りました。
ところがある日……」

神殿から見渡せる海の底に、奇妙な銀色と赤の光が見えるようになったという。邪悪なものではないと感じられるが、非常に強い力で、常人には扱えないような性質のものではないかと感じたらしい。

「それが、あの、『シャボンヌ』の岩が砕け散ってから、その光が見えなくなりました、かわりに、澄んだ海の底に箱のようなものが見えるようになりました」

そして、今朝方、夢にその箱らしき物の蓋が開いた様子を見たという。

「水底にあるのは、細長い木の箱で、蓋が開くと中から一条の赤い光が飛び出し、ブルサ方面へ飛び立って行きました」と言うのだ。

「赤い光がブルサ方面へね……」

マークが珍しく気難しい表情になって、考え込んでいると、ロザリアとクラウスが心話^{しんわ}で語りかけてきた。

「（兄様、やはり、それも聖剣でしょうか？）」「

「（私もロザリア同様、聖剣の可能性を考えますが、しかし……）」

「（二本一度に同じ土地に封印されていると言う例は、僕は聞いた事が無い。どうなんだろうね）」

「（有りえない事でもないぞ）」金の龍がマークに語ると、その年老いた神官はガタガタ身を震わせた。

「おおっ、真^{まこと}の金の龍様の気配！あなた様は、ひょっとして！」

「（この老人は多少の事柄ならば感じ取る力はあるそうだな）」

「（そうだな、メイト）」

「（このあたりで身分を明らかにしておくか？）」「

マークは魔法を解き、一瞬金色の髪と緑の瞳を露にした。が、デニズが戻ってくる寸前に又褐色に戻す。

「お察しの通りの者だが、まだ、内密に願うよ。そしてこの二人もそれぞれ聖剣の主で、女神様の御言葉を直接に伺う事ができるんだ」

「その箱は、あなたがおいででの神殿から見えるのですか？」

「海の底に有るのですよね」

琥珀色の髪と眼をした美少女と美青年、二人は兄妹だろうか？それにしても強い神気だと神官は驚く。

「あ、はいはい。左様で御座います。神殿の有る岬のすぐ下の海にその箱が見て取れます」

「問題は、場所だよなあ……海の底って、かなり深い場所かな？」

マークが尋ねていると、人数分の茶を運んで来たデニズが興味深そうに口を挟んだ。

「海の底ですって？こちらの海の底なら、大抵の場所はわかっておられますよ。まあ、海女にとっては、自分の庭先みたいなものですからね」

「そうだね！おかみさん、海女なら海はお手の物だね」

そこで、今度はデニズも交えて、箱を手に入れる相談をまとめた。赤い光の件が真実とすれば、都であるブルサで何事か起こる前触れの可能性も有り、事は緊急を要する。

まずはともあれ現地調査だ、と言う事でマーク・クラウド・ロザリアに、海女でもあるデニズと話を持ち込んだ老神官の5人は、問題の箱が見える海を覗き込んだ。

「随分と澄み切った海だなあ。それにしても、かなり深いし、岩と岩にはさまれているような感じで、危なっかしくないか？」

「ただの箱でしたら、あのぐらいの深さも岩場もお安い御用で取ってこれますが、神官様のお話にあったような何やら神がかった曰くつきの品物だと、怖いです」

デニズは潜る事自体は平気らしい。

「おかみさんに防御と護身の魔法をかけましょう。そうすれば何かあっても、危険は避けられるかと」

「ああいう所によくいる大海老でも捕まえられたら、良い稼ぎになるんですけどね、箱じゃあね」

「じゃあさ、僕が金貨五枚払うよ。だから、行ってみてくれるかい？」

マークは金貨五枚をデニズに渡した。

「こんなに沢山ですか？」

「おかみさんに防御と護身の魔法をかけるけれど、普通の人の体には負担だろうから、仕事にならない今日と明日の手間賃って事で、どうだい？」

「お客様方がその魔法をかけてくださるんですね。承知しました」
デニズは身支度を整えに、急いで旅籠に戻った。

「さてと、君は結構ここは長いのか？」
マークは神官に尋ねる。

「もう三十年以上この神殿で過ごしております」

「神殿の元の姿は頭に鮮明に思い浮かべる事は出来るかい？」

「出来ます」

「なら、龍の力を借りる事が出来そうだな。じゃあ、目をつぶって、神殿が破壊される前の美しかった頃の状態を思い浮かべてくれ。思い浮かんだら言ってくれよ」

老人は神妙な表情で目をつぶり、一心に神殿の以前の姿を思い浮かべようとしていた。

「……思い浮かびました」

「メイト！力を貸してくれ！」

マークの声にこたえて、金色の光が老人を包み、それが一瞬で周りの神殿に拡散した。

「（できたぞ）」

神殿の屋根も柱も見事に復旧し、枯れていた泉の水が滾々（こんこん）と湧き出した

「まあ、素敵！」

ロザリアはうれしそうな声を出すと、チチェックで空を切る。

すると枯れていた花園の花が、いっせいに咲き始め良い香りを放つ。

「私も何かお役に立つでしょうか」

クラウスもパンテラ・レオを振るうと、今度は木々の花が咲き始め、空に虹がかかった。

「おお！」

奇跡を目撃した老いた神官は感涙に咽び、土下座して三人を拝んだ。

「大げさだよ。さあ、立って。君のこの場所に対する思いが強いから、こんなにもうまく行ったんだよ」

マークはニッコリ笑って、老人の手を取って立たせた。

「摂政殿下、私はあなた様のような方と同じ時代に在る事が出来て、真に幸せでございます」

「まだまだ、これからが本番だよ。ほら、おかみさんも支度が出来

たみたいだ」

そこには、海女姿であまりの神殿の変わりようにあっけに取られているデニズの姿があった。

「あの、これは一体？」

「金の龍の力と聖剣の力だ。じゃあ、今度はおかみさんの番だよ」
三人は一斉にデニズに向かって、手をかざした。そして、強烈な物理防御と魔法防御の護身魔法を施す。

「ふう……三人で一緒にかけるのは初めてだったけれど、うまく行ったな」

マークは額の汗をぬぐった。

「私達、ここでちゃんと見張ってます。何か危険があったらおかみさんはまず、逃げる事を考えて下さいね」

「そうですよ。無理は禁物です」

ロザリアとクラウスの言葉に、デニズは感激した。

「きっと大丈夫です。では、がんばって潜ってきますね」

デニズは無事に箱に到達し、それを抱えて海面に浮かんだ。

鋭い磯笛が響く。

「おかげさまで、無事ですよう！今お持ちしますね」

「今日は海老や鮑もあきらめて、上がって来ておくれよ」

マークの呼びかけにデニズはにこやかに手を振った。

皆が固唾を吞んで待っていたその箱は、案外と平凡な見てくれの細長い木箱だったが……

「おや？開かないな」

マークは首をかしげる。

「もしかしてあの、ボルで見た後の剣『ヴィーヴル』に関わる物であれば、この箱を開けるのはロザリアと言う事になりませんか？」
クラウスも色々と考えをめぐらせているようだ。

「チチェックは後の剣『ヴィーヴル』を呼び覚ます、って書かれていたつけ。じゃあ、ロザリアちゃんが開けてみなよ」

「はい」

「ちょっと待ってください、その前に護身と防御の魔法をかけておきましょう」

慎重派のクラウドらしい申し出をロザリアは素直に受ける。また熱でも出れば厄介だ。

「では、開けますよ」

ロザリアが箱を開けた途端、柄も鞘も赤い剣が姿をあらわした。光り輝く実に美しい剣だ。

「これは、やはり後の剣『ヴィーヴル』なのでしょうか？」

このクラウドの言葉に反応したかのように、剣は勝手に箱を飛び出して、空中高く跳ね上がり、神殿の上を幾度か旋回していたが、急に停止して方向をブルサ方面に定めると稲妻のようなスピードで飛び去った。

「神官さんの夢は、この事を予言していたのですね」

「飛び去ると言う事は、やはり持ち主は今のオルトにいないと言う事でしょうか」

「それにしても、ブルサで何か起こるんだろうか？」
マークは気がかりだった。

この直後、ブルサの巨大な貧民窟クシャダスで、飛来した赤い剣が大変な騒ぎを引き起こした、と言う事実を三人が知るのは、しばらく後の話である。

第三十九章 クシャダスの異変 (前書き)

だんだん、話は加速してきます。一行はいよいよブルサへ！

第三十九章 クシャダスの異変

岬の神殿での一連の出来事が有ってから三日目、早馬がやって来た。マークの元にブルサでの一大異変を知らせる報告書を持ってきたのだった。

報告書を読み進めるマークの表情は険しい。

「これは……急遽クシャダスに向かう必要が有るな」

マークは読み終えた報告書をクラウスとロザリアにも見せた。

ブルサの巨大な貧民窟クシャダスは「呪われた者の町」或いは「穢れた町」などの異名を持ち、見苦しく不潔な町並みが見渡す限り広がっているような場所だ。

建物は恐ろしく古い。

かつては宮殿の一部であったものが「神の呪い」により穢れたのだともいう。

事実、この巨大な貧民窟とブルサの王宮の直線距離は驚くほど近い。とてつもなく分厚くて巨大な、台座のような塀と言うか壁と言うかそういったものが、神聖で祝福された場所とされる王宮と穢れた呪われた町を完全に仕切っている。

「神の呪い」と言う言葉だけが一人歩きしているが、その由来も事情も今はまるで伝わっていない。

考えてみれば、実に奇怪な話だ。

このクシャダスに生まれた者は生れ落ちたその瞬間から「穢れて罪深い」とされるが容姿は奇妙なほどに整った者が多く、娼婦や男娼向けの人材の宝庫としても知られている。外の世界で経済的に成功した者も、そうした「罪深い」業界で生きるものが大半であったため、ますます「穢れた町」として広く世に知られるようになるとい

う悪循環に陥っていた。

クシャダス出身の娼婦が富豪や貴族・王族に身柄を買い取られて、落とし胤が生まれても「クシャダスの種はクシャダスへ」追いやるのが普通である。中には良心的な実の「父」によって何がしかの金品を受け取ったり、毎年決まった額の手当てを与えられたりする者も居るが、そうした連中は「差別されていながらも高貴な身分の血筋」であると言う自覚からか、強烈にゆがんだ自尊心と破滅的な生活態度の者が多いと言う。

「クシャダスの種」たちは、その隠れた血脈やネットワークを梃子にして、さまざまな種類の非合法的な経済活動を行っている模様だ。賭博・麻薬などの違法薬物取引・人身売買・盗品の売買・請負殺人などが主にあげられるであろうか。

さて、クシャダスの街の現実の姿はと言うと、恐ろしく不衛生な匂いが立ち込め、あちこちに吐しゃ物や排泄物が散らかり、古めかしい建物に多くの人間が住まうにもかかわらず、夜はほとんど明かりも見えず、昼は人の笑い声はおろか話し声すらほとんど聞こえないと言う奇妙に静かな状態に有る。時折怒号が響き、嬌声が聞こえる事が有るが、大抵は国法を無視して営業されている麻薬の取引所か娼婦宿から聞こえて来るようだ。

この街の子供たちは、親や周囲の大人に虐待される事がほとんどで、皆、早くから夢と希望を失い、目に暗い影を宿し、日当たりが悪く劣悪な衛生環境に有るため、ごく幼い内に命を落とすものが多い。

マークは「クシャダスの種」でありながら珍しく官吏登用試験に合格した若者二人に、この地区の教育と福祉について研究させ、対策を講じてきたが、なかなか厄介ではかばかしい結果は出ていない。まずは街の衛生環境を改善するため、衛生的な水を確保できる水場と公衆便所をいくつか設けたが、官吏の巡回が手薄になると水場はすぐに汚され、便所はいかがわしい取引などに使われると言う具合

である。

クシャダスのすぐ外に「誰でも入学できる小学校」を設け、無償で昼食を食べさせるようにしたが、反応はいまひとつで、いまだに器量良しの子供は女衞や人買いに売り飛ばされる事が多い。

あの、シャボンヌの岩が吹き飛んだ翌日に飛び去った謎の赤い剣は、王宮とクシャダスの境界線の頑丈な台座に飛来したらしい。一日中奇妙な甲高い音を発し続け、王宮も大騒ぎになったと言う。

安全のため、その台座から王宮の皆をなるべく離れた場所に誘導し、クシャダスの側の顔役達にもその旨を伝達し、一応大半の人間が台座から可能な限り離れたかと思われた夕刻になって、凄まじい轟音と共にその台座が粉々に崩れ、全て近くの海に飛び去ったと言う。そして、王宮からもクシャダスからも良く見える海の或るポイントに、その粉々の台座が集結したかと思うと、見る間に巨大な角柱を形成したと言う。

「そして、その角柱の上で赤い剣は強い光を放ち続けているのですね？」

「報告書によればそうだねえ」

「それにしても、王宮とクシャダスの境界が壊れてしまうなんて、どういう意味が或るんでしょう？」

「元はクシャダスも王宮の一角だった、と言う事を示しているのかもしれないな」

「クシャダスの建物は不潔に汚れてはいても、基本的な作りが王宮と同じだそうですね。以前ティボー先生と御一緒に各地の伝承を調べていた時に読んだ書物で知ったのですが」

「ついでに言うなら、王宮もクシャダスもキタイがまだ帝国領であった頃からの建物が大半だ」

「問題は、赤い剣は何のために光っているかと言う事です。兄様はどうお考えですか？」

「大真面目に、后、いやはつきり言えば、僕の番がもうすぐこのオルトに出現するって事かな。もっとも、それだけでもないんだろっけれど」

「ロザリアが母親になるのはまだ先だと思いますが……」クラウスの表情は険しい。

「だが、後数年だと言う事だろう。器をなくした龍が生き延びるのは最大で十年程度とされるからね」

「チチェックは後の剣『ヴィーヴル』のふさわしき主を探し当てる力を持つ。それがたとえ遠き異界であっても飛来して、オルトに迎え入れる助けとなる……でしたっけ」

ロザリアはゼキの家で見た覚書の文章を思い返していた。

「ここは、やっぱり、チチェックとその主が出向く必要が有りそうだ」

そのマークの言葉にクラウスは眉をひそめる。

「クシャダスと言う場所が、危険であることに変わりないのでしたら……」

「私が危険な目にあうのをクラウスが心配してくれるのはわかるけれど、やっぱりここは行って実際にその巨大な角柱と赤い剣を見てくる必要が有ると思うの」

「そうだよ、クラウス君。確かにクシャダスはいまだに物騒な場所だと思われるが、王宮側からだって、その巨大な角柱は確認できるんだ。何なら王宮側から角柱の場所へ行くっていう手も有るだろう？」

「それは、そうかもしれません。今の王宮の警備体制はどうなのでしょう？」

「一応仮の堀をめぐらせて、兵を配備して警戒には当たっているし、神官が魔法の結界も張った事は張ったはずなんだが……そうだなあ……」

「兄様、何が一番気がかりでいらっしゃいます？」

「いわゆる『クシャダスの種』の中に強い魔力を持った人物が混じ

っている可能性は、有るな」

「そうした人物が何か不穏な行動を取る可能性は、高いのですか？」

「クラウス君も知っての通り、彼らは犯罪的な組織の重要人物である可能性が高いからね。王宮側と正面切って事を構えるとは思えないが、神官が張れる程度の結界なんて、魔力の強い人間なら破る事もたやすいだろうからさ、油断できないって事さ」

「チチェックの力を借りれば、そういうクシャダス側の人との意思の疎通も容易くなりませんか？」

「なるほど、チチェックを持って歩いていると、人との話が上手くまとまりやすいような気がするって、以前もロザリアは言ってたね」

「まあ、可愛いロザリアちゃんを見て嫌な顔する奴なんていないけどさ、ただ、人買いや女衒の親玉も居るから用心に越した事は無いよね」

「人買いに女衒……」クラウスは苦虫を噛み潰したような表情になる。

「まあ、彼らも儲ける為にやっている事だから、ロザリアちゃんの安全を金を出して買う事だって出来ると思うんだ」

「マーク兄様、沢山のお金が私の安全のために必要なんで、申し訳ないです」

「何、ロザリアちゃんの安全のためなら安いもんだ。幸い僕の個人的な資産は今の所、オルト一いちなんだしね。まあ、僕に任せなさいって」

「それは、鉄鉱山をはじめとする新しい事業の収益で出来たものですか？」

「そうだよ。ロザリアちゃんのアイデアでまた新しい事業を展開すれば、また金が入ってくるわけさ。だから、クシャダスの犯罪組織の親分連中に払う一時的な金なんて、たいした問題じゃないのさ」

「ならば、それはそうとして、いつブルサに向かいますか？」

クラウスの問いにマークはしばらく考え込んでいたが、一つの結論

に達したようだった。

「このトラブゾンの特産品の開発の計画は中断する事になるかな。どちらにせよ、この村の主だった連中と話もしておきたいね。この半島を一周できるように街道をつなぐ工事はすぐに入りたいし……」マークは行動を決めると素早かった。

その日のうちに旅籠のおかみデニズや老いた神官の力も借りて、ほぼ全員の村人を岬の神殿に集めた。それに際してマークは魔法を解いて、自分の正体を明かし、村人の前で説明した。

「出来るだけ速やかにこの街道をつなげ、更に幅を広げて整備するとお約束します。また、このトラブゾン独自の特産品の開発の件ですが、デニズさんに幾つかの魚加工品のアイデアをお渡ししておきますので、参考になさって、皆さんで工夫して下さい。アルビの『朝霧楼』はいわば私の身内のようなものでして、味や料理法について何かご相談があればいつでも応じるように話を通しておきます。また、こちらの『通行証』を網元さんにお預けして置きますので、直接私に伝えたい事が有りましたらブルサの邸の方においで下さい」

それを聞いた村人達は、ざわめく。面白い事が始まると皆が感じたらしい。

更にマークは村人全員に行き渡る様に金貨を一枚ずつ渡した。

「皆さんそれぞれ、この金を活用して美味しい特産品を考え出してみて下さい。自信作は一度、朝霧楼の連中に味見をして貰いましょう。ブルサでも十分売れると判定される物が出来ましたらお知らせください。私も、こちらの聖剣の主で料理名人のロザリアちゃんと、經理に詳しいクラウス君と相談の上で、美味しい特産品をキタイ中に売り出す作戦を考え、皆さんのお手伝いをします」

村人は拍手した。

「さて、個別のご質問は、今から、どうぞ。出来る限り、誠実にお答えしますよ」

後は、相談会と言うより、スターのサイン会のようになって、皆着ている服や手持ちの紙にマークのサインと手形を押してもらいたかった。何しろ「金の龍」様が宿る公爵様は、このあたりでは生ける福の神と信じられていたからだ。ある老女などはひれ伏して拝み、涙を流して「これで思い残す事はございません」とまで言う始末だった。

何はともあれ、トラブゾンの特産品開発に一つのめどが立ったのは確かかなようだった。

「さてと、これでブルサに行けるかな？」

出発は明日と言う事に決まって、その晩はデニズの旅籠に村の人間が入れ替わり立ち代りやってきて、にぎやかな酒盛りとなった。ロザリアも色々な料理を振る舞い、大いに皆を喜ばせたのだった。

第四十章 エスコバル公爵邸（前書き）

舞台はいよいよ、移りました。これから色々重要な出来事が起こります。

第四十章 エスコバル公爵邸

海辺の小さな村から、都までは途中の宿場で幾度か馬を換えてひたすら走っても、三日はかかる。

まだ、幼いロザリアの体に過大な負担はかけられないと言う判断で、少し回り道では有るがまず、アルビに取って返し、そこから四頭立ての馬車に乗り換える。エスコバル公爵家の馬車でオルトの乗り物としては最大限乗り心地に配慮されたタイプであったため、馬の背に揺られるよりは格段に楽なはずだった。

それでも、地球の感覚で言うところ未舗装の道路を乗用車でひた走る程度の疲労感はあるわけで、食事と睡眠以外は走りっぱなしの四日間、なかなか辛い。

エスコバル公爵としてのマークも、これほどきつい旅程は稀で、領内の巡視も、もっとのんびり行ってきただけに、さすがにゲッソリとする。

「（もう少しお前達の力が強まれば、瞬間移動も可能だがな）」金の龍が言うには、今までに行ったことがある場所同士ならば瞬間的に移動しうる能力を三人とも秘めているはずだと言う。

「（更にその力が強まれば異界であつても、訪れた事の有る場所にならば瞬間移動出来る）」と言うから、なかなか凄い。

「と言う事はメイト、僕がアメリカの元の自分の家の辺りに行きたいとか、お祖母ちゃんグランマの墓参りがしたいとか考えても出来るようになるって事かい？」

「（あくまでオルトの存在として異界を訪れる事が出来るだけだな）」

「地球に居つくのは無理なのか」

「（今でも地球に戻りたいのか?）」

「ちょっと様子が見てみたい。オルトよりも大きくて、科学や技術が発達しているからね。あくまでオルトの者として地球を訪れる感じじゃ無いとまずいんだろうな。時間制限でも有るのか？」

「（特には無いはずだが、自分自身が地球のものかオルトのものかあやふやでは虚空に砕け散るらしい）」

「じゃあ、僕は……砕け散るかもしれないな」

それが、とりもなおさず地球人マーク・ゴールドとしての彼の本音で有るとクラウスは感じる。大貴族であり、オルト中に名を知られた才人で優れた為政者でも有り、もうすぐ子供も生まれようと言う人であっても、それほどに生まれた世界は恋しいものだろうか？地球とはさほどに素晴らしい所なのか？

摂政エスコバル公爵としてよりも、地球人マーク・ゴールドとしての意識や感情が大切なのか？

クラウスは自分の膝の上に身を伏せて眠るロザリアの髪を掻きながら、ロザリアの内に存在する京子の魂の有り様が心配でならなかった。

「ロザリアちゃんと、地球人としての京子さんの魂は分離できるらしい。その点は僕とは違うよ。君達の結びつきが今より一層強くなつて、僕の番を生み出してくれる頃になったら……の話らしいけどね」

クラウスの考えた事は全て、そのままマークに伝わってしまう。そして逆もまた然り。

「殊更に意識のブロックもしづらだろうか？だったら、ロザリアちゃんみたいに眠ってしまうのが一番疲れない良い方法だ」

「魂の分離など出来るものでしょうか？京子様の魂が地球に戻られたら、ロザリアはどうなるのやら」

その確かな答えは、この大学者で賢人である摂政殿下にもわかりはしないのだ、と言う事は、伝わってくる。

「やれる限りのことをやって、自分なりに正しいと信じることを成し遂げる以外に、解決策はなさそうだよ」

「確かに今はまだ、わからない事ばかりですね」

「今の所確かなのは、何かと言うと暴発を繰り返して来た銀の龍の力を、もっと穏やかに安定した状態でオルトに存在させる方法を探り出す必要が有ると言う事だろう」

銀の龍はなぜこれまで、暴発ばかり繰り返してきたのか？その暴発を封じるにはどうすればいいのか？

自分とロザリアの間に将来生まれる娘が銀の龍の理想的な器になる
とは言うが、ロザリアが密かに心配しているように、魂が未熟な幼
い子供の内から強大な魔力を帯びたりしたら、何か災厄を引き起
さないだろうか？

クラウスもそのロザリアの心配が現実のものと成りはしないかと、
心配になってきた。

「幼い魂に銀の龍の暴走を制御する力など、有るでしょうか？」

「君達の未来の娘さんの中に、力有る魂が宿る事になるのかもしれない。そしてやがて、金の龍の器である僕と、一対の番^{つがい}になると言う事じゃないか？だからこそ『チチェックは後の剣ヴィーヴルのふさわしき主を探し当てる力を持つ。それがたとえ遠き異界であつても飛来して、オルトに迎え入れる助けとなる』と定められているのではないだろうか？」

「殿下が仰るのは、異界に銀の龍の器にふさわしい魂を迎えに行く
と言う意味ですよね？」

「まあ、あくまで、仮説と言うか推測に過ぎないけれどね」

京子の魂は今現在はロザリアと同化しているように感じられる。しかし殿下や金の龍、それに女神の話をあわせみると、ユークが自滅するか自分とロザリアの娘が産まれるかして、銀の龍の問題がひ

とまず解決できれば、地球に帰ると言うか、元の家族の身近に転生したいと願っているらしい。そして、いずれはその願いが実現する公算が強いと殿下も女神も見ているらしい。

「京子様の、地球に残した御家族への思いは強そうですね」

「そうだね。だから、色々な意味で僕とは違うんだろう。しかし……」

マークが言いよどんでいるうちに、クラウドも強烈な眠気に誘われてしまったようだった。

「僕が考えている通りなら、答えは一つしか無いような気がするけどな」

そのマークの呟きを、クラウドもロザリアも聞いてはいなかった。規則正しい馬車の揺れに誘われて、マークもやがて眠ってしまう。

ブルサのエスコバル公爵邸に到着したのは、もう夜の闇もかなり濃く立ちこめた頃だった。

「ほらほら、二人とも、ついたよ」

えらく気軽な口調で促されて降り立ったそこは、壮麗な宮殿と言った佇まいの建物だった。

「お帰りなさいませ」

執事と言うか、家令と言うか、そういった立場の男性がずらりと居並ぶ使用人を従えて、恭しく迎えた。

「おや、ユスフ、随分と気張ったね。僕の家族同然の二人だから、もっと気軽にしてくれてよかったのに」

「御主人様と御家族同然の尊き方々と伺いまして、このようにさせていただきますました」

「お前らしいね。わかったよ。みんな！こちらがロザリアちゃんとクラウド君。僕にとって本当に大切な人たちだから、皆もそのつもりでいてくれ。二人は許婚同士で、深く愛し合ってるんだから、邪

魔しないですよ」

「殿下！」「兄様！」

「ま、そう言う事。二人とも魅力的だから、このぐらいはつきり言っておいたほうが、後々厄介が起こらなくていいだろう」

どう反応してよいのか困惑する二人に、助け舟を出すような形で

「お食事の支度が整っております」と、ユスフが言った。

「先に一風呂浴びるかな、ね、そのほうが良いよね？」

言葉を聴かなくても二人の状態や気分がわかってしまうのは、こうした場合は便利だ。

「こちらでございます」

年配の物腰の穏やかなメイドに案内されて来た部屋は、ベージュ色と抑えた金色を主体に調度が整えられた豪華な部屋だった。部屋の真ん中に巨大な天蓋つきのベッドが有り、左右それぞれに男女別の衣裳部屋が有り、小さいが落ち着いた感じの二人で使える書斎や、かなり広い地球のシティホテルの『バスルーム』風の湯殿が有る。機能にこだわっていつでも給湯・給水が可能らしい。シャンプーや入浴剤の用意まであった。

着替えを手伝うと言われたが、断って、人払いをして、二人でまず風呂に入った。後で、髪の毛の手入れだけ頼みたいと言うと、

「お風呂がお済みになりましたら、これを鳴らしてお呼び下さい」と言われて、呼び鈴を渡された。

普段でも、この呼び鈴一つで部屋の担当者がすぐにやってくる事になっているらしい。

「本当に、地球の便利な『バスルーム』みたい」

バラの入浴剤を浴槽に入れたら、バラの花びらが浮き甘い香に包まれる。湯の色がピンク色に変化した。

「面白いものですね。他にも色々種類があるみたいで、楽しめそうです」

浴槽は二人が入っても余裕の広さだ。アルビの朝霧楼の豪華な湯殿とはまた違って、明るく清潔感が有る。

「このお邸には、結構長くお世話になるような気がする」

「確かに、私もそう感じますよ。邸の主が摂政殿下の所為か、なんとなく安心感が有りますね」

今日の所は悪戯抜きで（それでも、軽いキスの一つや二つはあったが）手短に風呂を終えて、服を着たところで呼び鈴を鳴らす。

先ほどのメイドともう一人の女がやってきて、ロザリアの髪を乾かし、緩やかに編みこんで纏め上げ白い花を飾った。淡いピンク色の口紅をさし、控えめに眉を引く。二人とも手の爪を綺麗に磨いてもらった。

「艶やかな黒い御髪おぐしですね。本当に女神様のようでいらっしやいます」

「このぐらい控えめな御化粧のほうが、ロザリア様の愛らしさを損なわずにすむかと思えます」

マークが見立てていたらしいロザリアの衣装はどれも美しかったが、今日は薄桃色の艶の有る素材で出来たあつさりとしたデザインのものを選ぶ。クラウスの濃紺の地に金糸で刺繍が入った衣装も顔映りが良かった。

「まあ、お二人とも良くお似合いで」メイドたちは満足げだった。

大食堂でマークは待っていた。

「ちょっとばかり、面倒くさいけれど、まあ、我が家に二人を迎える最初の日のセレモニーだから」

確かに、国賓を迎えるような豪華で格式ばったディナーであった。

「料理は熱々がいいよね。こういう調理場から離れた無駄にでかい部屋だと、何かと不便だから、普段は調理場に近い小食堂で食べるか、自分の部屋にちょっとしたものを持ってこさせるかしてるよ」

「（それに、味自体いまひとつだよな。ロザリアちゃんの料理を食

べなれちゃうと、あちこちアラが目につくが、調理場の担当者は頑固者でね。どうしたもんかな」

使用人たちに聞かせたくない話は『心話^{しんわ}』でする。

「(材料はそれなりに真面目に吟味されていると思いますけれど、長旅の後に食べるものとしては、もう少しあっさりと軽めの仕上げをしてほしい所ですね)」

「(酒は文句なく良いですね。殿下がお選びになったのですか?)」

「そうそう。僕が校長をやっている農業学校の実習で作らせ始めたものだが、うまく出来ているだろう」

無言の時間が続いた後にいきなり主人がしゃべりだしたので、食堂につめている給仕やメイドは奇妙に感じた。

そんな中で、家令のユスフだけは以前『心話』がいかなるものか、主人から話だけは聞いていた。

静かに三人の様子を観察していたが、ひよっとしてこの二人の客人は金の龍を宿す主人と釣り合う『力』の持ち主なのかもしれないと思いついた。

その、ユスフに向かって、主人が言う。

「そうだよ、ユスフ。お前が思った通りさ。でもまあ、一応まだ、内密に頼むよ」

ユスフは無言で恭しく礼をした。

第四十一章 キタイ王家の事情（前書き）

相手の事情をわかりすぎていると、どう反応すれば良いのか、かえって困る事って有りますよね。

第四十一章 キタイ王家の事情

「今日は王宮にも行くけれど、クシャダスの様子も見たい。まずは、国王陛下にお会いするからそのつもりで居てくれ」と、朝食の際にマークに言われた。

「それなりの格式有る服装で伺う必要があるでしょうが、クシャダス訪問には不便でしょうね」

「男の礼装はさほどでも有りませんが、ロザリアのドレスは動きにくいでしょう」

マークはその点も考えてくれたようで、

「ちゃんと小間使いに動きやすい着替えを持たせて、供をさせるように手筈は整えた」

実に行き届いたものだど、クラウドは毎度のことながら感心する。

朝の光がさす花園に囲まれたテラスで、新鮮な果物とオムレツ・パンケーキ・チーズの盛り合わせと言ったメニューの朝食は悪くなかった。適切なタイミングで注ぎ分けられる薫り高い紅茶は食欲をそそる。

「ユスフの給仕は悪くないだろう？この邸の経理の責任者で、全ての使用人の取りまとめ役だから、目下の者に任せれば良いようなものの、どうも他のものではこう、しつくりと来ない」

「ありがとうございます」

「別に褒めたんじゃないよ。部下の指導が下手だと言ってるわけだ。お前はもっと重要な仕事を色々抱えているんだから、早くこの役目は誰かに譲るべきだと思う。さもないや、前に説明した、地球式のセルフサービスで十分だ」

「はあ……」

「まあ、お前の気持ちはありがたいとは思うし、お前の淹れる茶は文句無しにうまい。だがね、お前だって体は一つなんだから、もっ

と考えてみるよ。な」

「……」

どうも長年の習慣で朝一番に御主人様のお顔を見ながら、茶を淹れないと自分も仕事の気合が入らない。それにお茶を召し上がる様子で御主人様の御考えや御気分を察してきたのに、それが出来ないとなると、かなり困る。御主人様は聡い方だから、毒殺の危険も未然に察知されるだろうが、それでも自分は自分なりに最善を尽くして食事の最終チェックをして置きたい。万が一にも何か起こらないという保証は無い……

と、まあこんな具合にユスフもユスフで、色々思う所が有ってやっている事なのだ。

マークには、こうした思いの全てがはっきりわかってしまう。と同時に、クラウスやロザリアにも伝わってしまうのだが、そこまではユスフのあずかり知らないことだった。

「わかったよ。お前がそのほうが仕事がやりやすいのなら、今のままでもかまわない」

そんなわけで、当分は今の状態が続く事になった。

朝食後、皆礼装に着替えて、昨日まで乗っていた物よりもずっと華やかな馬車に乗り込む。車体は落ち着いた、溜め塗り色とでも言おうか深みのある赤ワインのような地に、金で艶やかな装飾が施されている。内装は深みのあるモスグリーンのベルベットと金の刺繍が基調になっていた。小柄で元気の良い小間使いも供をする。彼女は生まれてはじめての王宮行きに大張り切りだ。

キタイの王宮は帝都オルテスの宮殿ほどではないが、なかなか規模が大きい。エスコバル公爵邸はどちらかといえば「瀟洒^{しょうしや}」という言葉が当てはまるのに対して、この宮殿は「雄渾^{ゆうこん}」と言う風情だ。帝都の宮殿に存在していたような、冷ややかで突き刺すような悪意の波動は感じられない。ロザリアは気分が楽になった。

「ロザリアちゃん、今日も凄くかわいいよね。クラウド君、そう思うだろ？」

「殿下のお見立てのこの深紅のドレスは、本当によく似合いますね。大人びて見えます」

何を着てもロザリアは可愛らしくて美しいが、本物のルビーを刺繍に配した豪華なドレスはロザリアをいつにもまして気品高く見せている。金とダイヤで飾られたロケットペンダントの中には、うんと小さくなった聖剣チエックが納められている。ロザリアが相当な剣と魔法の使い手だとは、見破られる事はまず無さそうだった。

当初、太ももにホルスターを取り付けてチエックを納め、ドレスのスカート部分で隠すと言った方法をマークは考えていたが、その扇情的なイメージからクラウドが良い顔をしなかった。

「確かに、取り出すときのチラリって言うのが問題か」

マークはスパイ映画やアニメの妖艶なキャラクター達を思い返していた。大人になったロザリアになら、本当に似合いそうだ。

「今でも十二分に魅力的な美少女キャラだけだな」

そんな空想をするマークに向けられるクラウドの視線は、いつも突き刺すように鋭い。その視線を浴びるとマークも我に返るのだった。

マークにとってみれば、勝手知ったる我が家も同然のキタイの王宮だが、一応初めての賓客連れなので、侍従に先導されて長い回廊を抜ける。

「(庭を抜ける最短コースが有るから、後で教えるよ)」

「(随分近道になるのですか?)」

マークとクラウドの『心話』のやり取りは侍従には全く伝わっていない。内緒話には好都合だ。

「(三分の一程度の距離かな。まあ、庭園の花の風情を楽しんで貰うには正規ルートの方が良いけどね)」

「(ロザリア、歩くペースが早すぎて、辛く有りませんか?)」

「(ちよっとせわしい感じかしら。大丈夫だけど)」

「あ、君、小さな姫君の歩調にもっと、あわせ給え」マークが一言言うのと、侍従は恐縮して歩調を緩めた。

「（兄様、大丈夫です）」

「（このぐらいなら、良いかな？）」

そうこうする内に、謁見の間に辿りついた。

礼法に従って国家元首に対する型どおりの挨拶を行うと、すぐに椅子が用意され、楽にして話をするようにと言われる。

キタイ王ファジルは、目も髪も褐色に変えたときのマークと実の親子だ、と言っても通りそうな風貌の人物だった。瑞々しい好奇心と豊かな知性を感じさせる目の光と身に備わった気品と威厳から、おそらく摂政殿下はこの方に様々に影響されて今のようになられたのだと、クラウスは感じた。すぐ隣に座る王位第一継承者のイゼル王女は美しいが、どこかその笑顔に寂しげな影を宿している。マークと朝霧楼のハリカとの間に、もうすぐ子が生まれる事を知っている所為かもしれないとロザリアは感じる。

「陛下、この二人はこう見えて女神もお認めになる仲睦まじい許婚同士でして、私同様通常の人間の寿命の枠を超えているのです」

「ほおお、龍の力ではなく、女神様の力で不老不死の存在と成り得たのかな。確かに並々ならぬ力だ」

ファジル王は自分で魔力を行使する能力は無いが、他人の『力』の存在と大きさを感じる事はできる。

一方イゼルは、ロザリアの外見と大人びた雰囲気^{ツガイ}が噛み合わず、不思議に感じているようだった。

「ロザリア姫は御幾つなのかしら？ お小さい人のような外見なのに、大人の雰囲気がお有りね」

「ロザリアちゃんのオルトでの年齢は七歳ですが、異界の知恵有る御婦人の魂を宿して居るのです」

そのマークの説明を聞いてイゼルは納得できたようだった。

まさか、マークも将来ロザリアの産む娘が自分の番となるなどとい

う話は出来ない。ましてや、イゼル自身の寿命はあまり長くない事など言えるはずも無い。

改めて、マークの密かな苦悩を目の当たりにして、ロザリアもクラウスも痛ましさに胸が一杯になった。

「おや、客人方はどうされたかな？何か辛い事でも思い出されたか？」

ファジル王は中々に鋭い。

「帝国の大貴族でありながら、今は故国に戻れぬ立場です。王の御様子を拝して、故国の家族を思い返したのであります」

マークはそう言い繕ったが、ファジル王がその言葉を額面どおり受け止めなかったのは明らかだった。

「人の身に有らざる存在は、人知れぬ悩み苦しみも多いのであろうのう。兩人とも、このキタイを故国同様に思って過ごして欲しい。

王位に在るとは言え、わしは唯の人間だが、このエスコバル公爵は金の龍を宿す不老不死の賢者だ。真の兄とも思っ頼るが良い。きっとそなたらの良い助けとなろう」

王の表情は穏やかだった。ふっと、表情を和らげ冗談めかしてこんな事を言った。

「それにしても、ロザリア姫に許婚が居てよかった。後数年で光輝くような美女となるだろうからな。公爵にこのイゼルをどうにかして娶わせたいというわしの希望は、まだ、見込みがあるようだ」

「陛下……」

「まあ、良い。お前の事情は聞いている。一区切りついた所で、イゼルの事も考えておいて欲しい。これは一人の父親として甥であるお前に頼んでいるのだ」

王の言う『事情』が、もうすぐ迫っているハリカの出産を指すのは確かだった。

「お父様、どうか、あまりマルクを困らせないで下さい」

イゼル王女は困惑した表情を浮かべている。

「イゼルも余り欲の無い事ばかり言っていると、また機会を逃すぞ」
ファジル王が娘の幸福を願う気持ちは紛れも無い本物だった。

「伯父上、どうか、ご安心下さい。私も私なりに、真剣に考えておりますから」

その声は心なしに震えているようにロザリアとクラウスは感じた。
ファジル王は謁見の最後に何処か寂しげな、それで居てやさしげな微笑を浮かべてこう言った。

「これは、客人の前で御無礼した。マルク、後は全てお前に任せただ。御兩人、気が向かれたらこの宮殿に、いつでもお越しになるがいい。お待ちしている」

謁見は無事に済んだが、切羽詰ったキタイ王家の家庭の事情も思い知らされる結果となった。

「確かに、イゼルに子が生まれて、その子が王位を継げると良いのだろうが……」

マークの心労に対して、何の解決策も持ち合わせないロザリアとクラウスは沈黙するしか無い。

イゼルがマークを慕っていて、マークもそんなイゼルを憎からず思っている事も承知しているだけに、何を言っても役に立ちはしない事も明白だった。

「まあ、うじうじしても仕方が無いよね」

マークは何処か吹っ切れたような表情を浮かべている。

「一つ一つ、出来る事から精一杯やって行く以外、他に道なんて有りはしないのさ」

ロザリアもクラウスもその言葉を無言で聞いていた。

「何はともあれ、今日の所はクシャダスの問題を何とかしなきゃ、ね？　そう思うだろ？」

その声は普段の明るい声に戻っていた。

「じゃあ、着替えてから、早速現場に向かうよ！」

「わかりました、兄様！」

ロザリアは元気に返事をした。

第四十二章 消失と出現（前書き）

後の剣の真の覚醒には、別の聖剣が必要なようです。

第四十二章 消失と出現

王宮の『庭を抜ける最短コース』をたどるマークの後を、ロザリアとクラウスもついて行く。

城壁沿いに走る道を馬車で行くよりも、はるかに早く確実に謎の角柱が出現した場所にたどり着ける。

「あっ！あれじゃないか？」

マークが指差す海の方に、巨大な角柱が見えてきた。上で赤い光を放つものが存在するようだ。

「まだ、ひるひなか昼日中と言うのにこれほどはつきり確認できる光というのも、不思議ですね」

クラウスは合点が行かないという感じだった。

確かに、トラブゾンの海から引き上げた木の箱からロザリアが取り出した『ヴィーヴル』らしき剣は、柄も鞘も赤く、美しく輝いてはいたが、あのような凄まじい怪光を放っていたわけではない。

「この場所にこもる力と連動して居るのかもしれないわね」

ロザリアはふと思いついて言ってみただけだが、マークとクラウスは顔を見合わせ頷いた。

「ロザリアちゃん、それは確かに正しいかもしれないよ」

ともかくも、近づいてみないと詳しい事はわからない。

ロザリアはドレスから、貴族の少年が乗馬でもする時のような身軽な服装に着替えていて聖剣・チチュックは腰に収まっていた。ところろが、目標の角柱が近づくにつれ、落ち着かない振動を繰り返すようになる。

「チチュックが反応していますね。ロザリア、何が有るかわかりませんから、どうぞ私の傍を離れずに居て下さい」

ロザリアは元からそのつもりで居たが、こうして声をかけてくれる気持ち嬉しかった。

「ジルニトラもパンテラ・レオも反応しないなあ」

マークの言うとおり、マークの腰に納まっている『聖剣の盟主』の異名を持ち、他の聖剣を呼び寄せる力を持つとされるジルニトラが、びくともしないのだ。ジルニトラが反応しないので、聖剣中で最も相性が良いとされるパンテラ・レオも、同様に沈黙を守って居るように見える。

「チチェックだけがあの『後の剣・ヴィーヴル』と思われる赤い剣によばれているのかしら？」

そのロザリアの言葉に反応したかのように、急にロザリアの腰を離れ、巨大な角柱へ向かって飛んで行く。

「ロザリア！こちらへ！」

クラウスは鋭く呼ぶとロザリアを自らのマントで包む様にした、と、そのとたん、耳を劈くような大轟音が発生して、角柱が水煙を上げて、海中にあればあれよと言う間に沈没してゆく。

「赤い光が見えなくなった！」

そのマークの言葉に、ロザリアもクラウスもはっとして沈み行く角柱を見つめたが、確かに赤い光が消えた。

見る間に角柱も海の底に沈んでしまい、赤い剣の姿は何処にも見当たらないようだ。

チチェックは、角柱が沈んだポイントの海面近くに浮かんでいたが、やがてフラフラとした感じの飛び方でロザリアの手元に戻った。

「チチェックが戻ったと言う事は、やはりもうヴィーヴルと思われる赤い剣は姿を隠したって事かしら？」

確かにそのロザリアの推測は正しいようだった。

その後、マークの命令で兵士達も搜索に加わったが、特に何も見出しなかった。

エスコバル公爵邸に戻った後も、三人で邸内の図書室に有る古文書類をチェックしたりしたが、余りはっきりした事はわからない。こ

の図書室は円形の大きな部屋で、マークが「恐らくはオルトで一番古い文献が揃ってる」というだけあって、年代別、国別に分類された膨大な量の書籍類が巨大な本棚にズラリと並んでいた。

「大英博物館の図書室をイメージして作った」そうで、紹介状を持った研究者には書籍の閲覧を許可しているらしい。これほど大きな図書室だと専門的に管理するスタッフが必要だろうが、マークはオルトでは初めて「図書館司書」を養成して、この図書室に専門スタッフとして置いた。

「ここには常時三十名のスタッフがいて、他に見習いが十名ほどいる。他の地域や学校でも、彼らを配置した図書室を増やしたいと考えているよ。大学の図書館にはここからスタッフを送り出している。評判は上々だ」

その、図書館司書たちの手も借りて、更に蔵書全体を探してみるのだが、古文書類は整理し切れていないものや、意味不明の断簡を含む場合も多い。謎の多い赤い剣にまつわる記述は、やはり見出せなかった。

「記述自体が存在しないのだろうか？」マークもお手上げという感じだ。

「まだあきらめるのは早いかも知れませんが」粘り強いクラウドらしい意見だが、さしたる当ては無いのだ。

「この常連さんもおいでになりますか？たとえばマルクスみたい」

ロザリアが尋ねると

「マルクスとは、人の名前ですか？」クラウドが質問する。

「ここに良く似た感じの図書室に通いつめていた、地球では有名な学者で思想家だよ。ああ、そうだ。常連のあの人に聞いてみよう」

マークは、天窓からの光が一番具合良くあたる席に陣取っている白いヒゲを蓄えた老人に声をかけた。

「先生、ご精が出ますね」老人は相手が誰か認めると席を立とうとした。

「いやいや、そのまま、そのまま、実は先生のお知恵を拝借したいのです」と老人を座らせてから、

「あ、そうだ、二人とも、この方は腰の調子が思わしくないご様子だから、治癒魔法をかけてくれないだろうか？僕よりも、君達二人の合成魔法の方がずっと効果も高いと思うんだよ」

「どうやら、かなり腰が痛んでいて、立っているのが辛いらしいとロザリアとクラウスは見て取って、快く引き受けた。二人は互いの両手の平を向かい合わせ、意識を集中して老人の腰に強固な治癒魔法を施した。」

「お、おお、ありがとうございます！」老人は喜びの表情をたたえて立ち上がると、二人に深々と礼をした。

「紹介するよ。こちらはキタイを代表する大学者・ジェマル先生。ティボー先生とは長年の文通仲間であらっしゃる。先生、こちらの二人は僕の家族も同然のロザリアちゃんとクラウス君です。二人ともティボー先生の弟子にあたります」

「という事は、帝国からお越しになったのですな。おお、レオンハート家の方々であらっしゃいますか？」

「御推察の通りですが、何卒その件は内密に願います」

その、マークの言葉を聞いて、ジェマルは緊張した面持ちになった。

マークはジェマルにこれまでの経緯をかいつまんで説明していた。トラブゾンの海から引き上げた赤い剣が飛び去った事、謎の角柱の上で非常に強い赤い光を放っていた物体がロザリアの持つ聖剣・チエックが飛来すると角柱ごと海中に没した事を聞くと、ジェマルはしばらく考え込んだ後、こう語った。

「そもそも、聖なる剣は幾つ存在するのでしょうか。長年気にして調べておるのですが、それすら不明です。どうやら、八本よりは多

そうですが、十本か十二本か解っておりません。ただ『聖剣の盟主』とされる殿下がお持ちの『ジルニトラ』が呼び覚ます事のできる剣は、恐らく半数で、残りの半数は『ヴィーヴル』が共に存在しないと呼び覚ませないようです。後の剣と言われるだけ有って『ヴィーヴル』は『ジルニトラ』の持ち主の真の番である方の物らしいです。その方がオルトに生じる方か、はたまた異界の方かは謎ですが、番の方を探し出すのは『チチェック』の重要な仕事らしいです。殿下の『真の番』である方が御降臨あそばすまで、『ヴィーヴル』は海底で待つものではありませんまいか？」

「僕の『真の番』はこのロザリアちゃんとクラウド君との間に将来生まれる娘さんだと、女神様はおっしゃるのだよ。金の龍もそう言っている」

マークのその言葉に、ジェマルは大きく頷いた。

「なるほど、さようでしたか。『チチェック』の力を十分に発揮させるために『パンテラ・レオ』が必要不可欠なのです。その事を女神様も金の龍様も重要視されているのでしょうか？持ち主のお二人が将来、夫婦の契りを交わされて姫君がお生まれになると、物事は大きく動くのでしょうか」

「ジェマル先生、『シャボンヌ』はいかなる役目の剣でしょうか？クラウドは以前見た、青い瞳に淡いブルーの髪の毛の幼子が出てきた夢との関わりが気になっている。」

「申し訳御座いません。『シャボンヌ』が清らかな水の力を湛える剣で持ち主は男である事、その持ち主の目が青い事だけは確かなようです、役目についてはいまだに謎でして……」

「ジェマル先生、クラウドの持つ『パンテラ・レオ』は私の実家の家宝として伝えられてきましたが、他にもそうした形で保管されている聖剣は無いのでしょうか？」

ロザリアはそうしたいわば、所在がわかりやすい聖剣からでも、見

つかれば何事か期待できると感じていた。

「キタイ王家の秘宝として聖剣『ジラント』が存在するはずですが、殿下は所在を御存知ではありませんか？」

「いや、一度も王からその『ジラント』の話は伺った事が無いですが……」

マークはしばらく、意識を宮廷内にいるはずのファジル王に向けてみると、なにやら反応が感じられた。

「先生、『ジラント』の持ち主の性別、あるいは特徴で御存知の事は有りませんか？」

「持ち主は男の方で、『ジルニトラ』の主であられる殿下の御血縁の方では無いかと推察いたします。『ジルニトラ』が『パンテラ・レオ』と『ジラント』を従えている事は、後の剣である『ヴィーヴル』の主である『真の番』が御降臨あそばす必須条件ではないかとも思われますが、まだ不確かです……」

図書館の蔵書全体について最も詳しいジェマルの助言の元、ロザリア・クラウス・司書たちは聖剣に関する資料集めを行う事とした。マークはファジル王に『ジラント』について尋ねるために王宮に返す。

「陛下、聖剣『ジラント』について御存知の事をどうぞお教え下さい」

ファジル王は自分の寝室の傍の花園にいた。ここは今亡き彼の后、つまりイゼルの母が丹精こめて花々を育て上げた場所であった。その中央には大昔から大きな黒い岩が存在する。

「おやおや、血相を変えてどうしたのかと思えば……ああ、『ジラント』の事か。『ジルニトラ』の主であるお前になら動かせるのだな。見よ、この、黒い大岩を。其処に金属製の取っ手が見えておろう？ 他の誰が引いても岩からは取り出せない聖剣を入れた櫃の取っ手らしい。試しに引いてみよ」

王に促されるままに、マークは黒く光る取っ手を引いてみた。

「一応、取り出すことは出来たな」

「ですが、これでは……」

半透明の黒いガラスのような素材の櫃の中に、黒く光る剣が確認でき
るが、櫃の蓋が開かないのだ。

第四十三話 恋の二律背反（前書き）

中盤、子作りのためR18的内容のR15な記述です。
マークはイゼルとの間に子供を作ります。ハリカは息子を産みます。

第四十三話 恋の二律背反

「この『ジラント』の主は誰なのだろうな。言い伝えでは『ジルニトラ』の主と血の繋がりが有る者らしいが、これから生まれてくる子供であろうかな」

ファジル王の独り言めいた呟きは、心なしか寂しげに聞こえた。

未だにイゼルには子がいない。という事は、必然的にアルビに居るハリカの腹の中の子という可能性が高い。

言葉を失ったマークに、王は言った。

「全ては巡り合わせなのだろうよ。聖剣の主なら、末頼もしい子ではないか。ひとしきり目鼻がついたらで良いのだが、イゼルの方も宜しく頼む。あれはあれなりに、お前を好いているようなのでな。イゼルに子が生まれずとも、お前に任せて置けば国の行く末は安泰だろう」

「伯父上……」

「そんな顔をするな。別にお前の罪ではなからう？イゼルが聊か不運なので親としては気が揉めるだけだ」

ファジル王のその言葉は、逆にマークに自分の罪を自覚させる。

イゼルが自分を思ってくれる事を知っていて、しかも幾度かベツドを共にするような関係にまでなっていて、今のような宙ぶらりんな状態では王の心痛を増し、イゼルを嘆かせるばかりだ。

「子を作る覚悟も無い」

「何一つ約束を交わせない」

そんな薄情な言葉を囁いた自分の態度をイゼルはただの一度も責めた事は無い、いや、そればかりか「そんな事は気にしなくていいのと健気にも言っただけだ」。

近頃のイゼルの物憂げで悲しげな微笑みを見ると、多情な男なりの「誠意」を示す必要が有ると感じる。

図書室での資料漁りは、大した成果を上げなかった。

ロザリアとクラウスは「今夜は宮中に泊まる」というマークからの知らせを受けて、久しぶりに心話を遮断する腕輪をはめた。恐らくはイゼルと夜を過ごすのだろうと察しての事だったが、腕輪をはめる直前までのマークの感情の乱れようが激しくて、気がかりではあった。

夕食も入浴も済ませて、二人でベッドに入ると話題は自然とマークの事になる。

「酷くご自分を責めてましたね。『ジラント』の主がハリカさんのお腹の御子様らしい事がわかって、王やイゼル様がどのようにお感じになるか……確かに難しいですね」

「イゼル様は微笑まれても、寂しげで悲しげでいらっしゃるもの。何とかして差し上げたいでしょう」

「一途なイゼル様のお気持ちに、殿下もお応えになりたいのでしょうが……」

「そのお気持ちにこたえて、ハリカさんを傷つけないって、兄様でも難しいでしょうねえ」

誰かの思いを受け入れれば、誰かを傷つけるという二律背反。

クラウスは自分などは最初からそんな難問を抱え込む覚悟もないし、命が尽きるまでロザリアだけを一筋に思う、それ以外考えられないと感じていた。

ロザリアは正解の出ようの無い難問を前に、マークが悩む様に心を痛めているのだった。

さて、マークと言えば金の龍の言葉に苛立ちを深めていた。

「（クシャダスの結界が壊れて思いだしたのだが、あの女の奇妙な波動は『クシャダスの種』特有のものだったのだな。それならば腹の中の子が聖剣の主になる力を帯びているのも合点が行く）」

「何なんだ、ハリカの波動が奇妙って。それにハリカはアルビの生まれのはずだぞ」

「（あの女の親が、あの強さだと二親共にかもしれんが『クシャダスの種』だろう。アルビに移り住んで後に、あの女がうまれたのだろうよ。脆い体に不似合いな強すぎる魔力ゆえに寿命が短い。お前の種を受けて生まれる息子はその、無駄に強すぎる魔力の恩恵を受けたようだがな）」

「ハリカは魔法を使えないが？」

「（発動する術を知らんだ。強すぎる魔力が滞留し日々体を蝕んでいる。だから寿命が短い。子を産んでも産まなくても、どの道寿命は定まっている）」

その言葉を聞いて、イゼルの寝所に行こうとしていた気持ちが削がれた。

「（王の娘も寿命が短いぞ。早く事を定めないと子も産めない）」

「イゼルまで死期が迫っているのか？なぜだ！」

「（金の龍の気を胎内に受け入れるより以前に、下らぬ人間の澱んだ気を受け入れたからだ。王の願い通り、最初からお前があの王の娘と契っていたら、かなりの長寿を保ったであろうが）」

「今からでは手遅れなのか？」

「（少なくとも寿命の方はもう回復しないだろう。だが、まだ子に合うぞ。王が願い、あの娘自身も願っている。キタイに必要な子だ。さっさと作った方が良い。あの娘は泣いてるぞ。早く行つてやれ）」

「メイト、そう言う事はもっとタイミングを見て言えよな。イゼルの元に行こうとしていた気持ちに冷や水を浴びせかけておいて、火炙りにするような、おかしいことは止せ。泣いているって、本当か？」

「（お前は感じないのか？）」

「沈んだ波動は感じるが、それ以上は解らない」

「（絆が薄いのだな。悪い事は言わん。早く子を作った方がよい）」

人間の感情の機微など、この金の龍には理解できないのだろうが、心話で伝えてくる事は事実だろう。

「今から、イゼルの所に行く。そして、なるべく早く子を作るよ」

マークはイゼルの部屋のドアをノックする。

覗き窓からマークの姿を確認すると、寝巻き姿のイゼルは自分でドアを開けた。

「マーク！」

そう一言だけ言うと、イゼルはマークに抱きついたまま震えている。マークは後ろ手でドアを閉めた。

「あなたが僕を呼んでいるような気がしたのです。罪深い僕を、あなたは変わらず想って下さるのですか？」

「愛してます。マークに取って迷惑な想いだとしても、自分ではもう、どうにも出来ないの」

「迷惑だなんて……あなたにそんな事を言わせてしまう自分が情けない。愛してますよ、イゼル」

イゼルの涙の一粒一粒にマークは想いをこめてキスをする。

「あなたが悲しい涙を流さないですむように、精一杯勤めます。それでも、あなたを悲しませるかもしれないけれど、でも、せめてブルサにいる間はあなたと共に夜を過ごしたい。受け入れて下さいますか？」

マークの言葉にはイゼルに対する愛情と労わりの気持ちが溢れていた。

「もう、マークは来てくれない。私を抱いてくれないと思っていたの。本当に、良いの？」

「ええ、私があなたを抱きたい、愛したい」

「嬉しい……」

壊れ物を抱くような手つきでイゼルをベッドに横たえると、マークはすばやく衣類を脱いで隣に滑り込んだ。

寝巻きの前をはだけて、イゼルの乳房を露にすると、快感を呼び覚

ますようにやわやわと揉み上げ、桜色をした愛らしい乳頭を口に含み舌で転がす。噛み付くように激しい接吻をしながら、女の密やかな部分を緩急自在に刺激して、イゼルの快感を引き出して行く。

「愛しています」とマークが囁くたびに、イゼルは蜜を吐き出し、接吻をせがむ。舌と舌を烈しく絡ませ互いの脳髓が焼き切れるほどの熱を交わすと、さらに蜜は溢れた。

「どうぞ、私の想いを受け止めてください」

その想いがイゼルの胎内に新しい命を宿らせるであろう事を、マークは確信した。

マークとイゼルが幸せな気だるさの中で、抱きあって眠っていた所、奇妙な振動音が宮廷中に響き始めた。

「何かしら？」イゼルも異様な雰囲気を目を覚ました。外で、近衛兵らしい男達の声がする。

「陛下の御寝所の前の岩が、奇妙な光を発している」

「殿下は、摂政殿下はどこにおいでだ？」

「宮中においでらしいのですが、お姿が見えません」

「陛下がおっしゃるには、殿下以外のどなたも岩の中にしまわれた聖剣にふれられないとか」

「弱ったなあ。昔のように町にお忍びと言う事は無いのか？」

「はあ、その点も考慮してお探します」

「どうやら、男達は通り過ぎたようだ。」

「イゼル、なにやら一騒ぎ持ち上がったようですね。陛下の所に伺ってきます」

マークは衣服を来てイゼルに軽くキスすると、振動する『ジルニトラ』を手に王の寝所の前に急いだ。

「陛下！」

「ああ、マルクか。昼間取り出した櫃が光っているようだ。お前の『ジルニトラ』も振動しているな。もう一度取り出してみるか？」

今度は先ほどより軽々と岩から取り出せた。そして、今度は櫃の蓋が開いた。

「おお、これが聖剣『ジラント』か」

ファジル王も興味深げだ。すると、急にマークの腰から『ジルニトラ』が離れ、空中に飛び上がった。

「一体、これはどうなっているのだ？」

「聖剣の覚醒には別の聖剣の力が必要らしいのです」

すると急に『ジラント』も櫃を飛び出し、『ジルニトラ』と空中で同じ位置にまで持ち上がると、方向を定めて、まだ明けきらぬ空をレオンハート峰方向へ飛び去った。

「ふうむ。『ジラント』の主が誕生したかな？」

そうであるならば、ハリカは無事だろうか？ 子供は元気だろうか？ 急に酷く気になってきた。

「急ぎ一度邸に立ち返り、またご報告いたします」

マークは王の前を辞すると、黒いマントに身を包み、単身で邸に戻った。ブルサの裏路地まで知り尽くし、身軽でオルト一の剣豪でもあるマークは、時折こうして供も置いてきぼりで移動する。それが一番時間的に早いからであったが、周りはしばしば驚かされる。

家令のユスフの住まいから、勝手口伝いに自室に戻る秘密の入り口には地球の金庫のようなダイヤルキーが有る。秘密の番号を知っているのはマークとユスフだけだが……ロザリアとクラウドスはユスフの意識から読み取る事は恐らく出来るだろう。

自室に戻ると、小型の使い魔がアルビからの知らせをもたらしていた。アルビからブルサまで馬を飛ばしても二日かかりだが、この使い魔はおよそ一時間で定められた二つの場所を結ぶ。普段は小さな鳥の形の置物のように見えるので、ハリカの部屋に置いておいたのだ。お産が終わったらすぐに、知らせの紙を持たせて、このブルサのマークの居室に知らせが届くように設定されている。ハリカのお産が無事で子も健康なら金色の紙を、ハリカに異変があれば白、子

供に異変があれば赤、二人ともに異変があるときは黒、という具合で、文字の読めない者でも一応、知らせが出来るようにはなっている。

紙は金色で、こんな文字が書き付けられていた。ハリカの弟の筆だろう。

「褐色の髪・緑の目の元気な若君がお生まれになりました。ハリカも無事です」

マークは聖剣『ジラント』が生まれた息子の所にたどりついたかどうか気になった。

女神に語りかけると、返事が返って来た。『ジラント』は無事に守り刀の役目を果たしているようだ。

「今度生まれた息子は魔力は強い。不老だが不死ではなさそうだ。

『ジラント』の力と調和出来れば、また状況も変わるかもしれない。早く名を定めよ。力が名に籠もるゆえ」

「では、私の尊敬する先生にちなんで、通称はポールとしましょう。パウルトも読めますしね」

幼いパウル・ド・エスコバルに会いに行きたいが、その前にもう一度宮殿に戻らねばならないとマークは考えていた。気がつくやと夜が明けていた。女神の見る所では、イゼルの腹には愛らしい娘が宿ったようだ。

美しい朝焼けが、幼いパウルとイゼルの胎内に宿った命を共に祝福しているようにマークには思われた。

第四十四章 聖剣の行方（前書き）

中盤R15です。御注意下さい。

所在不明の聖剣を探す手がかりが見つかったようです。

クラウスは独占欲の強さを自覚してますが、どうにもならない事も有るようです。

第四十四章 聖剣の行方

「宮中での用事を済ませたら、その足でアルビの『朝霧楼』に息子の様子を見に行つて来る。留守中に遠方からの客人が来るかもしれないが、応対は君達二人にお任せするよ」

マークはロザリアとクラウスに宛てたこんな内容の手紙を残して、宮中に取り返したようだ。

二人は朝食の席で、ユスフからマークの子の名前がパウル・ド・エスコバル、通称はポールと決まった事、

ボルカトラブゾンの村落会議のメンバーが訪ねて来たら相談に乗り、手助けしてやって欲しいと言う事を聞かされた。

「どうやらゼキさんは、すでに出立されたようです」

ユスフが美味しいお茶を給仕しながら、教えてくれた。ユスフがマークに対して並々ならぬ敬意を持っている事、そして主の^{あるじ}ためなら本気で「何でも」してのける覚悟がある事は、ロザリアにもクラウスにも容易に感じ取れた。そして、ユスフもこの二人が将来もずっと長い間、主と親密な付き合いを続けてゆくであろう特別な存在だと理解していた。そのため、互いに知り合った時間は短くても深い信頼関係が存在する。

二人は図書室の資料を再び点検してみる事にした。

特にジェマル老人が「これはよく調べなくては」と言った一見意味不明の古文書の断簡類を納めた皮製の小箱が気になった。今日はジェマル老人の姿を見かけないが、二人がそれぞれ聖剣の主であるからこそ見えてくるものも有るかもしれない。

「この古文書自体に力を感じるから、わざと文章がバラバラに分断されているのよね、きつと」

「ひょっとして聖剣の力に反応するという事は無いでしょうか？」

「試してみる価値は有りそうね」

クラウスの『パンテラ・レオ』とロザリアの『チチェック』は聖剣の中でも特に親和力の強い組み合わせらしい。「互いが互いの力を補完し増幅する関係に有るようです」とジェマル老人も言っていた。二人がそれぞれ自分の剣を抜いて、古文書の上に掲げて交差させる。すると、煙のようなものが立ちのぼり、バラバラの紙片と見えていたものが、一枚の古文書に変化している。

「驚いたなあ。こんな仕掛けがあったんですね」

「聖剣の持ち主以外には読ませないための仕掛けかしら？」

「ああ、今日はジェマル先生がいらっしやらないのが、かえって良かったんでしょうか？」

「さあ、解らないけれど、可能性としては有り得るかしら？」

「フッフ、なんだかさつきから、ロザリアも私も疑問を投げかけてばかりですね」

「そう言えば、そうよねえ。まあ、謎だらけだから、仕方が無いけれど」

「これは、一体、何でしょうね？」

ティグレ、ゲパルト、レオパルト、サミール、バスイール……

意味は解らないが、矢張り何かの名前らしき物が書き連ねられている。

五番目以降も有る様だが、読み取れない。

「ティグレ、ゲパルト、レオパルトは、多分地球上の肉食獣だと思う。きっと、『パンテラ・レオ』に象嵌されたライオンの仲間だと思うわ。後は私の知らない言葉だから、解らない」

「ならば、ティグレ、ゲパルト、レオパルトは、私の持つ『パンテラ・レオ』と親和性が強いのかも知れませんね」

「だとしたら、持ち主は男の人かな？ねえ、兄様に心話で伺ってみない？サミールとバスイールの意味が解るかもしれないわよ」

「そうですね」

マークに心話で話しかけると、すぐに答えが返ってきた。

「（ああ、ごめんよ。今、道中の宿屋で休んでいた所だ。サミリアにバスイール？うーん、多分、地球上の言葉だな。えっと、ああそうだ。思い出した。サミリアは『全てを聞くもの』、バスイールは『全てを見るもの』だったと思う。と言うことは、この二つは一揃いなのかな？）」

ロザリアもクラウスもマークの意見に賛成だった。

「（ティグレは虎、ゲパルトはチーター、レオパルトは豹にあたる。どれも地球の猛獣だね。僕もその三つは戦闘能力高めの男の剣という気がする。クラウス君の考えどおり『パンテラ・レオ』との親和性が強いかも知れないな）」

それらの剣を一体何処で見つければよいのか、まるで見当もつかない。

「（多分、『ジラント』の力がもっと強くなる必要があるんじゃないだろうか。他の聖剣との絆が強くなる必要もあるだろうしね）」
マークのその言葉が正しいとすれば、まだ他の剣が見つかるには当分かかりそうだ。

「（ロザリアちゃんとクラウス君の絆が深くなると、恐らく二人の聖剣の力は強くなるはずだ。せいぜい、がんばってイチヤイチャしてくれ。これから明日の朝まで心話を遮断する腕輪をつけるよ。じゃあね！）」

「殿下も、全く……」

「恐らくこれ以上にここに居ても、はかばかしい成果は出ないような気がしない？」

「確かにそれはそう思うのですが……」

すると、そこへメイドがやってきて、ボルの村からゼキが訪ねて来たと伝えた。

レオンハート家の祖でも有る英雄バラムと野に下った女戦士エミーネの末裔であるゼキは、身なりは質素だが、豪華なエスコバル公爵邸の応接室に有っても堂々としている。

「さすがはバラムとエミーネの末裔でいらっしゃる」

ユスフも感心していた。どうやら邸に逗留するように勧められたらしい。

「まあ、よかった。一緒にチーズを使ったお菓子類の売り出し方を考えましょう」

「都の人たちの好みや、流行なども考えに入れる必要がありますね」

「明日はお三人でブルサを見物されたいかがでしょうか？馬車と気の利いた道案内をつけましょう。主人からは何事も便宜を御取り計らいするように申し付かっておりますので」とユスフが申し出てくれた。

三人とも異存は無い。ロザリアもクラウスも、明日はきっと愉快な都見物になるだろうと思った。

小食堂で三人の和やかな夕食が終わると、ゼキも客間に向かった。ロザリアとクラウスは部屋に引き取ると、風呂に一緒に入る。これはもはや日課になっているのだが、マークに言われたように「イチャイチャ」とはなかなか行かなかったりする。

一旦、手を繋ぐだけの清らか過ぎる状態が幾日か続いてしまうと、そこから先に進もうとするのに何となくためらいを感じてしまうのだ。アルビでは、自分達がしていた洗濯物も、自分達ではなくメイドが行うために、色々と気恥ずかしかったりする。

「殿下にあんな風に言われてしまいましたけれど、どうしましょうか」

「私は兄様のおっしゃるようで、いいと思う」

「最近、キスすらもしてませんでしたね。折角ですから、思いっきり『イチャイチャ』しましょう。ね」

ロザリアは顔を真っ赤にして、頷いた。

「風呂に入るのは平気なのに、キスは照れますか？」

「照れるけど、好き」

「そうですか。じゃあ、これからは毎晩、ちゃんと大人のキスをする事にしましょう」

久しぶりに互いの舌を絡ませ、唾液のやり取りをするようなキスをする、ロザリアの体は熱を運び、肌が香る。クラウスはロザリアの寝巻きをゆっくりはだけると、体のそこにキスを落とし、愛撫を施す。

「近頃のロザリアは大人っぽくなりましたね。前から可愛らしかったですけど、だんだん花が綻びるように、美しさを増してますよ」

「でも、まだ、胸もまっ平らだし……月の物も来ないわ」

「胸はちゃんとその内に美しく大きくなりますよ。今のこの状態のあなたをこうして見る事が出来るのも、毎日少しずつ大人になって行くあなたを身近に感じられるのも、私一人だと思うと、幸せです」

「今夜はクラウスが気持ち良くなれるように、是非お手伝いさせて」

確かにクラウスのその部分は、質量共に熱を帯びて最大限に増大している。

「じゃあ、手で可愛がってやって下さい。キスしたり頬ずりしたりするのは、止めておきましょう」

「キスや頬ずりは嫌い？ ああ……きっと私が下手なのよね」

「まだ、そんな事は良いんですよ。私の物を嫌がらないで居て下さるだけで、十分なんですから。あなたの顔を私の物で汚してしまうのは、矢張り、避けたいのです」

「そういうもののなの？」

「こんな事をしていて矛盾するようですが、大切な宝物を汚すような、そんな後ろめたい気分なのだろうと思います。ロザリア、あなたは私にとって女神様よりもある意味神聖な方なのです」

「神聖って、そんな」

「ずっと、あなたと共に有りたいと強く願い続ける事で、私は常人

には無い力を得ました。叶う事なら永遠に、私は、私こそがあなたを守る者でありたい。愛しています、ロザリア」

「ずっと傍に居てね」

「はい。私の命のある限り、ずっとあなたの傍に居ります」

愛し合う事は別に力を得るためでもなく、聖剣を手に入れるためでもない。止むに止まれぬ互いの想いが一つに溶け合って、熱を放ち絆が深まるのだと言う事は二人にとって自明の理であった。

だが……クラウドは意識を失ってしまったロザリアの、まだ幼すぎる体を清めてやりながら思った。

自分の思いの強さは、ロザリアに取っては全てを束縛する重荷でも有る事を。

白い肌に散る赤い鬱血、そして自らの体液、このような物を愛情の表れだなどと美化する気持ちは毛頭無い。

自分の妄執、あるいは欲望を、幼い肉体に向かって放った結果に過ぎないと思っている。

だが、今夜のように歯止めが外されてしまうと、幼い体に過重な負担を強いてしまう自分の欲望と飢えが恐ろしい。

ロザリアの瞳が、誰か他の男を目にして嬉しげに輝くと、其れだけで焼け付くような痛みを覚える。

まだまだ、これから美しくなっていくであろうロザリアに、どれほど多くの男が目を惹かれる事だろうか。

自分は本気で全てを遮断し、遠ざけたいと思っている。

最も信頼すべき恩人であり、友人であり、いずれは主君となるであろうマークですら例外ではない。

女神は当初マークをロザリアの産む子供の父親の一人として想定していた、自分はそうではなかった。

ただの従者に過ぎなかったのだ。魔法もろくに使えず、聖剣も持っていないなかったかつての自分を、女神がするように看做したのは、当

たり前の事なのだが、時折焼け付くほどの焦燥感と嫉妬が自分の中に渦巻くを感じる。

「このような浅はかな未熟者が、あなたを守って行けるでしょうか？」

聖剣を探し出し、ロザリアと共に銀の龍の器を生み出して行かねばならないはずだが、果たして自分にそれが出来るのであろうかと、恐ろしくもなるクラウドであった。

第四十四章 聖劍の行方（後書き）

大馬鹿な脱字に脱力です。すみませんでした。
誤字脱字の御指摘、大歓迎です。

第四十五章 ブルサ見物（前書き）

街の再生、特産品の売り出し、色々忙しくなりそうです。

第四十五章 ブルサ見物

ユスフが手配した馬車の乗り心地は快適だった。普段口数が多いくないゼキも、楽しげに談笑している。

「私も罪深い『クシャダスの種』の一人なのです。二親に捨てられて、雪が降る街角で空き腹を抱えて凍えていた所を殿下に拾っていただきました。もう、十年前の話ですが」

案内役のモーハン は、至ってにこやかに自分の身の上について語った。

眉目秀麗で黒一色ではあるが上質の素材の服を着こなし、洗練された物腰のこの若者は、大貴族の息子だと言ってもまかり通りそうな雰囲気を漂わせている。

ゼキは驚き「その時お幾つだったんですか？」と尋ねた。

「正確な誕生日がわからないのですが、八歳ぐらいでは無かったかと思われます。殿下は私に食事を与えてくださったばかりでは無く、教育の機会と生きがいも与えて下さいました」

ロザリアとクラウドスの脳裏にはモーハンの思い出の場面が鮮明に見える。

近頃は二人とも、他人が思い浮かべた情景をあたかも自分のもののように見てしまう事が多い。

意識的にブロックしようとする、相当な緊張を伴う。

相手の思念に同化しても大きな問題が無さそうな場合、こうして他人の心を覗き見る事にはなるのだが、

余り過大な罪悪感を持つ事も無いと、二人とも割り切る事になっている。

マークの言うように「気にしていたらキリが無い」状況なのだから……

『心話』^{しんわ}を遮断する腕輪は、反射神経や勘と言うか、ひらめきと言うか、言語化しにくい微妙だが重要な感覚まで鈍くなる。だから二人とも、同じく強大な力の持ち主であるマークが身近に居るときか、安全だと思われる屋内で眠る時にしか装着はしない。何が待ち受けているか解らない出先では、用心に越した事はないだろう。

その思い出が、モーハンにとって、極めて大切な或る種神聖な物である事は明白だった。

雪がちらつく街角で、檻樓に身を包んだ裸足のやせこけた男の子が軒下で立ち尽くしている。どうやらこれが当時のモーハンらしい。そこへ、まだ十代の少年であったマークが通りかかり、抱きかかえるようにして馬車に乗せられる。邸に着くとすぐに入れられた大理石造りの風呂に戸惑い、与えられた豪華な衣服に驚き、生まれて始めて見るご馳走に夢中になる。

そのときのモーハンの驚きと喜びとが、いかに大きかったか伝わってくる。

そして、マークの「お腹をすかせて寝る場所も無い子供を一人でも多く助けたい。ぜひ手伝ってくれ」という言葉を聞いた時の驚きと共感と強い敬愛の気持ち……なるほど、この人物が『クシャダスの種』で有りながら官吏登用試験に合格したというのも頷ける。

「殿下は幾人もの命を救われました。身近にお仕える者は、大半が命を救っていただいた人間です。でも、殿下はそうした事で満足なさる方ではありません。全ての貧しい人々が救われ、希望を持って働ける世の中にしなければならぬとお考えです」

「モーハンさんも、そうした殿下の理想の実現のためにお力を尽くしておられるのですな？」

「はい。同じ境遇のファーガスという者と共に、クシャダスを明る

い街に再生する任務に当たっておりますが、中々成果が上がらず、苦勞しております」

ブルサの名所と言えば、大神殿・王の宮殿・大学・港と言ったところだが、今日はそれぞれの名所の傍で評判の食べ物屋や料理屋、茶店、土産物屋に立ち寄り、ボルの村の特産品を売り出すための手がかりになるように配慮されていた。

ぱっと見た所、ロザリアが以前帝国で手がけたような、デザート類を中心としたメニュー構成で、女の子が立ち寄りたくなるような可愛らしい雰囲気のお店はまだ皆無だった。それに、野外で気軽に食べる事のできるスナック類の店も殆ど無かった。強いて言うなら、肉の串焼きとドーナツに近い感じの甘い揚げ菓子ぐらいだ。どちらもまだまだ味に工夫の余地が大いに有ると思うような代物だった。そのせいか、どの店も大して繁盛していない。

それに、外国人が多い港の傍に、これぞ「キタイ特産」とか「ブルサ名物」と言うような料理や品物を扱う店が見当たらない。オルト中何処でも食べられるような、焼いた肉に揚げた芋、ビール、ワイン、あとはせいぜい魚のムニエルか季節の果物程度しか出てこない。キタイの特色と言うか良さが、アピールできていない。

「殿下から、ロザリア様はキャラメルや軽くて絶妙な風味のパイをオルトで初めて売り出されて、事業家として目覚ましい実績を上げられたと伺っております。ゼキさんの村のチーズの品質向上にもお力を貸されたとか。このブルサの人々の食べ物の好みを分析されて、なにかお考えが浮かびましたか？」

「お菓子の製造のアイデアは私が出したものだけでも、事業として成功出来たのはクラウスの経理面での知識や堅実な資金計画のおかげよ」

「いや、私のした事などは微々たる物で。やはりロザリアの作り出

したお菓子の美味しさがなければ、事業の成功はありませんでした」とクラウドが言うと、モーハンは感じ入ったようだ。

「お二人は女神様のお定めになった御婚約者同士と伺っておりますが、息もぴったりであられるのですね」

新しいレシピは思い浮かぶが、採算が取れるか、あるいはボルの人々の力で美味しく作る事が出来るか、課題は色々あるかと断った上で、ロザリアは一つのアイデアを提示する。

「ほう、外国の人も多く行きかう港の傍に、チーズ料理専門の店を出すのですか」

モーハンは関心を持ったらしい。

「余り難しい、再現が難しいようなメニューではなくて、作ろうと思えば誰でも作れるけれど、今まで知られていなかった目新しい料理法を中心にしてみようと思うの。簡単な技法で出来るお菓子も出すと良いわね。そしてそこで、ボルのチーズを売り、メニューをまとめた本や調理に必要な道具類などもあわせて売るのが」

「以前教えて頂いたスフレチーズケーキも、チーズプリンも、とろける様な美味しさでしたが、幾度も作っている妻などは『以外に単純な作り方で、教えて頂いて驚いた』と申しています。そうした作り方を編み出されるのが、また素晴らしいですな」ゼキは、メニューがシンプルである事の必要性に気がついているようだ。

「少ない資金で出来るものとしては、露天で軽く食べられる物を売り出すのも良いかもしれないと思うわ」

クレープ、ホットドッグ、ピザ、たこ焼き、中華まん……どれも、考えて見ればオルトに存在していない。

このキタイの都であるブルサの人々にとって、目新しく、未知の美味しさを感じさせるもので、材料が手に入れやすく製作技法がそれほど高度でないもの……まだ色々と考えた方がよさそうでは有るが、

考えてみる価値は有りそうだ。

「誰かがうまそうに食べていれば、それにつられて客が増えるでしょうしね。食欲をそそる香りにつられる事もあるでしょう」
クラウスの言うように確かに、香りは大切だろう。

「ボルのチーズは軽くこげると美味しそうな香りを放つから、熱々のメニューが良いかしら」

「ああ、そうですね。あの香りには遠くからでも引き寄せられてしまします」

とゼキは遠い目をしてチーズが香ばしく焦げた香りを思い返しているようだった。

「後は、おしゃれをした御婦人方でも、買うのを躊躇わないような、ちよつと気の利いた演出が欲しいわ」

「たとえば、どのようなものでしょう？」

モーハンはこの小さな姫君の言葉を興味深く聞いていた。

「可愛らしい入れ物とか包みとかを持って、そのまま見苦しくなく口に運べるような工夫が必要でしょうね」

「かわいらしい紙袋や、気の利いた容器も考えた方が良さそうです。以前ロザリアが扱った蜂蜜風味のキャラメルは、容器のデザインの良さが売り上げに大いに貢献してましたからねえ」

クラウスはあの時「見た目」や「雰囲気」の重要性が商品の売り込みにいかに大切か思い知ったのだ。

「ボルのチーズも皆様のお知恵で美しい包装で売りに出すようになってから、以前の倍以上の売り上げ数を出すようになりました。と言っても、都の目抜き通りを見る限り、まだまだ認知度は低いですな」

ゼキはなかなか意欲的だ。ボルの村人の期待を背負っているのだろう。

「新しいブルサの名物料理やお菓子を作り上げて、露天で売ったり、お店に出したりして、その仕事をクシャダスの人々にもして貰うって事はできないのかしら？新しい収入の道が出来れば、生活も良くなってゆくでしょうし」

「確かに、新しい仕事はクシャダスの住民には必要です。まだクシャダスの中で衛生的な食品の製造は難しいかもしれませんが、近隣の場所に製造所を設営して、クシャダスの住民に働いてもらう事ならすぐにでも出来そうです」

モーハンは、無料の小学校の設営やここ数年来の活動の成果で、少数ではあるが意欲的で優秀な人材が発掘されつつある事と、今の所はそれらの人材の受け皿が存在しない事を説明した。

「レオンハート領内の人たちには保存性の良いキャラメル製造を指導しましたが、クシャダスの人々に参加してもらう場合は、製造と販売の場所が近いのですから保存性より鮮度で勝負でしょうか？」

「作り立てをお店に出している事を強調するのも、戦略かもねえ……」

この二人は何か非常に有益なアイデアを出してくれそうだと、モーハンは期待を込めて見つめていた。

「(何だか物凄く期待されちゃってるわね、私達)」

「(ロザリアはそれなりの実績を上げてますから、致し方ないでしょうね)」

「(美味しくて、簡単に出来て……)」

「(出来ればボルやトラブゾンの名産が使わたメニューが良いでしょうね)」

「(以前、クラウスに食べさせてあげたピザはどうかしら？本格的な焼き方ではなかったけれど、色々とアレンジも出来るのよね)」

「(ああ、あれならボルのチーズの美味しさが生かれますね)」

「(チーズケーキも水分控えめな焼き上がりで、棒状に切って仕上

げると、手で持って食べやすいわね。後は、揚げ菓子にチーズをアレンジできそうだし……」

「（いっそ、これから試作してみませんか？ モーハンさんはブルサの色々な店に顔もききそうです。めばしい材料を買い込んで、公爵邸のキッチンを借りれば良いのではありませんか？）」

確かに、クラウスの言う通り、作って見せて食べさせた方が話が早そうだ。

「モーハンさん、今から早速新製品の試作をしてみたいのですが、良い食材を仕入れられそうなお店に連れて行っていただけます？ ゼキさんはいかがですか？」

モーハンもゼキも、すぐに賛成した。二人とも興味津々だ。

「それにしても」とモーハンは思った。

あのかなり長い沈黙は、何だったのだろうか？ ひょっとして以前殿下から伺った『心話』^{しんわ}と言う秘密の会話を交わしておられたのだろうか？ と思いついた。力が強く互いの親和性が強くないと出来ない秘められた術だとは聞か……このお二人は、クシャダスの街を大いに変えて下さりそうだ……。

「（私、ご期待に沿えるかな）」

「（大丈夫、ロザリアなら、きっと出来ます）」

ロザリアはごく自然にクラウスに体を寄り寄せる。

するとクラウスは、いかにも大切だと言う風情でロザリアの髪を撫でるのだった。

第四十五章 ブルサ見物（後書き）

UPして、随分たってから誤字脱字訂正できました。
まだありそうですね。発見されましたら、ぜひお教えください。

第四十六章 学校を作ろう

ブルサ見物をした日に、ロザリアは、モーハンやゼキ、それにエスコバル公爵邸の使用人たちに、試作品を試食させた。厩や警備の者も皆呼び集めると総勢で百名は超えるので、調理場の人間を指揮して作らせたのだが、初めて出会う調理法に調理場の人間も興味津々だった。

出来上がったのは、細い棒状のサクサクしたチーズ風味のパイと、ハーブとチーズを乗せたピザ、チーズと芋のコロッケ、チーズグラタン、ベリーのソースを添えたチーズプリン、ほんのり甘いチーズ蒸しパンといったところだが、大半の人間には初めて見るもの味わうものばかりだった。

「皆さんが一番好きだったものの名前を、この紙に書いて、投票してください」

殿下の御計画にも必要なので、真剣に選んで欲しいというユスフの申し渡しもあった、厩の下働きから、洗濯女の見習いにいたるまで、皆頭を悩ませてくれたようだった。

投票用紙の色を男女で変えて、性別による好みの違いも見ようとした。

一番人気はコロッケで、屋台で売られている揚げ物に近い感覚で食べられるようだった。二番人気ではあるが、女性票の過半数を集めたのはチーズプリンだった。他はほぼ同数で、大差なかった。

次に「二番目に好きなもの」を皆に投票してもらうと、サクサクした棒状のパイが回答の九割を占めた。しかも男女ほぼ同数だ。

「クラウドスの提案で『二番目に好きなもの』を聞いてよかったわ」「これなら、このパイも有力候補であることがハッキリしますな」

ゼキも感心していた。

結果を整理して、モーハンも一緒に夕食をとりながら、今後の計画について語り合っていると、マークがいきなり姿を現した。

「お帰りなさいませ。お早いお戻りで。門番も厩のものも何も申しませんでしたので、お出迎えも致しませんでした。申し訳ございません」ユスフも気がついていなかったようだった。

「いや、初めて瞬間移動ってやつを試してみたわけだから、ユスフにだって解りはしないさ。『ジラント』がポールの守り刀になった所為か、僕の力が増したみたいで、金の龍が『試してみろ』って言うから、やってみたんだ。案外、あっけないもんだな」

「お疲れになりませんでした？」

「ちよつと腹が減った。おや、美味そうなものが並んでるな。ロザリアちゃんのお手製？」

「調理場の皆さんにも手伝っていただきました」

ロザリアは、今日のブルサ見物の感想と、試食会での投票結果についてマークにも報告する。

「モーハンの言ってた、クシャダスの何人かの見込みの有る子をこの邸の一角に引き取って、新製品の製造と販売を出来るように教育するか。奥庭の別棟は、無駄に場所をとってるし、独立した厨房の設備も有るから、少し手を入れたらすぐ使えそうじゃないか。堀も壊して、外部との通路にようちうも作ろう」

「あそこは高貴な女性にようしやうの為の場所ですが、よろしいのです？」ユスフは驚いたようだ。

「僕には秘密の愛人なんて居ないから、あのままにしても無駄だからいいよ。たとえば居たって、奥に閉じ込める趣味は無いね。それより新しい教育設備にした方が有益だ」

話題になっているのは、先々代の公爵が秘密の愛人を住まわせてい

た場所だと言う。

マークに言わせると「無駄に豪華で、場所を食っている」らしい。「あのお庭には、珍しい花やハーブ類が随分とありますが、上手く生かせるかもしれませんね」

と、モーハンが言うので、ロザリアも興味がわいた。

「じゃあ、明日、早速朝食後にでも、ここに今居るメンバーで、あの奥庭の別棟を見てこよう」

話がまとまると、マークはユスフに熱い茶を持ってこさせて、チーズ蒸しパンを食べた。

「僕、これ好きだけどな。冷めても旨いし。ブルサの人間は、結構油っぽいのが好みなんだよね、多分」

マークが言うには、真冬なら湯気のもうもうと上がっている蒸し器に入れて売ると、売れるような気がする、という事だったが、確かに季節による気温の差は売れ行きを左右する大きい要素だろう。

にぎやかな食後の時間が終わると、皆、自室に引き取った。

ロザリアとクラウスも入浴を終えて、共にベッドに入る。

「殿下がお戻りになると、それだけで場が賑わいますね」

「何というか、みな、話をしたくなるような雰囲気になるわね」

それも、マークの人徳と言うか、力なのだとロザリアもクラウスも感じている。

「それにしても、瞬間移動は驚きました」

「聖剣の力なのかしらね。私達もできるようになるって、以前聞いたけれど、ちょっと恐い気もするわ」

「寿命が並の人間の枠を超えてしまったとか、魔法が使えるようになったりとか、色々これまでもありましたから、私はそんな事もあるかなと思っただけです」

「移動に失敗して、おかしい事になったりしないかしら、なんて心配だったの」

「そう言えば……」地球とオルトの間を瞬間移動をする場合、自分

自身が地球のものかオルトのものかあやふやでは虚空に砕け散るらしい、と言う、以前、この邸に向かう馬車の中で聞かされた話をクラウスがすると、ロザリアは目を見開いて言った。

「砕け散っちゃうのは、やっぱり怖いわ」

クラウスはあの時話題になった、京子の魂が地球に再生する可能性について酷く気になり始めたが、今のロザリアには恐らく解らないだろうし、闇雲に不安をあおるだけののような気もして、言葉にするのを避けた。

こうした場合、マークが戻れば『心話』しんわを遮断する腕輪をつけると言う決まりはありがたい。

京子の魂が地球の様子を見てみたいと強く望めば、宿しているロザリアはどうなるのだろうか？

不安でならない。あの、奥庭の豪華な建物に愛人を閉じ込めた先々代の公爵の気持ちもわかる。

随分と得手勝手なやり方ではあるが、愛する人を外界と遮断して自分だけの秘密の宝として大切にしておけば、異界への興味もいづれ薄れるかもしれない。

もつとも、ロザリアに限って言えば、そんな事をして無駄だろうが……

「マーク兄様は、愛する女の方を奥まった場所に隠すなんて事はないと仰っていたわね」

「いかにも殿下らしいと感じました。ハリカさんとの関係を考えて、納得ですが」

「普通の高貴な身分の男性なら、身請けしてお屋敷の奥に隠すのでしょうか？」

「少なくとも商売や取引をさせたりはしないでしょ」

「ハリカさんが御自分の才覚で人生を切り開いた生き方も、兄様は好きなのね」

「そうなのだと思います。だからお子を作りたいとお考えになった

んでしょう」

「私自身も……作りたいから、作るのだろうと思っているの。銀の龍の器でも、そうじゃなくても」

ロザリアは顔を真っ赤にした。

「確かに……未来の娘が銀の龍の器になるかどうかは、多分、あなたと私にとって一番大切な事では無いはずです。少なくとも私はそうですよ。一番大切なのは二人の想いですよね。」

クラウドがごく自然にロザリアに口付けると、ロザリアも思いをこめて受け止める。こうした思いのやり取りの結果として娘が生まれるだけで、別に銀の龍のために産むわけではない。そうロザリアは思っているし、クラウドもその点に関しては、同じ考えだった。

「きつと、私達なりの正解が見つかると思いますか？」

その言葉は、ロザリアに対するものであると同時に、クラウド自身の不安に対する答でも有った。

翌朝の朝食は、賑やかだった。

ゼギが、これから奥庭に作る予定の施設に、クシャダスの若者だけでなく自分の村であるボルや、トラブゾンの若者もいずれは受け入れて欲しいと希望を述べたのだが、その件も考慮して今日の下見をする事になった。

「いずれは、また一つ、新しい学校が出来るのかもしれないね」

農業学校などの創立にも携わってきたユスフは、そんなことを言う。

「いっそのことオルト初の調理師専門学校にしちゃうか」

ロザリアも同じ事を考えていたので、賛成する。

他のものには、どんな学校かわからないので、マークとロザリアがざっと説明すると、皆、感心して、

「ぜひ、作りましょう」という話になった。

皆で訪れた問題の奥庭は、ひどく静かだった。

別棟はなかなか凝った建物で、小貴族の邸かちよつとした学校程度の面積は有りそうだ。

二階にはかつての女主人のものらしい豪華な寝室の他に、いくつもの小部屋が有る。

「この、主寝室は皆で勉強するちよつとした図書室か資料室にしたらどうだろう？ 小さな部屋は生徒達一人一人の個室に出来ると思う。それに……」

地球人だった頃のマークは建築が専門だけに、改装プランを考え出すのもお手の物だ。

「個室に備える家具は、ベッドと勉強机、書棚、クローゼット程度で良いでしょうか」

「白を基調にすると清潔感もあって良いでしょうね」

「日当たりの良くない部屋がちよつと気になるなあ」

皆色々な事を言うと、マークはそれぞれの対処法もすぐに思いつくようだった。

一階は授業と実習を行う調理スペースと食堂と居間、共同の浴室程度は設けたい所だが、水周りは大改装というより、根本的に作り変える必要が有りそうだった。

「清潔感があって、明るくて、講師の作った料理をチームに分かれて作成できる調理スペースがあって、となるとねえ、結構難しいな。機能的で使い易くないといけないし」

「食器やリネン類の収納や、食材の保管の問題もありますね」

「いやあ、これは結構、難問だぞ」と言いながらもマークは楽しそうだ。

「モーハンさんが仰ってたように、貴重な薬草も多いですね」

「珍しい花も色々ですな」

庭の方も、楽しみな要素が色々ありそうだ。

「そうだ、大学で建築をやっている学生を呼んで来よう。実習もかねて、アイデアを出させようか」

マークの言葉に、ロザリアは興味を覚える。

「へええ、ブルサの大学は建築のコースが有るんですか？」

「まだ新しいから、たいした実績はないんだ。でも、才能の有る学生は集まっていると思うよ」

「何か画期的なアイデアで、この建物が素敵な学校に生まれ変わると良いですね」

「僕一人のアイデアでは、限りが有るからね、みんなの意見が上手く集約できるといいな」

「開校はいつ頃になりましょうか？」

「そうだなあ。この半年以内にどうにかしたいね。なに、金は十分あるんだから、どうにかなるさ。こう言う時には、個人資産がドッサリ有って良かったと思うよ。金も使いようだよな」

なんだかんだでアイデアを出し合って語らううちに、昼食の時間も過ぎたのに、ユスフが呼ぶまで皆気がつかなかった。昼食後も話し合いは続き、新しい学校の基本方針と概要はほぼ固まったのだった。

第四十六章 学校を作ろう（後書き）

毎日一回、黄色いバナナをポチッとお願ひします。
更新の原動力になります。

第四十七章 別れの予感（前書き）

ハリカの死期は迫っています。

第四十七章 別れの予感

何が売れるか売れないか、有る程度の目処はエスコバル公爵邸の試食会で見当はつけたが、いざそれらを商品として売り出すとなると色々と課題もあるのだ。

クシャダスの種たちを、正業に就けて、街の雰囲気は大いに変えるという計画は、今まではかばかしい成果を上げてこなかったが、モーハン達もそれなりに出来る事はやっていたおかげで幾人かの有望な人材が育っては来たのだった。そうした若くてやる気の有る人材を引き取り、教育する施設の建設は、ブルサの建築を専攻する学生達の力も借りて急ピッチで進んでいた。

「本当に、地球式の調理師専門学校の教室ですね」ロザリアは感動していた。

「かなり良い線を行っているだろう？」

マークは産後の肥立ちが思わしくないハリカの様子を見守りながら、アルビとブルサを瞬間移動で頻繁に行き来して、必要なことをこなしていた。金の龍に言わせれば「産後の肥立ち」と言うよりも、無駄に大きすぎる魔力に肉体が蝕まれて、そろそろ限界に近いのだ、という事らしいが、いずれにしても、ハリカの寿命は先行き余り長くなさそうなのは、ハッキリしているらしい。

そして、その一方で、イゼル王女の懷妊が明らかになり、マークはひっそりとイゼルと秘密の結婚をした。

「ハリカの残り少ない人生が、穏やかで平和であって欲しいと願うのに、何をやっているんだろうとは、思わないでも無かったけれど、王家には嫡出の後継者が必要だからね。大げさに触れ回る必要は無けれど、少なくとも法的には正式にイゼルと僕が結婚する必要が有ったんだ」

「ハリカさんは、わかって下さいますよ」

「それはそうだろうが、いざ実現したと耳にすれば、それなりに辛いだろうと思ってね」

「国王陛下やイゼル様が秘密でも構わないと仰ったのですよね？」

「そうなんだが、このままの状態で居るのも、そろそろ限界では有るみたいだ」

秘密の結婚とは言え、宮中にもエスコバル公爵邸内にも、事情を知ってしまった物は少なからず居る。

それに、特にイゼルに古くから仕える者の中には「なぜ秘密にする必要があるのか理解できない。摂政殿下は頭がおかしくていらつしやるのではないか」と公然と非難する者も居るし、王の側近達は大半が今の状態が不満なのだ。

「近い内に、やはり結婚のお披露目をなさる必要があるのでしょうかね」

「すぐにでも、支度を始めないと宮中の老人達に突き上げを食らうのは目に見えているんでね、宮中での対策に付きっ切りでやらないと、色々和不味いんだろうと思うのさ。ハリカや幼いポールにも思わぬ形で悪い影響が及ぶ恐れも有る。少なくともポールがスムーズに公爵家の家督を継げるようにしておきたいし」

そんなわけで、と、ロザリアとクラウドはアルビに赴いて、自分が会いに行けない間、ハリカやポールの面倒を見てやって欲しい、と頼まれた。

「可能なら、成人するまでのポールの教育もお願いしたいなあ。どう？」

「殿下は、我々にポール様の謂わば守役もりやくを務めて欲しいと仰るのですね？」

「ああ。今のところは身边に不穏な動きは無いけれど、一番安心できるからね。ロザリアちゃんには、京子さんの力もあるんだし。それに君たちもポールも互いに聖剣の主でもあるわけなんだから、傍

に居れば何がしかの力や能力の増大も見込めそうだ」

口にはしないが、ハリカが相当に弱っているようだ。クラウドとしても恩人のハリカの最後が穏やかで有って欲しいと思う。

「兄様のお役に立てるのでしたら、喜んでアルビに参ります」ロザリアも異存は無かった。

「もっと僕に瞬間移動が軽々とできれば良かったんだけど、今の能力では移動した翌日を使い物にならないぐらい集中力が保てないんだよ。茶でも飲んで無駄話をするぐらいなら出来るが、宮中の厄介事は色々有ってねえ、そんな状態では恐らく処理できない。君らがアルビに行ってくれば、僕も安心だ」

調理師専門学校の方は、まずは建物の完成に専念し、モーハンと相棒のファーガスが『クシャダスの種』の生徒候補達に一般教養や公衆衛生についてあらかじめ指導して開校に備える事となった。

「こちらの学校の開校に、もしかしたら立ち会えないのは少し残念です」

「いずれは、ポールを連れて、また、この邸に戻って来てもらう事になるから。そうしたら、ロザリアちゃんには、この学校の講師もお願いしたいな」

ポールを連れて戻るのは、ハリカの死後という事だ。

互いに口にはしなくても、その事はイヤと言うほどハッキリしている。

「じゃあさ、僕はこれから宮中へ戻るよ。今晚はもうこの邸には戻らないと思う。アルビに出発出来そうになったら、使い魔を飛ばしても良いし、明るい時間帯なら直接『心話』でも良い、すぐに知らせてくれよ」

マークは、何気ない調子で言い置いて邸を出て行ったが、その心痛はいかばかりだろうか？

どうやら、イゼルの方も寿命の短さをそれとなく感じさせられる様

子らしい。

ロザリアとクラウドスは、翌朝早速アルビに向かった。

「（それでは、殿下、ただ今から出かけます）」

「（馬車に乗りっぱなしじゃ、ロザリアちゃんが大変だろう。途中でちゃんと宿屋でとまるようにしてくれ。そこまで事態は切迫はしてないだろうから）」

「（兄様、イゼル様の御容態はいかがなのですか?）」

「（まだ、本人にそれほどの自覚は無いが……良くは無い。目に見えて悪化しない内に、結婚の披露をする必要もあるし、胎内の子供の事も気がかりだ。こちらも急がないといけない状況だよ。）」

「（我々二人とハリカさんの相談で、たいいていの事は決められると思いますが、場合によっては殿下にお知らせして個別に御相談と言う事も出てくるでしょうね）」

「（僕の方は心話をブロックする腕輪は当分使わないと思う。いつでも遠慮なく知らせてくれ）」

ロザリアとクラウドスはひた走る馬車の中で語り合った。

「イゼル様の御容態は望ましく無いと言う事なのでしょう」

「お子様がお生まれになるのは、確実なようだから、当分は大丈夫なのかしら……」

「問題は御出産の後と言う事なのでしょう」

「兄様を公に王家の婿君として披露なさるのは、ごく近い内かもしれないのね」

「その時にハリカさんが心細く思われたり、辛いと感じられる事が無いように我々がしなくては成りませんが……」

「難しいでしょうね。それでも、小さなポールちゃんの事も含めて、多少なりともお役に立ちたいわ」

久しぶりに見る『朝霧楼』は閑散としていて、かつての賑やかさを

知るロザリアとクラウスは、それだけでもなにやら悲しい気分になって来たのだった。

「あまり客が居ませんね。ハリカさんの看病やポール様のお世話で人手も目配りも不十分なのかな」

クラウスは思わず眉を顰めた。

それでも、ロザリアも一生懸命デザインについて考えた看板や必ずきれいにするように指導した窓の手入れは完璧で、入り口の掃除も行き届いているのが、かえって物寂しい感じを強くする。

「ともかくも、中に入りましょう」

ロザリアがドアを開けて「こんにちは、お久しぶりです」と声をかけると、厨房からハリカの弟が出てきた。

たった三人しか居なかった客は、もう食べ終わっていて、次々と席を立ち店を後にした。

「公爵様からの使い魔が、今朝、お二人がお着きになる予定だと知らせてくれました」

という事で、早速以前二人で使っていた部屋に通された。

「何だかとても懐かしいわ」

ロザリアは庭の景色が、変わりなく美しいのが嬉しかった。

「全いです。お二人にお戻りいただけて、私もほっと致します」

ハリカの弟も嬉しげだった。

「昼時なのに、随分店は静かでしたが、やはり人手が足りませんか？」

クラウスの問いに対して、自信無さ気な返事が返ってきた。

「姉が寝込んで、公爵様もお二人もおいでにならない状態では、どうも店の切り回しが上手くできません」

「そのお話は、後でじっくり伺う事として、まずはハリカさんとポールちゃんに会わせて下さい」

ロザリアはまずは、ハリカの顔を見てから考えた方が良いと感じた。

こちらで御座います、と案内されたのは、かつてのハリカ専用の居

間だった。

かなり大きなエスコバル公爵家の紋章が入ったベビーベッドが置かれていて、その中に褐色の髪・緑の目の幼いパウ・ド・エスコバルが寝かされていた。枕もとの棚には聖剣『ジラント』が有る。急に『ジラント』が低い虫の羽音のような音を立て始め、乳母役を努めているハリカの妹がびっくりした顔で目を見張った。

「この剣がこのような音を立てるのは、初めて聞きます」

ロザリアは、クラウドと自分の剣が恐らくは反応しているのだと説明しておいた。

ベビーベッドの中のポール、つまりパウ・ド・エスコバルは小さな手を動かし、声を上げた。

ロザリアが抱き上げると機嫌の良い顔つきになった。

「ポールちゃん、初めまして。ロザリアです。よろしく願いいたします」

次にクラウドが抱き上げると、何か口を動かして話でもしそうな表情をする。

「ポール様、お父様からポール様の守役もりやくを仰せ付けられましたクラウドでございます。大きくおなりになったら、剣をお教え致します。学問もなさらねばいけません。未熟者ですが精一杯努めさせていただきますね」

「（ポールちゃんはひょっとして『心話』が使えるようになるのかもしれないわ）」

「（私もそんな気がします。今もこうして私の顔を真剣に御覧になって、何か伝えようとされてますね）」

「ハリカさんは、この奥でお休みですか？」

ハリカの容態もロザリアは気がかりだった。

「今は寢床で目覚めていると思いますので、会ってやって下さい」と弟が案内に立つのについて行くと、寢床で体を起こして居るハリカが居た。

「まあ、お休みになって下さい！」

ロザリアは、ハリカが眠りやすいように枕をあてがう。

「お久しぶりでございます。この様な姿で失礼致します」

その声は、小さくて、やっと搾り出したようにも聞こえる。

確かに、ハリカの最後の日は刻一刻と近づいているようだ。目に力が無く、肌のハリも失せている。

クラウスに抱かれている幼いポールは、盛んに手足を動かし、口をゆっくり開け閉めして、何事かを訴えかけているのだったが、残念な事にロザリアにもクラウスにも、まだ、その意味合いは理解出来ないのだった。

第四十八章 落ちる涙（前書き）

今回は、悲しいお話です。

第四十八章 落ちる涙

ブルサの宮廷での厄介事は、なかなか収束しない。

イゼルも王も本心ではきちんとした形での結婚披露を望んでいる。それだけに、老臣たちの感情を逆撫でするような行動には出られない。

こうした状況下で、ロザリアとクラウドが朝霧楼のハリカとポールを見守り、毎日事細かに様子を伝えてくれるのは、マークにとって実にありがたく心強かった。

「（そっか。朝霧楼の商売が思わしくないか）」

ハリカの弟の困惑についても、知らないわけではなかったが、正直な話、ハリカの健康問題とポールの養育で頭が一杯で、余りちゃんと話も聞いてやって居なかった。ロザリアとクラウドが相談に乗って、対策を実行してくれれば事態は随分よくなるだろう。

イゼルは妊娠している。胎内には将来このキタイ王国の王位を継承する事になる筈の娘が居る。父親であるマークのような人間離れした寿命の持ち主かどうかはまだ分からない。まだ母体との連携は十分ではなく、イゼルの体に負担を掛ける事は避けねばいけない。たとえばイゼル自身がマークに抱かれる事を望んでいたとしても…。

「お願い、マルク、行かないで」

マークが一晩でもベッドを共にしないと、イゼルは心の平静を失うようだった。

「お願い、私を見捨てないで、一人にしないで、恐いの」と言っただけに、しがみ付くかと思えば、

「迷惑ばかり掛けてごめんなさい。でも、私もマルクを愛しているの」と言っただけで泣く。

第一王女としての誇りも矜持もかなぐり捨てて腕の中に飛び込んでくるイゼルを、マークは振り切れなかった。

「マルクに愛されているアルビの方が、うらやましくて妬ましくて気がふれてしまいそう。私、自分がこんなに嫉妬深くて愚かだと知らなかった」

そう言ってまた、烈しく泣く。

こんな時はひたすら、抱きしめて、時折キスしてやるしか方法は無かった。

「おなかの子に障りますから、今はあなたを抱けない」と言い渡した時の、イゼルの暗い瞳の色がマークの感情を強く刺激する。

「この子は、あなたに必要とされているのね。でも私は…」さらに自虐的な言葉を吐こうとするイゼルの口を、マークはキスでふさぐ。イゼルがその先口にしようとした言葉は、自身を傷つけ、胎内の子を傷つけ、マークを傷つける。

マークと一緒にだと、どうにか食事でも喉を通るようだったが、姿が見えないと何も食べられないらしい。それほどイゼルはマークに依存し、執着していた。

「(用心しないと、子が流れるぞ)」

わざわざ金の龍が言うほど、不安定な状態なのだ。

「(お前らしくも無い不手際だ。この王女が幾度か気にしなくて良いと言った言葉を、自分に都合よく解釈して茶を濁してきた結果だな。アルビの女は、どうせ長くない。お前がつききりで看病しようが同じ事だ。王女の方はお前が傍に居るだけで心身ともに安定し、胎の子も無事に育つ。どちらを優先するべきか分かるよな)」

マークは金の龍の言葉に、一瞬、血が沸騰するほどの激しい怒りを覚えた。

「(ふん、だからお前はどちらの女も幸福に出来ないのだ)」
そう言い捨てると、金の龍は姿を消した。

マークの思いをよそに、不安定なイゼルの傍を離れる事が出来ないまま、時間は過ぎてゆく。

「(兄様、ハリカさんの容態がおかしいのです)」

「(どうしたんだ一体?)」

「(昨夜から高い熱が出たまま、一向に下がる気配がありません。先ほどから痙攣が始まりました。そしてうわ言で『マーク』と幾度も兄様を呼んでいらっしゃいます)」

「(殿下、ぜひこちらにおいで頂いて、ハリカさんをお見舞い下さい。皆の動揺を沈めて頂きたいと思います。私たちだけではどうも力不足です)」

その『心話』を受けるとすぐ、マークは飛び起きた。

ハリカは普段、人目のある所では自分の事を「公爵様」とか「旦那様」と呼んできた。「マーク」と言う呼び方は二人きりで居る場合の特別な呼び方なのだ。

何か、マークに特別に伝えたい事が有る、きっとそうに違いない。居ても立ってもいられなかった。

「マルク、どうしたの?」

イゼルは必死な形相でマークの服の裾を握り締めた。

「急用が出来ました。なるべく早く戻りますから、待っていてくださいね」

服の裾から、イゼルの手を剥がすと、その手にキスを落として、すばやくドアの所に立った。

「マルク、置いてゆかないで、お願い」

「イゼル、どうか分かってください」

あっという間に自分の書斎に駆け込むと、マークは机の上に置いた大きな丸い鏡に意識を集中した。
すると次の瞬間、マークはハリカの枕元に立っていた。

「ハリカ、僕だよ、マークだ。わかるかい？」

ロザリアとクラウドスは、そっと病室の外に出た。

マークはハリカの額に、自分の額を合わせ、必死に呼びかけた。すると、ハリカは眼を覚ました。

「ああ、マーク、やっとおいで下さったんですね。嬉しい」

「暫く、留守にして本当に悪かった」

「ご結婚あそばしたのですよね、王女様と」ハリカは力無く微笑んだ。

「知っていたの？」

「ええ、ここの窓から景色を眺めているときに、噂をしている人が居て……」

「ごめんね」

「いえ、以前からそうなるかもしれないって、仰っていたじゃないですか」

「そうだね。でも、ごめん」

「私はもう長くないのですよね？」

「僕には分からない」

「最後に、どうしても申し上げておきたかったのです」

マークはハリカの手を取って、そっと握った。

「今まで、本当にありがとうございます。誰よりもマークを愛しています」

そう言って、微笑むと、ハリカは急に意識を失った。

「ハリカ、ハリカ、ねえ、ハリカ？」

口元に浮かべた笑みはそのままに、ハリカの心臓は脈打つのをやめた。

ロザリアとクラウドスがマークの心の波動の大きな乱れに気がついて、部屋に入ると、ハリカの手を取って、ひたすらその名を呼んでいるマークの姿があった。

「兄様…」

「殿下…」

やがて、異変を悟ったハリカの弟や妹、その妹に抱かれた幼いポール、そして店の者達が部屋の外に集まってきた。

マークは立ち上がり、ハリカがいつも使っていた文箱から、一つの書付を取り出した。

「ああ、ゴメンね。みんな。ついさっき、ハリカは息を引き取った。実を言うと僕も今はまともに考えがまとめられない。でも、ここにこうしてかねてから決めていた事はちゃんとまとめてあるから、ロザリアちゃんとクラウド君にこの通りに実行してもらおうと思う。ゴメン、君達二人に厄介を掛ける事になるが、是非お願いしたい」

書付を受け取ったロザリアとクラウドは、そこにハリカの葬儀の執り行い方から、ポールの養育・財産の分配・今後の朝霧楼の経営にいたるまで、事細かに纏め上げられているのを確認した。

「これほど詳細な御指示があれば、私たちでもかなりの事ができます」

「お葬式の取り仕切り以外は、ロザリアと二人でどうにか致しましょう」

「すまない。もう暫く、別れを惜しませてくれ。そうしたら、直ちに都に戻る。連絡はいつしてくれても構わないから」

マークは穏やかな中に、断固として他者の介在を拒む風情を漂わせていた。

その言葉に従って、他のものは全員別室に引き取り、ロザリアとクラウドを中心にして、早速葬儀の準備について話し合う事になった。

「ねえ、ハリカ、僕はもっともっと君を大切にしたかった。なのに出来なかった。君は許してくれて、僕を愛していると言ってくれたけれど、僕は僕自身が許せない。馬鹿だろ？」

一方で、急にマークに置いて行かれてしまったイゼルは、真夜の宮殿内を寝巻きのままで彷徨っていた。やがて、マークの個人的に使っている書斎にたどり着くと、机に置かれた大きな丸い鏡に不思議な金色の光が揺らめいている事と、その隣に非常に良く出来た美しい女の絵姿が小さな銀の額に入って飾られているのに気がついた。それが「写真」と言うものだとは知らなかったが、女がアルビのハリカであることは容易に見当が付いた。

その写真の隅に書き添えられた言葉は、紛れも無いマーク本人の筆跡だった。

「愛している」

「いやああ！」

イゼルは金切り声を上げて、銀の額を放り投げた。打ちつけられた額は、音を立てて一部が割れた。

マークの残り香が漂う椅子の座面に、顔を摺り寄せて、イゼルはずっと泣き続けた。

一体どれほど、そうやって居たものか、気がつくとマークがすぐ傍らに立って、じっと、イゼルを見下ろしていた。

「ハリカは、つい先ほど亡くなりました。安心しましたか？」

マークの言葉に籠もる激しい怒りと悲しみと無力感に、イゼルは打ちのめされた。

「ごめんなさい、本当にごめんなさい」

泣いて侘び続けるイゼルを見るマークの眼からは、滂沱の涙が溢れ出していた。

「イゼル……僕はまた、あなたを傷つけてしまった」

マークはイゼルをそっと抱きしめる。イゼルを罰する気持ちも恨む気持ちも無かったはずなのに、自分の言葉はイゼルに怒りの矛先を向けたのも同然だった。

「愛しています。イゼル」

その言葉が更なる引き金となって、イゼルは声を放って号泣した。

第四十九章 ロザリア・十歳（前書き）

さて、これから又、話は大きく動きます。

第四十九章 ロザリア・十歳

七歳でキタイに来てから瞬く間に年月は過ぎ、ロザリアは十歳になった。

その間に幼いポールの守役となったクラウドを助け、共にポールの生母・ハリカの作った朝霧楼の建て直しを成功させた。ハリカの弟以下指導を受けたメンバーで、二人のサポートが無くても危なげなく店の運営ができるようになり、かねてからのマークとの申し合わせどおり、二人はもうすぐ三歳になるポールを連れて、都であるブルサのエスコバル公爵邸に戻った。

それ以降は、クシャダスの生活改善事業や調理師専門学校の事もあって、ロザリアもクラウドも大忙しだった。

近頃はロザリアの生来の美少女ぶりに更に磨きがかかり「後数年で空恐ろしい程の美女になる」とキタイの宮廷でも言われているが、王にまで認められた婚約者であるクラウドが普段から近衛師団の連中の剣の相手をしていて、聖剣の主で剣豪である事も広く知られている。

本当はロザリアに誘いをかけたいとは思っていても「眼の保養だけで済ませるしかない」と諦めて居る男は実に多いのだった。

クラウドはそうした視線の一つ一つに一瞥をくれるのだが、その破壊的な攻撃力は男達を震え上がらせるのに十分だった。そのくせいつも行動を共にしているロザリアは、一向に無頓着なのだった。又、そのように居られるようにクラウドが万全の注意を払っているのもあったが。

それでも、主君であり恩人でも保護者でも有るマークの場合は、ロ

ザリアに時折ぶしつけな視線を向けてもクラウドなりに自制して、睨み返したりはしない。そのようにしなくても、マークにはクラウドの不愉快な感情は手に取るようにわかってしまう。

「ゴメンよ、クラウドス君」と毎回、口にして謝られてしまうのも、決まりが悪い。

マークはハリカの死後、すぐにイゼル王女との結婚を国民に広く披露して多くの祝福を受けた。

だが、それから一年もたたない内にイゼル王女はファティマ姫を産んで、すぐ亡くなってしまった。

ファジル王にとって唯一の子供であったイゼル王女の死後、王位の第一継承権は幼いファティマ姫のものとなった。ファティマ姫の父でファジル王の甥であるエスコバル公爵つまりマークに、次の王になって欲しいと願う貴族も多かったが「自分はいくまで摂政の立場を貫く」と言うマーク自身の強い希望は、そのまま通りそうだった。

「いずれ、マルクは帝位を継ぐのだろうしな」というファジル王の昔からの持論は、近頃はますます現実味を帯びてきた。隣国である帝国の状況は、幾ら皇太子ユーグが魔法で不都合な実態を隠そうとしても、時折咯血すること、顔色がますます以前より悪くなった事などは、帝国を訪れる商人の噂や外交官達の報告で明らかだった。無論、そんな報告が無くても金の龍の話でマークは逐一承知していたのだが……。

「エスコバル公爵は実は先帝陛下の第一皇子らしい」「聖剣『ジルニトラ』の主であるエスコバル公爵こそ正当な皇位継承権を持つ」と言う噂を利用して、マークは帝国の貴族の切り崩しを図った。かなりの帝国の貴族が亡きギルバハル皇后の悲劇を記憶しており、今の状況を苦々しく思っているのは確かだった。

本来なら皇太子ユーグの生母の実家と言う姻戚関係で権力を得るべきレオンハート家が、ただ一人の姫君であるロザリアをキタイに居るエスコバル公爵に委ねたという事実も、驚きと共にある種の共感を持って受け止められている。

「レオンハートが見放すとは、やはり、ユーグ殿下は狂っておられるという事だな」

口にはしないが、そのようにユーグを見る者は着実に帝国内で増えている。

銀の龍の力を暴走させた「爆殺^{ばくころ}」事件については魔法の力の所為で詳細に思い返す事は不可能でも、女神の封印を目論んでいるらしいと言う噂や、時折垣間見せる過剰なまでの残虐性は、心有る者を離反させるのに十分な材料であった。

名ばかりの現皇帝フアン・ド・オルテスは、もはや思考能力を完全に無くし、人語を理解する事すら不可能になったという事実も、かなり知られるようになっていく。普通なら退位して皇太子に帝位を継承させるべきだが、帝国内には皇帝の剣である『ジルニトラ』が無いので大神殿における皇位継承の儀式を執り行う事ができないと言う噂も、オルト中の神官を中心に相当広がっていた。

昨年のようにブルサ中の神官連中が大挙して宮中のマークの元を訪れて、

「一日も早く聖剣『ジルニトラ』を掲げて、帝国の首都オルテスにお入りになり帝位をお継ぎあそばすべきです」と申し入れると言う事件まで起きている。

そのような事をすれば皇太子ユーグとの争いは避けられず、下手をするとオルト中を巻き込んだ大戦争を引き起こしかねない。避けられる戦争は避けるのが上策で、自分の寿命は限りなく長いのに対し、ユーグは酷く健康を損ねているので先は短い。あせる必要は無い…

：そのようにマークは神官達に言い聞かせ下がらせた。

「ユーグは酷く健康を損ねているので先は短い」とマークが公の場で公言した事が引き金になって、各国は様々なやり方で帝国に探りを入れるようになった。ユーグが弱った体に銀の龍の力を受け入れて行う眼くらましだけでは、覆い隠せない事実が次々明らかになって来ている。

「僕が特に軍事的な行動を起こさなくても、回りが勝手に騒いで、ユーグをじわじわ追い詰めている感じだね。戦闘はなるべく避けたい。悪くはない手だろう？」

含み笑いをもらすマークの顔は、結構悪人面だとロザリアもクラウスも思った。

「おいおい、僕がそんなに悪人面か？」

近頃はポールの養育や仕事の件で、互いに連絡を密にする必要を感じていたので、心話をブロックする腕輪を使う事は稀だった。だが、こんな風に頭にチラツと浮かんだ事まで全て丸わかりというのは、なかなかに決まりが悪い。そうだとも言いかねて、ロザリアとクラウスは顔を見合わせる。

「僕は近頃は誰とも親密に愛し合う事もできない寂しい身の上だから、はかりごと謀をめぐらすぐらいしか気晴らしも無いのさ」

国家の一大事を「気晴らし」とは何とも感心しないが、マークには今、愛情を傾ける女性が居ないのは確かだし、マークが流血の惨事を可能な限り避けようと真面目に考えているのも確かなので非難できない。

「なあ、ロザリアちゃんは、そろそろ始まるんじゃないの？月の物。そんな気がするんだけどさ」

たとえばマークであっても、そんな話題を口にされるのは愉快ではな

いクラウスだった。しかしその理由もまんざらわからないわけでもない。冷静に答える。

「おっしゃるとおりのような気がします」

ロザリアはロザリアで、男二人に自分の一身上の事をこんな風に話題にされて、恥ずかしかった。

「ああ、ゴメンよ、ロザリアちゃん。でもね、個人的な事のようにあつてそうでも無いんだ。いつ僕の番が出現する^{っがい}か、いつ二人が帝国に戻るかと言った重要事項に直結するんだよ」

番の件は二人とも承知していたが、帝国に戻る時期と関係しているとは考えていなかったので意外に思った。

「いずれ又、細かく話をつめることになるだろう」

そうマークに言い渡されて、狐につままれたような気分で、二人は宮中を下がり、エスコバル公爵邸に戻った。近頃マークは七日に一度程度のペースでしか邸には戻らず、宮中に居る事が多い。娘を失った王を慰め、幼いファティマ姫の安全を図るためもあったが、何かそれ以外の事情も有りそうだった。

幼いポールの乳母は引き続きハリカの妹が勤めていたが、貴族としてのたしなみや立ち居振る舞いなどを仕込むのは、守役を任じられたクラウスとロザリアの役目で、食事のマナーが楽しく自然に身につくように、夕食はいつもロザリアが心を砕いた献立を用意していた。

美味しく夕食を食べ、日課の絵本の読み聞かせが終わると、ロザリアとクラウスはようやく自室に戻った。

二人で久しぶりにゆっくりと入浴した直後、「あらっ」という狼狽したロザリアの声で、クラウスは異変を知った。

「あんな風に殿下がおっしゃったのは、虫の知らせでもありました

かね」

待ちかねていた月の物の始まりだった。

クラウスはいそいそという感じで、ロザリアの手当てをした。

「ねえ……クラウス……月の物が終わったら……」

「まだ、早いです。早すぎますよ。あせらなくて良いんです」

幾らなんでも、十歳で男女の契りを交わすのは早いだろうとクラウスは思う。

「明日は偶々休日でよかったですね」

二人はいつものように寄り添いあって、穏やかな眠りに着いた。

オルトに七日ごとの休日の慣習を根付かせたのはマークだが、ロザリアもクラウスも大いに恩恵をこうむっている。ゆったりと朝の間を気にせず二人の時間を持つことができるのだ。いつもならとつくの昔に身支度を整えなければいけないが、休日の朝は二人そろってまだ寢床に居た。

「頭は痛かったりしませんか？」

「頭は大丈夫だけど……」

クラウスが大きな手で包み込むように後ろから腰から下腹にかけて摩ると、ロザリアの口から溜め息が零れる。

「冷やさないように用心しなくてはいけませんね」

「摩ってもらうと、痛みが引くみたい」

「これから、毎月これがあると思うと、心配になります」

「女の人みんなそうなのだから、心配し過ぎなくても良いのじゃない？」

「本来なら母君がお祝いを用意して下さったでしょうに……」

「クラウスが居てくれるから、平気よ。お母様には内緒だけれど」

「そうですね、色々と内緒の事が増えてしまって、申し訳ない気もするんですよ。時々」

クラウスはロザリアの耳朵を軽く噛んでから、首筋にキスを落とす

た。

「どうして？ お父様もお母様もクラウスと私が結婚するんだと認めていらっしやったから、何も申し訳ないことなんて、無いわ」

「でも、随分前からこんな風に貴女にキスもしてますし、他にも色々してますからね」

それでも、全然かまわないのに……とロザリアは思っている。

恐らく、父も母も銀の龍の魔法で自分がクラウスとの結婚を認めた事を綺麗さっぱり忘れている。それを思い出させるのも、そして自分に魔法をかけられた時に真実を思い出すためにも、クラウスとの強い絆が大切なのだから。

「そうですね。帝国内部は銀の龍の魔法で覆われているでしょうし、戻る時は大変でしょうね。私にはなぜかあの魔法は効き目が無いのですが、ロザリアには多少なりとも効くかもしれません。私との関係も忘れさせようとする可能性は高いでしょう。でもね、ロザリア」

クラウスはロザリアをしっかり抱きしめて言った。

「貴女の記憶は必ずや私を取り戻します」

ロザリアは自分をしっかりと受け止める逞しく広い胸に身を委ねて、頷いた。

第五十章 女神の封印を阻止せよ

今の所、銀の龍はアムダリア帝国皇太子であるユーグを器としているが、彼の死は刻一刻と迫っている。普通ならいつ亡くなってもおかしくない程、強大すぎる魔力で体が痛めつけられて居るが、それでもどうにか持っているのは金の龍が告げたように「次の器がまだ出来ていない」のが最大の理由のようだ。

キタイと帝国の関係はほぼこの一年、大した破綻も変化も無く、ずっと膠着状態に有った。

ユーグは「なまじっか中途半端に魔力が強いから」現皇帝ファーン・ド・オルテスのように、廃人となる事も出来ず「最後まで明晰な意識を保ちながら苦しんで死ぬ」事になるらしい。

「（ユーグも哀れだ。あれでも一応このオルトでは血を分けた僕の弟なんだよな）」

「（ほお？お前がそのようなことを考えるとは意外だ）」

「（意外か？元来僕は善良な人間だから、当たり前だ。ユーグは死んだ後はどうなるんだ？）」

「（宇宙の塵となるか、彷徨う悪霊と成り果てるか、二つに一つだ）」

「（どこかに生まれ変わって人生をやり直し、と言う事は出来ないのか？）」

「（そうだなあ、お前と京子の故郷の地球でなら可能性は有るかもしれない。ただしその為には女神か同等の力を持つ存在の導きと助けが必要だ。それに、何よりユーグ自身がそれを望まねば無理だ）」

「（ユーグが地球での転生を受け入れる条件は何だろう？）」

「（ロザリアの波動とよく似た波動の女と番になる事が出来る運命

なら、転生を望むだろう)」

「(そんな運命を彼のために用意できるかどうか……が、恐らく鍵だな、メイト)」

「(つまりはその番が地球に生じるかどうかだな、マーク)」

死期が迫っている事を自覚しているユーグが何かしでかすとしたら、まずは女神の封印、次がキタイとの戦争と言うのがマークと金の龍の一致した見方だった。

「(銀色のは帝国以外の土地に出る事を極端に嫌うが、それでもブルサの周りは其の昔帝国領で有ったのだし、クシャダスと言う龍の魔力を帯びた場所もある。他所はともかく、ブルサの宮殿の辺りならヨレヨレの銀色の中でも、洋上からの砲撃ぐらいは出来るぞ)」

「(おい、出来るぞってメイト、何だよ。そもそも攻撃させないようになしてくれよ)」

「(防ぐ手立てはマークが自分で考えろ)」

そもそもオルトの兵器のレベルは、大砲がせいぜいで、未だにローマ帝国のバリスタと言った据え置き式の大型弩砲と同様の代物も現役なのだ。後はトレビュシェットとかカタパルトと呼ばれたような大型の投石機の類がせいぜいだ。火器の類は大砲以外は見るべきものが無い。南北戦争で使われた手回し式機関銃ぐらいなら、多分マークでも作れそうだが、敢えて作るつもりは無かった。のどかな小さい世界であるオルトでは、手回し式機関銃の一分間当たり百二十発程度と言う性能でさえ、大量殺戮兵器たりうるとマークは警戒したのだ。

洋上の艦隊を攻撃するのに戦闘機も考えられるが、オルトの発展段階で必要だとは思えない。

艦隊と言っても木造船に精度の低い大砲をせいぜい六門程度備え付けたちゃんな戦艦で構成されたものだから、近代的な火器を登場さ

せるのは躊躇いが有る。飛行船かバルーンに簡単な爆弾を積んで、撒く程度で十分だろうとマークは思っ居る。帝国の艦隊を出航できないように封鎖できれば、一番賢いかもしれない。

一方で陸路での攻撃となれば、女神の台座周辺が重要なルートとなる。オルトの最高峰であるレオンハート峰付近の国境地帯は常に警戒が必要なのだ。

「（なあ、メイト、やっぱり、やりそうだな、女神の台座の封印を）」

「（それぐらいしかユークの頭では考えつかんからな）」金の龍は辛辣だ。

「（おやおや。ユークも随分と舐められたものだ。それにしても、帝国に潜り込ませた密偵からの報告じゃ、女神封印の禁術に使う呪文って言うのが、なぜか日本語だったな、密偵は意味も分らず写し取っただけだが）」

どうやら日本語で『オルトの女神をここに封印する』と言う一文を、銀の龍の器であるユーク自身の血でもって女神の台座に書き付ければ、封印が出来てしまうようだ。

「（ユーク自身の新鮮な血が一番効力が強いのだよな。ならば、封印のためにユークはレオンハート領内にやってくると見るべきだな）」

「（ユークにすればレオンハート公爵は家臣なのだし、レオンハートの皆はユークの魔法で記憶を操作されている。女神の台座に到達するのはたやすい）」金の龍の指摘は至極当たり前だった。

オルトでただ一人、ユークの魔法の影響を全く受けない男……クラウスの力が必要だと、マークと金の龍の見解は一致した。

夕食の席で、マークはロザリアとクラウドに語った。

「ユーグの女神封印の企みを妨害しなくてはいけない。女神の台座に恐らく銀の龍の器たるユーグ自身の生き血で『オルトの女神をここに封印する』と書き込むと言う方法を取るようだ。さて、どうやって防ぐかだが……」

クラウドは何か考えが有るようだった。

「殿下、女神の台座は知らぬものが見れば、オルトでは見ない文字のような物が刻まれている四角い白大理石の石版ですよ。見た目が瓜二つなものを街道筋の別の場所に置けば、騙されてくれないでしょうか？」

「それ、良いアイデアだと私も思うわ。あの刻まれた文は、なぜか地球の日本語のなのよね」

ロザリアにその文章が何であったかを、マークは確かめて、クラウドが言ったような石版を二枚用意する手筈を早速整える。

「なあ、クラウド君、龍の魔法が全く効かないと言う君だけの特殊能力を活用して、ユーグの奴をギャフンと言わせて見ないか？この作戦は君自身のアイデアだし、女神の台座のそばは、君の故郷だよ。偽物の台座の設置場所も、君なら相応しい場所の候補が有るんだろ？」

「はあ。確かに仰るとおりです。ですが、その、故郷に一時戻るとして、その間ロザリアはどうするのです？」

「ロザリアちゃんはユーグに見つかったら、無理やり妃にされかねん。それは困るよな。だから危険回避のためにロザリアちゃんは、このブルサで留守番をして貰おう」

「はあ……」

クラウドは顔をしかめた。

「クラウド、私は大丈夫。でも兄様、その御仕事は危険じゃないで

すか？」

「殿下の仰るように故郷ですし、ピネ村には私の力になってくれる者も居ます。エスコバル公爵領を伝って国境線を超えて、ちよつとばかり偵察と偽の台座設定に行ってもさほど危険でも無いでしょう。ですがロザリアは……」

「普段どおりの状態で、この邸に居れば、ロザリアちゃんの身に危険な事がそうそう興ると思えない。ああ、確かに僕に関しては否定は仕切れないが、ロザリアちゃんは大丈夫だ」

不覚にもクラウドスはロザリアとマークが親密になる様子を、チラッとつい浮かべてしまったのだ。そしてその一瞬だけ脳裏に浮かんだ情景を、よりにもよってマークに、更にはロザリアにも読み取られてしまった。

「も、申し訳ありません」

「僕は女性関係が乱れているから、クラウドス君にしてみれば心配だよな。だが、その気も無い女性に無理を強いた事はただの一度も無いからね。まあ、いいさ。早く一仕事終えて、戻って来たまえ。それでもういい加減、さつさと僕の番^{つがい}を作るように励んだらどうだい？」

「さ、さあ、さすがにそれは早すぎるかと」
クラウドスは冷や汗をかいている。

「それでもロザリアちゃんは、もうすぐ十一歳になる。帝国との関係同様、君らも膠着状態かな？ イゼルにもハリカにも死に別れて以降、金の龍の言葉に従って方々に種を撒き散らかしてはみたが、もう、一通り終わったという気もするのだよ。僕としても早く番^{つがい}に会いたいのだ」

「あの……兄様、撒き散らかすって……」

「あちこちにポールとファティマの異母兄弟姉妹を作っておいた。それぞれの子供らの母親は、器量は二の次で賢さと性格の良さで選んだのだがな……二十人も居れば十分だろう？」

「で、殿下、二十人ですか！」

「ああ。金の龍が『龍の血脈をオルトに広めよ』と煩いんでね。どの女も身が立つように、それぞれ配慮しているし、子供が十歳になったら、私の所に連れてくるように言ってる」

銀の龍の器はどうしても嫉妬深いという基本的な性格が有る。新しい銀の龍の器であるマークの番の娘は、後宮に他の妃が居る状況を受け入れる事は絶対に不可能だと思われるらしい。だが、しかし優れた龍の器であるマークの血脈は、確実に末永く受け継がれるべきなので、多くの子をなすように金の龍はマークにうるさく勧めた……とまあ、事情はわからないでもなかったが……

それにしても、イゼルとハリカが亡くなって以降、家庭的に寂しい状況とは言え、この一年か二年の内に二十人の子供とは、驚いた。確かに女性関係が乱れていると思われても仕方が無いかもしれない。

「ああ、わかったわかった。君たちの娘を僕の妻に貰い受ける事ができたら、もう余所見はしないよ。だから、頼む。早く、生んで欲しいものだ。また、そのことがユークの力を弱め、無益な戦を防ぐ事に繋がるのだ。宜しく頼むよ」

自室に戻ってからロザリアとクラウドスは「確かに子作りは必要」だと思いつながら、さてどうしたものか、正直な話当惑していた。

「余り、意識しすぎてもいけないですよ、ロザリア」

「……ええ、そうなのでしょうね」

だが、どうやら悠長に構えている訳にも行かなそうで、二人は顔を見合わせて苦笑いを漏らすのだった。

第五十章 女神の封印を阻止せよ（後書き）

お久しぶりです。今月中にもう少し話を進めます。七月に続編に入れるように、頑張ります。

第五十一章 敵艦隊を封鎖せよ

「何と言うかさ、このオルトに不似合いな大量殺戮兵器なんて代物は僕としては登場させたくないわけさ」

ロザリアにはマークの悩みが理解できたが、クラウドには余りぴんとかない。

「京子様のお母様は被爆者ですからね、原爆だの水爆だのと言う話になったら、怒りだしますよ」

「何なのですか？それは？」

クラウドは深刻な話とは察しつつも、わからない言葉や概念なので質問する。

マークがざっと説明してやり、「ヒロシマの場合死者が投下直後に十二万人で五年後に二十万人、ナガサキでは投下直後が七万四千人で五年後までに十四万人、余りに犠牲者や身元不明者が多くて数はあくまでも概算だが」と言うと、クラウドは「巨大な爆殺のようなものでしょうか？それにしても凄い犠牲者の数ですね」と言う。

「巨大な爆殺かあ。もっと酷いな。運が悪いと子供や孫にまで影響が及ぶんだ。まあ、あんなものは心配しなくても僕のちょっとした工夫程度じゃ、作る道具も材料も用意できないから、大丈夫なんだが……」

マークは酷く難しい顔になった。

「君ら、本当に子供を作ってくれないか、そろそろ。その点がクリアできればうんと犠牲者は少なくて済むはずなんだ。銀の龍の次代の器が胎内に存在する状態で、ロザリアちゃんに帝国に戻ってもらうという作戦を考えている」

「そ、それはどう言った利点があるのでしょうか？」

「クラウド君も知ってのとおり、ユীগの魔力が衰えそうで衰えな

いのは、次代の銀の龍の器が存在しないからだ。だが、胎内に密かに次代の器を抱えた状態でロザリアちゃんがユークに近づけば、恐らくそれだけでユークの魔力は大きく削がれる」

「そんな！ロザリアが危険ではないですか！」

「クラウド君も無論一緒に戻るんだ。そうだな、多少の変装は必要かもしれない。武人らしい身のこなしをもう少し商人風にするとかね。金の龍に言わせると僕の力をこめた眼鏡をかけると、恐らくユークの魔力では見破れないと言うんだよ。まあ、その作戦はロザリアちゃんが妊娠する事が成功の大前提だ。まずは、それ以前の準備を行わなくてはね」

まずはクラウドが提案した偽の女神の台座に、偽の情報を封印するのだという。

「ロザリアちゃんとクラウド君は、あくまで『保養のために』女神の台座に近いレオンハート家の所有する城に滞在していた、という情報で良いだろう。レオンハートの方たちがなぜか今はそのように思い込んでいるようだし、それに乗ってしまう形だ。もとは恐らくユーク自身がでっち上げた大嘘だが、そのユーク自身が考えた嘘と言うのがミソなのさ。ユークの深層心理になじみやすい偽情報であるわけなので、これを金の龍の力を借りて真実であるとユークに信じ込ませるんだよ」

金の龍の力をごく僅かだけ偽台座に封印すれば、恐らく可能だ、そんな風にマークは言った。

「クラウド君は、可能な限り本物と紛らわしい形で、二つの偽台座を仕込んでもらいたい」

「で、私が無事に偽台座を仕込み終えましたら……」

「急いでこの邸に戻り、可及的速やかに、子供を作って欲しいものだ。ロザリアちゃんも、良いだろうか？」

「殿下！」

クラウドは反射的に怒りがこみ上げて来て、声が荒くなった。その顔をマークは冷ややかに見つめて言い渡す。

「いや、これは悪いが君たち二人の個人的な愛情の問題などと言う話では最早無いのだよ。僕の言っている意味はわかるだろう？」

ロザリアは、マークとクラウドの顔を代わる代わる見ていたが、やがて決心したようにこう言った。

「兄様の仰る事は、ご尤もです。クラウドがその任務を無事に終えましたら、私も子をなせるように、精一杯努める事にいたします」

「君達二人がユーグの首根っこを抑える役目に回ってくれば、大して戦闘も発生させないで僕が次代の皇帝の位に納まる事が可能になるだろう。僕は僕で、これから出来ることをやるさ」

「どのような事でしょう？」

ロザリアが尋ねると、マークはニヤリとして「帝国艦隊の封鎖作戦さ」と言った。

「ぐずぐずしてたら、好機を逃す。クラウド君は早く行った行った」そんな調子で命令されてしまい、確かにユーグの動きに先んじて行わなければ偽台座の作戦も、無効になってしまうのは明らかであったので、クラウドはレオンハート峰麓の自らの故郷に急遽向かう事になった。ロザリアの事が気かりではあったが「絶対に手を出さないって」と言うマークの誓いもあり、「早く戻ってきたら、子供を作りましょう」と言うロザリアの言葉もあり、と言う訳で、感情的に色々と波風は立ちながらも、表面上は穏やかに一人で邸を出て行ったのであった。

「やれやれ、煩いのが居ない間にさっさと話を進めようか」

早朝に邸を出たクラウドを見送って、いつもの小食堂での朝食の後、マークはこんな風に言った。

マークの言葉にいささか不穏な空気を感じたロザリアは、眉をひそめてマークを見返した。

「こちら、そんな風に見ないでよ。僕はね、ロザリアちゃん、君の中に潜んでいる京子さんとコンタクトを取りたいんだけどね、このごろ全然取れないんだよ」

「京子様？ 私自身の知らない所で兄様とどうやってコンタクトを取っていたのですか？」

「やっぱり、ロザリアちゃんは気がついていないのか。なら、良しさ。京子さんには京子さんの事情ってものがあるのだろうしね。それに……」

「それに？」

「ロザリアちゃんと京子さんの魂は別物のようで、そう言うわけでもないと言う不思議な様相を示している。普通の守護霊とか言う関係とは決定的に違うのは、ロザリアちゃんの魂そのものが京子さんの魂とほぼ同一の存在だって事だ。この、『ほぼ』って言うのが曲者で、銀の龍の新しい器を構成する力としてどう作用するのか、僕の予想通りなのか違うのか、興味津々では有るよ」

「確かに、そのあたりの事情は私にも丸でわかりません。京子様と私って、同じ存在で居て別々、別々のように居て同一、そんな奇妙な関係ですから」

「ふうむ。それが理解できるぐらい、ロザリアちゃんの魂の部分が成長したと言う事なのだろうな。これは、あくまで僕の考えだがね、ロザリアちゃんの魂に影響を与えないように、京子さんの過去の地球での生活に対する執着を封印し、ロザリアちゃんと共有の本体から切り離す形でいずれば、その一部だけを地球に転生させようと企てているのではないかな」

「京子様は地球の家族を強く愛しています。狂おしいほどに。でも、その感情は私のものではないんです」

「君はクラウド君と愛し合うロザリアとして、オルトに存在し続けたいだろうか？」

「そう。その通りです」

「大半の知識、大半の感情はこれまで、共有して来られたが、そろそろそれが無理になってきた。だから僕にも金の龍にも女神様にも京子さんが感じられなくなっているのかもしれない。そんな風に思うのさ」

「そのことは、新しい銀の龍の器たる存在の魂と関係してるのでしょうか？」

「多分。だが、京子さんは現れないし、何も教えてくれない。ロザリアちゃんが妊娠すれば、事態は動くだろうけどねえ。今はこれ以上考えても何もわからないだろうと思うよ」

「さて、男女二人きりで子作りの話なんてすると、クラウド君が大変だ」とマークは冗談とも本気ともハッキリしない口調で、その話題を打ち切った。

「帝国の艦隊の封鎖作戦について、ロザリアちゃんにも意見を述べて欲しいんだ。是非今日は宮中に参内してくれ。僕は一足先にワープで移動するよ。摂政の執務室に貴族の爺さん連中や軍人の主な連中を集めておくからさ、作戦会議と行こうや。思い切り豪華な装身具とドレスを選んで、一番デカイ馬車に乗っておいでよ。頭の固い貴族連中は何でも『格式』って色眼鏡を通して人を見るからね」

ロザリアはマークに言われた通り、恐らくこのオルトでは最も上質でカットが美しい真紅の紅玉を連ねたネックレスに、揃いのイヤリングのセットと言う極めて高価な装身具を身に着けた。それらをより一層引き立たせ、ロザリアを大人びてみせるロイヤルブルーのドレスを纏うと、いつもの快活な美少女は堂々たる貴婦人に変身していた。そして、ユスフが既に用意してくれていたエスコバル公爵家の馬車の中でも、最も大きくて豪華なものに乗り、ロザリアは侍女を従えて宮中に向かう。

「殿下、その軍港を塞ぐなどと言う事が真に出来るものなのですか？」

侍従に案内されて通された摂政の執務室では、既に議論が始まっていた。

「やあ、やあ、来たね！待っていたよ。堅苦しい挨拶はこの際省くが、このオルト随一の才媛であるレオンハート公爵家のロザリア姫にも議論に参加してもらうよ」

マークは閉塞作戦へいそくさくせんの意義について解説していた。

意見を求められたロザリアは、敵の港を封鎖するために沈める船を、正しい位置に沈める事の重要性について補足説明し、成功の鍵は情報管理に有ると述べた。

「隠密裏に敵の艦隊の出撃を妨げる位置に、障害物となりうる老朽船を沈める事が肝要なのです」

その一方で、ロザリアはマークと心話でこんなやり取りも交わしたわけだったが……

「（地球上の過去の歴史では、きちんと成功した閉塞作戦へいそくさくせんは皆無じやないですか？機雷を開発して敷設する方が現実的では無いでしょうか？）」

「（機雷はただいま開発中だよ。このオルトでは閉塞作戦へいそくさくせん自体、知られていないわけだから試してみる価値は有りそうだろう？）」

「（失礼ですが、この会議のメンバーから機密が漏洩する恐れは無いのですか？）」

「（連中の意識は、すぐに探る事が出来るし、一応帝国側の内通者は居ないはずだ。用心のためこいつらのそれぞれの邸に式神を放つて有る）」

その会議から約一ヵ月後、マークの作戦通り完璧な閉塞作戦^{へいそくさくせん}が実行された。

帝国艦隊の母港をきっちり塞ぐように、老朽船が幾つも沈められ、その後、機雷も敷設された。おかげで、帝国艦隊は長らく出撃不能状態となった。

「ねえねえ、地球じゃ成功例の無い作戦をまんまと成功させたよ。ちよっと自慢して良いよね」

マークは上機嫌だった。無論他にもっと上機嫌になる理由が有ったのだが、まだそれは秘密なのであった。

第五十一章 敵艦隊を封鎖せよ（後書き）

一部誤字訂正しました。まだ、有る気がします。教えていただけましたら、大急ぎで直します。

第五十二章 静かに確実に到達せよ

ユーグはどうやら寄り道を散々した末に、やはり本物の女神の台座に到達した。

そして、執念で血文字を書き記した。

偽台座は寄り道をさせる効果はそれなりにあったものの、やはりそれ以上の効果は望めなかったのだ。

だが、しかし、クラウスが直ちにユーグの血文字を聖なる泉の水で清めたので、ほとんど実害が出なかった。

この事により、クラウスは女神の力の恩恵をより強く受けられるようになった。

「クラウスよ、お前もかつて一度行った場所に瞬時に移動する事ぐらいは出来るようになったぞ」

女神からそのように告げられた直後から、クラウスは今までに感じた事の無い力が満ちるのを感じた。

クラウスもワープで瞬間移動できるようになった、それも龍の魔法を帯びたものに気配を悟らせず移動する事が出来るのだ。

初めてワープが可能になって、クラウスは女神の台座からブルサのエスコバル公爵邸内の自分達の部屋にワープした。すると宮中での用事がすんで帰宅したばかりのロザリアと丁度一緒になったのだった。

「ロザリア、そうやって礼装に身を包んでいると、もう、堂々たる貴婦人ですね。あなたも」

言葉はいつもと変わらない穏やかな調子だ。しかし、今日は初めてのワープを成功させた所為で多少気持ちが高ぶったのか、ロザリアの礼装姿に煽られたのか、クラウスの大きな手は無遠慮にドレスの

内部に潜り込んで、ロザリアの太股から尻を撫で摩り始めていた。その手は当然の権利を主張している、と言った雰囲気を漂わせていた。

「一緒に風呂に入りましょう。私も懸案事項が片付きましたし……」

どンドン動きが大胆に淫らになってくるクラウドの手をどうすればよいのか、ロザリアは戸惑いながらも快感に突き動かされて、自分でも驚くような甘い喘ぎ声を上げ始めた。

「ああ……くっ、クラウド……」

クラウドはロザリアに幾度もキスを繰り返しながら、器用にドレスを脱がせ、装身具を外し、詰まる所すっかり裸にしてしまつて、二人で一緒に風呂に入ったのだつた。

「今日こそ、私達の子供を作りましょう、ロザリア」

「え、ええ」

かくして、二人の間の子供がその日のうちに無事にロザリアの胎内に宿つたのであつた。

余りにもあつけないほどの事の成り行きで、拍子抜けするほどだつた。

「だから、僕が以前言つただろう。既に通常の人の力を越えた力を持ち、不老長寿とされる肉体を手にした二人なんだから、二人が共に子が欲しいと思つて契りを交わせば、すぐに出来るつて」

全く、マークの言う通りであつた。

だがしかし、ロザリアの個人的な思いとしては初めてクラウドと契

りを交わすにいたるまで、それなりの逡巡は無かったわけではない。クラウスにしても、それは同じで、二人の間の密やかな行為がそのままオルトを救う秘儀で有ると言われても、はい、そうですかと素直に頷けないものが有る。

「この子が女の子で、銀の龍の次の器になる、それがもう既に決まってるなんて、複雑。将来の旦那様が立派な方なのは確かだけど、年齢差も大きいし、本当にうまくやってゆけるのかしら？生まれたときから大きすぎる魔力を持っているらしいのも心配。いまだかつてどの銀の龍の器も激しすぎる嫉妬心から開放された事はなくて、その強すぎる嫉妬心の所為で『爆殺』なんて物騒な魔法を発動させてきたのでしょうか？」

「私はどうも殿下が余りに御機嫌なのが気になるといえば、気になる。ロザリアに話したという京子様の魂とロザリア自身の魂との微妙な関係も気になるし。以前からロザリアが気にしているように、銀の龍の器が女であるのはどうやら初めてらしいし、強すぎる嫉妬心の暴走を押さえ、大きな魔力を完全に制御するには強い魂が必要なはずだ。だとすれば、この女の子の魂は私達より遥かに年上だったり、力が強かったりするのかもしれない。そうなると子供とは言っても、本当に肉体だけの仮初の親子と言う感じで、寂しいものが有るかもしれない」

契りを交わしたという意識の所為か、ロザリアとクラウスの言葉遣いも主家の娘と騎士と言う感じから、まともな夫婦のそれに自然と改まってきたようだった。

既に子まで成したのだから、これからの作戦の性質上大っぴらには行かないが二人は正式の夫婦として女神の神殿に届けを出し、キタイ王室の人々が小さな内輪の宴を行った。

「帝国での厄介ごとが全て決着が着いたら大々的に御披露目もしたら良いだろうが、今はこんな形ですまないね」

神殿への届出も宴も全てマークの取り計らいだった。

「（お前が目論んだとおり、ユীগの地球への転生が確実に出来そうだ）」

金の龍はうまい具合にユীগが転生しやすい条件を備えた家庭を見つけた。しかも地球で暮らす京子の長男の家に、これからユীগの番となりうる女の子が生まれる可能性は高い。

「（ユীগの地球での番の魂としてロザリアちゃんと完全分離した京子さんが転生した女の子、って考えるのが普通だろうが、それって勿体無いなあ）」

「（勿体無いとは？京子の魂とユীগの魂では強度の釣り合いが全く取れていないが、そういう意味か？）」

「（銀の龍の新しい器の中に宿る魂は、強く、病的な嫉妬心ですら制御できるものが望ましいが、ロザリアちゃんとクラウド君の娘の魂で、そこまでの強さは望めないだろう。このままでは今度も銀の龍の器は壊れる、違うか？）」

「（お前は京子の転生する魂と、新しく生ずるロザリアの娘の魂の入れ替えを目論むのか？）」

「（そうだ。それが一番合理的だ）」

「（だが、京子は承知しないだろう）」

「（家族の動向がわかりさえすれば、地球への転生にさほど大きく拘らないのではあるまいか？京子さんの一番のこだわりの原因は夫であったようだが、病で亡くなった。長女も次男も無事結婚して、三人の子供は概ね平和に暮らしている。それを自分で確認できさえすれば、魂の入れ替えに応じてもらえそうじゃないか）」

「（マークの考えるように、かつての夫と子供達の行く末が気がか

りと言うだけなら入れ替えも出来そうだな」

「（だが、メイト、大きな問題が一つ有る）」

「（何だ？）」

「（この半年ばかり、ロザリアちゃんの中にいるはずの京子さんと、まるで接触できない）」

「（マークに出来ないなら、他のものには出来ないだろう。女神なら、ひょっとして、とは思うが）」

「（そういえば、ユーグの呪いをクラウドが封じてから、女神の気配も無いな）」

「（女神が消滅したのか？クラウド君の作戦は失敗か？）」

「（作戦は成功したはずだ。うううむ……どうやらオルトにいないようだ）」

「（オルトを離れて……地球か？）」

「（おお、そうだ。地球だろう）」

ロザリアの魂の一部から分離しつつある京子としての魂と、女神がそろって不在と言う事は、共に何かをしていると言う事なのだろうか？

「（京子さんも一緒だろうか？）」

「（その可能性は高いな。地球の様子を見てこよう）」

金の龍が地球で何かを見つけ判断材料が揃うまでは、マークも先の事を決めかねた。

「（帝国にロザリアちゃんとクラウド君を戻すタイミングも、その調べがついてからだな）」

一方で……妊娠してから、ロザリアは毎晩のように地球の夢を見る

ようになった。京子としての記憶が作用しているのか？マークが言っていたように、自分とは別個の魂を独立させていずれば分離させると言う予兆なのか？

過去ではなく、どうも今の日本の関西圏のとある町の風景だとなぜかはつきり判った。

「ここに戻りたかったのですね」

京子の夫の墓・二人の息子と娘一人のそれぞれの家庭の様子が細切りに鮮明な映像となって、次々に入れ替わる。

「戻れそう……なのかしら？京子様がいなくなってしまったら、私はどうなるのかしら」

今度は大きく場面が変わって、ロザリアにソックリだが、黒い髪に銀の色がメッシュ状態に入り瞳が赤い少女が、何事かを叫ぶと、あとの剣『ヴィーヴル』が飛来する。

「この子は強い、恐らく、私よりもずっと……」

まだ幼い子供の姿なのに、凄まじい力を持っているのがわかる。

こんな具合に、夢の中の情景を見て、夢の中の自分はあれこれ考えるのだが、それが現実とどのように噛み合って行くのか、まるでわからない。

ロザリアとクラウドは夜は相変わらず睦まじく同衾している。クラウドはこの所、ロザリアが様々な寝言を言うのが気になってならない。腹の子供が銀の龍の器であるからかも知れないし、マークによれば地球に女神は滞在しているらしいが、クラウド自身がワープする力を授かってそのときに言葉を聴いて以降、女神の気配を感じないのも落ち着かない。

「女神様は、オルトに戻るだろうか？」

「戻ると思います」

このごろは、クラウドよりロザリアの方がへりくだった、丁寧な話し方をするようになった。

「だって、旦那様なのだから、当然じゃないかしら？」

この点に関して、ロザリアは何のこだわりも無さそうだったが、クラウドがまだ時々まごつく。

更に半月ほど経ったある日、マークがロザリアとクラウドに言い渡した。

「つい先ほど、女神様と連絡が取れたよ。新しい『銀の龍の器』をいつ、帝国に向かわせるかについて、金の龍とも話したが……来月、ロザリアちゃんが十二歳になるのを機に、クラウド君ともども帝国に入ってもらおう」

その言葉を聴いて、ロザリアもクラウドも女神の波動を探った。確かに普段通りの状態に戻ったようだ。

「女神様のお力は、強くなりましたか？」

「僕もそう感じた。地球に行っておられたそうだ」

「地球ですか？」

「ああ。京子さんも地球で何事か確かめて、戻ったようだ。ロザリアちゃんは感じないか？」

「何か気持ちが高揚しています」

「今から、絶妙な加減でロザリアちゃんに魔法をかけなくちゃいけない。帝国に入国するために、正式な夫婦になって早々悪いが、ロザリアちゃんにクラウド君との関係について忘れてもらう」

「なぜ、また、そんな、横暴ではないでしょうか？」

「クラウド君がそう言いたいのも判るが、仕方が無いのだ」

マークが言うには、ユীগに「ロザリアは月の物も来ていない、男を全く知らない乙女」だと信じ込ませるのが重要なのだと説明されて、クラウスも一応理屈では納得したが、感情的に不快だった。

「魔法を掛けられた状態に君達が慣れて、帝国でボロを出さないように予め訓練しなくてはいけない」

理屈はわかったが、ロザリアは「少し猶予を下さい」とマークに願った。

「そうだな。では、後十日の後に魔法をかけるからそのつもりで。出来れば二人の絆をより強くしておいた方が良好だろう。特に第三者には秘密の合図なんかが決められるとよいな」

そうした秘密の合図をうまく機能させて、魔法を必要に応じて強めたり解除したり出来るようにクラウスの訓練もしたほうが良いとの事だった。

「有る特定の場所にキスをする魔法が解けるとか、特定の体の触れ方をする魔法が発動するとかね。そうした事は夫婦だけの、共同の秘密にしておくの良いのだ」

クラウスは、自分が思い浮かべたような動作や行為で良いのか、自信が持てなかった。

「まあ、なかなか考えると色っぽい合図になりそうで、そそるだろ？なあ、クラウス君」

マークは悪戯っぽくクラウスに笑って見せた。

第五十三章 密かに内部に侵攻せよ

ロザリアとクラウドスは陸路を取り、なつかしい帝国の首都・オルテスのレオンハート公爵邸にたどり着いた。

全ての人の記憶が銀の龍の器である皇太子ユーグの魔力により、不自然に捻じ曲げられていて、ロザリアにかけられた記憶操作の魔法もこの邸の人々には不自然には感じられないだろう。

この邸から送り出される時、クラウドは確かに公爵夫妻からも、師匠であるティボーからもロザリアの配偶者たる身分を認められていたのに、皆綺麗さっぱりその事を忘れている。それでも、図書室に封印した過去の正確な記録であるロザリアの父・レオンハート公爵ジョシユアの日記は無事であった。

常にロザリアの身近に居る事をとがめだてされたりはしないが、使用人らの手前も有り、何よりロザリア自身が魔法で一時的に自分を「月の物も来ない少女のまま」だと信じている状態なので、同衾はおろか、共に入浴する事も無いのだ。

クラウドはこうした事態を覚悟はしていたが、現実には直面してみると予想以上に辛いものがあった。

「しばらくは商売人になりきって貰う方が、話は早いと思うよ。ああ、その眼鏡、似合うじゃないか」

隠密作戦を帝国内で行うに際して、自分の身分をどう設定するか相談……と言うのは表向きで、男として夫として実に辛い状態であるのを、どう凌げばよいのか途方にくれて、わざわざワープしてマークに相談した事が有った。

「身分は副社長か専務か、まあ、好きにすれば良いさ。ロザリアちゃんが社長であるにせよ、君が実質の經理の責任者であるわけだからな。ん？色々辛いかな、男として……ロザリアちゃんが寝入ってからワープで寢床に入り込み、その多少の事をするぐらい、構わんのじゃないか？まるで痴漢か泥棒猫で、真面目な君としてはイヤなんだろうな。だがねえ一時的に記憶を復活させる方法は、負担が大きいか……勧められない。ロザリアちゃんは懷妊しているからな。余り混乱させない方が良い」

密かに破廉恥な行為を働く以外、方法が無さそうだと知って、クラウスが困惑していると、「真夜中にこっそり艶めいた悪戯を仕掛けるのも、楽しいぞ、君もそのぐらいふてぶてしくなりたまえ」とマークはニヤニヤとしながらかける。

「今は深層心理に君との真の關係が無理やり押し込められている状態なのだから、眠っている間に艶めいた悪戯を仕掛けるのは、ある種ロザリアちゃんにとっても開放であるわけだ。しばらく不自然な心理状態に留まるのだから、艶めかしい夢でストレスを減らしてあげる事になる。ククッ、そう考えたら堅物の君だって、さほど躊躇わず事に及べそうだろう？」

「まあ、頑張りたまえ」とえらく陽気な調子で肩をたたかれた。

事に及ぶ……と言って、どの程度なら許されるものやら、またクラウスは悩んでしまった。その行為の具体的な内容までさすがにマークに相談する気にはなれないので、ワープで帝国の首都・オルテスの会社内部に設けた自室に戻ったが、酷く興奮してしまって、仕事にならなかった。

「艶めいた悪戯」など自分の柄ではないと思う。だが、差し迫った自己の欲求をこのまま抑えつけているのも辛すぎた。結局の所、クラウスはロザリアの眠りが深くなった時刻にワープして、思うさま体に触れ体中にキスをした。うっかりしてドレスからはみ出してしまいう首筋にキスマークを残してしまい、翌朝ロザリアが「おかしい虫でもいたのかしら？ いやあねえ」などと真顔で言っているのを聞いて、ヒヤリとした。

クラウスが意識を探って確かめた限りでは、それがキスマークであると悟ったものは、幸い邸には居なかった。

「やれやれ、危なかった」

何事ももつと慎重に運ばねばいけないと、改めて自戒するクラウスであった。

邸内は、このところ華やいだ雰囲気満ちている。

ロザリアの母であるレオンハート公爵夫人が懐妊したのだ。

「お子様が男の子なら、公爵位をおつぎになるのでしょうかね」

「ロザリア様はやはり、お妃様になられるのでしょうか？」

まあ、そうした噂話を邸内の侍女やメイドたちがするのは仕方の無い話だが、クラウスは非常に不快だった。ロザリアの夫は自分なのだから。

「だが、レオンハート公爵位と君やロザリアちゃんの地位については、多少の変更もありそうだ。それはそうと、その子供は恐らくは聖剣の主だ。そんな波動が遠く離れたここからでも僅かに感じ取れる」

定時報告の際、マークにその様に言われて、クラウスは驚いた。キタイの首都ブルサと帝国の首都オルテスの距離をもとめせず、未

だ胎内に存在するだけの子供の波動を感じ取ってしまうマークの力の物凄さも驚きだが、その子が聖剣の主だと言うのも驚きだった。遠距離のワープにまだ苦勞する自分などとは、やはりこの殿下は力の大きさが違うのだとクラウドは思い知った。

「多少年下ではあるが、将来的にはファティマの婿に迎えたい所だ」
「そうなのですか！」

「レオンハート公爵もキタイ女王の王配ならば、納得してくれるだろう」

「殿下が帝位にお付きになった以降なら、御命令なさればそれで事は足りるかと思いますが」

「ファティマも母に縁が薄く、可愛そうな子なのでね、せめて将来の夫とは仲むつまじく有ってほしいとか、今から色々考えるよ。

まあ、クラウド君もそのつもりで公爵夫人の胎内に居る男の子に、気を配ってやってくれ」

「そのロザリアの弟君は、いかなる聖剣の主なのでしょうかね？」

「さあなあ……未だ見つかっていない物、いったん姿を現してまた隠れた物、色々有るからわからない。むしろクラウド君が探った方が本当のことが色々判るかもな。ああ、そうだ、女神様にお尋ねするのも良いかも知れん」

作戦遂行のためには、当然の事ながらロザリアがユークに対して直接的な不自然でない接触をする必要が有り、その機会をこちらはひたすら待つしかないのか、その辺りも気を使うが、今の微妙な時期に聖剣の主が出現するのは、どう言った意味合いがあるのだろうか？

クラウドは女神に語りかけ、疑問を投げかけた。

「クラウドは夢で姿を見ておるぞ、その、聖剣の主の姿を」

「……？そうですか？思い出せないのですが」

「ロザリアが海のそばで高熱を出して、寝込んだ折の夢だ」

「ああ！『シャボンヌ』ですか！」

「そうだ。クラウドがユーグの呪いの血文字を洗い清めるのに使った深い泉の奥底で、今、聖剣『シャボンヌ』は自らを清め、主の出現を待っている」

「この時期に『シャボンヌ』の出現が迫っているのは、いかなる意味を持つのですか？」

「脆き銀の龍の器が潰え、穢れが去り、新しき龍の器が力を発揮するのに必要なのであろう」

「と、言う事はロザリアの弟君おにいさまが生まれる頃には、ユーグは……」
「まあ、このオルトにおいて存在する事は、適わないだろう」

事態が大きく動くまでに、もう余り時間が無い。

「ロザリアがユーグと面会する必要が有りそうですが、どのようにするべきでしょうか？ひたすら待つべきですか？」

「こちらから、仕掛けてみても良からう」

「どうすると、ユーグの気持ちが進みますようか？」

「あれは金の龍の器であるマークに強い敵愾心を持っておる。キタイとの大規模な取引の許可を求めてみては、いかがじゃ？」

まんまと成功した軍港の封鎖作戦の所為で、帝国艦隊は未だに出航出来ない。表向きは一応「国籍不明の不逞のやから」の仕業とされているが、当初からキタイの陰謀説が囁かれている。だが、ユーグにとって腹立たしいのはキタイの仕業と言う証拠が見出せない事らしい。

つまり、キタイに対する嫌悪感不信感、これまで以上にユーグの中で大きくなっていると見て良いだろう。

「最高諮問会の連中に鼻葉を利かせておくか」

商業・貿易に関する事柄は皇帝の老臣たち10名で構成されている最高諮問会で許可されれば、問題無いのが普通だが、そこに今、キタイとの大規模な取引の許可を申請したらば、どうだろう？恐らく最高諮問会の決定が「問題無し」と出ても、ユーグは強引に白紙撤回させようとする公算は強い。

その様になれば、ユーグはロザリアに結果を申し渡すために呼ぶかもしれないし、逆にロザリアが面会を求めても不自然ではない。

最高諮問会の許可の裁定を、強引にでも横暴でもユーグが絶対取り消したくなる様な、それでいて会社の経営としては不自然ではない、そんな事業計画は何だろう？

女神が言うように、ユーグはマークに対する強い敵愾心を持っているとして……しかもロザリアとの結婚をユーグは願っている……ならば、そうした気持ちを煽ればよいのだ。

「キタイに大規模な事業展開を計画して、ロザリアがその実現のために走り回っている、そんな噂を立てればよいだろうか？」

ただの噂ではユーグを欺けない。ロザリアが本当に実現したいと感じるような事業計画を作り上げ、本当に最高諮問委員会の許可を求めるようにしてみれば良いだろう。まさか、ロザリアとユーグを直接に面会させる為のカラクリとは思えない。

敵を欺くには、まず味方からと言う訳で、クラウドは計略にふさわしい事業計画を作った。ロザリアは大いに「キタイに多くの支店を出す」計画に乗り気になり、クラウドは各方面への働きかけを本格化した。

その一方で、真夜中に「艶めいた悪戯」を仕掛ける事も毎晩続けた。歪められた記憶によるストレスを減らす事になると言うマークの説が正しいのかどうか、確信は無かったが……

ロザリアは相手が誰かはっきり認識できないが、連日連夜淫らな夢を見るのはどうした事なのだろうかと思議に思い、時折、自分自身が酷くはしたない人間になって仕舞ったのだろうかと思ひだりした。今のロザリアは掛けられた魔法の所為で心話を使うことも、他人の思念を読み取る事も出来ないものであった。

クラウドはその悩みを読み取って「何も悩む必要は有りません」とか「実はあなたと私は既に男女の契りを交わした夫婦です」とか言っただけの気持ちになるので有ったが、ぐっところえた。クラウドはたとえ夢であっても、ロザリアを心地よくするように細やかに意識をするようになって、ロザリアの受け止め方が微妙に変化して来た。

「私の体が大人になってきた、そう言う事かしら？」

色々と事実とは食い違っているが、ロザリアにあまり負担を与えないで済む様になって、クラウドはほっとした。

「後は、最高諮問会に提出したキタイ王国への出店計画が、一体どうなりますか」

狙い通りにユーグが食いついてくれる事を、クラウドは強く願っていた。

第五十四章 神慮

「キタイ王国への出店計画？けしからん話だ。何？既に最高諮問会は認可した？馬鹿な！全面的に撤回させよ」

ユーグは声を荒げ、摂政府の執務室で吼えた。

レオンハート峰の麓で養生していたロザリアが、またこのオルテスで暮らすようになってユーグは喜んでいた。だが、金が儲かるとは言え公爵令嬢に相応しいとも思えないおかしい商売にうつつを抜かすのは愉快ではなかったし、ましてやキタイで事業を展開するなど、ユーグにしてみれば許しがたい話だ。

皇太子であるユーグがこの数年摂政を務めながらも、皇位を継承する目処が立たない真の理由は、聖剣の盟主である『ジルニトラ』が帝国内に存在しないため、皇位継承の儀式自体行えないから……だが、口が裂けてもその様な事をユーグ自身が口にするわけには行かなかった。

腹立たしい事に、『ジルニトラ』は隣国キタイ王国の摂政・エスコバル公爵の愛用の剣である事が近頃は広く知られるようになってきており、エスコバル公爵の生母は現国王の妹で不慮の死を遂げた皇后・ギルバハルで有るとまで噂されるようになっていく。

キタイ国王はエスコバル公爵を「甥であり、高貴の血筋だ」と公言しているのも有名な話で、聞くところによるとキタイの主な神殿の神官どもが「一日も早く聖剣『ジルニトラ』を掲げて、帝位を継ぐべき」と騒いだ折には、かの公爵は「ユーグは酷く健康を損ねているので先は短い」と言ったとか……

かの公爵は血筋からすると「兄」に当たるのかもしれないが、断じて認める訳にはいかないし、認めたくもない。

ともかくも廃人と成り果てた現皇帝である父の名を借りつつ、女神の申し子・ロザリアを后として迎え、子をなすまでは死んでも死に切れない。

「ロザリー、お前は大人になったら俺と結婚すると言ったはずだよな」

だが、その約束も女神に「馬鹿者！」と一喝され女神の許し無くロザリアに会う事も禁じられた後は、有効なのか否か曖昧だ。それでも、無理無理に顔を見に行ったが僅か三度しか顔を見る事が出来ていない。当然ながら三度とも女神の許しなど得てはいないし、得る必要など認めても居ない。忌々しい女神を封じたはずだが、その封印をまた何者かに解かれてしまった……。それが一体何を意味するのかわかりたくも無い、と言うのがユークの今の正直な気持ちだ。

「泣かないでユーク兄様」

そう、ユークが涙を見せたのも、そして泣くなど慰めたのもロザリア以外いまだかつて誰も居ないのだ。銀の龍を宿す故の孤独・恐怖・苦痛、それを理解できるのはロザリアしかない。

「金の龍を宿す女たらしに、身も心も囚われては居るまいな？」

忌々しい「兄」は金の龍を宿しながら、自分とは異なり健康で、亡くなりはしたが妻を娶ったし、子も居る。更にはキタイのあちこちに庶子が居ると言う。癪だが女神との関係も良好で、何より腹が立つ事に『ジルニトラ』の主であるらしい。考えれば考えるほど腹立たしい。

「キタイへの出店計画を持ち出したのは、ロザリーの補佐役のあの眼鏡男らしいが……」

何か気に入らない男だが、所詮は家臣だ。まさか主家の姫君に不埒な振る舞いに及んでいとも思えないが……何かが引かかる。あの眼鏡の奥に、何かが有るような気がする。

クラウドは真の姿をユーグに悟られないように魔法的な防御を張り巡らしていた筈だが……恋する男の直感を欺く事までは出来なかった訳だ。ユーグから見てクラウドは、ロザリーの身近に存在を許された男と言うだけでも、十二分に不愉快な存在なのは確かだった。

「眼鏡男は……あの女たらしの使い走りをしているのかも知れんな」

さすがにクラウドの子供がロザリアの胎内に存在し、その子供が新しい銀の龍の器であるなどと言う、ユーグからすれば「女神の悪意」あるいは「金の龍の呪い」とでも言うしかない絶望的な状況であるとは察知できなかったのだが……

ユーグは咳き込んだ。神経が昂ぶった所為か、いつもより更に激しい。そして、かなりの量、喀血した。

「いつまで持つのだろうか？」

肉体的な苦しみ、内臓がバラバラにされるような、それこそ一寸試し五分刻みとでも言うべき激痛を連日味わいながらも生き延びているが、死期が迫っているのを嫌でも自覚させられる。今日も体のどこかに穴が開き、内臓が壊れているのだろう。

「ロザリーが居てくれれば」、そう、あの黒い瞳に黒い髪の乙女が身近に居てくれれば、きっと自分の運命は大きく変わるのだ。この苦しみからもきつと解放されるに違いない。そんな思いが今やユーグの中で一つの信仰のような、あるいは確固たる真実のような物となっているのだった。

「まだ、十二歳か」

ロザリアがまだ幼く、男女の契りを交わせないかもしれない、それ以外に大きな問題は存在しない……無理にでもユーグはそう信じ込もうとしていた。

クラウドはこうしたユーグの心情を、手に取るようにきわめて正確に読み取っていた。

読み取ること自体はマークでも可能だが、同じ龍の気配をどうしてもユーグに悟られ易く、警戒されてしまうのに対して、そうした一切の痕跡・気配も無しに龍の器の内部まで探る事が出来るのがクラウドの特殊能力であった。

「クラウド君のスキルがアップすれば、僕の意識も密かに探る事が出来るかもしれないが、僕は君の高い潜在能力に対して敬意を払い、有る意味警戒も怠り無いからね、意識を読まれっぱなしと言う事は有るまいよ」

マークのその言葉が事実とすれば、クラウドの能力はまだ成長を続けると言う事らしい。

「問題はロザリアの心情だろうか？」

キタイでマークと協力して巧妙で強力な記憶の操作を行った件は、ロザリア本人が承知して納得の上とは言え、やはり気分の良いものではない。こうして本来なら誰にも秘めておきたい心情ですらも、ロザリア本人が与り知らぬ間にあからさまに全て読み取るなど、酷い暴力で横暴だとクラウドスは感じている。

「あの『爆殺事件』さえなければ、ユীগはやはりロザリアの夫となる公算が非常に強かった……」

銀の龍を宿すが故の孤独や恐怖に理解を示し、助ける力を持った存在で有り、なにより幼かったロザリアが最初に「結婚」を意識したのはユীগなのだという事のはつきりとわかる。自分がかつてはあくまで「大好きではあっても、夫には出来ぬ男」と認識されていたのだし……ロザリアを終生支える覚悟は有ったが、元来はあくまで「家臣として支える」のが自分の役どころであったのだ。

ユীগでは銀の龍の力を制御できないから、新しい銀の龍の器を作り出す必要が有ると言われ、ロザリアは自分との間に子を成した。

『子を成す事自体がオルトを救う秘儀』などと言われても不愉快極まりなかったが、女神や金の龍あるいはマークから見れば、『自明の理』なのだろう。

オルテスはオルト随一の大国の首都であり活気有る街であるはずが、常に暗い沈鬱な気が辺りを覆い続けている。人々は常に目に見えぬ何者かに怯えているように見える。そうした辺りが、明るく伸びやかな雰囲気のキタイ王国の首都・ブルサとは、大違いだ。

「ユীগが連日連夜闇雲に放つ記憶変容の魔法が、人々に疑心暗鬼と暗い気分をもたらしている」

ユーグは、あの『爆殺事件』を完全に無かったものとしたいのだ。そして、あの時の女神の「ユーグよ。精進して龍の力を自らの物とせよ。それがならぬ内は我が許し無くロザリアに会う事を禁ずる」と言う言葉を取り消して欲しいのだ。何しろユーグの弱りはた肉体では、龍の力を自らの物にする事は難しいのだから、女神を封印してしまいたくなるのも、無理は無い。

皮肉な事にユーグの命を奪う事になる作戦を遂行中の今になって、ユーグの痛み・苦しみとそれを理解し気遣っていたロザリアの想いが、手に取るように判ってしまう。何と言う皮肉だろうか。

「ユーグは、きっとロザリアを抱きしめてキスするだろう」

そのこと自体、夫たる自分からしてみれば許しがたい行為だが、それが前提条件、あるいは織り込み済みの当然の行為として、この作戦は成立している。

「素敵な女の子は幾人もの男に好かれて当然だし、キスの一つや二つケケチするなよ」と言うマークの言葉に強烈な反発も感じたが、これまでのいきさつを考えればユーグがロザリアにキスをする方が自然で、自分がまだ十二歳のロザリアとの間に子供を作った方が奇妙なのだ。『神慮』の名の下に、人外の強烈な力で運命を捻じ曲げられた結果なのだ。

「銀の龍が『爆殺』などと言う根本的な欠陥を抱え込んでいるのは、云わば神の側の不手際・不始末だ。それを脆弱な人間を勝手に器にしておいて、やれ器の出来が良いの悪いのって、酷い話さ。オルトの神って言うのは、実に横暴で勝手だ。僕は正直な話、今でも、地球に帰りたい。家族思いの京子さんがそう願うのは、当然だ。それを、散々こき使って働かせて……まあ、面白い事も嬉しい事も色々

と有るには有ったさ。でも、元来地球の存在である僕には、どこか
ひんじと
人事、よその話だったな。子供が出来て、初めて自分がオルトと結
びついた、そう感じたよ。子供でも居ない限り、あんないい加減な
神様連中に付き合っていられない」

そんなマークの言い草が、かつてのクラウドには許しがたい暴言と
感じられていたのに、魔力が増大し、神である存在の様々な欠点・
欠陥が見えてくるにつれ神が「横暴で勝手」だと実感するようにな
ってきたのだった。

『神慮』による恩恵を蒙って、ロザリアと長い時を共に生き続ける
事を許された自分が、なぜ、ユーグの事を哀れに思うのか、クラウ
ス自身にもよくわからない感情では有った。

「ああ……そうだな……余りに深く、思いの中に分け入りすぎたか」
ロザリアを思うあまり、その心を深く読み取り、いや、読み取りす
ぎた結果、敵であるユーグの苦しみまでが手に取るように鮮明に感
じられるようになり、する必要の無い共感までしてしまったからだ
ろう。

マークにあれほど「無用に深入りすると自分自身が傷つき、辛い思
いをし、最悪の場合、力も削がれる。十分気をつけたまえ」と事前
に注意もされていたのに……。

腕の中で、ロザリアは穏やかな表情で眠っている。夢の中での想い
は全く魔法の干渉を受けていないはずだ。

「あなた……」

そう、結婚して以降、ロザリアはクラウドを「あなた」と呼ぶようになった。それが何とも嬉しく、どこかこそばゆいような思いがしたものだ……。寝言を呟き体を擦り付けて来るロザリアは、どうやら自分と愛し合っている夢を見ているらしい。そう見て取ったクラウドはホッとする反面、ロザリアの懐妊の事実をまるで知らないユーグの命が、もうすぐ尽きるであろう事を思うと、酷く気が重かった。

第五十五章 出頭

「京子さんは、オルトと地球を行き来しているらしい」

マークが言う「京子さん」、ロザリアの魂の作り手であると同時にそのものでもあり、平凡な騎士に過ぎなかったクラウドが不老不死の存在にまで変容するきっかけを作った存在だが、地球人としての記憶と感情を魂本体と分離分割して温存した部分「だけ」を地球に転生させるらしい……あくまで「らしい」のだが、これからの作戦の実行とそれがもたらす様々な危険を未然に防ぐべく、奮闘していると言う。

「ロザリア、いや京子さんの魂の中で『オルトのロザリア』としての部分は、今回の作戦で相当疲弊し混乱する」

マークとクラウドは協力してロザリア本来の能力のほんの一割程度しか作動できないような特殊なブロック魔法をかけたが、それが可能だったのは「京子さん」とマークが良く相談して事を運んだかららしい。

「だが、それ以外の部分、特に『地球人の京子さん』の部分は寧ろ活性化している。曰く『大詰め』らしい。ユーグが穏やかな形で龍の器としての機能を停止し、オルトから去るためには、まだ色々課題が有る」

『銀の龍の器』の交替時には、魔法の暴走や流血の惨事が付き物らしいのだが、京子は可能な限りその様な事態を避けようとしている。そう言う事だろうか？ そんなに大切な話でも、クラウドには直接の相談は何も無い。

「考えてみれば私も、ロザリアも、『京子様』とお話をした記憶が有りません。ロザリアは『京子様』の想いや感情が直接流れ込んでくるように感じる事が度々有るようですが」

「自分の一部、ないしは殆どそれに近い状態のクラウド君には『京子』としての独立した人格と言うか、魂を示して対話する必要がある、そういう事ではなからうか？」

「逆に、殿下にはその魂を示す必要があり、特に『地球人としての想いは殿下にしか示すつもりが無い、そう言うことなのでしょうか？」

「と言うか、理解し共感出来るほぼ唯一の存在って事なのかな？僕も僕の中に『地球人マーク・ゴールド』としての記憶と感情が存在するからな。ただ、僕の場合、空き家状態の肉体に『地球人マーク』の魂がすっぽり入り込んで居るだけの状態なんだが、京子さんは生まれたてのロザリアちゃんの肉体に入るとき、小さな種のような存在に気がついて、意識的にそれと同化し育成したらしい。その種のおかげで、クラウド君の『成長し続ける』潜在能力に気がついたそうだ」

マークは自己の魂を増殖・分割など出来ないが、京子はオルトで取り込んだ『小さな種』のおかげで増殖・分割を遂げた、どうやらそういう事らしい。

「どうやらその種は、女神様自身が忘れていた能力の一部だったようだ。だから、そのおかげで成長したロザリアちゃんと君の魔力も寿命も、龍の系統ではなく女神様の系統に由来するんだろう」

『女神の力に外界から飛来した金の龍・銀の龍が作用して、オルトが出来たらしい』と言う創世に関する伝承は承知している。だが、その事と自分やロザリアに龍の魔法が普通なら効力を発揮しない事

とは、どう関連するのだろうか？

「ユーグはユーグで必死だから、ロザリアちゃんの中で顕在化している全ての想いを自分に強引に傾けさせようと魔法もかけるだろう。本来はロザリアちゃんには全く効果の無い魔法も、クラウス君との関係を忘れ、胎内の子の存在を忘れている事によって、十分効力を発揮する。だが、作戦成功のためには胎内の子の存在をユーグに宿る銀の龍にも一時的に秘密にせねばならないので、やっかいなんだよな」

ユーグを器とする銀の龍はれっきとした神だ。欺くにしてもなかなか難しい。既に出来上がりつつある新しい器の存在を認識させないための『目くらまし』は、今のところ上手く作用しているらしいが、問題は新しい器を認識した龍に、いわば見捨てられる事になる古い器の混乱と暴走だ。魔力も能力もさほど無い人間なら、現在の廃人に成り果てた皇帝・ファーンのようになるか死ぬかするはずだが、ユーグの場合はそうは行かないらしい。

「ユーグは中途半端に魔力が強いし、何よりもロザリアちゃんに対するある種の信念と言うか信仰のようなもので凝り固まっている。無理にでもオルトに存在し続けようとする、かなり厄介な悪霊になる可能性が高い。それを防ぐにはユーグがと言うかユーグの魂が納得するような良い条件の転生先を確保し、提示するのが一番だ」

「ユーグが穏やかな形で龍の器としての機能を停止し、オルトから去る」事はすなわち、「ユーグの魂が納得するような良い条件での転生」であり、皇太子・ユーグの死でも有る。

「当初は、ロザリアちゃんとのキスで銀の龍の転移が始まり、ユーグが亡くなればそれで十分だと思っていたが、『あんた、アホか』

と京子さんに怒られて、色々指摘されて、転生先を見つけ出す必要性を理解したよ」

「その様な形でユーグが亡くなれば、ロザリアにも大きな心の傷が残ります」

「ああ。京子さんにも真っ先にそれを言われた」

自分に対する接吻の直後からユーグが悶え苦しんで死亡したとしたら……ロザリアは傷つき、やはり自分を責めるだろう。ユーグがロザリアに向ける想いの純粋さは疑いようが無いだけに……。心から幸せそうに笑う事が出来なくなったロザリアを見つめて生きて行くのは、クラウド自身にとっても辛い筈だ。

「ユーグはロザリアちゃんに、恐らく指輪を渡す。銀の龍の大きな力が籠った指輪だ。夫であるクラウド君には少々辛いけど、ユーグの穏やかな死と良い転生を失敗無く達成させるまでに、少し時間が要る。作戦が上手く行く目処が立ったら、クラウド君が指輪を外せ。そうすればロザリアちゃんは全てを思い出す」

そして、ユーグは死ぬのですね……と言う言葉をクラウドは口にすることが出来なかった。

「指輪が外れれば、ユーグは横暴ででたらめなオルトの神の力から解き放たれ、地球に再生する事が適うのだ。そう考えたまえ、クラウド君、な？」

何もかもわかりすぎるほど良くわかっているこの主君には、何の隠し立ても出来はしない。だが、今の言葉で、この人もユーグの死と魂のありようについて様々に思い悩んだと言うことが、クラウドにも実感できた。その悩みの深さは、クラウドを大きく上回るものだったに違いない。ユーグはこの人の紛れも無い弟なのだし……。

「地球人マーク・ゴールドは一人っ子で、兄弟が居ない。兄弟が居れば、楽しいだろうと思っただけだ。巡り合わせとは言え、こんな風に敵対するのは、ちょっとばかりしんどいな」

クラウドは無言で深々と礼をし、マークの前を辞した。そして魔力の籠った眼鏡を取り出して掛けなおすと、自らの役目を果たすべく、オルテスの会社の中にある自分の部屋に戻った。

「クラウド様、お戻りでしたか。先ほど摂政府のお使いの方がおいでになりました。『明日出頭せよ』との事でした。一体何がどうしたんでしょうか？」

会社の受付役を勤めている男が血相を変えて、摂政府からの召喚状をクラウドに持ってきた。

普通こうした場合の書面は、個人の名前で送られて来ると思うが、『株式会社『キョウコ』経営陣一同へ告ぐ』とエラく変則的な具合になっている。

ロザリアがまだ十二歳のため、登記や取引でロザリアの名前では不都合な場合、クラウドの名前や他の人間の名前を使う。書面だけでは誰が実質の経営者か判明しない。何か起こったときの用心のための細工をしてあるわけだ。

「貴社は外国との通商に際し、国家の機密を漏洩した疑念これ有り。明朝、一番に出頭すべし」

えらく高圧的で、愛想の無い文面だ。だが、罪人を糾弾するにしている。「貴社」と言う言葉が奇妙だ。最高諮問会の決定を覆すほどの理由なら、普通は疑念ではすまない。「漏洩の罪により処断する」とかいった具合になるはずだ。

「多分、キタイとの商売で何か疑われたり、誤解されたりしたんだろう。何も疚しい事は無いから、心配するな。明日私が出頭して、夕方までに戻れなかったら、ロザリア様に報告するべきだろうが、それまではかえって御心配をおかけするから、黙っておくように。何、すぐに、そうだなあ昼飯前に戻れるさ。余り心配するな」

その言葉を聞いた受付役の男は、少し安心したような表情で、クラウスの前を辞した。

（さあて、おいでなすった。ユーグ本人が出てくる可能性が大きいな）

下手に刺激すると、かつてのティボーのように投獄の憂き目を見る。すぐに脱獄は出来るが、その様な事になればユーグに警戒されてしまう。一番良いのは「荒事は苦手な商売一筋の男」と思わせることだろう。聖剣『パンテラ・レオ』は手元に携えていなくても、呼べばたちどころに現れるので、帯剣する必要も無い。

「擬装用の意識を貼り付ける必要が有るな」

クラウスがユーグの意識を探る事の出来る能力の持ち主である事を、悟られないようにしなくてはなるまい。

ユーグが銀の龍の力でクラウスの意識を探った時に些かの疑念も抱かれないように、「いかにも商売人」と言うキーワードを意識の浅い部分に配置する。商品の価格・為替・各国の通貨・店舗情報、そうした言葉と導き出せる情報を大量にちりばめる。それだけで、商業に疎いユーグはより深く意識を探るのを止める公算が強い。

逆に、意識の深部に封印すべきものは、愛情・妊娠・聖剣・エスコバル公爵・龍・女神・地球・妻であるロザリアとのこれまでの生活一切……これがなかなか厄介だ。

「ユーグの意識を探りながら、出方を見るしか無いか」

翌日、クラウドは、いかにも商売第一の富裕な商人と言ったいでたちで馬車に乗り、摂政府に出頭した。やはり、そこには予想通り、ユーグが待ち構えていた。クラウドは深々と商人風に見える礼をした。

「ほう、お前は私が誰か判っているのか」

（この眼鏡男、ロザリーが商いをしている『会社』とやらの責任者なのか？）

「はっ、恐れ入ります」

うんと深く、這いつくばるような礼を続ける。

「呼び出したのは、他でもない。先の帝国艦隊封鎖事件で、キタイの関与が有った事が確定になった。そこで、貴様の所はキタイとの大規模な取引を願ひ出て、最高諮問会の許可が出たようだが、急遽取り消してもらいたい」

（脅しつければ、この眼鏡男、どう出る？既に投下した費用の回収もままならぬ事になるが）

「はっ、仰せのままに」

クラウドは、費用の回収に気が回るユーグが、当初の予想より厄介な相手かもしれないと感じ、ますます気を入れて「騙しにかかる」のであった。

第五十六章 接吻

クラウドは結局の所、ユーグの命令全てを即座に受け入れる事にした。

「ロザリー、いやロザリア姫はいかが過ごしている」

「このキタイへの出店計画を纏めるために、この半月ばかりは特に忙しくしております」

「だが、その件はこれで立ち消えになったから、ロザリア姫は暇になったはずだな」

「はっ」

「自分から、やって来るかな？ いや、何、独り言だ。ともかくも帰り着いたら、ロザリア姫に今回の顛末を報告するのだな」

「ははっ、立ち戻りましたら、早速仰せの通りに報告致します」

出店計画を白紙に戻す事で、思いの他あっさりとクラウドは許された。ユーグがロザリアに非常に会いたがっているのは確実で、会えば、恐らくロザリアの指に銀の龍の魔法をこめた指輪を嵌めるつもりだろう。

一方で、ユーグは自分の命令が余りにもあっさり受け入れられて、拍子抜けしたが、そこに自分にとっての不利な条件が潜んでいるとはまるで考え付かなかったのだった。

クラウドは急ぎ会社に立ち戻ると、丁度ロザリアが出社する時刻になっていた。

「ひ、姫様、一大事です！」

商売一筋で、荒事はまるで苦手な眼鏡男と言う風を装っている今は、

いかにも慌てふためいて社長室に入る。

「皇太子殿下じきじきのお達しで、今回のキタイ王国への出店計画は白紙撤回せよとの事です」

ロザリアは、非常に気に入らないと言う表情になり、眉をピクリとあげた。

クラウドのいかにもくだくだしい説明は、更に苛立ちを強めた。

「宜しい、クラウド。では、私自身が殿下に直接伺って来ましょう。お優しかったユーク兄様が昔とはすっかりお変わりになってしまったのだとしても、私とあの方とはいわば幼馴染で従兄弟同士……。率直なお気持ちやお考えをお打ち明け下さらないとも限らないもの。まあ、難しいのかもしれないけれど、何らかの事情があるはず。その一部だけでも探り当てておきたいものだわ」

(……これで計画通りに事が運びそうだが……)

クラウドが内心胸をなでおろしつつ、これからロザリアとユークの間で起こりうることを考えると、男として、そして夫としてはやはり複雑なのだ。

(キスに指輪……覚悟はしてますけどね、やはり辛いな)

摂政府に出向き、ユークへの面会を願い出る為、ロザリアは身支度を整えた訳だが、真紅のドレスを着て似つかわしい真珠とルビーを沢山あしらったネックレスとイヤリングの一揃いをつけた姿は、溜息が出るほど美しい。

(ユークが一時にせよ、抱き締めるなんて……キスをするなんて……ああ、血が逆流しそうだ)

だが、これはあくまで重要な作戦の一環なのだ。それは百も承知のクラウドだが、馬車に乗り込むロザリアの姿を見て、溜息を吹き零さずにはいらなかった。

ロザリアは、憤慨していた。不当な取り扱いを受けたと感じたが、ユーグが敵対勢力とみなしたものは容赦ない弾圧・粛清の対象となるのも事実で、自分の会社の人間がユーグの「事実誤認」から恐ろしい事に巻き込まれはしないかと心配だった。あの眼鏡男のクラウドも、自分にとってはかけがえの無い存在……

「クラウドが、かけがえの無い……存在……？」

どう言うわけか、クラウドの事を考え始めると、感情が過度に刺激され、今まで知らなかった感覚が目覚めるような奇妙な状態になってしまう。その所为で混乱してしまって、冷静に考えられないのが……どこか奇妙で不自然で、引くかかる。

馬車を急がせた結果、摂政府には思いの他早く着いた。そして、ユーグに面会を申し出ると、すぐに取調べを行う表の部屋ではなく、奥まったプライベートな空間へ招き入れられた。近頃はここで寝泊りする事が多いらしい。

ユーグには妃も側妾も愛人も無く、皇太子の後宮は無人で男色家なのではないかと言う噂が立って久しい。本人の容姿が龍を宿すものの常として、整いすぎるほど整っているだけに、よけいに噂は根強かった。

だが、実際の話、男の恋人の噂もまるで無い。つまり「氷の微笑」などといわれる誰に対しても冷ややかな美貌の皇太子は、愛情を傾ける存在を持たないのだとロザリアは理解していた。

「レオンハート公爵御息女ロザリア・ド・ヴァレス・レオンハート姫、お越しになりました」

皇太子の部屋としてはやや小ぶりで、簡素な部屋に通された。

「早くこれへ。皆遠慮せよ。オレとロザリア二人きりで重要な話があるのだな」

その、どこか嬉しげなユーグの声を聞いて、七歳の頃の記憶が蘇って来た。何かとても大切な事を自分は忘れていた、いや、忘れているのかもしれないと……そんな事を思う。

「ユーグ兄様、御久しゅうございます」

正式の称号を呼びかける事こそしなかったが、それでも一応正式の礼をしようとしたロザリアをユーグは押しとどめた。そして、いかにもまどろっこしいとでも言いたげにロザリアを抱きかかえ膝の上に乗せ、ソファアに座り込んだ。

ロザリアは驚いた。そして混乱した。自分は大人ではないにせよ、無心で人の膝に抱き上げられる程の幼児でもない。従兄妹とは言え、相手はこの国の皇太子だ。確かに幼い日にたわいも無い『約束』をしたが……

「あ、あのう……」

「良いではないか、オレとお前の仲だ。それともオレの膝の上は座り心地が悪いか？ 帝國中で、いやこのオルト中でここに座る事を許されているのはお前だけだと言うのに」

ああ、そうなのかと、ロザリアは合点がいった。この方はあのかつ

ての『約束』が有効なのだと考えておられるのだと。だが、あの約束の後、何かとんでもない事が有って……どうもその後が思い出せない。

「オレがこんなに好きなのに、このオチビちゃんは冷たいな」

ロザリアの心臓はその言葉に跳ね上がった。ユーグの赤い瞳でじっと見つめられると七歳の時自分が何を言い、ユーグに誓ったのか、嫌でも思い出す。

会社の自室から魔法を使って様子を探り続けるクラウドは事態の展開を予想はしていたし、ユーグの行動もかなり気の早いものになるとは考えていたが、いざとなると平静には受け止められない。自分の嫉妬心の制御は非常に難しいから、くれぐれも無理はするなとマークにも事前に言われていたのだ。

「嫉妬心に突き動かされて行動するところくな事にならない。この眼鏡越しに、あくまで平静に事態を観察するように。それが無理ならロザリアちゃんの意識を後から探るだけにとどめたらどうか？」

（理屈がそうでも、やはり覗き見ずにはいられません）

今のこの一瞬もロザリアが気になって、ならない。

あの毒殺事件の直後、ロザリアはユーグに抱きしめられながら確かにこう言った。

「もう泣かないでユーグ兄様、ロザリアは大人になったら兄様と結婚して差し上げますから」

ユーグは無言でじっとロザリアを見つめている。それがユーグの感情の表出で有る事は理解できた。だが、不都合な記憶は封じ込め都合の良い事柄のみ強く意識させる銀の龍の魔法でも有る、などと言

う事は、今の状態のロザリアには思いもよらない。

魔法で変容され加工された記憶と感情に突き動かされて、ロザリアは答える。

「大人になりましたら、きつとお約束どおりいたします」

ユーグの口元に、嬉しげな笑みが浮かんだ。そして、ロザリアの体をより強い力をこめて抱きしめた。

「並みの大人が太刀打ちできないような知恵者が何を言う。十二歳であっても、もう大人も同然ではないか。早くオレの妃になってくれ。何を思ったか知らんが、あの女たらし公爵に嬉々として会いに行くと聞けば、心穏やかではないのも致し方無いぞ」

ロザリアはその言葉を聞いて、今回のキタイへの出店許可が取り消された事情を漸く悟った。別にユーグを嫌いなわけではないと思うが、妃になる……それは不可能だと、自分の意識の何かが警告を発する。そうだ、考えてみれば自分の体は、まだ、未成熟ではないか。マークとクラウスのかけた魔法で、自分の体の本当の状態も、胎内の子の存在も忘れてしまったロザリアは、本気でその様に思うのだった。

「私の体は、御覧のようにまだ子供です。ご心配には及ばぬかと・・」

「憎い口だ。未来の夫の言う事にはもっと素直に従え」

ユーグの「未来の夫」と言う言葉に衝撃を受けている間に、気がつくほど深いむさぼるようなキスをされた。

ロザリアの感覚は混乱した。ユーグの熱い想いが伝わってきて、その激しさに驚き、それに同化しきれない自分の何かを同時に意識し

た。

ユーグはキスをしながら、ロザリアの中で抵抗する意識の素となっているのは、自分が魔法で変容させた『爆殺事件』に関わる記憶ではないかと思いつた。よもやもうすでにロザリアが自分以外の男の胤を胎内に宿らせているなどとは、思いもよらない。いっそのこと肉体は未成熟でも官能を目覚めさせ、男女の情愛でロザリアの思いを絡め取りたいとユーグは強く願った。燃える様な想いと願いを込めた口付けは、幾度も繰り返された。

密かに監視するクラウドには、口付けの一つ一つがまさに拷問だった。ユーグがロザリアにキスをするたび、呻き声を上げずにいられない。まだ焼鰻やきうでもあてられた方がましだとまで感じる。

官能に目覚めた瑞々しくも艶めかしいロザリアの様子を目にするとユーグの心配は膨れ上がった。この魅力的な少女を他の誰かに取られてしまうのではないかと……

（ロザリアは、既に私の妻だ！）クラウドは冷や汗を流して、冷静さを保った。

「もう、オレは待てないぞ。ロザリー、月のものはまだ来ないのか？」

ロザリアは一瞬間われた意味が理解できず、ボンヤリとユーグの顔を見てしまった。月のもの？あ？一瞬きわめて重要な情景が思い浮かびかけたが、具体的な象を結ぶことなくイメージが雲散霧消した。なんだろうか？

「名実ともに夫婦となるには、そなたの体が大人にならねばなるまいが・・・まだでも構うものか、正式な婚約と広めの儀式だけでも済ましてしまおう」

「え？ええ？？？」

「本当は他の男の目に触れさせるのも嫌だ。黄金作りの足かせでもして、オレしか知らぬ所に閉じ込めてしまいたい」

「そ、そんな」

「そんな無体をすればロザリーは許してくれないだろう？だから、昔の約束を守れと言っているだけだよ」

「でも、正式の婚約者になってしまえば何かと・・・」

「何かと面倒ごとが増えて、商売に差し支えるか？」

ロザリアは恐る恐る頷いた。

艶やかな笑みを含んだ美しい顔で言葉を畳み掛けキスを仕掛け愛撫を施す皇太子に、ロザリアはなすすべも無く感情を揺り動かされている。すでにユーグの膝の上は心地よく、確かにこの場所を誰か他の女に取られてしまうのは嫌だと感じるまでになっている。

（ロザリア・・・その膝の上は・・・あなたの居場所ではない）

クラウスは呻き、拳を握り締め、血が噴出した。その痛みがどうやら意識を平静に保つようだった。

「ロザリーはオレが嫌になったのかい？」

急いで頭を横に振って否定するその様子は、何やら幼い子供じみていて、愛らしい、とユーグは感じた。

「ならば、オレの気持ちを受け止める。な？」

高貴な17歳の少年は、一層強く芳しく愛らしい美少女の体を抱きしめ、幾度も幾度も激しい口付けを繰り返した。そして、ロザリアの内に眠る不都合な記憶を封じた。

(ゆ、ユーグッ！)

クラウスはそのキスがロザリアに及ぼした官能的な作用に、我慢がならなかった。腹が立ってならなかった。「嫉妬心の制御」と言うマークから厳命された課題が無ければ、確実にクラウスの意識は暴走していただろう。

ようやくユーグの膝から降りる事を許された時、ロザリアは下着が奇妙な湿り気を帯びているのに気がついたが、どうやらキスだけで「いってしまった」のであった。この恥ずかしい状態をどうすべきか戸惑いつつも、どこか嬉しいと感じた事自体、歪められた記憶によるものだと思わなかった。

作戦としては、大成功でも、クラウスにとってはまさに拷問だった。(再びこのような事があれば、自分は人として存在できなくなるかもしれない)

不老不死になってしまっただけに、悪鬼の如き化け物に変じ兼ねないとも思った。

帰り際に左の薬指にはめられたユーグの母アデル妃の形見の美しい指輪に込められた執念と魔法の作為を、ロザリアはユーグの深い愛情としか、もはや感じられなくなっていた。

第五十七章 予兆

クラウドは次のロザリアとユークの対面がいつになるのか、固唾を呑んで見守っていたが、翌日からユークが大量に血を吐き倒れてしまった。すると銀の龍が姿を現し、宮中を抜け出すと、海上を真っ直ぐキタイ方面に向かったのを多数の人々が目撃した。

最高諮問会の老臣たちをはじめ、貴族連中は蜂の巣を突いたような大騒ぎになったが、大神官の『ジルニトラ』の主で金の龍と銀の龍を引き連れておいでになる方を皇帝にお迎えすれば良いと言う発言で、キタイのエスコバル公爵を迎えれば良いと言う方向に意見が固まりつつある。

そんな中で、ロザリアの母、レオンハート公爵夫人・エスターが予定よりも早く出産した。レオンハート公爵家始まって以来の青い瞳に淡いブルーの髪の子が生まれた。父である公爵はアングスと名づけた。

産声がすると同時に、かねてより女神がクラウドに告げていたように聖なる剣『シャボンヌ』が飛来し、その途端に邸内の枯れ井戸に澄み切った水が滾々と満ち溢れた。

すると、クラウドが隠し持っていた『パンテラ・レオ』、そしてロザリアが首から提げているロケットに納めていた『チチェック』が共に反応し、三本そろってレオンハート邸の上空を舞った。

その途端にレオンハート邸内の人々は銀の龍の魔法から解放された。

ロザリアは自分である指輪を外し、クラウドが夫であり胎内に子がいる事を思い出した。

「なあ、クラウド君、ユーグがロザリアちゃんに会った時、色々感情的に反応したんだろう？あれほど注意したのになあ。まあ、結果が悪くないから、良かったんだが……」

『シャボンヌ』が飛来した日にクラウドはマークに報告に行ったのだが、『ジルニトラ』も反応して煩いらしい。

「聖剣が大騒ぎするんで、銀の龍が異変に気がついてユーグから抜け出してしまった。そして、僕を呼びに来た。それをブルサ中の多くの人間が目撃したので、『ジルニトラ』を掲げて、金の龍・銀の龍と共に近いうち、オルテスに向かう事になる」

古から、偉大なる皇帝は金銀の双龍を引き連れて、鏡の如き海の水面よりオルテスに入るとされている。初代皇帝がそうであった。

「僕の中に二つの龍を納める事は可能なんだが、疲れやすかったり、思いがけず感情的になったりで、やはり具合がよろしくない。やっぱり僕の番である人に銀の龍の器の役を担って欲しい」

ユーグの転生先は目処は立っているし、京子の孫に当たる赤ん坊が生まれたので、後は『銀の龍の全き器』にふさわしい魂をオルトに迎え入れなくてはいいらしい。

「やはり、我々の娘の魂では不十分なのです」

「すまない。だが、京子さんの孫の肉体に宿る魂と肉体を交換するのだから、地球ではそれなりに幸せに生きてゆけるはずだ。その、あの京子さんが無理をしても戻りたがった場所なのだから、それなりに良い場所だ」

「ロザリアが、京子様のお孫さんの姿を見たのですが、余りに自分にソックリで驚いたそうです」

「可愛い赤ちゃんだから、きっと周りの皆に愛されて幸せに暮らせる。心配なら、こっそり様子を見に行けばよい」

「うちの子と魂を入れ替えるその、京子様のお孫さん……ひよっとして」

「ひよっとするよ」

「ああ、やはりそうなのですか。宿る魂はロザリアと同じ魂で有り、存在でも有った方ですね」

「ただねえ……これは、あくまでこちらの都合だ。京子さんにしてみれば、オルトの連中と縁を切って、孫娘としての一生を全うするという選択肢だって、十分ありえるんだよ……寧ろ、番になる予定のユীগにはそのほうが良いぐらいだ」

「魂のつりあいが悪いのではないですか？京子様とユীগ皇太子では」

「京子さんは『育成する』と言う特殊技能を持った強い魂だからね、ユীগの魂がそれこそ思いもよらないほど、高い次元の魂に育つかもされない。丁度、クラウド君、君のようにね……それもアリかもしれないが……僕は皇帝にさせられちゃうんで、やっぱり京子さんの助けが必要だ。そうじゃないと、また、銀の龍の器が壊れる」

帰宅してクラウドはロザリアと胎内の娘の魂を交換するか、否か、話し合った。

「京子様の御家族、伊丹家の方々は本当に良い方たちですし、まだ幼い力の無い魂が伸びやかに生きてゆくには、あちらの環境の方が良いと思います。銀の龍の器なんて、責任が重過ぎますもの」

「私はね、ロザリアのことが心配なんだ。『地球人としての京子様』が地球に戻り孫娘に転生するだけの事で、『オルトのロザリア』にはあたかも何も悪い影響が無いかのように女神様は仰るが、私や殿下の考えは違う。やはり、元は一つであった魂が別々の世界に分か

れて存在する状態になれば、ロザリアは力が弱まるのではないかと心配だ」

すると、ロザリア自身も、自分の力が弱ってしまうのではないかと気にしているという話になった。

「やはり、これは『地球人としての京子様』にも、オルトに戻って頂きたいね」

「ええ、番^{つがい}である方に迎えに行っていたくのが一番良いのかもしれないですね」

それがクラウドとロザリアの結論で、マークの意見と一致したのであった。

そんな話をした翌日、マークが居るブルサの宮廷に程近いクシヤダスの海の沖に、『後の剣・ヴィーヴル』が現れたらしい。ロザリアの元を『チチェック』は離れて、『ヴィーヴル』と共に海上で浮いているようなのだ。

すると、その同じ日にロザリアは急に産気づいた。

邸の者は上を下への大騒ぎで、有ったが、どうも状態が思わしくないので。陣痛が定まらず、始まったと思ったら、また止んでしまう。つい先ごろエスターがアングスを生んだ時は、大変な安産だっただけに、様子が違いすぎる。心配なのは、ロザリア自身の体力が低下しているように見えることだった。クラウドはロザリアの手を握り締め、女神の言葉を待った。

「これは、魂が定まっておらぬゆえじゃ」

女神の言葉を受けて、マークは金の龍・銀の龍と共に、急遽地球へ向かった。ふさわしき魂をオルトに迎え入れるために……『チチェ

ツク』と『ヴィーヴル』もマークに付き従ったようだ。

同時に、滾々と眠り続けていた皇太子ユーグの容態も一変する。

マーク一行が晴れやかな表情でオルトに戻ったのと、ロザリアが娘を産んだのと、ユーグが眠る様に息を引き取ったのは、ほぼ、同時で有った。

「殿下、あなたが帝位につかれて真の番とする娘の名です、我々よりも殿下に付けていただくべきなのではないかと思いました」
クラウドスは、マークに名づけを依頼した。

「娘がファティマだから、ハディージャとかアーイシャとかも考えたが……全然違う趣でフェリシアとしようか。ロザリアちゃんの娘・フェリシアちゃん、語呂も悪くない」

「どういった意味が有る名なのですか？」

「古い地球の言葉で、幸運を意味する」

「ありがとうございます。ロザリアもきつと喜ぶでしょう」

「僕は、ちよつとフェリシアちゃんに、会って行っても構わないかなあ？」

「どうぞ、御一緒に参りましょう」

生まれたばかりのフェリシアは、産着に包まれ、乳母に連れて来られた。黒い髪に斑に銀色の髪が生えている。オルトでは見たことも無いような風変わりな髪だ。

「女神様の力と銀の龍の力を持ち合わせている、そういう意味なのだろうな」

マークの见解は、恐らく正しいのだとクラウドスも思った。そして、目は銀の龍の器にふさわしい真紅で、泣きせず、マークとクラウドスを見た。

「抱っこさせてくれ」

マークは少し不器用な手つきで、フェリシアを抱いた。

「ああ、なるほどね。はいはい」

手の角度を調節し、少し抱き方を変える。

「……いや、全く、そうだよ。でもまあ、頑張るから、どうぞお手柔らかにね」

「殿下？フェリシアは『心話』を使いますか？」

「ちよつと違うように思う。龍の力だな……ん？ああ、そうなのか」
「クラウド君やロザリアちゃんとの意思疎通は、あと、半月ほど待つて欲しいそうだ。色々都合と言うものもあるらしい」

それから、マークはフェリシアとの意思の疎通を繰り返し、かなり楽しんでいた。

「ごめん。体は、まだ生まれたての赤ちゃんだものな。疲れさせるといけないから、今日のところは失礼するよ」

マークは去り際に、フェリシアに手をふり、小さな手にまるで貴婦人にするようなキスを一つ落とした。すると……驚いた事に生まれたての赤ん坊が恥ずかしげに顔を赤らめた……少なくともクラウドには、その様に見えた。

クラウドは、その様子をロザリアに語って見せてから、溜息をついた。

「私達の娘と言うより、やはり、あの方の番つがいなのだな」

「大人の魂が宿っているのですもの、仕方が無いですわ。でも、き

っと、子供らしい可愛らしい部分もあるはずです。だから、あなたも余りがっかりなさらないで」

めでたく新しい銀の龍の器が定まり、心配な事がとりあえず無くなった所で、マークは伝説の開祖皇帝と同じ海上からのルートで聖剣『ジルニトラ』を掲げて、オルテスの宮殿に入り帝位に就いた。

「金の龍・銀の龍って、本当にいるんだ！」

「女神様の声って、あんなふうに響くのか」

「幾本もの聖剣があるんだね。こんなに凄い皇帝陛下は開祖様以来じゃないか？」

オルトで一番の大富豪でも有る新しい皇帝は、オルテスの主な酒場・食堂の酒を買い取り、全て無料で飲みたいものに振舞った。それ以降、街は大いに活気付き、オルテスは往年の賑わいを取り戻した。

「皇帝陛下って、キタイでは色好みで鳴らした方よね。後宮にはどんな方たちがお入りになるのかしら？」

「あんな方なら、一夜の慰み者でも構わないわ、私、お相手願いたい」

「皇后陛下は決まってらっしゃるんですって。女神様や双龍様の御意向で決まったらしいのだけど、まだ、生まれたての赤ちゃんですってよ」

「ええ？陛下って、三十は過ぎていらっしゃるんじゃないの？」

「そうなんだけど、皇帝陛下と皇后陛下は不老不死でいらっしゃって、何百年も何千年も御一緒だから、三十かそこの年の差も、余り関係ないんですってよ」

「でも、その方がお育ちになるまで、皇帝陛下は御不便じゃない？」

そのころ女達の噂の的である幼い「皇后陛下」は白い産着に包まれて、夫の腕の中で安らかに眠っていた。

「これから、色々有るだろうけれど、一緒に仲良くやってゆきたいものだね、奥様」

マークは愛らしいほっぺにキスを落とした。

ロザリアとクラウドスは、この風変わりな夫婦がオルトをこれからどのように変えて行くのか、適う限り傍で見たいと思うのであった。そして、出来うる限りの手助けをしたいとも願っていた。

第五十七章 予兆（後書き）

一旦これで最終話となります。

続編「双龍の絆」

<http://ncode.syosetu.com/n92227m/>

執筆中ですので、どうぞ宜しくお願いいたします。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4693i/>

やるっきゃない！

2011年6月12日16時40分発行